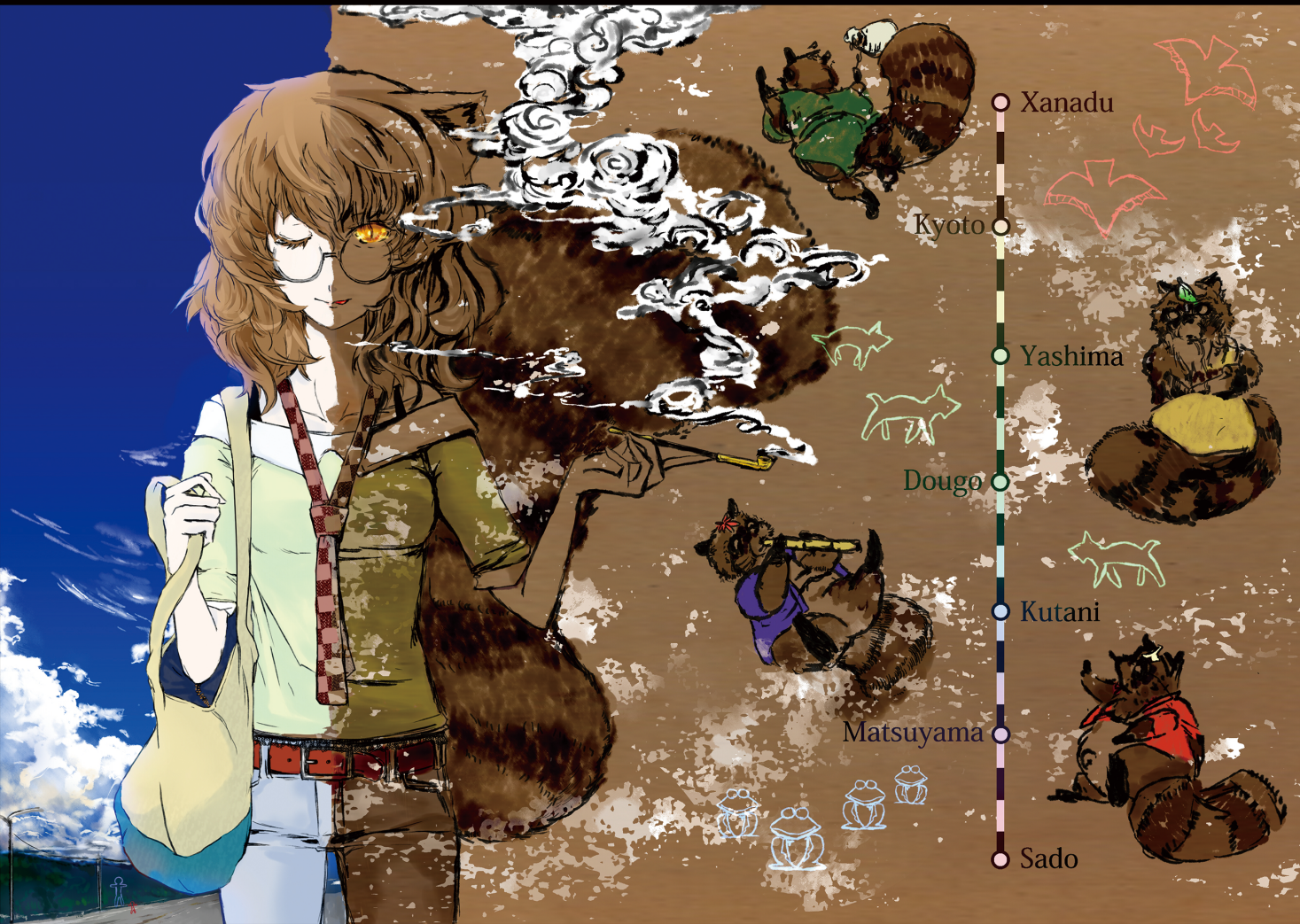




フタツイワムジナ
二ッ岩猪
バケギヤモン
化逆門 結
ムスブ

折葉坂三番地





9月16日

22:08 広島
22:13

9月16日 23:50 京都
06:48

09:03 東京
09:12

10:49 新潟
11:05

11:20 佐渡汽船
11:30

12:35 両津

佐渡島

①両津港

⑤金井温泉

④廻転義司 弁慶

⑥大佛所

③東光寺

②二つ岩大女神

1 ニッ岩猪化逆門・結

目次

佐渡から眺める狸合戦	3
二ッ岩貉化逆門	13
四十九里波越えて	75
続二ッ岩貉化逆門	83
二ッ岩貉化逆門〈よりみち〉	171
二ッ岩貉化逆門 結	201
妖怪大作戦 真打	265

佐渡から眺める狸合戦



「……そうじゃな、少し昔の話でもしようかの」

化主・聖白蓮の理想の元、人妖共存を掲げる命運寺。その離れには3つの人影があつた。離れの主である佐渡の化け貉、二ツ岩マミゾウ、彼女の知己の封獣ぬえ、そして目下、ここで金貸しの修行中であるマヨヒガの化け猫、橙。

夜空に浮かぶ満月の下、マミゾウは懷から取り出した煙管を手にも身を起こした。

橙はその向かいではいっと行儀よく答え、浴衣の裾を直して居住まいを正す。

尻尾をぴんと立てて熱意を見せるスキマ妖怪の式の式に、マミゾウはそう固くならんでも良いやと苦笑した。

畳の上にあつた煙草盆を引き寄せ、呟えた煙管からゆつくりと煙を吐き出す。元来、煙草は化術を阻害することから狸は紫煙を嫌うものだが——マミゾウは平然と煙草をたしなみ、ことにこの螺鈿細工の煙管を愛用していた。

「ちょうど、昭和の終わりから、平成の始まり頃だったかのう。はるばる四十九里の海を越え三国の山を越え、東京は多摩から一匹の狸が佐渡まで訪ねてきた。丁度、この間のぬえと同じようにな」

離れの庭、樹上に寝そべるぬえの羽がぴくんと動いた。なんだかんだいって、彼女はマミゾウによく懐いている。いつも素っ気なく振る舞っているけれど、こうして離れにいる時はいつでもマミゾウの様子を気にしているのだった。

「その名を水呑沢の文太。若いのに良くした狸じゃったよ。まだ十年も生きておらんというのに、大層立派に人の姿に化けておった。佐渡までの旅費もそうやって人に化けての『あるばいと』で稼いできたというのには驚いたのう」

自分よりも年下と聞いて橙も眼を丸くする。生まれて十年といえば、橙だってまだ尻尾も二股に分かれていない頃だろう。自分が妖怪になるなんて夢にも思わず、何も知らない一匹の猫として、一日中ご飯とひなたぼつこのことしか考えていなかったはずだ。

「世が世なら、屋島狸大学の特待生となり、金時計を貰ったやもしれん。狸や狐は生来、人を真似、化かすことを得意とするが——それでも大したものじゃ。よほど良い師、良い友、良き出会いに恵まれておったのじゃろうな」

多摩というところにはそんなに名のある狸がいるのだろうか。橙は藍に習った外の世界の地理を思い出そうとしたが、京都の隣にあるのが奈良なのか鎌倉なのか分からなくなってしまい、こんがらがった頭を抱えてうにゃあと鳴く。

そんな橙に目を細め、マミゾウはカンと煙管を鳴らした。

「さて。その文太じゃが、はるばる佐渡にまで何をしに来たのかと言えば、儂に助力を求めて

のことじゃった。この頃、多摩の山々は、人間たちの身勝手な開発事業でさんざんに荒らされておったんじゃない。

『にゅーたうん』とやらを作るとかでのう。人間達は大勢で詰めかけては重機で山を削り、河を曲げ、池を埋め立て、出た土砂を別の山に捨てる非道を繰り返しておると言う。狸達のことなど気にもかけんばかりの横暴じゃと、文太はたいそう憤っておった。多摩の狸たちも、はじめは事を荒立てるのをよしとせず、一時の辛抱と耐えておったそうじゃが、いつになっても工事が終わる気配もない。気付けば山が三つも四つも丸裸にされてしまい、とうとう堪忍ならんと一致団結して立ち上がった。多摩の集落の長が集まり、血判状まで回して、人間たちを追いつくべく決起したんじゃない」

外の世界で妖怪達が虐げられているというのは、橙も聞いたことがある。それでも、住まいを根こそぎ壊されてしまうなんて酷いことになっていたのかと橙は驚いた。

それはきつと、マヨヒガが無くなってしまうようなものかもしれない。自分の暮らす住処を追われ、配下の猫達も散り散りにされて、惨めに逃げまどう日々。それがどれほど重大なことなのかを噛み締め、橙は二股の尻尾を膨らませ、ぶるりと背中を震わせる。

ふかり、煙を輪にして吐き出し、マミゾウは続ける。

「多摩の狸達は長らく続いた平和の中で、野の獣として生きる事に慣れ、すっかり化術を忘れておった。彼等は今ひとたびの狸の隆盛、ばけがく化学復興を掲げ、全国各地の名狸たちに助力を請う

ことを決めた。文太もそうして各地に散った狸の一匹だったわけじゃ」

こうして文太は佐渡の各地を回り、貉総大将・ニッ岩団三郎を訪ね歩きながら、その先々で拳を掲げ熱弁を振るった。

今こうしている間にも、自分と同じ多摩の同輩たちが全国各地の名狸の元へと馳せ参じている。決起に名を連ねんとするのは狸の本領であるの屋島の禿太三郎、阿波の六代目金長、伊予の八百八狸総帥・隠神刑部^{いぬがみぎようぶ}ら。

いずれ劣らぬ伝説を持ち、歴史に名を残す日本有数の名狸達である。

愚かしい人間たちに力を示すため、今こそこの国の狸達が総力を結集し、化生の底力ここにありと示さなければならぬ時だと、文太は説いて回ったのだ。

「——噂はすぐに儂の耳にも届いた。最初にその計画を聞かされた時の儂の感想を正直に言えばのう、『無謀に過ぎる』の一言じやった。まったく、蟪蛄の斧どころではないな。外の世界で人間相手に真つ向立ち向かうなど、今の世にはありえんことじやよ」

ふかりと煙を浮かべ、言い切ってしまうマミゾウに、ぬえが不満そうに羽根を鳴らす。

「儂も多摩の狸たちの勢力を詳しく知っておるわけではないが、幼狸古老一切合財を掻き集めても五百から一千がいいところじやろう。その程度の数の田舎狸が力を合わせたところで、人間に敵う筈がないんじゃない。悔しい事にな。」

文太たちは、あまりにも人間の事を侮りすぎておった。仲間集めに際して、あちこちで自分

たちの武勇伝についても語っておったが、重機の一機や二機を壊したところで、損をするのは下請けの業者じゃ。開発事業の元締め連中の懐が痛む筈もない。……まあ、現場の連中はそれなりに苦労したんじゃないろうかの」

マミゾウの突き放した物言いに、橙は少し不思議になった。損得はあっても同じ狸なのに、どうしてマミゾウはそんなに多摩の狸のことを悪く言うのだろう、と。

「と、まあ偉そうなことを言っても、儂は実のところ、文太と直接会ったわけではなくての。これは全部後になって伝え聞いたことじゃ。……なにしろ儂は当時、死んでいる事になっておったからのう」

これを聞き、橙はうにやあと驚きの声を上げた。

マミゾウは長く煙を吐いた後、煙管の雁首をかつんと叩き、そつと両の目をつぶる。

「前にも言うたが、儂は長いこと外の世界で人間達に混じって暮らしてきた。金貸しもしたし、事業も起こした。人間の商売というのはこれでなかなか面白くての。時に儂らの思いもよらぬ事を考え出して、とんでもないことをやり遂げる。儂はそういう連中を見るのが好きでなあ。そこいらの妖怪よりも、人間達とは馴染んできたつもりじゃよ。

折も折、戦争に負けてからこの国もあれこれと変わってのう。狸と人間と、二足の草鞋がいろいろと面倒になった時分じゃった。そこでな、げん達たちとちよいと相談して、狸の身分を捨てて人間になっておったのよ。表向きは獵師に撃たれたということにしてな。

……なに、団三郎と言えば浮世絵の通り美丈夫じゃったからな。この姿は案外誰も気づかなかったよ」

からからと笑うマミゾウに、ぬえが意外そうな声を上げる。

彼女にしてみればニッ岩団三郎はずっと昔から今と変わらぬ、娘の姿なのだろう。

「そんな具合だから、結局、文太は儂を見つけることはできなかった。佐渡には他にも名のあつる貉が沢山居るが、そやつらにも文太と会うことを禁じた。勝ち目のない戦に挑む真似はせんようにと言ひ含めてのう」

空に浮かぶまんまるの月を見上げて、マミゾウはゆっくりと伸びを一つ。橙もつられて欠伸をした。

「それにのう、儂は、刑部殿も、太三郎殿も金長殿も、動かんだろうと決めつけておったんじや。文太たちが助けを求めた相手は、誰も彼も大物すぎた。いかに一大事と言えども、多摩の田舎狸が呼びつけるには釣り合わんだろうとな。」

特に、屋島の太三郎殿は日露戦争の折に大陸に勇んで出征して、御子息と一緒に若い狸を沢山失つておった。ロシヤの寒さに苦しんでほうほうの体で逃げ帰つて来た御仁が、まさかもう一度人間と事を構える気になるとは思いもせなんだ。……じゃが、な」

佐渡のニッ岩は、肩をゆすつてふうと大きく息を吐く。

「……信じられんことにな、四国の名狸たちは、示し合わせたように肩を並べて多摩に向かつ

たんじや。それを聞かされて、儂は正直、耳を疑った」

それはまさに、狸社会で——否、妖怪の世においても前代未聞の椿事であったとマミゾウは語る。

「いやはや、多摩の山に何かとんでもないものでも眠っておるのかという与太話を本気で信じかけたくらいじや。それほど大事だったんじやよ。流石にそうになると、儂も黙って見ておる訳にはいかん。すぐに多摩に使いを出して探りを入れさせた。

じやがな、刑部殿も太三郎殿も金長殿も、血迷ったわけでも気が違ったわけでもなかった。本気で力を合わせ、人間達に一泡吹かせてやるつもりじゃった。それを知って愕然としたのう。まさか皆揃って毫碌して、勝てる戦かどうかとも分からんようになってしまったのかと、もう声も出んかったわい。

とは言え、いくら悔いてももう後の祭りじや。儂は佐渡から動けんかった。どうにか止められぬものかと、芝右衛門殿や證誠寺の若衆にも声をかけたが……どちらも多摩からは少しばかり遠すぎてな、とても間に合わんかった。

三狸の指導のもと、多摩の狸達はいそがしく奮起したが、あれこれと巡らせた策も空しく、多摩の森は無惨に荒らされ、抵抗運動の本拠だった万福寺も陥落した。挙句、刑部狸はこのご時世に百鬼夜行なんぞという大化術に挑んでぼっくり逝ってしもうた。

老いらくの残りわずかな妖力氣力、命まで削って最後の化術をしてのけたツケじやな。八百

八狸の総帥が後釜も決めずに死んでしもうたから、伊予は後になって相当に揉めたそうじゃの。あわや阿波の狸合戦再びという剣呑さだったそうじゃ」

苦笑いとともに、マミゾウは湯飲みを煽った。月を仰ぎ、目に染みるのう、とぼそりと言。
「そしてな。狸達の一大反攻作戦は、結局人間どもに一泡吹かすどころか、何の成果もあげられぬまま、半年もせずに忘れられおった。文太を含む多摩の狸たちは、故郷の森を諦め、人間達に混じって暮らす事を選んだそうじゃ。

……儂の予想は、外れておらんかったよ」

眼鏡をそつと押さえ、佐渡の化け貉は静かに呟いた。

月明かりに照らされて、橙からはマミゾウの表情は窺えないが——きつと、泣いているのだろうと、スキマ妖怪の式の式は確信する。

「本邦八百八狸の首領達も、やはり老いておったのかもしれない。……いや、違うの。太三郎どの達が、本当に多摩の戦に勝ち目があると思ひ込んでおったとは、どうにも考えたくないだけかもしれないのう。

あるいは刑部どのも……今の時代に生き残る狸達の最後の晴れ舞台に、挑みなかったのかもしれんと——儂はそう考えておるよ。そう思うこと自体が、儂の老いじやろうと……せんばやま船場山の狸たぬきくぼう公方には笑われたがの」

ふうと吐息。

長い長い年月、人の世界に混じって生きてきた佐渡の狸は、静かに話を締めくくる。

「本当に、どいつもこいつも馬鹿な奴ばかりじゃな」

そう言つて、マミゾウは大きく煙を吐いて黙り込んでしまう。樹上では何か言葉をかけるべきなのだろうか、ぬえは落ち着かない様子である。

橙もまたその隣で、神妙な顔をして――やはり同じように黙つて月を見上げていた。

ニッ岩猪化逆門

【ふりだし】

さあさあ、御用とお急ぎでない方は寄ってらっしゃい見てらっしゃい。

これよりご覧いただくは、佐渡の団三郎貉こと、ニッ岩マミゾウが繰り広げる珍道中！

お伊勢に七度、熊野に三度、愛宕さまへは月参り。狸界きっての旅好きで知られたかのニッ岩貉が、このたび幻想郷を飛び出して訪れるは、外の世界の京の都！

備前、讃岐、伊予と進むその旅は、まさに双六道中によく似たり！ 行きつ戻りつ訪れる

先、出会うは本邦各地の個性豊かな名狸化狸大狸！

ご存知の方もそうでない方も、ぜひご覧あれ照覧あれ、これより始まる化逆門^{ハゲキヤモ}！

▼ 1

佐渡の貉総大将、ニッ岩団三郎と言えば、お伊勢へ七度、熊野は三度と歌にまでされるほどの旅好きである。

鎌倉の終わりに佐渡に本拠を移してしばらくの間こそ、越国総鎮守一宮を牛耳る宝徳山稻荷との紛争に備えて越佐の勢力基盤の構築に忙しくしていたが——東光寺の禪達や湖鏡庵の財喜坊を始めとした佐渡東西の名狸らを従えて以来は余裕もでき、暇を見ては相川の岩窟を空にすることが多くなった。

ふらりふらりと各地を旅するニッ岩狸の姿はときに海を超え、異邦の地へと向かうこともあった。巧みに人に化け、各地を旅する彼女の姿はあちこちの記録に残されている。

御一新以来は生来の好奇心も手伝って、魔都上海や戦乱に燦る大陸、果てはロシアの凍土を踏み、極東の商人としてかの女帝エカテリーナ宮殿の『琥珀の間』に招かれたことまである。

それは、ニッ岩マミゾウの活動の主体が幻想郷に移ってから変わらない。

旧友にして寵愛深き京都の大妖怪・封獣ぬえに請われ、佐渡の護りを東光寺の禪達狸に任せ一年半。忘れられた妖怪達の樂園に辿り着いた古狸は、幻想郷じゅうの化狸達を掌握し、人里はおろか地底や天界、冥界へも顔を出し、広い人脈を築くに至る。不倶戴天の相手たる九尾

狐——神隠しの主犯・八雲紫の腹心たる八雲藍という好敵手とも相まみえ、新天地の日々を忙しく過ごしていた。

そんなマミゾウであるが——幻想郷の各地を巻き込んだ神、仏、道の宗教戦争が一段落したある日、彼女はまるで思い出したかのように、命蓮寺の離れに四、五日ばかり留守にするとの書き置きを残して、ふらりと姿を消した。

寺の者たちが化狸の首魁の不在に気付いた時には——マミゾウの姿は既に大結界の外、彼等の呼ぶところの『外の世界』の、京都にあった。

9月も半ばだと言うのに喧しく蟬が鳴く京の都。千年を超える歴史を数える古都に、場違いなばかりに聳える黒耀の宮殿、JR京都駅。天へと登らんばかりの大階段を見上げ、佐渡の化け貉は新幹線の指定券を弄びながら額を拭う。

「やれやれ、異常気象も年々酷くなつとる気がするのう。経済成長も結構じやが、森がのうなるのにも息苦しくてならんぞい」

人に化したマミゾウの装いは、ジーンズに半袖のシャツ、市松模様のタイを締めて下縁の丸眼鏡といった簡素なもの。この国で一番目立たないのはおふいすでれいーの格好なのだが、遠出の長旅には向かないし、背広はどうにも尻尾が窮屈で落ち着かないのだ。

「まったく、何年過ぎてても変わらんなあ、ここは」

京都を訪れるのは何年ぶりになるだろうか。指折り数えて途中で諦め、旅行者でこった返す

構内を見て吐息する。

今回、外界への旅に当たってマミゾウは、旧友である封獣ぬえの力を借りて結界を抜けてきた。かつての平安京での夜を騒がせた正体不明の妖怪・鵺は、この地と強い因果で結ばれている。それをただ乗りのような形で利用したのだ。もっとも、ぬえ本人に許可を得たわけではなく、化術を用いて結界を騙したようなものであるため、いろいろと面倒を呼ぶ方法であったのは確かであろう。

「……あとで煩く言われるかも知れんのう。ぬえにも土産を用意せんといかんな」
ぼやきながら、マミゾウは愛用の金時計をぱちりと閉じてポケットに戻す。

「さあーて、どう時間を潰したもんか」

勢いこんで出かけてきたはいいものの、今日が秋の連休である事などすっかり失念していたマミゾウである。明治の初めに現世と隔離された幻想郷では、暦までもが外界とズレており、祝祭日なども異なる。新幹線の指定席は午後までぎっしり埋まっており、自由席は乗車率150%。すぐの出発は諦めざるを得なかった。

他の電車で向かうという手もあった事に気付いたのは、切符を買ってしまったあとだった。

「——ま、久々の京都じゃ、のんびり行こうかの」

どのみち、今更急ぐような旅ではないのだ。観光がてらに今の『みやこ』を見てやろうと決め、マミゾウは行くあてもなく歩きだす。

旅行客の賑わいに混じって数十年ぶりの街並みを眺めるうちに、いつしか四条あたりまでぶらぶらと歩いてしまった。息苦しいほどに寺社仏閣のひしめく古都は相変わらずだ。かつてのような攻撃的な気配は薄れたものの、帝の御所を守る靈威はいささかも衰えていない。

日も高くなり、空腹を覚え始めたところで新京極の入り口のところに洋食屋の看板を見つけ、マミゾウはこれ幸いとそこに腰を落ち着けることにした。

「ふむ」

地下への階段を降りた先、歴史を感じさせる落ち着いた雰囲気店内には、学生らしき姿がちらほらと見えた。メニューの一番上にあつたオムライスを注文し、遅い昼食とする。

どれ一服、ともどもぞと煙草を探しかけたマミゾウだが、壁に禁煙のマークを見つけて懷を探る手を止めた。

(……ありや)

いかにも喫茶店然とした店内にも、分煙の波はやってきているようだった。まったく今の世は好きなように煙草も吸えなくなつて久しい。さみしい口にアイステイのストローを咥え、ふつと息を吐く。

「……どこもかしこもこんな有様で、窮屈ならんのかのお」

手持無沙汰になり、耳を澄ませば隣の席で少女達が明日からの旅行の日程についてあれこれと話し込んでいる。後ろでは夏季休暇明けの課題に取り組む学生の姿。

(……む)

連れ立って店を出ていく三人連れの学生達に、マミゾウは眉をぴくりと動かした。よく化けているが間違いない、あれは狐だ。まず間違いないく伏見稲荷の眷族だろう。

(監視——では、無いようじゃな)

まさか尾行でもされていたかと一瞬冷や汗をかいたが、どうやら杞憂だったらしい。マミゾウに気付かないまま出てゆく狐たちを見送って、安堵と共に机に頬杖を突き、マミゾウは洋食店の奥にある神棚を見上げる。

いくつかの例外を除いて、日本各地の化生はいまや伏見の正一位稲荷を筆頭にした稲荷狐たちの統率下にあると言っても過言ではない。この京都だけを見てもそれは明らかで、独立の信仰を保っている妖怪など、北は鞍馬山の天狗魔王尊くらいのものだ。

長い人間の時代に、生き残った化生は狐である。

いち狸として、化術の技に関しては劣るところなどないと自負しているものの、その点はマミゾウも認めざるを得なかった。彼等狐たちは、自分以外の信仰の力を取り込む事にまるで躊躇がない。八雲の式の九尾がいい例だろう。

それは本来の自分を失いかねないことでもあり、妖怪にとっては命の危険すらある行為なのだ——狐たちは政争渦巻く混沌の京都で、ダキニ信仰や豊饒神への信仰を巧みに取り込み、陰陽寮や院にも食いこんで、廃仏毀釈や二度の遷都を乗り越えて生き延びてきたのである。

「……忌々しい話じゃが、人間に混じるのは奴らの方が長けていたと言う事じやろうなあ」
京都でも十数年前までは、名門の京狸達が下鴨神社は糺ノ森、『偽右衛門』下鴨総一郎狸のもとに確固たる勢力を築いていたのだが——総一郎が悪辣な人間どもの卑劣な罠によって狸鍋にされて以来、すっかりその名は地に落ちていく。

叡山電車や鞍馬の山にまで化け、かの如意ヶ嶽薬師坊をして京都狸界の名門と言わしめた総一郎狸亡き後、京都の狸の長老たちはすっかり耄碌し、妖怪を食い物にする人間達の跋扈を許している。新たに偽右衛門を襲名した平太郎狸に至ってはすでに京都の一門をまとめる意欲を失い、早々と隠居して南の国で余生を送る夢を語る始末だという。

「……んむ。そう言えば、総一郎殿の御子息はまだご健在じゃったかな」

総一郎には妻との間に四人の息子がいた。彼らもまたそれぞれに癖者ぞろいと聞くが、いまもこの京都で人に混じりなお逞しくも楽しく生きているらしい。

一度会ってみたもののじやなと呟いて、マミゾウは運ばれてきたタルタルソースと卵のたっぷり乗ったオムライスを堪能するのだった。



夕方の新幹線で京都を発ち、マミゾウが岡山に入ったのは夜になってからだ。予約を入

れておいた駅前のホテルで一泊して、翌朝には早々に宿を引き払う予定である。

「余裕があれば、もうちつと見て回りたいかったのう」

駅直結のホテルは価格の割になかなかに立派であり、部屋の居心地は上々であった。眠るだけの宿になってしまったことにいささか勿体なさを覚えつつも、旅程を考えると夜街に繰り出す気分にもなれず、早々にベッドに潜り込む。

かくして翌朝。朝6時前にホテルを引き払い、マミゾウは岡山駅へと向かう。ここから快速マリンライナーで瀬戸大橋を渡るのだ。古くは船を仕立てて半日ばかりで渡った瀬戸の海峡が、いまや掛けられた大橋を渡って文字通りの朝飯前である。人間社会の進歩を噛み締めつつ、マミゾウは1時間あまりの旅を経て四国・高松へと降り立った。

久しぶりに踏む狸の本領。尻尾をざわめかせる化力の感慨に耽ることもなく、マミゾウは改札横の立ち食いうどん屋へと歩み寄った。漂う美味そうな匂いに、ふらふらと足が引き寄せられていく。

「ちと腹ごしらえでもしておくか」

「いらつしやい！」

威勢の良い主人が一人で切り盛りしているらしい店内には、そこかしこに観光宣伝のポスターが貼ってあった。讃岐名物と言えば確かに定番の讃岐うどんだが、なんでも香川は最近、うどん県を自称して町興しに努めているという。

「……觀光誘致も大変じゃなあ」

券売機で勝った食券を並べ、待つことしばし。

ゆで上げたばかりのうどんを冷水で締め、井におろし大根と薬味を少々。讃岐のうどんの腰の強さ引き立たせる濃い汁をかけてずると啜るものだった。駅舎の立ち食いという立地ゆえに大した期待もしていなかったが、出てきたものは思いの外本格的な盛り付けである。

「……ふむ」

手を合わせ、箸を割ってうどんを口へと運ぶ。一口でマミゾウのほうと眉が跳ねあがった。もともと気が向いた程度で選んだ店だったのだが、それなりに食通であると自負しているマミゾウの舌をしても、この店は十分に合格と言えるものであった。

「むぐ、んぐ。……ごちそうさん」

軽く腹ごしらえのつもりが、ぺろりと二人前を平らげてしまったマミゾウに、人懐こそうな主人が器を片付けながら聞いてくる。

「毎度ありい。お嬢さん、どちらに？ 観光かい？」

「ん……、ああ。ちいと、昔の友人に会いになあ」

そう答えて主人に礼を述べ、マミゾウは暖簾を潜る。

ちようど改札を出たところで、マミゾウの元に一羽の鳥が飛んできた。指に留まると同時に、鳥はどろんと一枚の葉に姿を変えた。

「ふむ。間に合ったかのう」

そこに記された文面に目を通し、化け貉は駅前バスのステーションへと向かう。

四国八十八番札所、その第八十四。南面山は千住院・屋島寺へは、高松駅から直通の観光バスで30分ばかり。海に面してくねる坂道を登った先でバスを降りれば、そこはかつての源平の合戦の古戦場として客を呼ぶ観光地であった。

そこここに売店や土産物屋が軒を連ね、ポニーテールの少女がかわらけ投げに興じ、観光の旗を掲げたガイドに先導されてツアー客がぞろぞろと歩いてゆく。

サヌカイトの風琴が涼やかな音を奏でる隣では、野外に大きな演劇場が設けられて、義経と平家の合戦を模した演劇が客を集めていた。演目はまさにクライマックス、源氏の忠臣佐藤継信が義経の盾となり、王城一の精兵・平教経に討たれる場面である。

舞台の上で事切れた継信を抱きかかえ、涙する義経に、観客達から拍手が飛んでいた。

「……実物よりだいぶイケメンじゃのう」

判官最真に始まったことではないが、屋島の合戦から八百と余年。武勲を求め誇りを賭けて戦った源平武者の勇猛ぶりは、なお人々を惹き付けて止まないということだろうか。

島をぐるりと回る観光路に沿って、休業中のホテルの傍を抜け、水族館を右手に一周。遍路傘の行き来する巡礼路の脇へ。作法通りの順路をたどり、マミゾウは四国札所のすぐ隣に並ぶ社殿へと辿り着いた。

「お久しぶりです、太三郎殿」

鳥居から社殿に一礼し、奉納品である狸の信楽焼が山と積まれた碑を回り込めば、そこには小柄な老狸の姿があった。マミゾウは礼を失さぬよう耳と尻尾を出し、深く頭を下げる。

「ほっほっほ。よう来てくれた」

一見して好々爺然とした佇まいの老人が、ふさふさの眉毛を跳ねあげ、大きく手を広げてマミゾウを出迎える。ただでさえ小柄な身体は、まるまった背のせいでまるで子供のよう。つるりと輝く頭は通り名の通り一本も髪の毛がなく、代わりに地面に引きずるほど長い白髭をたくわえている。立派な袈裟を纏う彼の後ろには、まだ若い狸達がやはり僧形となつて控えていた。

この老狸こそ、四国屋島は叢山大明神に祀られた、屋島の禿こと太三郎狸であつた。

遡ること一千と二百年前よりこの地を治め、讃岐の狸達を従えて、淡路の芝右衛門、マミゾウこと佐渡のニッ岩団三郎とともに、日本三名狸に数えられる大妖である。その神徳は四国から海を越えて大陸まで鳴り響き、いまでは弘法大師の隣に妻子共々に祀られているのであつた。

「これは、太三郎殿直々のお出迎えとは」

「なに、これくらいせんとお主には引き合わんじやろう。遠路はるばる御苦労さまじやな」

ふさふさの眉毛を動かし、太三郎はじろじろとマミゾウの姿を眺め、ひやつひやと愉快そうに笑う。

「いやいや、相変わらず可愛らしい格好じやのう、眼福眼福。佐渡のお嬢ちゃんはいつも美人

でなによりじゃてな」

「……若造扱いは止して下さらんか」

まるで子供のように容姿を褒められ、マミゾウはこそばゆい思いで訂正する。確かに太三郎はマミゾウよりも年嵩だが、その差は精々百かそこらである。おたがい千年以上を生きた古老であり、いまさらどちらが年長などと張り合う意味もないはずだった。

「ひやつひやつひや。なーにを言うておるか。そのような見てくれを繕っておるうちは、若造扱いくらいは受け入れておかんといかんじやろう。ん？」

「……かないませんのう」

茶目つ氣たつぷりにぱちりとウインクをしてみせる太三郎に、マミゾウは後ろ頭をかくばかりだ。

屋島の頭領は、マミゾウがようやく二本の足で立ち、覺束ない手つきで人に化ける術を覺えた頃にはもうすっかり年寄り狸であつたが、それから千年以上もの歳月をずっと老狸として矍鑠と生き抜いてきた知己である。

平安時代の末に朝廷と貴族による統治が凋落を迎え、源氏と平家が武力を持つてこの国を巡つて争つていた時代、マミゾウと太三郎は揃つて京都にいた。四国に本拠を構える八百八狸の総帥、隠神刑部の名代としてである。

当時、既に人間の力を侮れぬものと認識し、その行く末を注視していた刑部狸は、多くの化

狸達を人間社会に潜入させていた。貴族、武士、帝、院、混迷する京都の中、対立する勢力のいずれにも己の名代を潜り込ませ、その動向を探り、時流の把握に努めていたのだ。

太三郎は、平家の棟梁である平清盛の嫡男、平重盛に恩を得てその庇護下に。そしてマミゾウは、佐渡の商人として摂津源氏の棟梁たる源三位頼政入道の元にいた。ふたりは保元・平治の乱に始まり、壇ノ浦で平家が滅亡するまでの戦乱を共に戦い、何度となく戦場でまみえたのである。

その後、故あってマミゾウは刑部狸に暇を願い出、佐渡へと落ち延びることになった。太三郎とはそれ以来、ほんの数度しか顔を合わせていない。

「しかし、懐かしい限りじゃなあ。最後に会ったのは確か、明治の……日露戦争の折かろう？」
「そうなりますか。あの前に、刑部殿の松山騒動で用心棒に呼ばれておりますが、儂は後詰めで大仕掛けには関わっていませんでしたからのう」

「おう、そうじゃったそうじゃった」

ぽん、と手を打ち、太三郎は面白そうにもじやもじやの眉を跳ねあげる。

「太三郎殿も、ご健勝のようだなによりです」

「なになに、最近はずっかりおいぼれてしまつてなあ。なお若々しくいられるお前さんが羨ましいぞい」

細い目をますます細くして微笑む太三郎。

ここでマミゾウ、居ずまいを正し、耳を伏せ尻尾を身体の脇に寄せ、改めて深く太三郎に頭を下げた。

「多摩の事、長らく、お詫びをしなければと思っておりました」

「ひやつひやつひや。過ぎたことを言うても始まらんよ。義理がたいのう、お嬢ちゃんは」

多摩ぼんぼこ騒動。そう呼ばれる一連の事件が起きたのは、いまから20年ほど昔のことだ。

折からの高度経済成長、それに続くバブル経済によって始まったニュータウン開発によって、東京は多摩の丘陵地帯の開拓が進んでいた。これにより住処を追われた狸達は古寺・万福寺に結集し、人間を撃退せんと一大反攻作戦を掲げて、全国各地の名狸達に使いを走らせて助力を求めたのだった。

化狸の本拠四国からは、讃岐屋島の太三郎のほか、伊予の隠神刑部、阿波の六代目金長らが連れ立ってこれに応じ、多摩まで出向いてこの騒動に加勢した。

彼らは長らくの平穏ですっかり野の獣となっていた若い狸達を鍛え直して、かの地に狸の復権を試みたのである。

しかし、化術^{けじゅつ}化学^{けがく}の復興こそ成功したものの、狸達の奔走虚しくあの手の作戦はいずれも人間達には通じなかった。闇を恐れることのなくなった人間達は山野を切り崩し、沢河をコンクリートで固めて、無慈悲に狸達を駆逐していった。

相次ぐ犠牲に士気を削がれ、同志が次々脱落する中、三名狸と残る総力を結集し、最後の逆

転を駆けて臨んだ大化術、妖怪百鬼夜行へと望みを託す。しかし、その切り札すらも途中で失敗、その中で刑部狸が命を落とす結果となった。

化狸の力が通じぬという現実を目の当たりにして太三郎も呆然自失となり、しばらくは多摩の山中でかつての親友の菩提を弔い、日がな一日念仏三昧で過ごすとともに耄碌してしまつたという。

抵抗騒動も立ち消えとなり、多摩の狸達が散り散りとなる中で、太三郎は後を追つてきた侍従に付き添われてどうにか屋島に戻り、十年ばかり静養を余儀なくされたのであった。

多摩の騒動は、いまも狸社会において苦い思い出と共に語られている。マミゾウも太三郎も、それは同じだった。

「こうして会つて、それが聞けただけでも十分じゃよ。刑部もきつとそう思つておるじゃろう」

頭を下げるマミゾウに、太三郎は数珠を握る手をそつと合わせ、念仏を唱えた。元々信心深かった太三郎が、仏道に深く帰依したのはあの騒動以来だという。

「なに、おぬしもおぬしなりの考えがあつての事じゃろう。ささ、頭をあげておくれ。辛気臭い話はこれまでじゃよ。今日は一席設けておる。存分に呑んでいっておくれ」

太三郎がぼんと腹鼓を叩くと、そこかしこに控えていた狸達が一斉に飛び出してくる。酒に料理を抱え、十畳敷きの赤絨毯を広げてまたたく間に宴席の会場と変わった叢山大明神の裏手に、乾杯の声が響いた。



賑やかに始まった宴席の中、高松名物、一鶴の骨付若鳥を肴に飲めや歌えとはしやぐ狸達の中、マミゾウはどうにも居心地の悪さを隠せなかった。

遍路傘の絶えないお大師様の傍という立地もさることながら、宴に同席する見慣れぬ顔のせいである。

その原因——宴席の斜め向かいに座る屋島の三稲荷、七九朗狐、平雄狐、朝日狐の三名もまた、マミゾウのほうを遠慮がちに伺っていた。

「……………」

太三郎を祀る叢山大明神のすぐ脇、ずらり並んだ赤鳥居の奥には、彼ら三柱の狐を祀る稲荷社が控えている。およそ佐渡では有り得ない光景だが、これは太三郎の意向であった。仏道に帰依した太三郎は、狸の長年の宿敵たる狐たちにも慈悲深く、屋島の化け狐たちと同輩の契りを結び、所領を分け与えて共に境内を守ろうと呼びかけているのだ。

伏見稲荷の加護のもと正一位を預かる七九朗は、神格だけならマミゾウや太三郎と同格。理屈だけなら、ここ屋島は狐と狸が並び立つて祀られているに等しい。

これは、大の狐嫌いのマミゾウとしては容易には受け入れがたいことであつた。

「そう嫌な顔をせんでくれ、佐渡の。呉越同舟というじゃろ。妖怪にはまこと生きにくい世の中になった。彼らも同じ化生仲間じゃ、仲ようせんとな」

「……はあ」

太三郎の手前、生返事こそ返したものの、視界の端で内輪になって何事か囁き合う狐たちの姿が気になって仕方がない。彼らもマミゾウを警戒しているのか、形だけの宴席の挨拶を述べてきた後はずっとこの調子なのだ。

（迂闊じゃ。儂とした事が忘れとった。これがあるから太三郎殿とは疎遠になっておったんじやよなあ……）

惘然と缶ビールを傾けるマミゾウ。

四国にすっかり足が遠のいていたのも、元をたどればこれが理由であつたのを思い出しつつ、口元に泡髭を作つて深く吐息する。

とは言え一応は格上の先輩相手、しかもマミゾウは招かれた客の立場だ。ここで我を通す訳にもいかず、曖昧な笑みで応じる他なかつたのである。

しかしいくら口に出さずにおいても不機嫌な気配は駄々漏れであり、宴席の隅で固まっている七九郎達も明らかにマミゾウからは距離を置いていた。佐渡の二ツ岩狸が、越佐で対立した狐たちにどんな苛烈な処断を下したかは、いまも畏れをもって伝わっているらしい。

宴席に漂う微妙に白けた気配を紛らわせようと、マミゾウは次々に杯を重ねる。酔つてしま

えば少しは気にならなくなるだろうという目算であるが、そんな理由で重なる盃が美味いはずもなく、いまいち気の乗らないぼやけた酔いだけが溜まってゆくばかり。せつかくの酒も若鳥の肉も味の分からぬままだ。

「さて、頃合いかの」

そんな心の内を知ってか知らずか、赤ら顔となった太三郎は身を翻し、社殿の上へと飛び上がった。

「久々に見られますよ、太三郎様の十八番だ」

若い狸が興奮に立ち上がる。マミゾウが顔を上げれば太三郎が大きく息を吸い込み、どんと腹鼓を打ち鳴らしたところだった。

とたん、あたりの風景がぼやけ、白い霧に包まれるように消えてゆく。ざわりと脚を撫でる感触に見下ろせば、どこからか溢れ出した波がマミゾウの足を洗っていた。

驚く若い狸や狐たちをよそに、マミゾウは眼鏡を押し上げて鳥の化け式を呼び出し、酒につまみを空中へ避難させた。ひよいと宙空に腰かけて見下ろせば、あたりは美しい松の生える浜辺へと化けており、白い砂浜には綾目の波が打ち寄せる。

さん、と揺れる海の上、一艘の小舟が波間にあった。舟にはひとさしの扇が立てられ、美しい姫君がその隣で袖を振り招く。

この難題に挑む主役はすぐに現れた。いなく馬の声に一同が視線を巡らせれば、向こう岸

の松の間より、一頭の馬に跨った美しい若武者が浜辺を駆けてくる。

いつの間にか海の上には赤旗を掲げた平家の船が何百艘も並び、浜辺には白旗を掲げた源氏の武者たちが数千騎と詰め掛けて、扇と若者の一挙一動を見守っている。

太三郎狸、十八番の化術、屋島なすのよいちの那須与一だ。

若者は長い黒髪をなびかせて、馬上より見事な大弓をぎりりと引き絞り、南無八幡の声とともに一矢を放った。空を裂く鏑が見事、狙いたがわずに扇の元金を打ち抜く。

ぱあっと空を舞う扇は、海鳥の羽ばたきと羽根の中に消えてゆく。絵巻の中に入り込んでしまったかのような美しさに、狸達は声も無く見惚れていた。

「お見事」

マミゾウが拍手を打ち鳴らすと、我に返った狸と狐が一斉に歓声を上げる。

空を舞う扇に皆が見とれている間に——景色はまたも姿を変える。皆はいつの間にか一艘の小舟に乗せられ、波の狭間にあった。

周囲には何艘もの船が重なり、鬨の聲が次々に響く。紅白の旗が入り乱れる壇ノ浦に、一騎打ちの名乗りを張り上げ、源平武者たちが舟の上でがつきと組み合う。

ばらばらと降り注ぐ弓矢の中、舟にぱつと火の手が上がった。黒煙を割いて右手より現れるのは王城一の強弓、平家きつての剛たいちのりつねの者、平教経だ。

一門の者たちが次々討ち取られる劣勢の中、彼は矢を打ちつくした弓を投げ捨て、单身源氏

の舟へ乗りこんできたのだ。右手に大太刀、左手に薙刀を抱えて暴れ回る教経に、源氏の武者たちが次々打ち倒されてゆく。

教経はなおも小舟を走り、奥に陣取る源氏の大将へと迫る。気合一閃、振るわれる大太刀は、確かに源氏の大将を屠ったかに見えたが——彼は身も軽く宙へと飛びあがり、波間に揺れる小船を次から次へと飛び回る。

まるで天狗のような身のこなしの若者こそ、源氏の御曹司、源九郎義経。

「おう、義経の八艘跳びか。……これは初めて見るのう」

若い狸達の喝采を背に受け、太三郎の大化術はさらに続く。吉野山の狐きつね忠信（これは七九朗狐の後ろ盾である伏見稲荷への配慮だろう）、弁慶の勸進帖、静御前の白拍子舞と千変万化に源平の名場面を彩り——最後にはどろんとひととき大きな煙と共に、満開の千本桜を散らした。常世の春に若者たちは感極まり、狐も狸も揃って声を上げる。一気に暖まった場の中、赤ら顔になった太三郎が一礼すると、万雷の拍手が鳴り響いた。

千鳥足の太三郎はよいよいと社の屋根を飛び降り、ちよこんとマミゾウの隣に腰を下ろして大きく額の汗をぬぐう。マミゾウが徳利を出せば、太三郎狸はそれを受け、ぐいと杯を傾けて飲み干した。

「はあーあ、やれやれ、年甲斐もなく張り切り過ぎたわい」

「お見事でしたぞ」

「世辞は止しておくれ。佐渡の。十番どころか五番勝負も保たんかった。あれくらいでへばつてしまふとは、我ながら情けない。歳はとりたくないもんじゃな」

最後の千本桜は演目の本来の締めではなく、息が上がり続かなくなった化術に無理くりにオチをつけたということであるらしい。しかし、マミゾウは心からの賛辞を太三郎に送っていた。

「何を仰るやら。太三郎殿が五番なら、儂なんぞ三番も持たんでしよう」

「ひやつひやつひや」

太三郎の得意とする化術は、空間自体に作用する大がかりなものだ。陸を海に、砂浜を空に、里を森へと丸ごと作り換え、まるで舞台のように多くの演者を自在に動かす。屋島の浜に波打つ海、扇を掲げた小舟と姫君、それを馬上より狙い撃つ那須与一宗隆、妙技に喝采を送る源平の武者——そういったものをたつた一人で行う化術の妙は、化狸の本流である四国で伝統の術の妙を磨き続けたからこそその絶技であつた。

かの三名狸、淡路洲本の芝右衛門が大阪で化け比べをした折、大名行列に化けた芝右衛門が、化術の大家と喝采を受けたように——化術とは本来、ひとつのものを別のひとつに化かす、一対一の対応が原則である。十枚の落ち葉を十枚の一万円札へ化かすことは簡単でも、一個しかないドングリを十枚の百円玉へ化かすことは非常に困難を伴うのだ。

百を超える変化を同時に可能にするマミゾウの術もその例に漏れず、鳥を魚にするような、変化の大本となる核の本来の性質をまでも変化させることは難しい。マミゾウは大がかりな化

術を使わねばならない時には、懷に飼っている蛤の化物 蟹が吐き出す蟹氣樓の助けを借りていた。それを単身で可能とする太三郎の技の冴えは、いったいどれほどであるだろうか。

いずれにせよ、余興と呼ぶにはあまりにも鮮やかな千変万化の大化術。マミゾウと狐たちの不和を見抜いての、見事な太三郎の助け舟であつた。

「ところで佐渡の、はるばるご来訪という事は、しばえもん 芝右衛門殿や きんちよう 金長殿にはもう会つてきたのかのう？」

「……生憎と、岡山から入ってきましたものでな」

痛いところを突かれたと、マミゾウは一度口ごもる。京都から四国へ渡るなら淡路を超えて徳島に入るのが近道である。マミゾウにはそれを敢えて避けてきた理由があつた。

阿波の狸は佐渡や屋島とはまた違った成り立ちをしており、血筋に寄らず実力をもつて代替わりすることで知られている。現在の阿波の狸の頭領、金長大明神は初代より数えて七代目、これを預かるのは玉三郎たまざうろうという狸で、余所から四国に移り住んだ変わり種である。

この玉三郎も件の多摩騒動の關係者であつた。多摩は鬼ヶ森から六代目を頼つてはるばる阿波に辿り着いたのはいいが、まだ歳若く化術も未熟であつた玉三郎は、長旅の疲れに倒れ、半年近くもの間、病に伏せることになった。そんな折に看病してくれた六代目金長の一人娘、こはる 小春と懇ろになつて、二男一女をもうけてしまったのである。

紆余曲折を経て六代目もその度量を認め、玉三郎が七代目金長大明神を襲名したのはそれが

ら間もなくのことだった。

「……儂が世話になりましたのは先々代の時分になりますな。先代とはお若い頃に数度お会いしたばかりで。あちらも面子商売、余所者が馴れ馴れしく伺うのは少々都合がよろしくないと思ひましてなあ」

そう、阿波の狸と言えば血の気の多い事で知られる任侠社会、筋金入りのやくざ狸である。過去に四度も大きな合戦を起こし、ここ屋島や松山の狸達とも出入りの争いをしてまで、血で血を洗う抗争を続けてきた。その為か太三郎や刑部狸のように、長じて何百年と君臨することを敢えて避け、代替わりをすることで組織を保っているのだ。また、抗争の中で命を落とした者も少なくない。初代、二代目、四代目の金長狸は、いずれもいくさ場での矢傷や鉄砲傷によって命を落としたと伝えられる。

しかし時代が下り、御一新で侍が鬚を落とし、文明開化の波が電灯を持ち込んで夜を照らし、人間の社会が変革をするに至り、彼等の在り方もまた変革を余儀なくされた。先代の六代目金長はそれまでの武闘派から一変、温和路線をとり、阿波の狸にしばしの調和をもたらした。が、七代目に代替わりして以降、まだ歳若い金長狸を侮って古老たちが腰を上げ、あちこちで小競り合いが始まっているのだと言ふ。

「ひやつひやつひや。七代目が色男なもの宜しくなろうなあ。化術の腕は若くして大したもんじやが、見た目からして優男すぎてのう、どうにも芯が細いし胆力も迫力も足りぬ。六代目

が見込んだ若者じゃ、もう三十年もすれば立派になろうが、向こう傷だらけの任侠の世に甘く見られるのはしかたあるまいて」

太三郎も玉三郎とは面識があるらしく、割と辛辣な評を向ける。まったく、三十やそこらの若狸がこの怪物たちと渡り合っているだけでも驚嘆に値するのだが。

「六代目殿も引退されたとはいえ健勝じゃし、確か阿波の合戦で佐渡に渡っていった仲間もおりう。佐渡の嬢ちゃんもいろいろと聞きたいことはあるのじゃないかね」

「……でしようなあ」

色々耳の痛い話だ。マミゾウはこっそりと耳を伏せ、太三郎の昔話を耳に入れぬようにした。

山と積み上げられた骨付き肉がすっかりなくなり、缶酎ハイにビールも尽きて、宴が中締めとなったのは、昼も大きく回り、午後四時になるのかという時刻だった。

「さて」

そこそこで酔っぱらった狸が寝そべり、ごおごおといびきを上げ始める中――先刻からむずむずの収まらない尻尾をぴんと立て、マミゾウは宴席から腰を上げた。

「ん、どうされた、佐渡の」

このまま二次会三次会、朝まで飲み明かして旧交を温める気満々だったらしい太三郎が、意外そうにふさふさの眉毛を動かす。マミゾウはわざとらしくポケットから出した金時計を開け、

「いや、楽しい宴にてすっかり忘れておりましたが、そろそろ特急の時間でしてな」

「なんじゃあ、今夜は心ゆくまで飲めると思っておったのに」

他の狸達も、何か非礼でもしでかしたかと口々に詫び、引き留めてきたが——マミゾウは頭を下げてそれをおかす。

「申し訳ないですが、切符の都合でしてのう。すみませんがお暇いたしますぞ」

せめて見送りとと駆け寄る狸達を押しとどめ、そそくさと広場を後にする。結局ほとんど言葉も交わさなかった七九朗狐たちに軽く会釈して、マミゾウは社殿から駐車場へと戻った。

酔い覚ましに、売店で買ったソフトクリームなどを舐めつつ屋島を降りるバスを待つことにする。

「……やれやれ、あの御仁はどうにも苦手じゃな」

はあ、と大きく吐息して、指に付いたクリームを舐めとる。太三郎は古くは同じ刑部狸の名代として平安の都を跋扈した仲だが、自分の未熟な頃を直接知る少ない知己だけになかなかどうしてやりづらい。佐渡の同族にこんな姿を見られたらどうしたものかと一人苦笑いするマミゾウだった。

ほどなくやってきたバスに乗り込む。昼中から酒臭い匂いをさせているのにはやや気後れしたが、バスの乗客には似たような酔っ払いもちらほら見られた。展望台の食堂でこたま飲んできた手合いだろう。マミゾウはガラスに映った己の姿を確認し、一人頭を撫でつける。

まさかこの歳になって耳や尻尾を晒すような未熟な真似はしないはずだが、酔った後にはどれだけ気を付けていてもやりすぎることはない。化術の名手である大妖怪が酒に酔って失態をやらかしたという逸話は、古今枚挙に暇がないのだ。

バスの中から見える高松の繁華街は、京都大阪にも劣らぬほどに見事なもので、ニッ岩狸の好奇の虫も疼いたが——ああ言って出てきた手前、どこで地元の狸と出くわすとも限らない。後ろ髪を引かれる思いで高松駅へと向かう。実際、特急までの時間はもういくらもなかった。

「いや、思ったより忙しなくなってしまったのお」

小走りに改札を抜けてホームへ。さっきまでさんざん飲み食いしていたのでまだ腹はくちかったが、松山に着くころには夜である。駅弁と酎ハイを二本買い込んで、マミゾウは発車ベルの中、特急いしづち23号の入り口に駆け込んだ。

幸い車内は空いており、切符の示す二人席のもう片方は開いているらしかった。

「うーむ。こりゃあ、わざわざ指定席買わんでも良かったのう。……太三郎殿にはちと悪いことをしたかの」

後ろ頭を掻きつつシートを倒し、酎ハイのプルタブを開ける。発車ベルの中、ホームを滑りだした窓の外を、高松の町並みが流れ出す。

二本目の缶の中身が半分ほどになる頃には、特急は一路松山を目指し、瀬戸の海沿いをひた走っていた。

▼2

四国の北端、高松と松山を結んで二時間半。駅弁も平らげてすっかり腹も膨れ、酔いの中でまどろんでいた臉を開ければ、マミゾウを乗せた特急いしづちはすっかり暗くなった松山駅のホームにあった。終点の案内をするアナウンスにふああと大欠伸をして、ごきごきと背中を鳴らして起き上がる。

この速度で走れば佐渡は楽に一周してしまうだろうが、それでも四国外周の四分の一も回っていない計算であった。

「まったく、いい加減にそろそろ、佐渡にもまともな鉄道の一本や二本くらい走っても良いと思うがのお」

口にするとは意外に思われる事が多いのだが、鉄道は、狸や狐の好む乗り物である。長野の桔梗ヶ原に住む玄蕃丞狐など、丘蒸気に化けるのを得意とした化生も多い。道路を我が物顔で走り、住処を踏み荒らす車に比べ、きめられた時刻にレールの上をおとなしく走る列車は、多くの狸が旅の足としていた。

そうしてマミゾウが思い出すのは角栄狸のことだ。

人間に化けて政治にかかわった狸と言えば、戦後に吉田茂のもとで辣腕をふるった広川弘禅

などが有名だが、かの田中角栄は真正正銘の人間でありながら、佐渡の狸から名誉狸の称号を贈られた数少ない人物だった。列島改造論なる計画をぶちあげ、三国峠をダイナマイトで吹っ飛ばして新潟の豪雪をなくし、そこで出た土砂で佐渡と新潟をつなぐ道を埋め立ててしまおうなどと言う大法螺を吹いて大いに国中を湧かせたのである。

彼はまごう事なき人間であったが、その終焉を含めて、いつそ人間にしておくのが勿体ないほどの名狸ぶりであったとマミゾウは思う。

——さて。

本州と地続きの感のあった高松とは異なり、色濃く昭和の香りを残す松山駅前を出て路面電車に乗り換え、城下をぐるりと回るように市内を揺られて20分。

終点となる大正のころのハイカラな趣を残した駅舎を降り、夜だと言うのに賑やかなアーケードを抜ければ、足湯の湯気と硫黄の香りの中、古びた道後温泉の本館が姿を現した。

「お待ちしておりました」

今日の宿はそのすぐ向かいの老舗である。ホテルの門前で出迎える、大正袴のコスプレをした従業員に領き、悠々とチェックインを済ませる。宿はここに来るまでの間に事前にスマートフォン経由で予約済みであった。

……ちなみに、マミゾウは幻想郷でもインターネットを使っている。機材や電力は外から持ち込んだが、流石に回線ばかりはどうしようもないので、迷い込んだ無線LANの回線の尻尾

を捕まえ、こつそりとパケットを偽装して拝借していた。暗号や通信プロトコルの進歩は日々目覚ましいが、化かすことに掛けてはプロの狸にかかれれば解読も偽装も朝飯前である。

「いやはや、便利になったもんじやな。情報化社会さまさまじやなあ」

まずは一服。汗もかいたところでひと風呂浴びようと、浴衣に着替えて下駄をつっかけ部屋を出る。向かうは道後温泉の本館だ。

大勢の客が詰めかける湯屋の大浴場は、なるほど見事なものだった。神の湯の名に相応しい石造りの浴槽に浸かって、豊富な湯量の湯船に手足を伸ばす。あちこち歩き回った疲労が心地よさに溶けてゆくようだ。

頭の上にタオルを乗せて、鼻歌など歌っているうちに——ふと、湯船の反対側に目がとまった。

「ちよつと、メリー、くすぐったいっ……」

「いいじゃない、たまには童心に帰るのも」

「め、メリーの母国は随分と解放的なね……!?」

混雑の中、ひときわ目を引く二人連れの若い娘。片方は短い黒髪のスレンダーな少女。もう一方は金髪を結った碧眼の白い肌だ。金髪の少女はメリハリのある身体を惜しげもなく晒し、もう一方の娘の背中を泡だらけのタオルで流している。

「ほら蓮子、そんなに逃げてちゃちゃんと洗えないわよ？」

「だ、だからなんだかさつきから手つきが——ひゃんっ!?」
洗い場の片隅に、実に眼福な光景が広がっていた。

（うむ。……うむ）

こくこくと頷きながら、頭の上に載せていた眼鏡を下ろし、マミゾウは曇るレンズを拭いて、きやいきやいとはしゃいでいる少女達を眺める。目の前の微笑ましい裸の触れあいに、思わず頬が緩んでいた。

そんなマミゾウに気付くこともなく、ふざけ合って抱き合う泡まみれの娘達。若々しさの溢れる白のお尻やつんと上向いた小ぶりの乳房に目を奪われているうち、ついむらむらと声を掛けそうになり——

「……いかにいかに」

ざぱりと湯船から上がりかけたところで思いとどまり、マミゾウは慌てて浴槽に頬まで顔を沈めた。いつの間にか飛び出しかけていた狸耳を慌てて髪の中に押し込み、すっかり浮かれていた自分を自覚する。

（邪念はいかな。うむ。儂もいちおう、形の上だけは寺におるのじゃし、そもそもこんな旅先で、しかも刑部殿の膝元じゃぞ。騒ぎを起こしておる場合か）

ぶんぶん首を振って湧きあがる欲望を振り払い、大きく深呼吸。目を閉じて百を数え、ゆっくり瞼を開ければ、娘たちの姿はなくなっていた。

軽く安堵の息を吐き、マミゾウは湯船の縁に頬杖をつく。

とは言え実に『美味しそう』な娘たちだった。久々に湧きおこる気持ちは、やはり結界の外に出てきている解放感からなのだろうか。普段はいつも張り付いて離れないスキマ妖怪の式の気配もなく、久々にのんびりできているのは確かである。

そう、ここはどうせ結界の外なのだ、わずらわしい妖怪と人間の協定もない。何をして咎められるはずもないし、ちよつとしたつまみ食いくらい――

「……うむ。欲求不満なんかのう」

一人ごちて、マミゾウは手桶に組んだ冷水を被った。若い娘の肌に囲まれ、油断するとむくむく頭をもたげてくる邪念を振り払わんと、何度も水をかぶり直す。

最初は酔いのせいかと思っていたが、どうも違うらしい。そもそも、マミゾウほどの化狸となれば息をするように人として振舞える。普段なら耳や尻尾を気にすることなど滅多にないはずなのだ。四国に入った頃から軽い違和感があったが、松山に降りてからその傾向は一層強くなっていた。

ここ四国は狸の本拠、いまだ根強く多くの狸達が生きる霊場である。ゆえに普段は押さえ込まれている獣の本能、最初の獣の鼓動が、マミゾウの胸を強く打つのであった。

どこか夢の中のようなぼうつとした頭で身体を拭き、二階の大広間へ出る。ここであれば湯上りの身体を冷ますのだが――

「おんや」

目に留まるのはさっきの娘達だ。一足先にここに来ていたらしい。浴衣姿で扇風機の前、団扇を忙しく動かしつつ、湯上りおやつに名物の団子などをつまんでいるようだった。

二人で寄り添う少女達を見ているうち、またむらむらとよろしくない衝動がこみ上げてきうようになったので、マミゾウはヘアピンに化かして持ち込んだ煙管を取り出して一服を始めた。

ひとり、無心に紫煙を吐き出していると、いつの間にか彼女達の一人、黒髪のほうの少女が傍に近づいてきていた。

彼女はじっと、不思議そうにマミゾウを見つめてくる。

「……………」

ちやうど相手の金髪の少女が席を外したところらしかった。少女の熱烈な視線にむずがゆいものを覚えつつ、マミゾウは困惑を隠しながら眼鏡を押し上げる。

「どうかしたのかの」

「あ、いや……その、それ、カッコいいなって」

「んむ？」

少女の視線に、マミゾウはひよいと煙管を持ち上げた。幻想郷の人里で見つけた螺鈿細工の逸品で、一目で惚れ込んで以来、マミゾウはずっと愛用している品だが、彼女はそれに興味を示しているらしい。

成程、いつもの癖で取り出していたが、こちらでは煙管で煙草を呑む者も少なくなっているのだろう。まして女の成りではなおさらか。

実際のところ、繊細な螺鈿の煙管など、脂ヤニの強い煙草で一服すればあつという間にくすんで見れたものではなくなってしまう。基本的には觀賞用の品で、実用に耐えない代物というわけであり、幻想入りして然るべき品なのだった。

すばあと煙を輪にして吐き出して見せ、マミゾウは笑みと共に少女を窺った。

「――良ければ、一服どうかの」

「いいんですか？」

「儂の吸いさしで良ければ、じゃがな」

勿論ですと頷き、娘はばあつと顔を輝かせる。なんとも可愛らしいものだ。

「ちなみにおぬし、煙草は――」

嗜むのか、と聞こうとした直後。娘は煙管に口を付け、水でも飲むように煙を吸い込んでいた。火皿が赤く染まり、少女はたちまち顔を青くして煙を吐きながら咳き込み始める。

「慣れておらんようじゃの」

「……けほつ……今初めて、吸いました」

濁点だらけのしわ枯れ声で答える少女。どうも一気に肺まで煙を入れてしまったらしい。涙目になってえずく少女の背をさすってやり、マミゾウは呆れながら堕ちた煙管を拾い上げた。

無茶な話だった。紙巻きも吸わないのに、いきなり刻み煙草は無理があるだろう。

しかし娘は、諦める様子もなくもう一度煙管を拾い上げ、顔をしかめながらも果敢に煙を吸おうとする。

「待て待て。慣れても居らんのに無理せんでも良からう」

「でも、こんな機会そうないですし、やつぱり何事もやってみないと！」

「……その心構えは立派じゃがなあ」

げげほと咳き込みながら煙管を離そうとしない少女に、またもむらむらと宜しくない気分が沸き上がってきた。

好奇心だけで後先考えずに突っ込み——自分が危険な事に手を出しているという自覚もない。火傷をしても懲りることなく、同じことを繰り返す。

これはつまり、誘っていると取られても仕方ないだろう。

（……据え膳、かのう）

マミゾウの脳裏を、このまま彼女を攫ってしまおうかという思考がよぎる。どうせ彼女も旅の身の上だ。すぐに誰かに気付かれると言うこともないだろう。その間にたつぷりと若い娘を堪能してしまえば——。

（……む）

無意識のうちに少女の肩へと伸びかけた手を慌てて戻し、マミゾウは近づく気配に振り向い

た。

「おや、お連れさんのお戻りのようじゃな」

「蓮子、なにしてるの？」

「何って——」

そこで少女はようやく、自分が懸命にジュースのストローを吹いているのに気付く。眼を丸くする少女にからからと笑い、マミゾウは椅子から腰を上げた。

「さて、湯冷めしても面白くないし、お前さんたちの逢引を邪魔しても悪からう。儂はここらで退散するとうかのかの」

手にした螺鈿細工の煙管をぐるぐると回してウイシンクを一つ。顔を紅くしてうろたえる娘達に微笑んで、マミゾウは雑踏に紛れて大広間を後にした。

そろそろ店じまいとなったアーケード街の自動販売機で買ったビールのプルタブを引いて、宿の窓から道後の街並みを見下ろし、ぐびりと一息。

「ふむ。……ちよいとばかり、勿体なかったのう」

夜に沈む松山の街並みを、頬杖ついて見つめながら。化狸の夜は更けてゆく。



「ふわあああ……よう寝たのお……」

結局、どうにもおさまらずに夜街に繰り出して艶店をハシゴし、半ダースばかり酒瓶を開けてしまったが、その程度で化け貉が宿酔いになるはずもない。翌朝、まだ日も出る前に起き出して布団の上で大欠伸をすると、マミゾウは、手早く身支度を済ませて宿を後にした。

「さて」

市内バスを乗り継いで1時間。砥部の細い街路を巧みに擦り抜けてゆくバスに揺られてさらに15分。遍路傘が行き来する巡礼札所を通り抜け、次第にバスの中の人影もまばらとなる。山道をすり抜け、古い石壁の続く狭い道や山中の分校を過ぎる事には座席のほとんどが空席となっていた。

目的地となる関谷に着く頃には、車内に残るのは地元に住人と思しき老人のみで、バス停を降りる時も運転手から珍しい顔で見られてしまう。

古びたバス停を後に、家もまばらな小道をふらりふらりと歩いてしばし。勝山の天満宮をひやかしながら、マミゾウはようやく今回の旅の目的地へと辿り着いた。

「おう、ここか」

道端に立つ小さな屋根。狸の石像を並べ、幟に囲まれた社殿。

松山は山口霊神——四国八百八狸を束ねる総帥、隠神いぬがみぎ刑部けいぶを祀る社である。

「これは……なんとも、まあ……慎ましやかなもんじやな」

小ぢんまりとした社を前に、これが仮にも四国八百八狸の総帥の住処なのかと、マミゾウは溜息をついた。

鳥居も燈籠も見当たらず、社の所領も猫の額のように。参道を行き来する行列があるわけでもなく、出店も社務所もどこにもない。社自体は寂れ放題というわけではなく、手入れも掃除も行きとどいているが——人気のなさは如何ともし難い。

隣には小狸たちの像に囲まれるように、刑部狸の立派な石像が奉納されていた。こちら名のある職人の手によるものか、威厳ある雄狸の貫録を八畳敷きまでしっかりと写し取った素晴らしい出来だが——こんな寒村の道端で、いったいどれだけの者がこれを目にするのだろうか。持つてきた珈琲の缶を並べ、一つを開けて口を付ける。珈琲は煙草と同じく匂いの強いものとして、獣から変じた妖怪は嫌うのが常だが——隠神刑部は特にこれを好んでいた。

かつての主にして恩人を前に、深く手を合わせしべし。マミゾウは深い息を吐く。

「さて、刑部殿よ。常頃より四国総帥なんぞとのたまっておるのだから、今でもさぞ御膝元は賑わっておるんじゃないろうと思つたが——なんとまあ寂しい限りじゃない」

これでは、本邦の妖怪の地位を天狗や狐どもに脅かされることも仕方ないものかもしれない。妖怪の生死と言うのは、人や動物に比べるとあいまいなものだ。よほどの事がなければ死ぬことはないし、仮に現世で活動するための肉体を失つてもその伝説、伝承が残る限り消滅することはない。まして大明神としての神格も持ち合わせた化狸に、明確な死というものは存在し

ないと言っているだろう。

しかし、件の多摩騒動の折、彼が命を落としたという事は幸か不幸か、衝撃を伴うニュースとして全国を駆け巡り、この国の妖怪社会に深く知られていた。どういう訳か、一部の人間達にまで。

事実、こうしてマミゾウが訪ねても、彼の声どころか迎えの侍従すら姿を見せない。決して荒れている訳ではないところを見るに、彼の眷族までも散り散りになっているとも思えないが——いずれにせよ、これは彼の存在がすっかり忘却されたことを意味し、その神格から零落していることを示していた。

「……せめて、恨みごとの一つくらい、残していった貰えると思っておったのじゃがなあ」

マミゾウは、懐から古びた手紙を取り出す。

隠神刑部が命を落とした多摩騒動において、尽力した四国の狸達とは対照的に、マミゾウはこれに対し静観を守った。多摩からの使いに対して知らんぷりを決め込み、配下の佐渡の狸四天王達以下、六百余の狸達に関与を禁じたのである。

直後にははるばる刑部狸から、多摩の森に協力を促す手紙も送られてきたが、マミゾウはこれを握りつぶした。

いち早く人間社会に溶け込んでいたマミゾウは、現代の人間達に対抗しようというのがいかに無謀なことか熟知していた。下手な肩入れは多摩を助けるどころか、佐渡の狸達まで共倒れ

になるとの判断だった。

結果として佐渡の狸達は勢力を失うことなく現代にまで生き延びているが——果たしてそれは正しいことだったのか。佐渡の二ツ岩の胸の中には、ずっとその思いがあった。

四国狸の名代として——同じ古老の狸として。あの時の多摩に、刑部たちと共に居なかったことは、ずっとマミゾウの胸の中に残る後悔だった。

「……時代、じゃなあ」

古い手紙を陽にかざし、なんともやるせない思いを吐き出し、懐から煙管を出してひとしきり感慨に浸る。

紫煙の立ち昇る空には鳶が高く舞い、悼むように鳴いていた。



なんとも哀しいものを見てしまったことへの衝撃もあつたろうか。社の回りをぼんやりと巡り——といつても、数十歩も歩けば全部見て回れる程度のちいさなものだが——マミゾウは山口霊神をあとにした。

「さーて、どうするか……」

ここは市街地からも大分離れた山奥で、バスは1時間に1本しかない。寄り道しながらでも

10分もかからずに来てしまったので、今から戻ったところで帰りのバスまでかなりの時間を
持て余すことになる。来た方向のバスを待とうにも同じこと。

「と言って、暇を潰すような店も見当たらんしのう」

適当に鳥にでも化けて飛んでいっても良いのだろうが、一応は余所の狸の領地であり目立
つ事はすべきではないだろうし、外の世界で力を使う事は余分な消耗も招く。ついでに言えば、
風に流れる雨の匂いもあった。天気予報によれば四国をかすめるように台風が近づいており、
午後からは雨天になるらしい。

まさか市内まで戻る間に力尽きるとは思えないが——旅の間はそれなりに気を払うべきこと
だろうと考えて、大まかに進む方向だけを確認して歩き出す。

「まあ、しばらくは、空も保つじやろう」

来た道を戻れば、行き道の道で通り過ぎた遍路の寺に出るはずだ。そこらまで歩いて適当にバ
スを待つことにする。

山口霊神を出てすぐ、マミゾウは道端に小さな商店を見つけた。近くにあまり集落も見えぬ
というのにどこに商売をしているのか分からないが、菓子やら雑貨やらを売っている店だった。
朝食代わりにと適当にクリームパンと牛乳を見つくり、代金を支払う。

店番をしていた女はこんな所まで何しに来たのかと不思議がっていたが、刑部狸のことを口
にしてみると、すぐに納得した様子だった。どこからと聞かれ、佐渡からと答えれば、遠いと

こちらから御苦労さまと頭を下げられる。

「……むぐ。あの分では案外と参拝客もおるのかもしれない」

パンをかじりながら店を出て、寂れ放題とは少し言い過ぎだったかも知れん、と改めるマミゾウであった。

クリームパンを腹に収め、牛乳を流し込んで。しばし、バス停を辿るように車もまばらな道を進んでゆく。ほどなく遍路道へと出て、白衣に金剛杖をついた遍路傘たちとすれ違うようになった。

「……ん？」

——半時間も歩いた頃だろうか。

丁度、四国札所四十六番を掲げる医王山養珠院の看板が見えてきたときだ。遍路傘に混じって寺の門前の掃除をしていた若者が、驚いたようにこちらを見た。

「あなたは……!!」

驚き目を丸くする若者に、マミゾウもすぐに彼が狸であると察した。

人目を避けるため近くの路地へと場所を移すと、若者は途端に畏まって化け姿を解き、耳と尻尾を出した。自ら本性を晒し、相手を欺いていない事を誓う作法である。

「此度この場所、お初にお目にかかります。どうぞ親分さんからお控えください」

マミゾウは驚いた。若者の仕草は、四国任侠狸の古流の仁義なのである。一瞬、対応を忘れ

かけ、マミゾウは慌てて宙返りし、どろんと煙の中に耳と尻尾を見せた。ふさふさの尻尾の見事な縞模様は、若者はおおと息を呑む。

「手前、ご覧の通りの隠居ものじゃ。どうぞ、そちらさんからお控えなさっておくれ」

「いえ、こちらこそ化術の及ばぬ若輩者。是非とも、親分さんからお控えください」

「ご丁寧に痛み入る。再三のお言葉、無礼とは心得るが、手前、これにて控えさせて頂く」

作法通りにマミゾウが控えると、若者は静かに畏まって、鼻先を地面につけんばかりの深いお辞儀をした。長い尻尾がぐるりと輪を描く。

「早速、お控えくださって有難うございます。粗忽者ゆえ、前後間違いましたる節は、まっぴらご容赦願います。お樂に、どうかお樂に。」

——手前、生国と発しますは伊州久谷は上野、大宮八幡の大柏^{ビヤクシン}住まい、学にて身を立てんと算盤を弾き書を汚していたところ、伊予狸一党に縁をもちまして、四国八百八狸総帥、隠神刑部より杯を頂き、大宮八幡の境内に金森大明神の社を任せられます、本名^{ほんな}を金平^{きんぺい}と申します。化術も半ば、稼業、昨今の駆出し者でございます。佐渡の親分さんにはご挨拶の遅れましたところ、並びに数々のご無礼、化けの足りぬ半尾者のすることとお笑い頂ければ無情の幸い。これで一つ親分さんにはお見知りおき頂きまして、よろしくお願い申し上げます」

お手本のように見事な仁義であった。昨今、よほどの古狸でもここまで礼に乗っ取った作法はこなさない。マミゾウを佐渡の貉大将と見抜き、最大の礼をつくした金平狸の律義さと博学

さにマミゾウは感服する。

「——最近じゃ減多に機会ものうなったからのう。当世の流儀には不心得ゆえ、旧弊の流儀にて御免こうむる。不作法お許しあれ、金平殿」

「いえ。このような場所でお目にかかれるとは光栄です。佐渡のニッ岩巖王様」

「ん。その名前はあまり好かんのじゃ。いまはマミゾウで通つておる。皆もそう呼ぶよ」
微笑むマミゾウに、金平もようやく口元を緩める。

大宮八幡の金平狸と言えば、学者肌で身を立てた逸話の他にも、宮司の大西家に神祇の御使いとして取り立てられたことでも知られている。算術を良くし書にも通じ、八幡のビヤクシンの根元に社殿を持つ四国名狸の一柱である。

勤勉にして博学、恩義を重んじることから人々にも慕われ、月のない夜には明かりを持ちだして人々の先導をすることもあるという。配下の狸達にも人間の学問を修めさせることで人との融和を進めていると、マミゾウは聞いた覚えがあった。

「いやはや、人に混じつてぼらんていあとは、聞きしに勝る勤勉ぶりじゃのう」

「いえ、僕なんかまだまだです。未熟者ゆえ、まだまだ恥じることばかりで。これも名狸になるための修行と心得ています。その、……マミゾウ様は、はるばる佐渡からどのような御用向きで？」

「そう構えんでもよからうに。特に深い理由なんぞありませんよ。ぶらりと観光じゃ」

「はあ……」

ウインクと共に答えるマミゾウだが、金平はいまいち得心のいかない様子だった。それも当然で、社殿を持つに至った狸達はひよいひよいと海を渡る事などないものだ。マミゾウの旅好きは有名だが、これは彼女が大分特別なのである。

伝承、伝説はその生まれた土地に根付くものであるし、余所に同じ名の化狸が祀られることでもなければ気軽に離れることも難しい。

妖怪から変じた外つ神は、神籍にこそその名を刻まれるが、神有月とても、出雲からもまずお呼びはかからぬものなのだった。

「お越しであるのなら一言頂ければ、こちらからお迎えに上がりましたのに」

「そう堅苦しくせんくれ。ちと旅で寄りたくなっただけじゃよ。あまり大仰にしてはお主たち、松山の狸に迷惑もかかろうしな」

金平は伊予狸の一門で、刑部狸の直系であつたが——ここで出会つたのは全くの偶然だった。刑部自身とは因縁もあれ、マミゾウは彼の恩義を無視して袂を分かつた身である。松山の狸には恨まれているに違いないと思つていたし、今更合わせる顔も無いと考え、できるだけ波風を立てぬように帰るつもりでいたのだ。

「そんな、お恨みなど!! 巖王様——マミゾウ様が、こうして刑部様に逢いに来て下さった、僕達にはそれで十分なのです。はるばるお越しにいただいたことを喜ばぬ訳がありません」

なるほど勤勉で知られる金平狸、聞くよりもなお真摯であつた。お氣楽で万事適当な狸には
らしからぬ実直さ。それゆゑに彼はこうして今も人々に慕われているのだらう。

一人納得するマミゾウに、金平はそうだと手を叩き、

「マミゾウ様。お邪魔でないようならば、本日、お城のほとりにて僕達伊予狸の寄り合いが
あります。ささやかな宴も用意しておりますが——宜しければお越しいただけませんか。ここ
でお会いできたのも、刑部様の御縁でしょう」

「んむ——」

面倒じゃな、と半分思いつつも、松山の狸達の近況を知るいい機会でもあつた。刑部亡き今、
松山には太三郎のような古くからの知己もおらず、ここまで低頭する金平の頼みは断りづらい。
ここまで誠実に申し出されれば、むげに断るにも難しかった。

おおよそ、マミゾウが苦手とするのは、まこと誠心誠意から出る言葉である。

「わかった。折角のお誘い、断るのも悪からう」

「ありがとうございます！……折角ですのでご案内差し上げたいのですが、あいにく自分は
御行がありまして——なんでしたら使いの者を出しますが」

「いんや、それには及ばんよ。折角じゃ、一人でぶらつきたいところだな」

答え、マミゾウは元の旅装へと化け直す。

また深く一礼して見送る金平狸を背に、思わぬ縁もあるもんじやなと呟き、ふと氣付けば。

聞き覚えのあるエンジン音が、遠ざかってゆく。

「——おう」

話に夢中になって、すっかり時刻表のことを忘れていたのだ。

見上げた先を遠ざかってゆくバスの車体に、マミゾウは眉を寄せて後ろ頭をかいいた。

▼3

「やーれやれ……さんざんじゃったな」

結局、次のバスを待ってもいられず進むうち、とうとう乗り継ぎ地点の森松まで歩いてしまった。刑部の社を出てから軽く二時間近くが過ぎている。途中から雨まで降りだし、慌てて傘を用意したが、風が強くすっかり脚元から濡れ放題だ。

幸いにして台風の進路は松山を外れていたため、この分なら夜には治まるだろうが――

「宴会に出る前に、一度宿に戻って風呂にでも入らんとなあ」

すぶ濡れの服を見下ろしてぼやきながら、市内へ戻るバスへと乗り込んだ。

私鉄の松山駅から道後まで戻って湯船につかり、時間までをのんびりと過ごす。思っていたよりも疲れの溜まった脚のこわばりを揉みほぐし、大広間で涼みがてら甘味に舌鼓を打つ。

刻限を待って、マミゾウは再び宿を出た。

目指すは天下の名城・松山城。ぐるりと堀に囲まれた勝山の上に聳える伊予松平家の城郭である。かつて隠神刑部がお家騒動に一枚噛んだという名城も、いまは観光名所へと整備し直されていた。夜も遅くなれば山頂へ登るロープウエーは停止するが、妖怪狸たちにそんなものは何の障害にもならない。

魚に化けて城の堀を泳ぎ渡り、人に化けてチェックを抜け、鳥や虫に化けて空を飛び。

数十数百の化狸達が、人のいなくなつた城内に集つていた。ずらりと陣取つた狸達は、天守閣のすぐ傍に見事な御殿を立てて酒盛りの最中である。そこには既に伊予狸の名門がずらりと並び、マミゾウを出迎えていた。

奥の席には稻荷山六角堂を預かる榎大明神こと六角堂狸、東雲坂の毘沙門狸など、伊予の狸番付の上番に名を連ねる名狸たちが勢揃いだ。松山市内に留まらず、太三郎の妹にして四国の古株と名高い、遠く新居浜にいばは一宮神社の小女郎狸こじようろうまでもが顔を揃えていた。

「ようこそお越し下さいました、ニッ岩マミゾウ様!!」

「いやいや、待て待て、儂はそこまでされんでも——」

深々と頭を下げられ、一番の上座神を勧められてマミゾウは慌てて彼等を止める。ここまで上の上の扱いをされるとは思わなかつたのだ。刑部への不義理を感じ、後ずさろうとするマミゾウだが——

「そう仰らないでください。ささ、どうぞ!」

大明神の使いに相応しい神主姿に身を改めた大宮八幡の金平狸が、素早くマミゾウの後ろに回り込んでその背中を押し、奥の座へと押し込んでしまう。

たちまち宴はどつと湧いた。高名なる佐渡のニッ岩団三郎様に——と、伊予の狸達が上座に詰めかけ、次々と杯を差し出してくる。その顔ぶれも見事なもので、椿神社のお紅、西林寺の

大狸、高井八幡の三光姫狸と、いずれも劣らぬ逸話を持つ者たちばかり。伊予ではこんなにも多くの狸達がそれぞれに社殿を持つているのだということに、マミゾウは内心で舌を巻いていた。

はじめは神妙に杯を受けていたマミゾウだが、人懐こく個性的な伊予狸達に、いつしか耳と尻尾を露わにするほど馴染んでいた。彼らもまた無駄におもねることもなく、すぐに佐渡の二ツ岩と打ち解けていく。

酒が回ればすぐに歓声が上がリ、若い狸達が余興を始める。太三郎の化術に比べれば拙いものだが、彼らには今を楽しむ狸達の力強い躍動があった。一緒になって腹鼓を叩きながら、マミゾウはいつしか笑っていた。

「よし、儂もひとつ行くとするか」

居ても立つても居られなくなり、マミゾウも舞台へと上がって轟雷のようなドラムビートを披露した。最近知り合つて意気投合した付喪神・堀川雷鼓直伝のドラム捌きに、狸達はやんややんやの大喝采。めいめいに腹鼓を叩いて応じ、宴のテンションをますます上げていく。

アンコールの嵐に、松山城下はちよつとしたライブハウスの体となった。

「——なんだい、ずいぶん賑やかだねエ」

立て続けに五曲ばかりを演奏し終えて、マミゾウが額の汗をぬぐっていると——宴に新たな声が割り込んでくる。

「おお、遅いぞ、お袖の」

「仕方ないじゃないのサ、今日も遅番だよ。まったく、お役所仕事だなんて囃されても楽なものじゃないねエ」

遅れて現れたのは美しい雌狸であった。しなりと色っぽい肢体をくねらせ、金銀の糸で縫い取りされた優雅な袖を纏った彼女は、するすると上座へ向かい、マミゾウの隣にすくと腰を下ろす。

「お見限りじゃないですかえ、がんおう厳王様」

「おんや」

切れ長の目元に艶めかしい唇、人の姿もまたじつに、色気のある悩ましい娘の姿の彼女こそ、
松山狸番付、西の別格——やまたえのき八股榎大明神、そでお袖狸。

江戸の昔から人間達の暮らしを見るのを好んだとされる彼女は、城の堀端にある榎と社殿に祭られ、商売繁昌、病氣平癒、縁談と、数々の御利益で知られている。その神通力で数多くの人助けをしたことから、いまでも松山の市役所前に祀られ、人々に親しまれていた。

「そうか。おぬしもこちらじゃったか」

「そうですよウ。嫌だ、お忘れだったんじゃないでしょうねエ。あたし厳王様？ ……折角いらつしやったのなら、いの一あ番に妾のところにきてくださってもいいじゃありませんか。ねエ？」
「……そう言わんでおくれ」

切れ長の目でちらりと射竦められ、マミゾウはバツの悪い気分で首をすくめる。お袖とマミゾウは、日露戦争での大陸への出兵の折に知り合い、杯を交わして知己となっていた。

「そういやア金平、喜左衛門さんは来てらっしゃらないのかい？」

「そうなんだ。お誘いしたんだけど、大事な約束があるって」

「なんだい、また碁会所かい。あの爺さんもいい加減飽きないねエ。もう八百年やそこら続けるじゃないサ」

「とっても見どころのある子供がいるんだってさ。今度こそ本因坊を仕込むんだって息巻いてるよ」

「呆れたもんだね、せっかく巖王様がお出でだったのにサ」

お袖はマミゾウに寄り添い、杯を差し出してくる。ひやりとした彼女の指から杯を受け取ってぐいと飲み干し、蒔絵の盃へと化かして返せば、お袖は白い喉を反らして美味そうに酒精に口を付けた。

ともあれ、これで役者は揃った。伊予の狸達はいよいよ本番とばかり盛り上がる。

「どうです、マミゾウ様、伊予は」

「良い所じゃなあ。皆、とても生き生きとしておる。実に楽しくてうらやましい限りじゃよ」

「あら、お世辞なんて言わなくてもいいんですよ」

「世辞なものかね。お袖殿も、羽振りが良くて結構じゃなあ」

城に入る前、マミゾウはお袖狸の祀られる八股榎大明神の傍を通りかかったのだが——その社には彼女とその眷族が禄を食むのに十分な石高の米や酒、花に甘味までが供えられており、丁度地元の若者と思しき者たちが月例の参拝をしているところだった。人間が御幣を立て真言に般若経まで唱え、熱心に拝礼している姿など、マミゾウは己の社では例祭の時くらいしか見たことがない。

「あら、妾アそんなつもりで言ったんじゃないですよ」

「わかつておる、年寄りの僻みじゃよ」

ぐいと杯を干し、マミゾウは煙管を出して一服する。

分厚い雲で月は見えぬが、まったくいい夜だった。立ち上る白い煙に、しばし思いを馳せる佐渡のニッ岩。

そんな、時だ。

「まったく、刑部様も間の悪いこと。こんな日に使い走りの手紙なんぞ送ってこなくったっていいでしょうにねエ。おかげ様で残業だよウ」

「……なんじゃと？」

聞き捨てならない名前が聞こえ、マミゾウはずれかけた眼鏡を直し、声を上げる。

「ちよ、ちよいと待て。いま何と言った？」

「なについて、刑部様からのお手紙ですよウ」

「……ま、待て。待て。どうということじゃ？ 刑部殿は、多摩の騒動でお亡くなりになっておるんじゃない？」

勢い込んで尋ねるマミゾウに、しかし金平とお袖は顔を見合わせて、

「うふふ、何を仰るんですよ、厳王様。刑部様がお亡くなりになるなんて、そんな頓稚気なこと、天地がひっくり返ったつてありやあしませんよ。ねエ金平？」

「はい。今も僕達は、刑部様からあれこれとご指示を頂いています。……ご存じなかったんですか、マミゾウ様？」

「……本当、なのかの？ いや、しかし儂は確かに、多摩で亡くなられたというのを——」

「嫌ですねエ厳王さま、そんな与太話を信じてなさったんですのねエ」

「なんじゃと？」

混乱の中、上手く思考がまとまらない。この20年、ずっと信じてきたことが全てひっくり返されたのだ。酔いも一気に醒めていた。

「じゃア厳王さま、厳王様は、刑部様のお顔を覚えておいで？」

そんなものの、覚えているに決まっている——と言いかけ、マミゾウは愕然とする。確かに記憶にあるはずの、刑部狸の姿も、声も、喋り方も。まるで思い出せないのだ。お袖はくすくすと笑いながら、杯をあおった。

「ほら、ご覧なさいな。そもそもねエ、妾たちだって刑部様のお顔を知らないんですもの」

「あん……？」

お袖の言葉の意図が分からず、マミゾウは顔をしかめる。

「言葉どおりですよウ。ホラ、いつだつて刑部様のお報せを持つてくるのは、御使いの豆狸たちでしたよねエ？　そういうことでございますよウ」

「なんと……」

すடன்、とその場に腰を落とし、マミゾウはしばし呆然としていた。ゆつくりと、お袖の言葉を噛み締めながら、小さく肩を震わせる。

やがて震えは全身に伝播し、大きく激しくなつていった。

「くくく……つかつかつかか!!　なんと、なんともまあ、意地の悪いことをされるのう、刑部どの！」

まったくもつて、間抜けは儂ひとりじゃったか！」

とうとう堪え切れなくなつて、マミゾウは顔を覆つて笑いだした。肩を震わせるマミゾウに、お袖はそつと寄り添う。

「厳王さま。ここ四国じゃア、阿波の金長様、屋島の太三郎様、松山の刑部様、揃つて皆が皆、四国八百八狸の総帥だつて名乗つておりますけどもねエ、ちよいと考えればホラ、どれが本家だ元祖だつて争いになりそうなもんじゃアありませんか。

それでも、伊予も讃岐も阿波でも、誰もそんなこと言い出したりしないんですよ。ねエ？

巖王様が名代を務めてらっしゃった頃からそうだったんじゃないやありませんか。刑部様は御自分のお名前を名乗らせた狸を、そこいらじゆうに遣わせてございましたでしょうよ。どうして今、真つ正直に御本人が刑部狸を名乗ってらっしゃるとお思いで？」

「……………成程、成程のう……………」

こうして言われてみれば、まったくもつともな話ではあった。マミゾウは一人、顎をさすりながらしきりに頷く。

聞いた話では、多摩の騒動において、刑部はいつも太三郎の脇に控え、その補佐に徹していたという。

てつきりあの場における仕切りを最も神格の高い太三郎に任せたということだと思っていたが——あれが本人ではなく、かつての自分と同じような、刑部狸の名代であつたとすれば納得もいく。

「そりやそうじゃなあ、確かに」

「今も昔も、妾たちは皆、髭の端から尻尾の先まで刑部さまのお心通り。ずうつと昔から、そうございましたようよ。だからどこに四国八百八狸の総帥が居たつて喧嘩にもなりやアしない」マミゾウは大きく深呼吸をして、ゆるゆると首を振った。この20年、ずっと大事に懷に収めていた手紙を取り出し、苦笑いと共に思いでそれを破り捨てる。細かい紙片になったそれをよく見れば、枯れた一枚の葉っぱだった。

「……いかなな、儂としたことが、すっかり騙されたわい。まったく、実に厄介な御仁じやな、刑部殿は！」

かつて——かの聖徳王の時代より生き、長きにわたって世を騒がせた狗神と名乗るその獣は、四国に奉じられいつしか隠神と名を変えた。その存在すら闇に伏して「居ぬ」神とし、同輩の化狸すらも化かす、不在にして四国狸達を掌握する、この国の狸の総帥へと。

そして今も。京都を追われ、多摩で散り散りになっていても。八百八狸総帥をその頂きに、狸達は変わらず日々愉快にこの世を生きているのだ。

「巖王様、ですからねエ、妾からもお願いしますよウ、どうか金長さんにもお会いなすってくださいましな。七代目は丁度、巖王様を探しに佐渡まで旅した水呑み沢の文太狸と御同輩。積もるお話もお怨みもありましようよ。あの折に死んだふりを決め込んで、多摩の同族をほったらかしたツケはお払いなさらなきやア嘘つてもんでしよう」

「……………うむむ」

まったくな言い分に、マミゾウは思わず考え込む。まったく反論のできない話である。

いや、あるいは——

（この旅自体、それに気付かせるためのものだったのかもしれないな。……八百年も経ってこの有様かと、刑部殿に叱られたと言うことかのう）

「いやはや、まったく、面白き事よ」

くすりと微笑み、マミゾウは思い切り盃を傾けた。



「んむ？」

宴もたけなわ、すっかり良い気分で酔っていたマミゾウは、懷で振動するすまゝとほんに氣付いて身を起こした。眠い目を擦り開けてみれば、緊急連絡用のメールの簡潔な文字が並んでいる。

——佐渡は相川、二ツ岩大明神にて火災。

「なんじゃと？」

看過できない報せであつた。思わぬ一報にマミゾウは眼を丸くし、お袖が一緒になつて画面を覗きこんでくる。

「どうなさつたんです？」

「ちとな、儂の社殿で無作法を働いた輩が出たようじゃ」

「——なんですって!？」

金平が叫び、あたりの狸達もどよめいた。

ニュースサイトを検索してみると、ついさつきタイムラインに並んだ話のようであり、まだ詳細は分からないままだった。どうやら燃えたのはお籠り堂であるようだが、本殿への被害は判然としない。

このタイミングでまるで見計らったかのような火災、あまりのきな臭さに、マミゾウは眉をしかめる。

（これは——ちと、禅達に押し付けけるには無責任じゃな）

せっかくの酔いも一氣に冷めてしまった。マミゾウは手早く荷物を纏め、伊予狸達の前に立つ。

「今宵の宴、まことに嬉しい限りじゃ。心ゆくまで語りたいと思っておったが、急用が出来てしもうた。名残惜しいが、儂も自分の社殿を焼かれて黙っておるほど老いても居らん。すまんが、ここで中座させて貰うとするよ」

一札と共に、一斉に化け式達が飛び出した。獣に鳥に、人に蛙。落書きめいたシルエットの化け式達が、伊予の狸達の間を名残惜しそうに駆け抜ける。

「おやおや、お忙しいですこと」

「金長のところには使いをやっておくよ。近々必ず顔を出す」

「ええ、ええ。それがよろしいでしょうよう。……どうぞご無事で、ニッ岩殿王様」

ひらひらと手を振るお袖狸に、マミゾウはしっかりと頷き、どろんと身を翻して帽子に襟巻の大妖怪の装いも新たに空へと飛び上がった。

もはや遠慮などしてられない。宙に身を翻して全身に力を漲らせ、化け式をさらに一羽の鳳へと変じた。五丈ほどもある翼をはためかせる猛禽の背に乗り、夜空へと舞い上がる。

遙か眼下、瀬戸内の荒波を見降ろして、一路、北へ――

「やれやれ――どこのだいじや、寄りにもよつて儂の社殿に手を出すとはの」

ニッ岩大明神お籠り堂に詰めるような者達は、そろつて敬虔な信者である。まかり間違つても不審火を出すような不心得者ではないはずだった。仮にそうだったとしても、留守を頼んだ禅達以下の四天王がへまをやらかすとは思えない。

胸騒ぎと共に、どこか昂る自分を感じながら――マミゾウは佐渡へと急ぐのだった。

——さて。

かくして故郷・佐渡は相川のニッ岩大明神へと旅立ったマミソウ。

その佐渡への道中、ニッ岩貉は思わぬ相手との再会を果たすことと相成ります。

旅の友を引き連れて、はるか越佐の海を超え。大親分の一年と半年ぶりの帰郷は、佐渡の狸社会を揺るがす大騒動となるのでありますが——その新たな化逆門^{バクギヤモリ}について語るのはまた、次の機会といたしましょう！

ニッ岩貉化逆門 了

「続」に続く

四十九里波越え了



「——ん、どうした？ 儂になんぞ用事かの」

穏やかな春の昼下がり。佐渡の化け貉、二ツ岩マミゾウは命蓮寺の離れ、縁側に座り込んで背を丸め、重ねた木の葉を何枚と繰っていた。

床に並んだ柏の葉には、人の目には見えぬ妖怪墨で、びっしりと文字が書きこまれていた。達筆な筆文字のそれをひらひらと振って示し、マミゾウは小さく苦笑。

「ああ、こいつか。佐渡からの便りじゃよ。皆、元気でやっておるとな。儂が居らんでも万事問題なくやっておるゆえ、もう戻って来なくても構わんなどと……まったく、憎まれ口を聞きおつて。相変わらず素直になれん奴じやな」

柏の葉の手紙に記された東光寺禪達とうこうじぜんたつという署名に、眼鏡の奥で目を細めるマミゾウ。その心は、遠く越佐の四十九里の海の果てへと飛んでいるようだった。

佐渡では古くより狸のことを『貉』——むじなと呼び、ゆえにここでもそう表記する。

平安のみやこにながらく暮らしていたマミゾウこと二ツ岩団三郎貉が、活動の拠点を佐渡に移したのは、承久の乱が過ぎた鎌倉時代の中頃である。この当時、佐渡には土着の妖怪貉が跋扈して覇を競い、さながら群雄割拠の様相を呈していた。

佐和田上矢の初右衛門、西三川椿尾の鵜掛老など、佐渡各地に一族を配してきた古老たちに交じって、九州より流れ着いた玄翁、二宮の真光寺貉などなど、新興の貉達も勢力を増し、一足早い戦国の世であったという。

マミゾウもこれ以前から何度となく佐渡へと渡っていたが、それはあくまで客分としての立場であった。佐渡に本拠を移すとなると意味合いはまるで違う。海を超えてやって来た侵略者に、土着の貉たちの多くは怒りをあらわにし、彼女の排斥へと乗り出したのであった。

その中でも反抗派の急先鋒が、佐渡貉番付東の横綱、東光寺の禪達^{ぜんたつ}であった。彼がマミゾウに対して敵対を表明したのはかなり早い時期からであったが、その対立が決定的になったのはマミゾウが佐渡の西半分を平定した時分であった。

なお、古くより狸貉の住む地域には、その地方の有力な貉が名を連ねる狸番付、貉番付なるものが存在しているが、これはなにも、佐渡の貉たちが島内を巡業し相撲を取っていたわけではなく、人間がめいめい勝手に有名な貉を並べたものだ。しかし案外その格付けが正確なところからして、作成に当たってはいずこかの貉の入れ知恵があったものと思われる。

……閑話休題。

「佐渡にはそれこそ何百という名貉がいたが、過去からいままでを見回してみたとこで、あやつほど頑強で強かな貉はおらんかったのう。なにしろ本身^{ほんみ}からして身の丈八尺を超える大貉じゃ。人に化けても巖のような豪傑でな。いっそ罌^{びん}よりもでかかったかもしれぬ」

その豪快な外見とは裏腹に、禪達貉は東光寺の床下に住みつき、徳で知られる歴代の和尚たちとの禪問答を好むという智恵者であった。はじめは拙い知恵比べで何度となく和尚にやりこめられていたものの、門前の妖怪なんとやらで経文を覚え仏道に親しみ、気付けば立派に仏門に帰依していた。

力もあり智恵もあり、化け貉としても一流となれば他の貉達が放っておくわけもない。禪達貉はいっしか佐渡の東半分の貉達の信頼を勝ち得ていたのである。

「図体は見上げるほどでかくせに妙なところで細かいやつでなあ。他の貉が無邪気に人を化かして楽しんで居る中で、妖怪と人がどう向き合うべきか、貉はどうして人を化かそうとするのかなどと答えも出んような事ばかりを気にしておった。今からしてみれば、長く仏門に触れていたゆえの思慮というものもあつたのかもしれない。海を越えて、佐渡の貉達の行く末などを案じておつた貉は他にそうおらんかったからな」

経を習い読み、小僧に化けて修行に励み、長じてしまひには和尚の代理を務めることもあつたというこの禪達。はるばる佐渡の寺を訪ね歩いて禪問答に精を出し、子供や若者に説教までする博学ぶりであつた。

「儂につつかかつてきた理由も、狗神いぬがみぎょうぶ刑部の名代を辞め、素のままの一貉となつたのならその証を立ててみせろと言うものでなあ。……つくづく無茶な注文じやつたよ。名代を務めるのが嫌になつて刑部殿の元を逃げ出してきた儂に、そんなことができるはずもない。言い争いにな

るのは必然じゃった」

元は余所者のマミゾウが佐渡の貉達と馴染み、多くの貉と親交を広めるにつれ、禪達の態度はますます頑ななものとなつていったという。

このくそ真面目な大貉は、佐渡が四国の支配地とされるのではないかという危惧を抱いていたのだ。当時すでに全国には稲荷を中心とした狐信仰が席卷し、狸達はかつての神格を失いつつあった。新たに産まれる子狸は年々妖力を欠き、かつての名のある狸達ですらも智慧を失くして禽獣へと追いやられていたのである。

残されたわずかな狸の領土である佐渡と四国は、それぞれ長らく独立状態にあったが——禪達はみやこより落ち伸びたマミゾウを、本邦の狸を統一し、狐へと対抗する四国八百八狸達の侵攻の尖兵だと考えたのである。

「まあ、儂も裸一貫でみやこを飛び出した手前、戻る場所なんぞなかったからのう。侵略の意図がなかったかという嘘になる。まだ儂も若かったしのう。余所者と舐められるのもまっぴらじゃった。……売られた喧嘩は買わにやならん」

かくして東西の名貉によって佐渡は二つに割れ、それぞれの陣営に与した貉達は、何度となく合戦を繰り返した。後の世にいう天下分け目の関ヶ原もかくやという有様であつたらしい。

佐渡じゅうの貉が化力妖力、知力体力時の運を結集し、人知れず佐渡の山野で、空で、湖で大激突を繰り広げた。その凄まじきことは大地を裂き、海を割り、筆舌に尽くしがたいもので

あつたと言うが——その多くは人知れず、山野の奥深くで行われたため、いまではわずかに百鬼夜行や猪火として人々の伝承に残るのみだという。

「ん？ 決着かの？ そりや勿論、儂の圧勝に決まっておる。

……と言いたいところじゃがの、残念ながら勝負はつかんかった。お互いの陣地を攻めて守つて奪い奪い返して、七年続いた大戦。死にかけたことも何度もあつた。

いい加減決着をつけようと、最後の最後にやつた大化け百番勝負が、九十九戦四十九勝四十九敗一引き分けじゃ。儂は最後の一番を残した九十九回番目で精も根も尽き果て、満身創痍の疲労困憊での。もう負けても仕方ないと諦めてひっくり返ったら、丁度禅達の奴も泡を吹いて、一緒に目を回しおつてのう。何のことはない、儂もあやつも、引っ込みがつかんまま皆の前で虚勢を張り続けておつたのよ。

それでな、もうなんだか争うのが馬鹿馬鹿しくなつてしまつてのう。双方手打ちにしてお終いにしたんじやよ」

そしてその場で、禅達はマミゾウに言った。長らく佐渡に住み、多くの貉達に親しんできた自分と、佐渡の外から渡ってきたマミゾウ。それがこの七年をかけて佐渡の西半分と東半分を率い、勝負して双方引き分けで終わるのなら、どちらが上なのかは明白であると。

「ゆえにあやつは儂を佐渡貉の総大将に立てて、自分はその配下になるとして引いたんじやよ。貉の棟梁なんぞという面倒な役目よりも、その方が気楽だとも言うておつたがな」

後に、マミゾウの妻となった関の寒戸^{さぶと}お杉、重屋^{げんすけ}の源助、湖鏡庵^{さいきぼう}の財喜坊^{さいきぼう}を加え、彼等は佐渡猪四天王として団三郎貉を支えることとなった。

佐渡の支配は盤石なものとなり、彼等は幾度となく海を超えて押し寄せた越国総鎮守一宮の宝徳山稻荷の勢力を撃退し続けたという。

「儂が幻想郷に来るにあたって、佐渡のことは禅達らに任せておったんじゃが——さてはて、あちらも愉しくやっているようだなによりじゃなあ」

そう言つて、マミゾウは手の中の榆の葉をぽいと投げ、鳥へと化け換えて己の指先に乗せ、笑うのだった。

(了)

初出…新潟東方祭14 (平成26年4月13日)

突発合同誌「さどころ」 改稿して再録

続ニッ岩猪化逆門

【つづき】

暇をあぐね、生来の旅好きの虫が騒ぎだし、幻想郷を抜け出して『外の世界』の観光に訪れたニッ岩マミソウ。その旅は数百年ぶりに狸の本領、四国を巡り讃岐、屋島の禿狸・太三郎や伊予の山口霊神・隠神刑部らの名狸の元を訪れる旅にございます。

旅の中、屋島や松山の名狸たちと新たな交流を育み、松山城下始まるは、彼等に囲まれての大宴会。呑めや歌えやの大騒ぎの宴もたけなわとなったその時、マミソウの元に一通の報告が届いたのであります。

なんとマミソウの本領、佐渡は相川のニッ岩大明神で火災が起き、社が燃え落ちたということからさあ大変。

急遽帰郷を決意したマミソウは、松山より海を越えて飛び立ったのでありました――

▼ 1

脂汗が滲み、息が荒くなる。夜闇の中でうねる瀬戸内の海の上、己の呼びだした化け式の鳳の上で、マミゾウは己の軽率さを後悔していた。

「——ちと、早まったのう」

吹き付ける風に煽られるなか、主の命に化け式は懸命に翼をはためかせる。

それでも速度は一向に上がらず、横殴りの風はふとした油断で化け式をマミゾウもろともに海へと叩き落とさんとするほどだ。折しも台風が通り抜けた直後とあって、海も風もまだ荒々しく化け貉の行く手を阻む。

みるみる消耗していく化け式に追加の化力を注ぎ込み、マミゾウは雲間の星灯りを頼りになおも北を目指す。しかし夜の海のただ中で、正しい方角であるのかは判然としない。対岸の街の灯りは一向に近づいてくる様子もなく、気持ちばかりが焦る。

（流石にもう、半分ほどは来ておるはずじゃが）

マミゾウの頬をつうつと汗が伝う。盛大に唖呵を切って松山城下を飛び出したのはいいが、風のように空を駆けていられたのも四半刻ばかり。いまはまっすぐ飛び続けるので精一杯の有様だ。

（今夜はもう船便も途切れておろうし、これが一番早いのは間違っておらん筈じゃが、……にしてみしんどいのう）

じつとりと顎に浮かぶ汗の気持ち悪さに、顎を拭った時だ。

「うお……っ」

突如、横殴りの風に煽られて鳳が体勢を崩した。集中が途切れ、化け式がどろんと煙を噴いて消えうせる。

宙に投げ出されたマミゾウ、咄嗟に飛ぼうとするが、砂袋を括りつけられたかのように全身を包む疲労がそれを許さない。落下速度をわずかに食い止めるのがせいぜいで、鉛のように黒々とした海原がみるみる目の前に迫ってくる。

「ちい……ッ」

舌打ちひとつ。耳元で唸る風を聞きながら、マミゾウは齒を食いしばって懷に手を突っ込んだ。楡の葉を握り締め、全身から振り出した化力を込める。

立ち昇る白煙を裂いて、白い翼が力強く風を掴んだ。

冷たい波に飲み込まれる寸前、新たに呼び出した化け式の背で、マミゾウはぜいぜいと息を荒げながら膝を突いていた。

「……危機一髪じゃの。……参ったのう、この様か」

狸は、空を飛べるようにはできていない。今更ながらにそんな当たり前の事実を深く噛み締

めながら、マミゾウは額の汗をぬぐう。知らず、幻想郷での生活に慣れてしまっていたようで、すっかりこちらの常識を忘れていた。

慎重に化け式を飛翔させ、高度を保つ。変化に用いる葉っぱは、初心者向けの補助具のようなもの。この程度の化術の行使にも、そんなものに頼らねばならないほど余裕をなくしていることに、マミゾウは改めて自嘲の息を吐いた。

もともと空を飛ぶことを生業とする一部の妖怪を除けば、山一つ、海一つを軽々と飛び越えるというのは名のある妖怪にも難しいものだ。

恐れや信仰が失われつつあるいまの時代、妖怪達は、伝承によって己の関連付けられた土地に縛り付けられている。自らの支配地を離れて長い旅をすることには非常な困難を伴うのだ。好き勝手に空を行き来できるのは、名山霊峰に祀られた天狗くらいのものである。

「三蔵法師が天竺へと旅をしとった頃は、こんな不便はなかったのかもしれないあ」

汗に湿った髪を掻き上げて後ろで縛り、静かに呼吸を整える。

振り向いた背中、松山の街灯りは向かう対岸のものと同じくらいに遠くなっていた。

「久々の旅路で、年甲斐もなく舞い上がっておった、ということかの」

自嘲と共に口元を緩める。本邦における狸の総本拠、しかも八百八狸のお膝元たる松山にあつて、狸達への信仰は篤い。己がうちにふつつと湧き起る妖力の滾りは自然とマミゾウを高揚させていたのであろう。

なおも慎重に風を読みながら、マミゾウは化け式の翼を北へと向けた。



やっと瀬戸内の海を越え、呉の起重機群を脇目に、マミゾウが広島港に降り立ったのは、夜の九時も半を過ぎようかという時刻。港前発の路面電車の終電前に滑り込めたのは僥倖と言えた。

それでも松山城下からの海を隔て、直線距離60キロ超をわずか1時間あまりで飛び切ったのであるから、この速度は狸界にあつて破格と呼んで差し支えないだろう。

混雑する座席の優先席シート前で、手摺にぐったりともたれかかり、扇子片手に顔に浮いた汗をぬぐう。

「んむ……どうにか今夜中に京都までは戻れそうじゃな」

スマートフォンを弄つて新幹線の時刻を調べ、ついでに指定券の購入も済ませる。まったく文明の利器さまさまであった。

「こんなものがあるから妖怪も墮落するんじゃないやろうなあ」

使いこなしている自分に言えた義理ではないがと自嘲しつつ、広島繁華街を通り抜ける路面電車をシートに揺られてしばし。マミゾウは窓の外を流れる景色を見るときもなしに眺めてい

た。

ここ広島は歴史ある町ではあるが、いまは妖怪達とはもつとも縁遠いところでもある。まもなく七〇年を数えようとしているあの戦争の爪痕はこんな形でも残っていた。

その分、新興の都市伝説や、最近生まれた怪異の溜まり場になっているとも聞かすが——いずれにせよ、いまは見聞を広めている時間はなさそうだ。

水都の誉れも高い広島の白亜の駅舎。そこらの飲み屋の暖簾をくぐって、疲れた身体に酒精を補充したいところをぐつとこらえ、ホームへと走る。発車ベルの鳴り響く中で新幹線に飛び乗り、わずかばかりの荷物（無論、旅装の大半は小豆や米粒に化かして身につけている）を網棚に乗せて。

指定席のソファアの背もたれに身を沈めたところでようやくマミゾウは深い溜息をついた。

「慌ただしい夜じゃったなあ」

ほんの半日前まで、隠神刑部の社に詣でて本邦の狸の行く末を嘆いていたというのに、いまや京都へと向かう車上の狸だ。旅好きが信条のマミゾウでも、ここまでの強行軍は滅多にこなした覚えがない。

さすがに疲れを覚え、眼鏡を外して目頭を押し揉む。

「……腹ごしらえも半端なままじゃったな」

松山城下の饗応も途中で飛び出し、海を越えた消耗のせいでえらく腹が空いていた。車内販

売を呼び止め、牡蠣弁当と缶酎ハイを注文する。

特急の揺れを感じながらの、旅情溢れる食事のはずだが、それも今はどこか味も素っ気なく感じられた。

「……………むぐ」

弁当を平らげながらも、マミゾウの胸を占めるのは、佐渡は相川で起きた火事のことだ。

自身を祀る二ツ岩大明神の火災というニュースは、老獺な化狸をして平常心を保つには難しいものだった。しかし佐渡の貉総大将たるマミゾウには一大事であっても、人間達にとつてはそうでもない見え、ニュースサイトを検索しても午後の更新を最後に詳細・続報はなく、匿名掲示板を漁ってみてもそれらしい内容は見つからない。

SNSのタイムラインを遡ると地元の青年団が様子を見に行った時の写真をアップロードしており、夕方までには鎮火したらしいことまでは確かなようだったが――

「あまり悠長にはしておれんかもしれないのう。佐渡にも誰ぞ、もう少しいた―ねつとに詳しい者を残しておくべきじゃったなあ」

時間の止まったような幻想郷は別にして、今の世の中、妖怪もIT化の波が押し寄せている。数年前、東の妖怪総大将、ぬらりひよんが不法侵入の罪に問われてセコムに追い出されたという話は多くの大妖怪達を震撼させた出来事であった。

佐渡に残してきた配下の狸達が上手く立ち回ってくれることを祈るのみだ。マミゾウが信頼

を置く四天王、よほどのことでもない限り後れを取ることはないだろうが……。

(さて——どうなっておるやら)

胸中の不安はぬぐえず、焦れながらスマートフォンを弄っているうち、いつの間にか眠気が押し寄せてくる。

海を飛び越えた疲れもあったか、いつしかマミゾウの意識はまどろみの中に落ちていった。

▼2

「——お客さん、もしもし、終点ですよ」

「……………んむ？」

うとうとと舟を漕いでいたマミゾウは、車掌に肩を叩かれて目を覚ました。

気付けば新幹線は煌々とした駅構内に停車していた。案内板には終点・京都の文字が明滅し、下車を促す車内アナウンスが繰り返されている。

「……寝ておったか」

鼻上に眼鏡を持ち上げ、ふわあと大欠伸と共に伸びを一つ。目元に浮かんだ涙をぬぐい、荷物を手にもうと出た。

京都——成立より千数百年を数える、この国で最も古きより続く都。四国への旅でここを経たのはほんの二日前のことになるが、随分と長い旅をして戻ってきたような気分だった。

案内板を見上げるが、本日の特急は大半が終電となっており、鈍行列車も近郊へ向かうものがいくつか残っている程度だ。飛び乗ったところで隣町に辿り着いておしまいである。

「ここまで来られただけでも重畳、とせんといかんのじやろうなあ」

現在計画中のリニアが完成すれば、京都と東京はわずか一時間足らずで結ばれることとなる

らしい。そうなれば、あるいは今夜中にも東京まで出ることも可能だったかもしれないが、今はまだ夢物語だ。世界遺産となった富士山や、青木ヶ原の樹海の磁場など、開発には問題が山積しているという話も聞く。

「さて、こうしておれん。今夜の寝床を探さんとなあ」

新幹線ホームを抜け、まだ人の賑わいが残る駅構内を進む。連休最後の日とあってか、構内のあちこちには旅行客らしき赤ら顔の飲兵衛たちが千鳥足でふらついていた。この有様ではホテルも旅館も大半が埋まっているだろう。今から飛び込みで泊めてくれる場所などあるだろうか？とマミゾウは思案を巡らせた。

これだけ有名な古都となると、寺社も大半が観光地化されている。軒先で夜が明けるまでというのは難しい。さりとてカラオケボックスやネットカフェ、公園で横になるのはなんとなく微妙に負けた気分なのであった。

「――仕方ない、あまり気は進まんがああのお店にでも世話になるかのう」

寺町三条の地下に、朱硝子というバーがある。ここは京都の狸達の多くが馴染みとする店であった。マミゾウも噂に聞くくらいで、これまで訪ねたことは無かったのだが――気兼ねせず休息を取れそうな場所に他に心当たりがなく、そこで夜明かしさせてもらうのが無難かと思いつながら、駅舎を出る。

こちらでは夜のうちにひと雨あったようで、駅の外は案外とひんやりしていた。半乾きのア

スファルトを踏んだマミゾウの視界の端を、ふと小さな影が横切る。

(む?)

見間違いだと思いつつも、なんの気なしに視線を戻し、それがよく見知った姿であることに気付いてマミゾウは驚いた。

「——ぬえ?」

駅舎の前、石のベンチに腰かけていたのは、膝上丈のワンピースに膝上までのニーソックスを身に付けた少女。

封獣ぬえ——マミゾウの旧知の妖怪にして、千年前の京都を騒がせた大妖怪であった。流石に背中 of 羽根は隠しているようだが、特に変装している様子も見られず、素のままの姿である。

「どうしたんじゃ、こんなところで?」

いまはマミゾウ同様、幻想郷に住む彼女がここにいることに驚きを隠せず、マミゾウは彼女に近づく。見れば彼女は全身ずぶ濡れであり、深く俯いた肩が小さく震えている。

「おい、ぬえ?」

「馬鹿っ!!」

伸ばしかけたマミゾウの手のひらをはたき、ぬえは肩を震わせて叫んだ。困惑するマミゾウの胸倉を掴み、思い切り詰め寄ってくる。

「——黙っていないとなるとか、そういうの無しだろ!! どこ行っただのかって思っ、ずつと、

ずつと探したんだぞっ!!」

感情をほとばしらせたまま、ぬえはマミゾウの胸元に額を押し付け、丸めた拳でマミゾウの胸を叩いた。

雨宿りも満足にできないでいたのだろう。白いうなじに濡れた髪を張りつかせ、ぼす、ぼすと弱々しい抗議を繰り返すぬえの身体が、マミゾウの胸元を湿らせていった。

「あー……」

胸元に顔をうずめてしゃくりあげるぬえに、マミゾウは気まずい思いで頬を搔き――

「すまん、ぬえ」

謝る以外の選択肢を持たなかった。



宿は必然的に二人部屋となった。濡れ鼠で目元を泣き腫らしたままのぬえを連れ回してはどうなるとも思えず、彼女を別の姿に化かし（ぬえは頑なに自分の能力を使おうとせず、マミゾウの腕に抱きついたまま離れなかった）駅前のホテルのフロントに向かう。部屋がダブルルームしか空いておらず、マミゾウは内心断られないかと冷や冷やしていたが――ホテルマンはプロの対応で快く応じてくれた。

後になって床が濡れていたことを不審に思われねば良いがと思いつつ、マミゾウはベッドに腰を下ろす。伸びをしてきききと首を鳴らした。

「……後は寝るだけと思っておったが、えらく疲れたのう」

「勝手に好き放題したツケだろ。自業自得ってやつだよ」

シャワールームから顔を出したぬえが、髪を拭きながら現れる。バスタオルを巻いただけの姿で気にせず部屋を横切り、冷蔵庫から勝手にビールを取り出した。

泣いたカラスが何とやら。彼女はすっかりいつもの様子をとり戻している。まだ目元が少しばかり赤かったが、それには触れずにマミゾウはぬえが投げてよこすビールを受け取り、プルタブを引く。

「おぬし、本気で付いてくるつもりか」

「決まってるだろ。白蓮からも頼まれてるんだからね。ちゃんとマミゾウを連れて帰って来いって。見張り番だよ」

口元に白い泡髭をつけながら、当然だろと言うような顔のぬえ。マミゾウが幻想郷に持ち込んで以来、ぬえはビールをよく好んでいた。

白蓮の慈悲深さはマミゾウもよく知るところであるが、マミゾウはあくまで寺の客分である。ぬえの説明は命蓮寺の代表にしてはいささか筋違いとも思えた。

（察するに、ぬえに儂の後を追わせる方便というところかの）

苦笑しつつ、マミゾウも冷えたビールを煽る。味の濃いつまみも欲しくなるところだが、生憎と部屋の中には備えられていない。今からルームサービスを頼むのも億劫であった。

「だから、ここに置いてくとかはなしだからな、マミゾウ」

「わかったわかった。せんよ、そんな事は」

びしっと指を突きつけてくるぬえ。ベッドの上で無防備に素足を組んでいるものだから、タオルがまくれて湯上りの肌が実にきわどい。――が、絶妙なところで大事な所が見えなくなっているのを眺めつつ、これも彼女の正体不明故なのかしらんと、マミゾウはぼんやりと思考を進めた。

「けどさ、ちよつと驚いたよ。マミゾウの社を焼くなんて骨のあるやつが佐渡にいたんだな。前から自慢してたじゃないか。佐渡でニッ岩団三郎に逆らう奴なんかいないって」

「……そこが思案のしどころじゃの。はつきり言えばこれと言って心当たりはなくてのう。偶然と片付けることもできるが、いささかたいみんなぐが良すぎるのが気になる。前にも言ったと思うが、儂の留守を預かる者達は、そうやすやすと異変を許すような連中ではないからのう」

マミゾウが佐渡を離れている間、かの島はマミゾウの配下である佐渡貉の四天王が治めている。いずれも四国の名狸に勝れども劣らぬ猛者たちばかりだ。そのなかで社を燃やすなどということができるものだろうか。

「……ま、どちらにせよ戻ってみんとわからんよ」

ビールを飲み終え、煙管を叩いて一服を終えたマミゾウはそう結論付けた。

「……さて。明日は早い。もう寝るぞ」

「えー、まだいいだろ、別に」

「駄目じゃ」

手早くシャワーで旅の汗と汚れを落としたマミゾウは、ぬえの手からリモコンを取り上げた。有料番組を垂れ流していたテレビを消してベッドの上に横になる。ぬえはなおも文句を続けていたが、マミゾウが部屋の灯りを落とすと大人しくなった。

部屋の窓、カーテンの合わせ目の隙間から、なお輝く街の灯りがわずかに差し込んでいる。

「……………」

小さな気配が、ベッドを軋ませる。もぞりと寝がえりを打つマミゾウの背中に、ふと近付く感触があった。

背中にかすかな吐息を感じたと同時、こつんと少女の額が肩甲骨のあたりに押し付けられる。マミゾウは片目を閉じて眉をしかめ、本性も露わに尻尾を振りだした。

ベッドの中にぼふんと膨らむ大きな尻尾。ぬえは間髪いれずその尻尾に抱きついてくる。ふかふかの縞模様にならずまるようにして、ぬえはすぐに寝息を立て始めた。

少女のあどけない横顔と、その黒髪をそつと撫で、マミゾウはゆっくり目を閉じた。

▼3

翌朝。

朝日が千年王城を照らす中、旅装姿の二人ははやばやと京都駅のホームにあった。夜明けもそこそこにホテルを引き払い、東京行の新幹線で一路首都を目指していたのである。

チェックの袖無パーカーにジーンズというマミゾウに対し、ぬえは肩から二の腕の肌もまぶしい黒の肩出しワンピース。

早朝とあってか、車内の混み具合はさほどでもない。座席に並んで座り、窓に張り付いて時速270キロで行きすぎる光景に目を輝かせるぬえに対し、やや寝不足気味のマミゾウは欠伸が絶えない。

すぐ後ろに少女の寝息を感じながら、その柔肌に手を出すのを堪えて大人しくしていたという努力は、割合称賛に値するものであったが——そんな気苦労も知ってか知らずか、ぬえは隣で朝食のホットドッグにかぶりついていた。いや。時折見せつけるようにソーセージを齧っている様は、明らかに分かってやっていいるのだろう。

「ふむ、やはり東京で乗り換えが一番かのう」

携帯端末で経路を検索しているのを、興味津々で覗き込んでくるぬえ。ふと気付いて、マミ

ゾウは聞いてみる。

「そう言えばおぬし、以前に儂を呼びに来た時はどうしておったんじや」

「んー？　へぐに、ふあつふふあんは」

「食つてから喋らんか」

「……むぐ。別に？　普通にここから特急つてのに乗って、上越のほうに抜けたただだよ」

液晶の地図をぬえの指がなぞる。どうやら特急サンダーバードで金沢へ抜け、そこから北陸を海沿いに移動して直江津から小木へのフェリーに乗ったらしい。

空を飛んできたわけではないだろうとは思っていたが、思っていた以上にまともなルートだった。実際に試して思い知ったが、今の世の中、人智を超えた妖怪であっても山越え谷越え風のようにひとつ飛びというのは不可能に近い。東京経由の新幹線よりも多少時間は掛かるが、下手に迂回の経路を探すよりも分かりやすく、路銀もこちらの方がだいぶ安いとあつては妥当であろう。

「ついてくるのは今更どうこう言わんが、騒ぎにならんよう大人しくしておれよ。おぬしの起こす厄介事まで面倒見るのは御免じゃからな」

「わかつてるって、子供じやないんだからさ」

小さく歯を見せて笑うぬえ。昨日の様子を見るにとても納得できないが、マミゾウは諦めてシートに腰を沈めた。懷から煙管を取り出して一服つけ、煙をくゆらせる。

「儂ももう少し、なにか腹に入れておくか」

マミゾウが車内販売を呼び止めると、ぬえがアイスクリームをねだったので、それも一緒に買い求めた。懐の札入れから紙幣を取り出すマミゾウをずっと見ていたぬえが、遠ざかるカートを見て口を開く。

「なあ、マミぞー」

「なんじゃ」

「前から思ってたけど、なんでいちいち律儀に金払ってんのさ。人間相手の商売になんて、従うことないだろ？」

思えばぬえは、新幹線の改札でも微妙に不満そうだった。成程、実に妖怪らしい疑問と言えよう。

「確かに妖怪の理屈としてはそうかもしれないが、これは儂なりの礼儀の通し方じゃからなあ」

「あっちじゃ葉っぱのお金で古本を買い叩こうとしてたくせに、良く言うよ」

「あれはあれで意味があるんじゃないや。軽々しく一緒にしてはならん。……む、その顔は信用しておらんや」

マミゾウは弁当の唐揚げを口に放り込んで咀嚼し、お茶でそれを飲み込む。

「……むぐ。単純に言えばの、驚かす相手の問題じゃ。儂ら狸は——狸に限らず狐も貂も鼬も、化生は人を化かすことを習性とするが、それは単に趣味でやっておるわけではない。その行い

が儂らの格を高めることに繋がるからじゃ。磨き上げた化術で多くの人間を化かし、名をあげることは己の格や力を増すことにも繋がる。ぬえよ、おぬしとて同じじゃろう」

「……まあね」

「だが、それも相手が驚き、狸に化かされたと理解してくれるからこそ成り立つことでのう。こちらの世界でも、人間を煙に巻く位の事はたやすいが——」

マミゾウはひよいと弁当のレシートを指に挟むとそれを一万円札に化かし、さらに同じ事をして五枚十枚と増やして見せた。人間達は電子制御やIC機器による個人認証などで偽造を防いでいるつもりらしいが、むしろそのような形のない暗号や情報を化かすのは狸の得意とするところである。

「それをしたところで、こちらの人間達はそれを狸の仕業じゃとは思いません。精々が見間違え、気の迷い、神経を患つての幻覚と言うことで片付けてしまふ。奇妙不可思議な妖怪の仕業だとは微塵も信じてくれんのじゃな。」

そんなところで葉っぱを札束にしたところで、異物混入か、機械の誤作動、あるいは詐欺師の仕業にされるのが関の山じゃ。特にこのような、人だらけの都会ではのう。それでは単にくたびれ儲けじゃよ」

加えて、妖怪への認知の薄い外の世界では、簡単な化術でも余分な力の消耗を強いられる。まったくもって割に合わないのであった。

そこへ行くと、幻想郷の純朴な人々は、妖怪と共に暮らさだけあつて騙しがいのある者たちばかりだ。葉っぱのお金をみて、すぐに狸だ狐だ、化生の仕業だと察してくれる。そんな環境であれば、自然と化術も冴え、一つ一つの術にも力がこもろうというものであつた。

「少し気取つて言えば、人でないものが人の成りをし、人の振りをして通すのもまた彼らを謀ることに他ならんということかの。金の支払いに関しては、儂個人の心情じゃがな」

「ふーん」

「張り合いのない返事じゃのう」

せつかくの説明も、ぬえには大した興味をもたらずものでもなかったらしい。諦めて弁当の続きを口に運ぶマミゾウの横で、ぬえもアイスに頬を緩めていた。

出発から二時間と少し。西と東の二つの都をつなぐ幹線路は二人を首都・東京へと送り届けた。静岡では車窓から富士山を眺めてその変わらぬ姿に感心し、横浜ではぬえが中華街に行きたいと降りたがったりとひと騒動あつたが、概ね順調な旅路である。

東京——いまのこの国の中心。京都よりもずっと新しい都。京都も人の多さでは引けを取らないが、ここはそこに輪をかけて混雑が酷い。歩く人々は皆忙しげに行きかい、間を惜しんで携帯端末を広げ、電話の向こうに何かを怒鳴っている。平日の出勤時間帯とあつてか、背広姿が非常に目立った。

「はぐれんようについて来いよ、ぬえ」

「わかつてるって」

背中からの応えに頷いて案内板を見上げていたマミゾウだが、ふと違和感を覚えて振り返る。見れば、背を向けたぬえがそくさと改札口を抜けようとしているところだった。

「こら待て、どこに行くんじゃ!」

「げ、もうバレた」

逃げようとするぬえの背中に手を伸ばし、羽根を掴んで引き寄せる。自慢の羽根を引っ張られたことにぬえが悲鳴を上げるが、マミゾウは構わず彼女の肩を押さえこんだ。

「マミゾウ、なにすんだよ、離せよー!!」

ぺしんと小突かれた額を押さえ、ぬえが大袈裟に痛がつてみせるのを呆れて見降ろしながら、マミゾウは深々と吐息した。

「おぬしは本当に……言つた傍から懲りんやつじやのう」

「いいだろ、ちよつとくらい寄り道したって」

「時と場合を考えんか。はじめに言つておいたはずじや。道中で騒ぎになるのは御免じやと。忘れたのか」

「うー。いまの都の見物くらいさせてくれたつていいだろー? 京都は何度か見たことあるけど、こつちははじめてなんだからさ。散々自慢してたのはマミゾウじやんか」

ぬえはマミゾウに抱きつき、上目遣いに観光をねだってくる。

「それにさ、ここって今の帝が住んでるんだろ。どんな顔してんのか一度見てやりたくてさ！」

「……そんな事だろうと思ったぞい。悪いことは言わん。やめておけ」

「えー、なんだよー！ マミゾーのけちー！」

このご時世に、皇居に黒雲と共に鶴の怪異などと、想像しただけでも頭が痛くなる。帝の御座所には今も変わらず守護があるだろうが、御一新の遷都を経た今、果たしてどれほど効き目があるのかは分からない。

鶴は古今東西の妖怪の中でも、その鳴き声によって直接帝を害した数少ない存在である。その性質は時代を経ても変わらぬものであるらしい。

「なー、いいだろ？ ちょっと脅かして来るだけだから。殺したりしないって。先っちょだけだから！」

「くだらんことを言っておらんで来い。乗り換えまでもう間もないぞ」

なおも抵抗するぬえに言い聞かせ——途中二度ほど、正体不明の種を使って身代りを立てようとしたりマミゾウを誘拐犯に仕立てようとしたりと暴れた放題だったが——彼女の襟首を掴んで、マミゾウは上越新幹線のホームへと向かった。



東京を発つてわずか二時間。かつての三国街道沿いの線路を駆け抜け、二人を乗せた新幹線は新潟駅のホームへと滑り込む。マミゾウは懐の金時計に目を走らせ、

「……急げば十一時半のジェットフォイルに間に合うな。行くぞぬえ」

「えー!? もう疲れたー。どっか寄って行こうよー」

「いいから早くせんか」

駅前から直通のバスに乗り継ぎ、朱鷺メッセの脇をすり抜けるようにして港へ。

新潟港と佐渡・両津間を結ぶ航路を、ジェットフォイル『ぎんが』はフェリーの半分ほどの時間で駆け抜け、マミゾウはおよそ一年半ぶりの故郷の土を踏むこととなった。

京都からおよそ6時間で、およそ800キロの旅路を走り抜けたことになる。天狗も驚きの速度と言えた。

「ふむ……久々の故郷は良いのう」

固まった背筋を伸ばし頸を鳴らしながら、マミゾウは懐かしい佐渡の空気を胸一杯に吸い込む。朝方の寝不足は道中の仮眠で取り戻し、体調は万全に近い。

一方、ぬえはさつきから少しばかり蒼い顔をし、口元をハンカチで（マミゾウが貸したもの）押さえていた。どうやら道中のジェットフォイルの中で酔ったらしい。

「……マミゾーの嘘つき……あれ、揺れないって言ったじゃんかあ……」

「ああもテレビに齧りついておったらそりや酔うわい。あれでもこの時期のフェリーよりは太

分マシじゃぞ。おぬし、前回どうやって佐渡まで渡って来たんじゃ」

「前に乗った時は全然揺れなかったんだよう……」

すっかり客が降りたジェットフォイルから、ふらつくぬえを引きずるようにして栈橋を渡る。同時にマミゾウの胸のうちを、感慨と共に湧き上がるものがあつた。

それは信仰。佐渡貉の本拠、日本海に浮かぶ島に満ちた、狸への崇拜と恐れ——妖怪の力の根源である。四国のそれは強くまつすぐなものであるがゆえ、マミゾウ自身もいささか持て余すほどに強力だったが、佐渡のそれはまるで息をするように馴染む。

「——あ!!」

フェリー乗り場で観光客の出迎えをする人々の列に紛れ、声を上げるものがあつた。たたと二人の元に駆け寄ってくるのは、兄弟と思しき二人の少年たちだ。

兄のほうは人間風に言えば10歳。弟のほうは5歳ほどか。良く似た二人はマミゾウの前にびしっと直立し、気を付けから大きく頭を下げて叫ぶ。

「団三郎の大親分!! おかえりなさいませ!!」

「なさいませ!」

「おんや、随分と可愛らしい出迎えじゃのう」

マミゾウが眼鏡を押し上げて呟く。

「俺は真野暁森の小平太。こっちは弟の志郎です。大親分のお帰り、首を長くしてお待ちして

「おりました！」

「ました！」

幼いながら、きちんと年齢相応の人の姿を装うことをしている。なかなか将来有望な子貉であった。

そう思った刹那、弟のお尻のあたりから、ぴよこんと小さな尻尾が飛び出す。それに気付いた小平太は、慌ててそれを押さえ、元の通りに押し込んだ。

「げ、源助様から、大親分をお迎えするようにと言いつかつてきました！」

「きました！」

「そうかそうか。朝からずっと待つておつてくれたのか。遅くなつてすまんのう」

目を細めるマミゾウ。なおもかちこちに緊張している小平太が、マミゾウの後ろでぐったりしているぬえに目を止める。

「あの、そっちの人は……？」

「ああ、ぬえは儂の連れじゃよ。それよりもいまはちと時間が惜しい。挨拶は道々にして、早々に向かうとしようかの」

「は、はい！」

背中にて規を突つ込んだみたいに直立不動になつて答える小平太。そんな兄を見て志郎も同じようにピンと背を伸ばす。微笑ましい小狸兄弟の様子にマミゾウはくすくすと微笑んだ。

フェリーの着いた両津港から見て、相川のニッ岩大明神は、佐渡中央の国中平野を抜けた先にある。島内の公共交通機関と言えばバスかタクシーだが、待っているのはまだるっこしいと、マミゾウはフェリー降り場から駐車場を挟んだ向かいの店でレンタカーを借りることにした。提示を求められた免許は、フェリーのチケットの半券を化かして誤魔化する。

「一応、昔にちゃんと取ったことはあるんじやが、どうにも更新が面倒でう」

「でも、平成年生まれってどうかと思うな。どんだけ若作りしてんのさ」

「……五月蠅いのう。この成りで百歳超えておるなんぞと言いつてもしょうがなからう」

借りたのは4人乗りの軽自動車。助手席にぬえ、後部座席に志郎と小平太を乗せてもやや手狭な印象だ。さっそく窮屈だと文句を言うぬえを余所に、マミゾウはハンドルを握る。

軽快に走り出した車は、市街地を反対側へと向かい、人気のない小さな路地に入り込んだ。サイドブレーキを引いて車を降りるマミゾウに、小平太が慌てて声をかける。

「さてと」

「？ ああ、団三郎様、相川はあっちの道ですけど……」

「分かっておるよ。ちと準備をな。……済まんが皆、一度降りてくれ」

首を傾げながら従う一同の前で、マミゾウは楡の葉を袖から取り出し、車のボンネットに乗せて念を込める。小さな掛け声とともにどろんと白い煙が溢れた。

白煙を切り裂いて、無人の車にぴかっとライトがともる。続いて響くのはぶおんと言う勇ま

しい唸り声。煙の向こうから飛び出してきた車が、ぶるぶると身を揺すってクラクションの吼え声をあげた。

「ふむ。よしよし。なかなか素直な子じやのう」

眼鏡を押し上げ、満足そうに頷くマミゾウ。軽自動車は生き物めいた仕草で地面を跳ね、マミゾウの胸元に擦り寄るように駆け寄ってきた。

これぞ佐渡の二ツ岩貉が愛用する、乗騎の隼車である。はっはと忙しく排気音を響かせ、ライトを明滅させる妖怪車に、マミゾウはどこから取り出した酒瓶を示し、ボンネットを開けて突っ込んだ。

「幻想郷の酒屋で手に入れたとっておきじゃ。奮発するからしつかり頼むぞい」

ぶおんと返事。瓶がぶるぶると震え、瞬く間に酒瓶が空になる。酒臭いげつぷを吐いた妖怪車は、ナンバープレートをはたはたと揺らし、四つのタイヤを器用に使って地面を跳ね、ハンドルをぐるぐると回して答えた。

目を丸くしている小平太と志郎をよそに、マミゾウはボンネットを低くしてドアを開ける軽自動車に乗り込んだ。やや遅れてぬえも続く。

「ほれ、どうした。二人とも、置いていくぞ」

慌てて後を追った兄弟は、乗り込んだ中でまたも驚きの声を上げる。

狭かった車内が見違えるほど広くなっていたのだ。窮屈な4人掛けのシートは広々としたソ

フアーに代わり、並んで座つてもまだ余裕があるほど。サイドデッキには冷えた飲み物やおやつまで備えられている。

マミゾウが行き先を告げると、妖怪車はカーナビを光らせ、飛ぶように走り出した。

「おうい、急ぐのは良いが交通ルールは守っておくれ。警察に目をつけられてはかなわんからのう」

妖怪車はただちに命令に従つて走り始める、車線を揃えて信号を守り、制限速度もばっちりだ。多少融通の利かない部分もあるが、それも運転の必要もなく横になつていれば勝手に進むのだから楽なものである。

「さて、それではしばし、ゆっくり寛ぐとしようかのう」

ごろんとふかふかのソファーに横になるマミゾウに、ぬえが口を尖らせる。

「こんなまだるっこしいことしなくたって、飛んでいけばすぐなのに。もうそんなに遠くないんだろ？」

「これでも十分に早い。このあとどうなるとも分からんしのう。できるだけ余計な力は使いたくないんじゃないよ。それに、こうでもせんと道中、酒は飲めんしな」

ウインクと共に、マミゾウは先程と同じ酒瓶を取り出し、その瓶を叩いてみせた。

▼4

佐渡、相川。日本海に面したこの街はかつて、日本一の金山を備え、佐渡奉行のもと幕府の直轄地として多くの人々が住んだ大都市であつた。往時の人口は十万人を超え、現在の佐渡の全人口の倍ちかくにも及んでいた。炭屋町、材木町、紙屋町の専門街が軒を連ね、京や各地の大店がこぞつて支店を出し、遊郭には一流の花魁が集まり、島外から米や名産を運び込むほどであつたという。

今もその名残を見せる街並みを見下ろす山の中。一行を乗せた妖怪車は狭く、ところどころ舗装の禿げた道を進む。ともすればハンドルを取られそうなデコボコ道だが、ふかふかのソファと妖怪車の器用なタイヤさばきもあつて、車内に振動は感じない。

「なんだ、これ」

山道が中程に差し掛かったあたりで、ぬえがくすぐったそうに背中を揺する。あたりに満ちる静かなざわめきを感じ取って、マミゾウはにんまりと微笑み、妖怪車の窓から身を乗り出した。

途端、草木の、木々の、岩の陰から、次々に黒焦げの毛玉が転がり出した。佐渡に住む貉の群々である。

「皆の衆、出迎え御苦労！」

佐渡では狸をむじな貉と呼び、ゆえにここでもそう記す。マミゾウの声に一斉に飛び上がった彼等は騒がしく囃子声を上げながら、山道を登る妖怪車を取り巻くように坂を上のように駆けだしていく。

あたりの山々に、佐渡の貉総大将、ニッ岩団三郎の帰還を報せに走っているのだ。はしやぎ転がり回る毛玉をみて、ぬえはななかば呆れた表情でつぶやいた。

「すごい人気なんだな、マミゾウ」

「みんなが、団三郎様の御帰りをお待ちしていたんです！」

小平太はまるで我がことのように胸を張った。

坂を登り終えたところの駐車場で、妖怪車に『待て』をさせ、一同は目的地、ニッ岩大明神の前へと降りた。

ニッ岩神霊の名を刻まれた古い石碑に、朱の門。茂る草木を押しつけるように、山道は無数の鳥居が連なっている。その数は遠目にも数百を超え、京都の伏見稲荷にも負けず劣らずの威容であった。……全体的にいささか古ぼけているという点を除けば。

火事から日も経っていないこともあってか、参道には立ち入りを禁じるロープが張られていた。とは言え他に人の姿もなく、邪魔はなさそうである。マミゾウがロープを跨ごうとした時、足元の子貉がマミゾウの裾を掴み、ぐいぐいと坂の上へと引っ張ろうとする。

「おん？」

不思議に思いながらも彼に促されて視線を向ければ、そこには連れ立った男女が二人。

片方はまだ若者の貉。あまり貉らしからぬ、生真面目そうな表情をしている。もう片方は穏やかな表情をした妙齡の雌貉。

いずれもマミゾウには懐かしい姿である。

「源助、おろく！ 来ておったのか！」

「マミゾウ様、お待ちしていました！ お帰りなさいませ！」

若者の方が深々と一礼する。それに合わせて周りに集った貉達も一斉に頭を下げた。茶色い毛玉に囲まれ、ぬえが怪訝な顔をする。

「マミゾウ、こいつらは？」

「佐渡貉四天王、重屋おもやの源助げんすけ。その母、高橋おろく。儂の家内と息子じゃよ」

「はあ!？」

「おや、話しておらんかったかのう」

素っ頓狂な声を上げるぬえに、マミゾウはさして重要でもないというように告げる。団三郎貉と言えば佐渡の伝承では美男で通っており、幾人もの美しい妻や愛妾を抱えている事で知られていた。確かに年経た化生にとって性別などは些細なことであるが——それでもぬえは衝撃を隠せない。

「あの、團三郎様、そちらの方は？」

「そうか、おぬしらは初めてじやつたかのう。封獣ぬえ。儂の長年の友人じゃよ」

「封獣……で、では、まさか!! あなたが京都の大怪異、鶴!？」

源助の叫び声に、貉達が一斉にざわめいた。おろくも目を丸くして口元を覆っている。見れば小平太と志郎もぼかんと口を空けていた。

いきなり空いた周囲との距離に、ぬえは無然と回りを見回す。

「な、なんだよ」

「かかか。いつもの威勢はどうしたんじや、ぬえ」

「う、うるさいなあつ」

気まずそうに羽根をもじつかせるぬえに、マミゾウがからからと笑う。

「こ、これは失礼いたしました!! かの御高名な鶴殿とは思ひもよらず、不躰な振る舞い、まことに申し訳ありませんッ」

身を正し、深々とお辞儀を返す源助。他の貉達も慌ててそれに従った。

平安の世を大混乱に陥れ、あろうことか時の帝をも害したという正体不明の大妖怪、鶴。その恐ろしき名は遍くこの国の妖怪達の知るところであった。ぬえ自身もいまち自覚せずにいるのだが、そのネームバリューは大江山の酒吞童子や白面金毛九尾の狐に勝るとも劣らぬものである。

「マミゾウ様と知己でいらつしやることはお聞きしておりましたが、まさかこのようなお可憐なお方とは思わず、ご挨拶もなしに無礼なことを——どうかお許しを!!」

「かつつか、この捻くれ者が可憐となあ」

「マミゾウ、うるさいっての!」

ぶんぶんと背の羽根を振るって叫ぶぬえ。なにしろ彼女は生まれも育ちも平安京のハイソサエティ妖怪である。以前から顔見知りであることは知っていた源助も、マミゾウとぬえの親しげな様子を見て、あらためて佐渡の総大将への敬意を深めたのであった。

なおも興奮冷めやらぬ様子でぬえに握手を求め始める貉達を脇に、これまで後ろに控えていた、おろく貉がそつとマミゾウの前に進み出る。

「旦那様。幻想郷よりの長旅、お疲れさまでした」

「うむ。不自由をさせたのう、おろく。おぬしも変わりないか」

「はい。皆様にも大変良くして頂いております。旦那様。今回のこと、お留守を預かる身ながら力及ばず申し訳ありませんでした。お杉さんも案じておられます」

「……そうか。後で顔を出してやらんといかんのう」

「ふふ、きつと驚かれると思いますよ」

「んむ、……まあ、のう」

意味ありげにぬえの方を見て、微笑むおろく。マミゾウは気まずそうに頬を掻き、ぱたぱた

と服を払った。

頃合いを見て咳払いを一つ。

「さて。再会を懐かしむのはこれくらいとしよう。今朝戻つて来たばかりで詳しいことはまだ聞いておらぬからのう。仔細を教えてくださいぬか」

「はい。一先ずこちらにお願いします」

源助が先頭に立つて、参道を登り始める。貉衆達に連れられて、マミゾウ一行は後に続いた。幾重にも連なる奉納の鳥居をくぐり抜け、石組の階段を昇つてしばし。やがて木々の合間にできた小さな広場へと辿り着いた。

いや。そこは元から広場であつたのではない。

「……ふむ」

まだ強く残る、火の気の燦る灰と煤の匂い。足元のぬかるみは、消火の為に撒かれた水の名残だろう。木々の幹が痛々しく焦げて皮も剥げ、炙られてくしやりと丸まった枝葉が揺れる。

往時は二ッ岩大明神への参拝者を迎え、奉納の鳥居や機械時計、沢山の供物を並べ、祭時おいては夜を徹しての信者たちの寝床となつたお籠り堂が――見るも無残に、燃え落ちていた。堂舎は土台から黒焦げとなり、中に収められていた品物もほとんど炭と化している。炭となつて半ば崩れた柱組が、火勢の強さを感じさせた。

足元に転がる、煤まみれの時計の文字盤を拾い上げ、マミゾウは鼻上に強く皺を寄せる。

「なんとも、酷い有様じゃな」

「申し訳ありません。皆もなんとか食い止めようとしたのですが……お守りすること叶いませんでした」

「私たちの力が至らぬばかりに、団三郎様の社を危機に晒したこと、お詫びいたします」

「そう気に病むな。本殿が無事であっただけでも儲けものよ。もともと留守にしておった儂の咎じゃ。おぬしたちが気にする事ではないぞ」

うなだれる皆に向き直り、優しく声をかけるマミゾウ。それでも源助は受け入れ難いのか、悔し涙を滲ませている。

「事態を重く見て、いまは禅達様が東光寺で指揮を取っておられます。私達はここに残りましたが、他の皆様はそちらに詰めていらつしやいます」

「そうか。……して、一体ここ何があつた？」

「……はい」

源助が語ったところによると、概ね詳細はこのようなものだ。

二ツ岩大明神の社は、入口の山門と本殿へ続く参道、その途中のお籠り堂で構成されている。今回、火事にあつたのはこのお籠り堂であつた。

火の手が上がったのは十五日——昨日の午前。山間から立ち昇る煙に気付いた地元の貉達が駆け付けた頃には、お籠り堂はすでに炎の中であつた。折しも海からの強風の最中、火勢は

凄まじく、堂を包んで撒き上がる炎は火の粉を撒き散らし、あたりの木々へと燃え移らんばかりであったという。

このままでは本殿はおろか、相川の森全てが火の海だ。あまりのことに放心しかけた貉達であったが、その対応は素早かった。彼等はただちに火の手を防がんと、己の化術の粋を尽くして消火活動に当たったのである。

ポンプに化けて水をぶつ掛けるもの、斧や鉋に化けて周囲の樹を斬り倒し、延焼を防がんとするもの。中には飛び散る火の粉を防がんと、己の八畳敷きを広げて煙を覆い、身を呈して大火傷を負った者までいたという。

死力を尽くし、奔走した彼らの努力の結果もあって、どうにか延焼は防がれ、被害はお籠り堂と隣の木々数本で喰いとめられた。その代わりに、お籠り堂は完全に灰塵へと帰してしまっただという。

火がほぼ鎮火したところで、ようやく異常を察知した人間達が消防隊を引き連れてやってきた。かなりの火の勢いだったにもかかわらず周辺への被害がまるでないことに、彼等は首を捻るばかりであったという。

「私は相川からの伝令で報せを聞き、大急ぎで駆けつけましたが——その時にはもう火は鎮まっていました。何もしていないのと同じです。皆の奮闘が本殿を守ったのです」

「そうか……火の原因は分かっているのか？」

「それが……」

源助が表情を曇らせる。

「はつきりしていません。人間達の消防の調査でも同じのようです。一番焼けていたのは竈とストーブのあるあたりだということで、参拝者の火の不始末が原因ではないかと言う話でした」

「ふーむ……」

マミゾウは腕組みをして顔をしかめる。

「夜の山が冷えると言っても、流石にまだ暖を取るような季節ではなからう。料理でもしておったのかのう」

焼け崩れた灰の中に埋もれた赤錆びたダルマストーブを一瞥し、マミゾウはその腹を軽く蹴り飛ばす。ごおん、と重い音が山中に響いた。

「ここに居る皆も、火の出た現場は見て居らぬのか？」

問われた貉達が、困惑気味にお互いの顔を見回す。その様子から、出火の瞬間の目撃情報を得るのは難しそうに思えた。

「マミゾウ様」

「んむ？」

源助は声を潜め、マミゾウの耳のあたりにそつと顔を寄せた。

「ここだけの話ですが、宝徳山稲荷の狐が入り込んでいるという噂があるのです。真偽も定か

ではないので表立って取り上げてはおりませんが、お社に火を放ったのも彼等の仕業ではないかと……そんなことを囁いているものもおります」

「ふむ。あやつらがのう」

マミゾウの狐嫌いが筋金入りであるのは周知の事実である。実際、越佐の貉達は数百年に渡って越後国総鎮守一宮、宝徳山の稲荷狐と争いを続けてきた。ここ数十年は落ち着いているが、それも冷戦に近い。

「連中が儂の不在に気付いたなら、十分にありうる話じやな」

そこまでの強硬手段に出るかどうかはさておいて、可能性の問題ではあるが。

崩れた社の柱の墨を握りつぶし、ばんばんと手をはたいて、マミゾウは腰を上げた。

「成程、仔細は理解した。ともあれ、ここに居ってもこれ以上のことは分からぬかのう。名残惜しいが禅達のほうへ向かうとしよう」

▼5

徳和の山間、開けた田畑の脇に巨大な岩が点在する奇妙な道路の傍ら、鎮守の森に囲まれて、佐渡八十八霊場の第八十番、白毫山東光寺は存在する。

この寺は佐渡の南において室町の初めに建立された由緒正しき名刹として知られ、歴代に名立たる住職を輩出したことでも名を馳せる。三川徳和の領主、本間氏の庇護を受け、六百余年の長きに渡ってこの地を守ってきた。

その門前に洞をもつのが佐渡貉四天王筆頭、東光寺とうこうじの禪達ぜんたつ。マミゾウの不在にあつて、佐渡貉を統治する化け貉であつた。

源助、おろくを加え六人の大所帯となつた一行であるが、マミゾウが息吹を吹きかけ、さらに化力を注ぐと、妖怪車の車内は豪華なリムジンの内装へと姿を変え、皆を悠々とここまで運んできた。またも途中の道で待ち構えていた貉たちに先導され、敷地の駐車場に乗り入れる。

すでに日も傾きかけているというのに、東光寺の境内は煌々と明るかつた。四方に焚かれた篝火に加え、石燈籠には化貉の天火が灯り、昼なお明るく輝いている。

「おう、こりやあ……凄いのう」

境内は人ならぬざわめきと賑わいに満ちていた。様子を見に来た地元の妖怪達が、ここ東光

寺に詰めかけていたのである。

妖怪車を降りるや否や、マミゾウ達はどつと彼らに取り囲まれた。小平太と志郎は怯えてぬえの背中に隠れようとする。

「いやはや……この度は災難でしたねえ、団三郎どの」

まずは赤泊の九天狗を代表して、徳和の天狗・野立坊^{のだて}が額の汗をふきふき火事見舞いの挨拶。続けて外山の主の金大蛇が鎌首をもたげてマミゾウを覗き込み、一山の砂金を尻尾で押しやる。その隣では重い根を引きずって、樹齡二千百年を数える川茂の太郎杉が眷族の切り株十輪を差し出していた。

色とりどりの鱗分を散らし、微笑む美しい娘たちは爪沢の蝶姉妹。幼子を胸に抱いて丁寧な挨拶をするのは、越佐の海を泳ぎ渡った立たず浜の白骨牛母である。いずれ劣らぬ西佐渡の名妖であった。

そんな彼等の中でもひととき目立つのが、染め抜き日向五つ紋の黒留袖を纏う、初老の婦人である。肩には薄墨に染めた羽毛を襟巻の如く重ね、曇りない純白の髪に朱の髪墨を塗り、金細工の片眼鏡を付けたセレブリティ溢れる姿は、寺の境内からはいささか浮きまくっていた。

「御機嫌よう、マミゾウ様」

「——イビスか。おぬしまで来ておるとはのう」

「ええ。お社の火事と聞いて取るものも取り敢えず駆けつけましたけれど、ご無事な姿を見て

ほっといたしましたわ」

どこか鼻にかかったハスキーな声で、背の羽根を揺すって女はころころと笑ってみせる。

鴛群うぐいすイビス——佐渡、ひいてはこの国の象徴とされる神鳥、朱鷺の妖怪である。

「はるばる新穂から御苦労じやのう。見舞いは有り難く頂戴する。……しかし、その物見高さはもう少し治めたらどうかの」

「あらやだ、わたくししたら……慌てていましたものでごめん遊ばせ。マミゾウ様の前にこのような恥ずかしい格好で」

十分すぎるほど身繕いを済ませているように見えるが、彼女としてはまだ不満らしい。イビスは絶滅寸前となった朱鷺の一族を養うため、人間達をかしづかせ、莫大な国家予算をほしいままにして暮らすセレブ妖怪であった。

門前に待たせてあったハイヤーはこういう訳かと理解しつつ、マミゾウは言いたいことを色々飲み込み、洪面で鎮く。

「火事の一報を聞いてどうなることかと案じておりましたけれど、こうして大親分が御戻りなのでしたら、わたくしがいろいろと気を揉む必要はないようですね。此度の災禍、順徳院様も憂慮なさっておいででしたわ。くれぐれも、どうかご自愛を」

「む」

イビスには、真野宮の神使というもう一つの顔がある。順徳院——真野御陵の御霊の名を出

されては、さしものマミゾウも神妙にならざるを得ない。

「お言葉、謹んでお受けする」

「佐渡が争乱となれば、皆が悲しみます。順徳院様はそんなことお望みではありません。無論、わたくし個人としても同感です。……どうか杞憂に終わるよう、願っておりますわ」

「まったくだぜ」

割り込んできたのは腹の底から響くようなどら声。

石燈籠が揺れるほどの地響きを立て、本堂から毛むくじやらの大きな姿がぬうつと顔を出す。袖の破れた結袈裟を着た、身の丈十尺を超える巨軀。目も口も鼻もやたらに大きな造作で、ぼさぼさの髭と眉毛がそれをさらに強調する。極めつけが、額から頬にかけて左目をこっそりと抉る傷痕である。

まるで罨と見紛うばかりの姿だが、背中から伸びる尻尾と丸耳は、まごうことなき貉のそれだった。

どすどすと地面を揺らして現れた大貉は、マミゾウを挑発的に見下ろす。

「性懲りもなく戻ってきたのか、老いぼれめ」

「ふん、儂が居らん間にまた太ったんじゃないかの」

「てめえこそ、随分若作りしやがって。いい歳して色惚けやがったか。幻想郷とやらで負けておめおめ逃げ帰って来たんじゃないやねえだろうな」

「ぬかせ、おぬしの手に余るようじゃったから手助けに来てやったものを」
佐渡貉四天王の筆頭、東光寺とうこうじの禪達ぜんたうは、そうやってマミゾウ達を出迎えた。



これじゃ騒がしすぎて話にならんという禪達ぜんたうの一声で、門前に群れていた野次馬たちを散解させ、マミゾウ達は東光寺の本堂へと通された。

「気にすんな、どうせ和尚は出掛けてる。三日は帰らねえよ」

……というのは、留守を預かるはずの禪達ぜんたうの言。

本尊が見降ろす畳敷きの堂内に皆が車座となる。八畳敷きと見紛うばかりの馬鹿でかい座布団にどつかと座り込む禪達ぜんたう。その向かいにマミゾウとぬえ。源助はその横に腰を降ろした。おろくは皆から引いてやや後ろに控え、小平太も末席に畏まって正座し、そのとなりで志郎がちよこんと兄の真似をする。

「寺の本堂で化狸が悪巧みの会合か。愉快なもんだねえ」

「命蓮寺も似たようなもんじゃろ」

ぬえの皮肉をさらりとかわし、マミゾウは懷から螺細細工の煙管を取り出して火を付けた。「やれやれだ。どいつもこいつも不景気な面並べて寺の前に居付きやがって。不安だ心配だと

肝の小さいことばかり、騒がしくつてかなわねえぜ」

「それだけ、団三郎様の事を案じて下さっているということでしょう。ニッ岩殿王様の威光がなお衰えぬ証です」

「源助よ。その信頼とやらをほったらかして、伊勢だ熊野だとふらふら遊び歩いてんのはこいつだろうがよ。てめえはちと身内に甘すぎやしねえか」

「団三郎様にはお考えがあつてのことです。自分が余計な口を挟む訳には参りません」

「あのなあ、源の字。誰に遠慮してんだか知らねえが——」

「お二人とも、その話は後になさってくださいな」

顔を合わすなり険悪な気配になり出した源助と禅達の間割って入り、おろくが二人を制す。血筋なのかのうと一人納得するマミゾウの前で、禅達は軽く咳払い。

「率直に言えば、今のところ妙な動きは見当たらねえ」

二つ岩大明神の火災に際し、禅達はすでにいくつかの対応を済ませていた。真野・佐和田・相川の貉達から事情を聞き集め、ただちに各地の貉に伝令を飛ばして社の警護と怪しげな連中の捜索に当たらせたのだ。同時に四天王を始め各地の貉達に警戒を強めるように通達を回している。

佐渡の妖怪達もこれに応じ、めいめいに警戒を強めていた。

「島外への出入りは、財の字に見張らせてある」

おい、と禪達が顎をしやくつて見せると、奥から豆狸達が水を張った桶をえつちらおつちらと運んできた。傾けた水面に波紋がひろがり、やがて一つの像を結ぶ。

『良かった、やっと繋がりましたね。ご無事でしたか、総大将』

「うむ。おぬしも息災かのう」

貉にしては妙に細っこい、枝のような印象の青年である。糸のように細い目も合わせて、鼬にも似た雰囲気をもつが——彼は佐渡貉四天王の一角、湖鏡庵こきやうあんの財喜坊ざいきぼう。佐渡貉の中で、二を争う妖術の使い手であった。

この、水鏡を用いた遠隔通信は彼の特技の一つであり、財喜坊はこれの応用で佐渡島内外の出入りを監視しているのだ。加茂湖の済んだ湖面を鏡としての化術は、越佐の海を越えて遠くの様子をも見通すことができるという。

『両津、小木、赤泊、いずれの港からも怪しい者の出入りは確認できていません。同時に空からの侵入も監視は続いています。現在までその様子もなし。よほど特殊な方法を用いたのでなければ、犯人は現在も島内に留まっている可能性が高いと思われますね』

離れた場所を一瞬で繋げる方法がないわけではない。ふと脳裏をかすめるスキマ妖怪の顔に、マミゾウはまさかと首を振った。あれは例外中の例外と考えていいはずだ。

「尻尾を出すまで様子を見るしかないということかのう」

「残念ながらな」

マミゾウは腕組みをして頭を掻いた。煙管から立ち昇る紫煙に禅達がわずかに顔を顰める。
「……しかし、どうにも動機がいまいち掴めんな」

「それよ。誰が下手人かはこの際置いておくとしても、どうしてあんな馬鹿な真似をしやがったか。そいつが分からねえ」

禅達が相槌を打った。丸太のように太い腕を組み、欠けた湯呑で茶を啜る。

「? どうしてつて、マミゾウが邪魔だったつてことだろ?」

「それにしちゃ、やり口が生温い。本気でこの老いぼれが邪魔なら、お籠り堂なんてつまらねえ場所を燃やすんじゃない、まず社殿から燃やしちまえばよかったんだ。どうせあのボロ屋だ。普段からだーれも居ねえんだからな」

「五月蠅いのう」

東光寺の禅達洞、新町大神宮の源助大明神といった、他の四天王たちの社に比べると、マミゾウのニッ岩大明神の社が古び、寂れているのは否めない。しかしこれを理由にマミゾウへの信仰が薄いと考えるのは誤りだ。

四天王貉たちが神社や寺の一隅に祠を併祀されているのに対して、ニッ岩大明神は団三郎貉そのものを神霊として祀る独立した信仰の集まる神社なのである。他の信仰への『ついで』で崇められる貉とはそもそもの在り方が異なっていた。

「ですが禅達様、団三郎様のお社には、火元を誤魔化せるものがなかったのでは? 火の気が

ない場所で火事が起きてしまえば、怪しまれる可能性も増えてしまうはずです」

「そんなもん、蠟燭の火の不始末でも煙草の消し忘れてもいいだろうがよ。滅多に人が来ねえつたつて、道がねえ訳じゃねえんだ。肝試しに来る連中も居たろうよ。なんとでもなる」

「火事の当日はかなりの強風でした。一歩間違えば山全体が燃えてもおかしくなかった。となれば出入りの多いお籠り堂を火元にすることはそれなりに自然な思考ではないでしょうか？」
水鏡の向こうで、財喜坊が同意する。

『偶然を装うか否かの差はあれど、今回のことが総大将への直接の害意によるものであったか、ということですね。仮に本殿を燃やすことが目的であったとしたら——』

「少なくとも、こちらにある儂の信仰は大きく薄れるじやろうな。二ツ岩貉の社殿があそこだけという訳ではないがのう」

かん、と煙管を鳴らしてマミゾウが言葉を継ぐ。

「儂が佐渡を離れていたというのは、すでに広く知られておる。儂に恨みをもつものが、幻想郷から戻ってこれぬよう画策したというのは、それなりに納得のいくところじやな」

「では、やはり宝徳山の手のものが？」

「そいつはねえな。狐が混じつてたらずぐに分かる」

『どうでしょう、彼等も越国総鎮守を預かる身。その気になれば徹底的に身元を偽ることはできるのではないでしょうか』

議論百出。佐渡の化け貉達が揃って頭を絞り、侃々諤々と話し合いは続き、論議は3時間に
も及んだが――結局、これといった結論は出なかった。

今後の方針も、このまま警戒を続けて様子を見るという暫定的な対応を確認するまでに留ま
り、そのまま会合は散会となったのである。

▼6

……さて。

所変わって、佐和田は東大通り。佐渡の中央に広がる国中平野の東西を貫く片側二車線の大通りには、ショッピングモールやホームセンターが立ち並び、行きかう人々の間に活気を見せていた。

時刻は午後8時を回り、陽はとうに沈み辺りは暗闇。店舗の灯りが走る車の列を照らす。

「ん、どうした。食わんのか、ぬえ」

無然と頰杖を突くぬえの前で、マミゾウは次々とカラフルな皿をテーブルに積み上げていく。北雪酒造の純米大吟醸をグラスで呷り、既にほんのりと頬が紅い。

「心配せんでも儂の奢りじや。好きなものを頼むといい」

「言われなくても食べてやるっての」

マミゾウからメニューをひったくり、注文を告げるぬえ。

会合の後、禅達が申し出た饗応を辞して、マミゾウ達は佐渡の中央へと場所を移し、遅い夕食を取っていた。彼女達が陣取るのは地元チェーンの回転寿司。無論、全員耳尻尾や羽根を隠して人間の姿である。

「おぬしらもじゃ。遠慮せんで良いぞ」

「は、はい」

緊張する小平太の隣で、志郎は口元にご飯粒をくつつけ、ぱくぱくと銀舍利にかぶりついていた。地揚げりの鰯がお気に入りらしい。

「ああもう、こつちまで飛んでくるから落ち着いて食えよ」

見かねたぬえが身を乗り出し、彼の口元を拭ってやるのを眺め、マミゾウは頬を緩めてグラスを空にした。

「……あのでかぶつはあんな糺のような成りをしておいて、心から精進でう、しかも修行だなんだと理屈をつけていつも粗食じゃ。むろん酒も出てきやせん。歓待の馳走と言つてもたかが知れておろう。せつかく外界に戻つて来ておるんじや。普段食えんものを堪能しておかんなあ」

「なら、もつと値の張るところに連れてけよ」

ふうと頬を膨らませながら、ぬえ。彼女はあのまま歓待を受けなかったことに大分不満があるらしい。珍しく大妖怪扱いされたのがよほど気に入ってたと見える。

マミゾウはそんな抗議をどこ吹く風と、金ぴかに輝く大トロの皿に手を伸ばした。2カンを纏めて口に放り込み、

「もぐ。……回らん寿司はたらふく食うところじゃないからのう。やはり寿司となれば新鮮な

ネタをたつぷりと喰いたい。おぬしらもそう思わんか？」

「はいっ！」

ぱあと顔を輝かせ、何度も頷く志郎。感動で飛び出しかけた弟の尻尾を小平太が慌てて捕まえ、彼の背中に押し込む。

厚い身の乗った鰻を頬張り、マミゾウはそうかそうかと満足げに頷いた。

「それにのう、儂はああいいう場で出る油揚げがとんと苦手だな。あんな狐の喰い物をどうして皆が有り難がるのか、いまいちわからん」

呻くような独白に、いなり寿司に手を伸ばそうとしていた小平太が慌てて手を引く。

マミゾウの狐嫌いは筋金入りであるが、これは坊主憎けりや袈裟まで憎いの典型であった。

「マミゾウの好みなんてどうでもいいけどさ。……そろそろ教えてよ。どうしてわざわざあそこを離れたんだ？」

「……ま、一言でいえば儂らの身の安全じやな」

さらにと言つてのける二ツ岩貉に、小平太がぎよつとして手を止める。志郎が手巻きのネギトロを口に含んで目を白黒させていた。

「誰も核心に触れられぬ会合なんぞ、いくら続けたところで時間の無駄じゃからのう。本音を言えばもつと早く切り上げたかったところじゃが」

「え、えつと……それって……」

「簡単なことじゃ。外からの侵入者が入り込んだ形跡は見られない。しかし現に堂は燃えておる。となれば、怪しいのは元より佐渡に住んでおる誰かということになるう」

「ま、待つて下さい！　なんでそんな話につ……!?」

「おぬしの前で言える訳がなからうよ。この中に敵に通じた裏切り者がいる、という疑いじゃ。軽率に口に出せばそれこそ戦争じゃからのう。あのような場ではなおさら口にはできない」

マミゾウの不在でもつとも得をするのは誰か。マミゾウをもつとも邪魔に思っているのは誰か。答えはひとつしかない。

「え……そ、それって、まさか」

口を開きかけた小平太に、マミゾウはそこまでじやと口元に指を立てて制止する。

「思っているも、口に出してはいかん言葉というのはあるものじゃよ。一度形にしてしまったら、それはたとえ己の言葉であろうとも、精神を強く呪縛する。心しておけ」

言い含めるように顔を見つめるマミゾウに、小平太は両手で口を押さえたまま刻々と頷いた。志郎も兄の真似をしてぶんぶんと首を振る。

「じゃあ、しばらくは様子を見るってこと？」

「……泊まる場所の当てはある。まあ、あやつもさすがにそこまでの短慮ではないと思いたいがのう」

やってきた追加の冷酒を煽り、マミゾウは渋面で呻いた。



一行の今夜の宿となったのは、佐渡の最高峰、金北山の麓にある温泉宿であった。たつぷりとした湯量を誇る広い湯船につかって疲れを落とし、浴衣に着替え、尻尾を存分に伸ばして布団に寝そべる姿は、さっきの緊張もどこへやら。すっかりだらけきって緊張感の欠片も見られない。これが佐渡の貉総大将と言われて、どれほどの者が信じるだろうか。

「はああ……いい湯じゃったなあ。命蓮寺の天然かけ流しも良い風呂じゃが、やはり佐渡の湯が一番肌に合う。生き返るのう」

「暢気なもんだね」

「目的があれば誰かしら仕掛けてくるじやろうて。さっきから随分と心配性じゃな、ぬえ」
枕を抱え込み、寝そべったまま器用に煙管を吹かしはじめるマミゾウ。

「あいつらの前で黙ってたことあるだろ」

「んー？」

小平太と志郎は、入れ替わりに温泉に向かっている。おそらくこのタイミングを狙って聞いてきたのだろう。マミゾウはうつぶせにのまま啞え煙管を上下に動かし、耳を立てた。

「……どうにも、ずっとたいみんぐが良すぎるのが気になってのう」

「火事の話か？」

「最初からじゃ。儂が隠神刑部どのに会いに行つたその日に、佐渡で火事。それ自体はまあいい、偶然じゃつたと言えるかもしれないが、その報せが妙に都合のいい時に送られてきた」

「マミゾウが最初に疑念を抱いたのは、松山城下でメールを受け取つたその直後のことであつた。」

「化術に長けたものであれば、めーるの文面などいくらでも偽装できる。差出人のあどれすも、完璧に他人を騙れるじやろう。電子情報には実体というものがないからのう」

「事実、マミゾウは幻想郷においても外の世界から漏れ出た電波や無線LANの尻尾を捕まえて、通信を化術プロトコルで騙し、外界のニュースなどを覗き見ている。」

「もともと儂は四国の狸からは嫌われておつた。長年世話になつた刑部殿に後足で砂を掛けて逃げ出したようなものじゃからなあ。表向きは友好を保つて見せていても、腹の底ではどう思われているかはわからん。あの場に佐渡の貉との不仲を煽る格好で儂を陥れんとしたものが居つても不思議はない」

「この場合は、火事はただの偶然ということになるかもしれない。佐渡に手のものを送り込んでいたなどと、勘繰り始めればきりがないが――」

「ごろんと寝がえりを打つて、マミゾウは隣に居るぬえを見上げた。」

「そして、どうにも腑に落ちんと言えbaum一つある。どうしてこうも都合よく、おぬしが京

都で儂の帰りを待っていられたのか——というのがな。のう、ぬえ？」

「……私まで疑ってるのかよ」

「かっかっか。なにしろ、化かし騙しが仰臥起座の化け貉の日常においては、己すら信じるに値するかは難しくてのう」

だが、その通りだ。ぬえが真実、幻想郷から姿を消したマミゾウを追ってきたのであれば、京都でぐずぐずしているよりも、まずは故郷の佐渡へ向かうのが自然と言えた。

「そう言うわけじゃからな、どこで尻尾を出すか、確かめさせてもらおうかの」

「ばか、やめっ」

気付いた瞬間には、ぬえはマミゾウに布団の上に組み伏せられていた。暴れる白い脚が掛け布団を蹴飛ばすが、マミゾウを跳ねのけることはできず、浴衣の裾が乱れ、むしろ危うく肌を晒すばかり。

「——ッ、マミゾウ……」

化け貉の手がするりと浴衣の合わせ目に滑り込み、華奢なぬえの肩を露わにする。化け貉が一瞥すれば、帯はひとりでにするすると解け、少女の肌を遮るものは無くなってしまう。

無防備な裸を晒す羞恥に顔を染め、ぬえは白い喉を震わせながら、視線を反らした。

マミゾウの指はぬえの薄い胸をまさぐり、あるかないかのささやかなふくらみを滑り、骨ばった鎖骨、うっすらと浮かぶ肋をなぞって——さらにその下へと進む。

刹那。

「っ……!!」

声にならない叫びが響き、マミゾウは横頬に強烈な一撃を食らって吹き飛ばされた。布団ごと壁に叩きつけられ、逆さまになってずるずると床に崩れ落ちる。

妖力の漲る異形の羽根を露わに、はだけた浴衣の胸元を押さえ、ぬえが涙目になってマミゾウを睨んでいた。

「痛つつ……ふむ。どうやらその反応は本物じゃな」

「っ、趣味悪い確認方法するなっ」

「やれ、すまん。う。一流の貉であれば外見はおろか、他の誰にも分からぬように化けるくらいは容易くするもんじゃからな」

「だからってなあ……っ!!」

ぬえが脇腹をぎゅつと押さえて声を荒げる。彼女の脇腹にある矢傷は、自分が討たれる原因となったもので、ここだけは誰にも触らせない。マミゾウはそれを用いて彼女の正体を確かめたのだ。

なおも怒りが収まらないか、ぬえは牙を覗かせ、背中中の羽根を逆立たせて唸る。目に滲む涙を手のひらで拭いながら、手近にあった物を次々に投げつけてきた。

枕が肩にぶつかるのも構わず、マミゾウは身を起こし、深く頭を下げた。

「——すまん、ぬえ。軽率じゃった」

「馬鹿……っ」

「悪かったのう。僕の不安をおぬしに押し付けてしまったようじゃ。すまなかった。煮るな焼くなど好きにせい」

「……………っ!!」

あくまで姿勢を崩さないマミゾウに、ぬえはがりがりと言を軋ませる。鞆を掴んだままじつとマミゾウを見降ろし、荒い息と共に肩を上下させて、しばし。

やがて、やり場のない拳をゆつくりと降ろし、ぬえは視線を反らして呟く。

「いまの。マミゾウじゃなかったら、その場で刺し殺してたんだからな」

「……すまん」

「ほんとにさ、そういうところ、マミゾウは卑怯だよ。他にたくさん女がいるのに、お前だけ特別だなんて顔しやがって」

ふらふらと近付いてきたぬえが、マミゾウに倒れ込むようにして胸に額を押しつける。なおもしばらくぐすぐすと、鼻をすすっている様子があつたが——マミゾウは敢えてそれを目に入れず、その頭をそつと撫でるに留める。

そうしておいて、マミゾウはちらりと廊下の方に視線を向け、細く開いた襖の向こうへと呼びかけた。

「というわけじゃから、のぞき見は遠慮してくれんかのう」

ガタンと襖を鳴らし、慌てて去っていく小さな足音に、苦笑して肩を震わせる。

「……可愛いもんじゃな」

そうこうしているうちに、ようやく落ち着いたか、ぬえが不貞腐れたように見上げていた。頬に残る涙の痕をそっと舌でぬぐってやると、ぬえはますます頬を膨らませて憎まれ口を叩いた。

「いたいけな妖怪の心をもてあそびやがって、非道い奴だな、マミゾウは」

「かっかっか。狸冥利に尽きるのう」

「どうせ、いまのも裏でなんか悪巧みしてるんだろ。……正直に話せよ」

「むーどのない奴じゃのう」

「ふん。置いてきぼりはもう御免だね」

伸びた手のひらを、ぬえの背から伸びた蛇がべしっと払いのける。なおも諦め悪く追いますが、蛇の手に、蛇の頭に変わった羽根がしやあつと牙を剥いて威嚇した。噛み付かれた指を振り払いつつ、マミゾウは顎を撫で、

「企みと言うほどの事ではないが……まあ、敢えて言えば、信頼かのう」

「……信頼？」

そんな言葉がこの化け貉の口から出るのかと、胡散臭げに顔を顰めるぬえ。マミゾウはから

からと笑いながら、懷から蓮の葉を取り出す。

「ま、あいつのことは儂が一番良く分かっておるつもりじやよ」

東光寺禪達殿

此度の災禍について、おぬしの真意を問いたい。

明朝卯午前六時の刻、真野・犬神原にて待つ。

ニッ岩マミゾウ

妖怪墨で書きつけられた、堂々たる一筆を示し、マミゾウは片目をつぶって見せた。

▼ 7

犬神原。真野の南に位置する、かつての佐渡長者の領地である。在りし日には佐渡最大の稲作地帯として百万石を数え、日の落ちることなく黄金色に輝いた一面の田畑も、今は主を失い、緩やかな草原へと姿を変えていた。

北には頂に金北山を冠する大佐渡山地の山並が拡がり、東には国中平野の豊かな土壌も見降ろせる。

一面の草原にはざわめきがあった。まだ早朝にもかかわらず、広場に押しかけた佐渡じゅうの貉達がひしめいているのだ。

貉達は大きく東西の陣営に分かれ、それぞれ草原の中央を固唾を呑んで見守っていた。禅達とマミゾウの間に決闘状が交わされたという噂は昨夜のうちに佐渡じゅうを駆け巡り、貉は大小も揃ってここに駆け付けていた。若衆が担ぐ輿に乗り、佐渡貉の最古老、初右衛門や鵜掛老と言った、隠居し長らく表舞台から退いていた貉達の姿までもが見られる。

皆が注視するのは芒ざわめく犬神原の中央に陣取る、二匹の貉である、向かって東の霊峰・金北山を背に、小高い丘の上に陣取るは黒めいた隻眼の大貉、東光寺の禅達。

いつもの檻褸袈裟ではなく、下ろしたばかりと見える真新しい袈裟をかけ、肩にはたすきの

ように大数珠を絡めている。伸び放題の髭に前髪の下から、ぎろりと覗く隻眼が辺りを睥睨し、たまたま視線の合った若い貉を震え上がらせた。

それに相対するのが、西の平原にどつしりと構えるマミゾウ。真野灣を背に、本家団三郎の正装である三つ紋を染め抜いた芒に満月の羽織を纏い、下は紺染めの袴に鈴飾りもきらびやかな黒下駄である。襟元にはいつもの市松模様のマフラーを重ね、蓮葉の笠を斜にかぶる。その背では、縞模様の尻尾がひときわ大きく波打っていた。

狐や猫は尻尾の数でその格を測るが、貉の化力は尻尾の艶毛並みとその大きさに現れる。マミゾウの尻尾はこの場の誰よりも大きく、力強くも美しい。

源助、財喜坊といった他の四天王は二人からそれぞれ距離を取り、宙空に敷かれた赤絨毯の座敷に座っていた。

そして。

『マミゾウ！ 元氣ー!!』

否が応でも高まる緊張を台無しにして、姦しい声が響く。財喜坊の手にした銅の水鏡の中、はしやぐように手を振るのは、佐渡貉四天王、最後の一角にして紅一点。関せきの寒戸さかふとお杉すぎ。金銀羅紗の煌びやかな装飾に身を包む、美しい雌貉である。

透けるような餅肌と、艶めかしく紅い唇に、居合させた若い雄貉達が揃って鼻の下を伸ばしている。魔性の肌の通り名そのままに、男を一目で魅了する娘であった。

彼女はある事情によって祀祠のある寒戸を離れることができないため、財喜坊の術でこの場を覗いているのだった。

『もう、せつかく帰って来たのに、うちに来てくれないなんてずるいじゃない。昨日も念入りにお風呂入って待ってたんだからねー？』

「んむ。こちらの色々あつてのう。……じっくり話したいのは山々じゃが、ちと後にしてくれんかの」

『あん、待つてよう』

財喜坊がそそくさと水鏡に張られていた水を酒瓶に移す。ガラスに包まれてなおかしきく続くお杉の応援を背に、マミゾウは小さく苦笑した。

「さて。そろそろ刻限か。ぬえ、離れておれ」

「わかった」

後ろに控えていたぬえが小平太と志郎を伴ってマミゾウの傍を離れる。不安げに揺れる小平太の瞳がマミゾウを見上げるが、マミゾウはそれに軽く微笑むのみで、禅達へと向き直った。

「さて、禅達よ！」

朗々とした声が大神原を駆ける。

「逃げ出さず、遅れずに来たこと、まずは褒めてやるかのう。おぬしのこととはそれなりに買っておったつもりじゃが、どうやら儂が見誤っておったようじゃのう！ 儂の不在にこの横暴、

もはや看過はできん。誰が総大将か、もう一遍教えてやらんといかんようじゃな！」

「さんざん留守にしておいて、今更親分面もねえだろうぜ。一遍外におん出たんなら、未練たらしく心残りせずに、幻想郷とやらでよろしくやってりやよかったんだ。佐渡のことなんざ綺麗さっぱり忘れてな！」

草原の西と東、佐渡の東西を分け合った化け貉の二匹の視線がぶつかり合い、ばちばちと火花が散る。これは比喩ではなく、実際に音を立てて火花が辺りに飛び散るのである。万物を化かす化術に長けた化生同士が化力を漲らせると、その迫力は無意識のうちに辺りの様子を様変わりさせてしまうのだ。

稲光にも似た火花は、見物を決め込んでいた貉達にまで降り注いだ。鼻先を掠める火花に野次馬の貉達がわあわあと逃げまどい、草原に喧騒が響く。それでも彼等は近くの茂みに飛び込んで恐々と様子を窺っているのだから、肝が据わっているのか物見高いだけなのか、些か判断が付き難い。

「ふむん。最後の機会じゃ。言い訳があれば聞くだけ聞いてやるぞ、禅達」

「お前こそ、申し開きがあるんじゃないかねえのか、マミゾウ。なんなら介錯くらいはしてやつてもいいぜ」

「は、物騒な事を言うのう、坊主かぶれめが。おぬしも貉の端くれなら、こつちで勝負せんか」「いいぜ。双方邪魔なし、一騎討ちだ」

どこからか取り出した榆の葉をひらひらと振って示し、挑発するマミゾウ。それを見て禅達は一步前に踏み出した。

双方、鼻の上に皺が寄り、獣の本性が滲み出す。黄金色の犬神原一帯にざわりと蠢く気配が高まり、場の緊張は最高潮に達した。

刹那。

どんと空気を揺るがす大音声が、草原を駆け抜ける。芒原が根元から吹き飛ばされんばかりにうねる。腹いっぱい息を吸い込んだ禅達が、思い切り腹鼓を打ち鳴らしたのだ。駆け抜ける衝撃が荒野を揺らし、たちまち茂みに身を縮めていた貉達を吹き散らす。

駆け抜ける衝撃波を、しかしマミゾウはものともしない。斜にかぶっていた蓮の笠がどこかへと吹き飛ぶのにも構わず、しつかと両足でその場に踏みとどまり、力強く地面を踏み締めた。マミゾウの足元で揺れた地面が、生き物のようにうねりざわめき盛り上がる。みるみるうちに丘が脈打ち、山の津波となつて禅達へと押し寄せた。

大地を深々とえぐり、轟音とともに跳ねる土砂を蹴散らして、地面より飛び出したのは、なんと身の丈50mを越える馬鹿でかい鯨であつた。

これはマミゾウが地面の中でのおんぴりと虫を食んでいた土竜もぐらを化けさせたものである。安穩と居眠りしていた土中から引きずり出され、怒り狂った土鯨は潮の代わりに土煙を噴き上げ、波打つ大地を泳いで禅達に飛びかかる。

が、禅達は巨軀に似合わぬ素早さで地を駆け、素早く印を結んで蔦を編み上げた大投網を放った。罾のごとき剛腕で網を捻れば、土鯨はたちまちで絡め取られて身動きが取れなくなる。

禅達はさらに片手を空け、十尺はあろうという鉈を担いで気合いと共に投げ放った。眉間にどつかと鉈を突き立てられ、鯨は激しく身をのたうたせて地面に倒れ込む。

地響きと共に煙がもうもうと舞い上がり、その奥では眉間に爪楊枝の刺さった土竜が目を回していた。

その時にはもうマミゾウは次の化術を放っていた。愛用の螺鈿の煙管から吐いた煙で見上入道をつくり、その巨腕をもって禅達を握りつぶさんとする。しかし禅達は大喝を叫んで己が剛腕でそれを受け止め、なんと真つ向力比べの上で入道をねじ伏せてみせた。見事な巴投げでもって投げ飛ばされた入道が煙を上げて消滅するやいなや、禅達は素早くマミゾウに飛びかかった。岩も砕かんばかりの体当たりを、マミゾウは一辺が30mを越える巨大な塗り壁で受け止める。

「すごい……！」

誰かのこぼした声が感嘆となって犬神原に拡がってゆく。声はいっしか歓声となって、東西の応援合戦となっていた。

「どうした老いぼれ。さっきから種の割れた化術ばかりじゃねえか。それで佐渡貉の顔のつもりかよ」

「つは、坊主かぶれが大口を叩きおつて。後悔するぞい」

双方の声援を背に受けて、見よ、これぞ化け貉の真価とばかりにマミゾウと禪達、二者の決闘はいよいよ激しさを増した。化力、知力、体力の粋を尽くした大化術の応酬が犬神原を揺るがせる。

マミゾウが釣瓶落としを呼び出して禪達を押し潰さんとすれば、かれは一匹の蠅に身を変じ、草の隙間を掻い潜つて抜け出した。大木切り裂く化け傘の乱舞を宙を飛ぶ金の鉢が絡めて撃ち落とし、大地を砕く巨大な煙管は焼け付く炎に撒かれて餅のように破裂する。

マミゾウの繰り出した化け提灯の閃光から逃れ様、禪達が印を結び、呼び出すのは憤怒の形相を浮かべた明王である。

むろんこれは本物ではなく、禪達の化術によるつくりものだ。仏道に身を置いた彼なりの矜持だろう。しかし形こそかりそめとて、その信仰は本物である。光背を背負った明王が火の矢を投げおろし、剣を打ちおろせば、大地は砕け火生三昧の炎に包まれた。

これに対し、マミゾウは牙が太刀ほどもある劍^{ケン}牙^バ虎^コへと身を変じて、その剣を噛み砕いてみせる。かつて海を渡り大陸を放浪して、見聞を広めたマミゾウの変化は、この国の如何なる狸よりも多岐に渡る。

不動明王はその名の通り、不動の決意をもつて魔を討つ化身だ。絶対の攻撃を誇る代わりに、動きが鈍い。化術によってつくられた偽物となればそれは決定的な弱点となった。マミゾウは

その隙を突いて虎の俊敏さで偽の明王を引き倒し、さんざんに踏み潰した。

しかしその時には禪達、既に真言を唱え終えていた。曇天を引き裂き空が割れ、そこから巨大な手のひらが姿を見せる。東京の一番でかい高層ビルディングでも、その小指一本にすらとても及ぶまい。

その中指に記されたのは、『せいてんたいせいこにひとたひいたる齊天大聖到至一遊』の八字。傲岸不遜な美猴王を懲らしめた釈迦の手のひらである。

「かの孫悟空と同格扱いとは、光栄じゃなあ!!」

「お前の増長慢を叩き折るにはお誂え向きだろうぜ!!」

大地を揺るがし、仏陀の掌が大神原に馬鹿でかい手形を刻む。功德も力強さも横綱の百万倍には及ぼうか。下敷きとなったマミゾウ目掛け、律儀に五行山が投げおろされ、順に重ねて積み上げられた。

「団三郎様!!」

ぬえの隣で小平太が叫んだ。

哀れ、かの齊天大聖のごとく、仏陀の功德を前に佐渡の二ツ岩猪も引導を渡されたのであるか？

否。もちろん、否。

どろんと巻き上がる白煙。仏陀の指の間をすり抜けて、もうもうと広がる化煙の中から、現

れたのは十人に増えたマミゾウであつた。

「出た！ 総大将の切り札だ！」

活目して見よ、これぞ、ニッ岩マミゾウの十変化。同時に十の変化を引き起こす佐渡貉の秘儀にして、幻想郷における聖徳王への妖怪の切り札として、ぬえが頼りにした力であつた。釈尊すらも化かしてみせんと、巨大な五指をそれぞれ化け貉の分身一体が翻弄し、残る五人が禅達へと挑みかかる。

「一番、二番なぞとまだるっこしいことはせん、ゆくぞ禅達よ！ 十番勝負、まとめて受けてみい！」

偽りの五行山を蹴飛ばし、芒原を揺らして一斉にマミゾウ達が奔る。それぞれが風を、大地を、獣と、鳥を、人を、蛙を、化術の粋をつくした変化が禅達へと繰り出す。十に分かれてなおその化術はいささかの衰えも見せぬ。

そしてそれを見降ろすのが、宙に陣取りどつかりと腰を下ろした、十一人目のマミゾウである。十と一人、どれが本体なぞという程度の低い化けはしなうと言わんばかりだ。本体を含めて十一人、その全てが虚実を織り交ぜた化術なのである。

さしもの禅達も戸惑いを隠せない。素早く印を結んで繰り出された化術を防ぐが、文字通りの多勢に無勢。十一人のマミゾウにたちまち追い詰められ、逃げ場を失う。そこへ天を裂いて打ち降ろされるのは、先程の禅達の五行山のお株を奪う、千丈を超える巨大な大岩である。

大貉は咆哮と共に大岩を受け止めんとしたが、流星のごとき質量に抗し切れるはずもない。禪達は為す術なく大岩の下敷きとなった。地響きが大神原を揺らし、大岩の下でぐしやりと何かが潰れる嫌な音が響く。

――が。

「ならば問う。この音、俺の頭より出たか、岩より出たか」

押し潰されたはずの禪達の、静かな声があったと同時に。

見上げんばかりの巨岩にびしりとひびが入る。粉々に崩れ去った大岩の中から、無傷の禪達が起き上がった。かち割られていたはずの脳天には傷一つない。

「……なんと」

マミゾウが驚きに眉を跳ねさせた。これぞ禪達貉の化術の極意。東光寺の歴代和尚と繰り返した禪問答にて磨いた独自の化術。相手への問答をもつて物事の真偽、表と裏、右と左を入れ替える奥義であった。

騒然となる大神原の中央、禪達は悠然と足を踏み出し、再び重々しい声で問うた。

「俺はいま、進まんとしているか、留まらんとしているか」

「……、しまった――ッ」

即座の返答に詰まり、マミゾウが痛恨の表情を浮かべる。先を選べば後が答え、後を選べば先が答えとなる。問答のどちらを選んでも悪手であり、しかし答えあぐねればそれも相手の有

利となるのだ。

その時には禪達の体は音よりも早く空を飛び、丸太のような剛腕が、十一体のマミゾウのうちの一つを捕えていた。

「俺がいま打ったのは、本物であるか偽物であるか」

三度の問答。十の分身が同時に消えうせ、残る一人のマミゾウが剛腕をまともに食らって吹き飛ばされる。本物と偽物を入れ替えられたのだ。

己が分身を生み出し、十の化術をもつて翻弄するはずが、完全に裏目に出た。反撃が来るのは予期し、分身を身代りに立てて逃れるはずが——禪達の問答はそれを許さなかったのだ。

岩に叩きつけられ、血の混じった痰を吐いて激しく咳こむマミゾウに、禪達は片合掌に構えた手のひらを向ける。

「それで終いか、マミゾウよ」

「やるのう、禪達」

二人の笑みが凶悪さを増し、再び両雄の激突が芒原に響き渡った。



真野は小高き犬神原。佐渡に住む六百の貉が詰め掛ける中での、東西貉大将・因縁の一騎打

ち。それはまるで、数百年前に勝負無しとしてお預けとなつた、佐渡貉総大将を決める百番勝負の最後の一戦であるかのようにだった。

互いに血を流し、肚の底から天へと叫び、化力の限りを尽くしてぶつかり合う東西の両雄。天地を化かし欺いて繰り広げられる激戦に、集つた貉たちの声援にも力が籠る。

撃ち合う爪と牙が血飛沫を飛ばし、いつしか黄金色の芒原を赤く染めていた。その凄惨な争いを見ていられなくなつたのか、浮足立つた小平太が飛び出そうとする。ぬえはその肩を掴んで彼を制した。

「邪魔する気か？ やめときなよ。親分同士が本気でやり合つてゐるんだ。殺されるぞ」

「で、でもっ」

顔面蒼白となる小平太。見れば草原の向こうでも、源助が軽々に飛び出そうとした貉たちを制していた。

「初めに言っていたはず。これは二人の化け勝負。何があろうと手出しは無用！」

「で、でも源助様、これじゃあ、二人とも死んじまいますよ!!」

「マミゾウ様も、禅達様も、承知の上です」

ようやくこれがお祭り勝負ではなく、真実命をかけた決闘であることに気付いたのだろう。野次馬を決め込んでいた貉達が今更のように慌て始める。

そんな彼等の動揺をよそに、両者の距離は再び縮まっていた。

「どうした、マミゾウ。息が上がってるじゃねえか」

「……まったく、おぬしのような筋肉達磨と一緒にせんで欲しいのう」

「ぬかせ。修行が足りねえってことだ」

禅達が繰り出す明王の掌が、マミゾウを左右から包み込む。対するマミゾウは、肩を上下させながら化け式の蛙でそれらをかわし、地を転がってどうにか避ける。

「ならば、儂も出し惜しみしておる場合ではないのう」

マミゾウがおもむろに懷へ手と突っ込むと、そこから顔を出した化け蛤が殻の隙間から幻を吐きだした。

これまでとは桁外れに大きな白煙が上がり、天空に巨大な影が姿を現す。ごうごうと吹き荒れるのは白い蒸気。周囲の温度が見る間に上がり、じつとりと辺りに湿気が押し寄せる。

現れたのは、ぐらぐらと湯を煮立たせる巨大な茶釜。特筆すべきはその大きさが山よりもお大きなことだ。

「ふん、また古臭い手だな」

化術の仕掛けを一瞥で看破し、鼻で笑う禅達。が、マミゾウは慌てずに懷から一握みの銅銭を取り出し、足元にそれを積み上げる。

一枚が二枚、二枚が四枚、子が子を産んでみるみる数を増した銅銭は、たちまち万を数えなおも増えて山と膨らんでゆく。

「かか。まだ終つておらんぞ！」

そこに示されるのは、二ツ岩貉の貸し証文。相手は上州茂林寺の大化狸、守鶴しゅかく。振りだす力のかの名器・分福茶釜である。

茶釜が煮立ち、ひととき猛烈な蒸気を噴き上げた。狸は五行で金気の獣でもある。マミゾウは己の化力に、財力という新たな力を上乘せし、守鶴の力を借り受けたのだ。

「東光寺の禅達貉、知力体力自慢は実に結構、ならば僕はこいつで勝負せんとな」
「……おいおい」

禅達が初めて額に汗をにじませた。この盤面でなお、ここまでの大化術を繰り出すマミゾウの化力の底の知れなさに、思わず一步を引いたのである。

その隙を見逃すマミゾウではない。宙でひっくり返った茶釜から、禅達めがけ、蒸気と熱湯が波濤のように襲いかかる。

分福茶釜の湯はいくら汲めども尽きず、無限に湧き出す。湯を水に変えたところで一時凌ぎ、壁を立てたところで防げるものではないだろう。やはり化術勝負ではマミゾウに一日の長がある。いよいよ手詰まりになったかに見えた禅達だが――

「喝！」

彼は慌てず大きく胸を膨らませて息を吸い込むと、特大の大喝をもつて叫んだ。同時に彼の隻眼がガラリと輝きを放ち、押し寄せる熱湯の大津波を包み込む。

途端、マミゾウの化術は茶釜ごと形を失い、見る間に溶けて崩れ去った。さながら光を当てられた影の如く、そこには何も残らない。

静まり返る草原で、禪達は静かに息吹を吐く。

「籠目、籠目よ。俺の目は見ての通りひとつしかねえが、だからこそ、大日よりも晃かにまやかしを祓う」

「なんとまあ、……貉らしからぬ術じやのう」

この秘儀に、さしものマミゾウも驚きを隠せない。

これはいわば反化術。貉にあつては掟破り、邪道のひとつであろう。化生の言葉通り、息をするように化ける妖怪を、根本から否定する力である。ここまで敢えて使わずにいたのも、禪達自身に迷いがあつたゆえのことか。

「何とでも言え。出し惜しみは無しだつて言つたろうがよ」

だが、もはや禪達は遠慮しない。片目を光らせる禪達は、その反化術の力をもって追撃に繰り出されたマミゾウの繰り出す化術を片端から無効化してゆく。

「なんだよ、あれ……反則だろ!!」

野次馬の中から悲鳴のような叫びが上がる。

化け貉の力を根本から覆す禪達の反化術——その力は犬神原に集った貉達をもして震撼させていた。いかにマミゾウの化術が優れていようと、その全てを無効化する禪達の前では無意味。

これでは千日手——あるいは、全ての化術を打ち消され、マミゾウが力尽きるのではないか。そんなざわめきが漏れる。

しかし、その中で正確に事態を把握している者達がいた。誰あろう、源助、財喜坊ら、残る佐渡貉四天王である。

「禅達様……何故、そこまで……？」

そう、全ての化術を打ち消す力。それは化け貉の決闘においてこの上なく強力であると同時に、己を傷付ける諸刃の剣でもあったのだ。禅達の反化術は、貉の化術を根本から打ち消す力。複雑な盤面を将棋盤ごとひっくり返して、『勝負なし』にしているようなもの。

あの反化術は、禅達貉が化術勝負においてマミゾウに勝てないことを認めたに等しいものであったのだ。

「どうした、マミゾウ、そんなもんか！」

果たして、彼の嘲りに焦りが滲んでいるように聞こえるのは、錯覚であつたろうか。

ざわめく野次馬達を前に、マミゾウはさらにいくつかの化術を繰り出すが、そのいずれもが喝破され、形を失つてゆく。

「ふん。埒が開かんな」

「抜かせ、お互い様だろうがよ」

肩で息をしながらも、疲労を振り払い、マミゾウは地を駆ける。もはや両者に、化術は意味

を持たなかった。化力の限りを使い果たし、両雄は徒手空拳をもって激突する。風を切って打ち込まれた禅達の剛拳を、マミゾウが片手を犠牲に払いのけた。即座に左の抜き手。身を捻った禅達はこれを大口で噛みちぎろうとする。

マミゾウの腕が食い千切られんとする直前、跳ねあげた膝が禅達の顎を打ち抜いた。よろめく禅達の足首へ、マミゾウの尻尾が蛇のように絡みつき、力任せに地面へと引き倒す。鈍い音がして骨が砕け、禅達が苦悶の声を上げた。

さらに体重を乗せた肘で頭を狙ったマミゾウに、禅達は強引に体を引き起こし、その剛腕でマミゾウを殴り飛ばした。鋼と鋼が打ち合わされるような衝撃が走る。

禅達は躊躇わず追撃に移った。巨軀をもってマミゾウを押し潰さんと迫り、強烈な頭突きを叩きこむ。寺の鐘を力任せにぶん殴った様な轟音が轟き、地面に凄まじい亀裂が走る。

しかしマミゾウは氣を失う寸前のところで踏みとどまり、今度は自分から頭を振り上げ、禅達の脳天に痛烈な頭突きを見舞った。先程にも匹敵する轟音が再度、衝撃波を伴って大神原を駆ける。

「つく、石頭がッ」

それでなお、罵声を吐いたのはマミゾウの方だ。眼鏡にひびが入り、額から流した血が頬を伝う。それを赤い舌で舐めとり、高ぶりのままに表情を笑みへと歪める。

「てめえとは鍛え方が違うからな。真面目に修行しやがれ」

「どこぞの坊主のような事ばかり言いおって」

笑顔とは、本来獣が見せる攻撃性の発露である。凄惨な笑顔のまま、爪が振るわれ、牙が打ち込まれる。血しぶきが飛び、骨が砕け、折れる音が続く。

常ならば一撃で目を回してしまいうだろう攻撃を、互いに受けながら無事なのは、単に妖怪として身体が頑丈だからだけでは済まされない。禅達もマミゾウも、互いに身体の負傷を、無事な身体へと化かしてダメージを緩和させているのだ。

しかし、化かすというのはあくまで一時的なもの。実際の肉体が激しい損傷を被っているのは事実である。化力、妖力が付き、化術が解けた瞬間、全ての負傷は元に戻るのだ。

あまりにも凄惨な打ち合い。その迫力に圧倒され、集う貉たちは声もなく二人の戦いに見入っていた。

そんな中。小平太は必死になってぬえの腕を跳ねのけ、もがいて走り出そうとしていた。

「やめてくださいっ!! 総大将も、禅達様も!! お願いです、も、もう、こんなこと——!!」
「駄目だ。小僧が割って入っていい勝負じゃない」

「で、でも、これじゃ、二人とも——っ、二人とも、死んじやうじゃないですか……!!」

小平太が声にならぬ叫びをあげた時だ。

血がしぶき骨が折れ、尻尾が千切れ腕まで飛ぶ派手な殴り合いの果て、満身創痍となった両者が草原の左右に対峙していた。睨みあいも一瞬のこと、東西の貉は風のように地を走る。

交錯は一瞬のこと。芒が揺れ、空が軋み——駆け抜ける化け貉が互いに牙を繰り出した。魂を込めた一撃は激しく打ち鳴らされ、草原に衝撃と轟音を響かせる。

「……………ッ！」

皆が固唾を飲んで見守る中、東西の位置を入れ替えて、両者は芒を揺らし立ち止まる。

交錯の直後、大きく肩を震わせていたのはマミゾウだ。胸元に大きく血を滲ませ、足元に朱の飛沫が跳ねる。

がくりと膝を突いたニッ岩貉に、大神原じゅうの貉達からどよめきが上がる。そして。

「——馬鹿もんが」

ごほりと血を吐いたマミゾウが眼鏡を曇らせ、呟いた刹那。

禅達の巨軀がぐらありと揺れ、仰け反るようになってゆつくりと傾いてゆく。

東光寺の大貉は、その全身から力を失い、土煙をたてて倒れ込んだ。

▼8

大神原は静まり返っていた。

長い決闘の果て、開いた口元からだらりと舌を垂らし、白眼を剥いて動かない大貉の前で、マミゾウは精根尽き果てたように座り込み、一人瞑目と共に吐息する。

生気の失せた禪達の身体は、先程より一回りは縮んで見えるかのようにだった。

「団三郎さまの……勝ち、だよな？」

「あ、ああ……。でも、いまのつて、禪達様……？」

「お、おい……。まさか……」

ぴくりとも動かない東光寺の大貉に、さしものお気楽な貉たちも異常を察知したか。あたりにどよめきが広がってゆく。

両者が牙を交え、片方が倒れ片方が立っている。誰が見ても明白な勝敗の結果だった。

だから——マミゾウから勝ち名乗りのひとつもあつてしかるべきだった。しかしマミゾウは禪達の前に座り込んだまま、じつと動く様子がない。

まるで、事切れた骸の前で盟友の死を悼むかのように。

曇る眼鏡の奥、俯くその視線は、何を思うものか。

爪に付いた血飛沫を払い、口元の汚れを拭って——がさりと揺れる茂みを振りかえらぬまま、ニッ岩貉は問う。

「……小平太か」

名を呼ばれ、びくつと背筋を震わせる子貉。かちかちと齒の根を鳴らしながら、小平太は這いずるようにしてマミゾウの前に進み出た。

「あ……う……、お、大親分……っ、」

「遅かったのう。ずいぶん待ったぞ。……のう、おぬし、何故あのような事をした」
「う……」

「答えんか、小平太よ！」

鋭く叱責するマミゾウに、小平太は落雷に打たれたように尻尾を逆立たせ、がばと地面に伏した。引き攀ったように肩を震わせ、鼻を嚙りながら、額を懸命に地面に擦りつけ、途切れ切れに声を絞りだす。

「お、俺っ、……お、大親分が、い、いない、のが、っ、つまんなく、てっ……、み、皆だつて、寂しいって言ってるし……お、大親分に、戻ってきて、欲しくて、それでっ……！」

「それで、儂の堂に火を付けたのか」

「っ……！！ ぐ、ぐめんなさいっ、ぐめんなさい！！ っあ、あ、大親分！！ ぐ、ぐめんなさい……っ！！」

怒る気も失せるほどに、無邪気で稚氣に満ちた理由だった。

ずっと飲み込めずにいた罪を吐露し、鳴咽に交じつての謝罪が繰り返される。もはやそれ以外に言葉を持たぬのだろう。畏れの中で地面に擦りつけられた額から血が滲み、子貉の喉を引き攣らせる。

ぬえに付き添われ、近くにやつてきた志郎が震えながら、その様子を見つめていた。

「で、でも、俺、こんな……こんな事になる、なんてっ、そ、その、思つて、なくて……っ」
「しかし、正直に本当のことを喋るのは、いつでも出来た筈じゃな。何故それをせんかった」
「そ、それ、はっ……」

「誰か、悪い奴に脅されておったのか。都合のいいことを吹き込まれて騙されておったのか。狐にでも寝返つて、儂を謀るつもりじゃったか。だんまりを決め込んでいた理由は何じゃ」

「……あ……あのっ……」

子貉の背中が激しく波打つ。がたがたと震えながら、小平太はひたすらに平伏するばかりだ。

「答えよ、小平太」

「ち、……違……」

「聞こえんぞ！ はつきりと申せ！」

動かぬ禅達の前、じっと俯くマミゾウの一喝に、小平太は喉から鳴咽を絞りだし、ついには泣きだしてしまふ。

「ち、違います、そんなんじゃない、なくて……!! お、俺、こんな、こんな事になるなんて、思ってた……なくて……、火、火も、すぐに消せば……大丈夫、だから……あ、あんなに燃えるなんて、おもわ……なくて、つ、た、ただ、これで、大親分が、戻って……、来てくれるって……思ってた、だけでっ……!!」

ごっ、ごめんなさいっ、大親分、ごめんなさいい、ごめんなさいい……!!」

「全部、おぬしが、一人でやったことか」

「は、はいっ……」

蹲ったまま震え、涙声のままひたすらに背を小さく丸めて答える子貉。

源助、財喜坊貉達がゆっくりと近づいてくる。ぬえは志郎の背中を押して、小平太のすぐ隣に進み出た。彼らの姿を見つつ、マミゾウは立ち上がる。

「その言葉、誓って嘘はないな」

「はい……ッ」

強張る体のまま、小平太は押し寄せる恐怖に身を硬くした。

「——だ、そうじゃ。禅達よ」

え、と小平太が間の抜けた顔を上げた。さっきまで確かに死んでいたはずの巨軀が、長い息を吐いてむっくりと起きあがる。

「参ったな。俺の監督不行き届きかよ」

呻きながら腹の傷をさすり、頭を掻き毛つて長い溜息をつく東光寺の大貉。
犬神原に、貉達のどよめきが響き渡った。



「ごめんなさいい……!!」

「なさいい……!!」

マミゾウ直々にお仕置きのげんこつを賜り、わんわんと鳴きながら叫ぶ小平太。泣き腫らした目は真っ赤で、しゃくりあげる息も止まらない。兄の悲しみに感化されたか、隣で志郎も同じように泣いている。

遠く、興奮冷めやらぬままにわあわあど騒ぎ立てる貉達。今回の騒動の主犯であった兄弟を眺めながら、マミゾウは地面に座り込んだまま、やり切れぬ気持ちで紫煙を吹かす。

「やーれやれ、じゃ。まったく、人騒がせにもほどがあるのう」

「こつちの台詞だよ。ひやひやさせやがって。あいっら押さえるの大変だったんだぞ?」

口を尖らせるぬえに、マミゾウは服の泥を払って伸びを一つ。強張った背中をほぐして肩を回す。レンズにヒビの入った眼鏡をふっと吹いて埃を払い、鼻の上に乗せ直した。

「万が一にも気取られる訳にはいかんかったからのう。他に黒幕が潜んでおる可能性は残って

おつたしな。……ま、完全な疑心暗鬼だったわけじゃが」

「全くだ。ひでえ目に遭ったぜ」

隣の禅達も、あちこちに怪我こそしているが先程までの様子が嘘のように蘇っていた。彼がさつきまで行っていたのは、狸の化術の基本中の基本、擬死。窮地に際して己を死んだように偽る術である。

マミゾウと禅達はこの決闘を通じて片方の死を偽り、騒動の黒幕を引きずり出すべく、ひと芝居を打ったのであった。

「文句を言いたいののはこっちじゃ。ばかすか本気で殴りおつて」

「そりゃあ、鬱憤が溜まってたからな。ちつとくらい痛い目見せねえと割に合わねえよ」

豪快に笑う禅達に、マミゾウも釣られて口元を緩める。お互い、特に打ち合わせなど無いままに挑んだ決闘だが、阿吽の呼吸でお互いの意図は伝わっていた。単に半ば本気で殴り合っていただけでも言える。が、少なくともマミゾウは、禅達がここであつさり死ぬような間抜け貉ではないと信じていた。

「お二人とも、お怪我は大丈夫ですか？」

「大丈夫なわけあるか」

「まったくじゃの。……痛つつ、おろく、もちつと優しくやってくれんか」

身を案じる源助に異口同音に答えるマミゾウと禅達。おろくの手当てを受けながら、マミゾ

ウは痛み止めの薬草を詰めた煙管を吹かし、痛む肋に眉をしかめながら、紫煙を吐き出す。

(……さて。色々と済みはしたが、結局なんにも解決はしとらんのだよな)

思いあまつた小平太の行動という形で表面化した今回の事件だが、その本質はより根深い。むしろ、分かりやすい黒幕や裏切り者がいないだけ、厄介で根の深い問題だと言えた。

動機こそ幼いものではあれど、二ツ岩大明神を燃やすとなれば重大事である。誰にも気付かれずに全てを済ませるなど、とても子猪一匹の手に負えることではないのだ。事前に小平太の意図を知りながら、あえて彼を止めようとせず、するがままに任せていた猪達がいちたはずだった。

そうでなければ、いくら身内の起こしたこととはいえ、禅達たちが見過すはずがない。

恐らくは積極的な加担ではなかっただろう。が、佐渡における二ツ岩マミゾウの不在が、彼らの心中の不安の種となつてそれを後押ししたのである。

「このままではいかんということかのう。しかし、だからと言ってどうしたものでも……」

一番簡単な解決法は、マミゾウが幻想郷を離れ、今すぐ佐渡に戻ることにだ。だがマミゾウには当面そのつもりはなかったし、何度も結界を超えて行き来することは八雲の賢者に睨まれる原因となるだろう。

(…………ふむ)

洗面になつて眉を寄せ、顎を擦つて思案することしばし。二ツ岩猪はほんと手を叩き、やお

らその場に起きあがる。

「のう、皆、ちいと耳を貸せ」

「あん？」

「ひとつ、いいことを思いついたぞ」

「……またぞろ碌でもねえこと始めるつもりかよ」

露骨に顔をしかめる禪達。近くにいた貉たちも首を傾げ、何事かと集まってくる。

顔をくつつけ合わせ、押し合いへしあい、ぎゅうぎゅうと円陣を組む貉たちの中で。

「とっておきの悪巧みじゃよ」

マミゾウはひとり、不敵に笑うのだった。

——さて。

かくしてマミソウは騒動を見事に収め、佐渡貉総大将の面目を保ったのであります。

とはいえこれは一時しのぎ。化け貉達の間に広まる不安は確かなもの。

形のないその恐怖を拭い去るため、二ツ岩貉はここに途方も無い計画を企み、各地で暗躍をはじめたのであります。

この企みもたらす驚天動地の大騒動は、やがて狸界のみならず人間社会をも巻き込んで、日本全国に知れ渡ることとなるのであります——その顛末を語る次なる化逆門ハケキヤモンについては、また別の機会といたしましょう！

続二ツ岩貉化逆門 了

「結」に続く

ニッ岩貉化逆門 〈よりみち〉

【#二ツ岩貉化逆門・木更津編】

君せらず 袖しが浦に 立つ波の
その面影を みるぞ悲しき



佐渡の団三郎貉、二ツ岩マミゾウが上総国木更津を訪れたのは、歳の瀬も迫った師走の半ば過ぎのことであつた。クリスマスも目前とあつて世間はなにかと慶事への期待に浮足立っているようだが、この港町はそれらとは無縁であるかのように閑散と穏やかだ。

駅から歩いて10分ばかりの川沿いに、今回の旅の目的地はあつた。

緩やかな矢那川の畔、緑に囲まれた境内をまっすぐに伸びる石畳の先、特徴のある六角屋根の石堂と、歴史ある趣の本堂が並ぶ。

——護念山證誠寺。日本三大狸伝承の一角、狸囃子の證誠寺である。

人気のない境内の隅に立てられた句碑の根元。車座になつて座る木更津の狸たちに囲まれ、マミゾウは手厚い歓待を受けていた。

「佐渡の総大将、はるばるお越し頂きありがとうございます」

「いやあ、楽なもんじゃよ。『あくあらいん』さまさまじゃのう」

高速バスの旅はまったく快適だった。新幹線を降りてわずか1時間余りで東京湾を飛び越え、ここ木更津まで一直線。ほとんど疲れもないままにマミゾウはこの地を踏んでいる。

「ここに来るのは何十年ぶりになるかのう。……最近の景気はどうかね」

「恥ずかしながら、捗々しくありません。買い物はみんなアクアラインで海の向こう。商店街は閑古鳥。駅前デパートも閉店です。この通り、ぼくたちのお供えも減る一方で」

「ふうむ。やはりか。世知辛い話じゃのう」

かつての軍港、そして鐵鋼産業で栄えた木更津の町は、皮肉にもその産業開発のための東京湾横断道路の完成によって衰退の一途を辿っていた。商店街は軒並みシャッターを下ろして閑散とするばかり。商業圏の人口はかつての3分の1以下に落ち込んでいるという。

6階と屋上を除いてデパートの撤退したデパートがまるで廢墟のように立ち尽くし、駅前だというのに人通りも疎ら。その寂れ具合には、見物がてらに市街を歩いたマミゾウも驚きを隠せなかった。

「證誠寺の狸囃子と言えば、子供でも知っておる伝承のはずじゃが、その膝元がこの有様とはのう。これも時代の流れか」

「……いえ、これでもぼくたちは良くしてもらっているほうです。證和大明神さまのお囃子の

おかげで、人間達もまだぼくたち狸のことを覚えてくれている。もしこのお寺がなければ、木更津の狸は残らず棲みかを追われていたでしょうから」

木更津の狸一門を率い、かつてこの證誠寺の和尚と親交を交わした名狸・證和大明神。器楽に通じ、舞を得意とした彼がこの世を去ったのは高度経済成長の頃のことになる。

化術の名手として、関東一円に名を馳せた彼であるが、不幸なことにある事情から後継者を残せなかった。それでも日本に名だたる狸の名門を受け継がんと、木更津の狸たちは一致団結してこの地を守り続けてきたのである。

しかし、そんな彼らとて、驚かせる人間が減ってしまったようもない。

「ご存命のうちに、是非一度お会いしたかったものじゃな」

叶うならば、幻想郷で付喪神から習い覚えた原始のビートと共に、腹鼓を叩き比べてみたかった。苦い後悔と共に、マミゾウはくいと盃を呷る。

「さて。いつまでも感傷に浸っておっても仕方ないな。本題に入るとしようかの」
声音を改めたマミゾウに、狸たちも居ずまいを正した。

「仔細は、文で知らせた通りじゃ。例の話、おぬしらはどう見るかの」

「……それなんですが。正直、あまり自信がありません。ぼくたち上総の狸は、囃子歌でこそ有名ですけど、佐渡や四国の皆様とは違って誰も彼もどんぐりの背くらべ。化術の腕だつて似たり寄つたりです。ですから……」

「官九郎の言うとおりだ。佐渡の総大将が俺らを頼ってくれるのは光栄だけど……なあ？」
そうだと、お互いの顔を見合わせながら自信なさげな木更津狸たち。マミゾウはふうむと立て膝に頬杖を突く。

すっかり信仰を失った彼らは、うら寂れたスナック街の残飯に糊口をしなぎ、ご当地戦隊ヒーローの怪人役などを務めて、ほそぼそと妖怪への恐れを食いつないでいるだけという。

「その、申し訳ないんですが、総大将のご期待には沿えないんじゃないかと思えます。證和大明神様のお社もない今、ぼくたちには満足な働きはできません。……すみません。せつかくお声をかけてくださったのに」

「まあ待て待て。そう話を急がんでおくれ」

一斉に頭を下げようとした狸たちを押しとどめ、マミゾウは彼らにぐいと顔を近づける。
「……で、でも」

「いやいや。儂が、おぬしたちに頼みたいのはちと別の事じゃ。おぬしら木更津本陣の狸衆には、化術よりも得意なことがあるじやろう？」

「化術、よりも？」

一斉に首を傾げる彼らの前で、ニッ岩貉はひよいと手元の酒徳利を放り投げた。化力を込めて一転、丸い徳利は白い球へと姿を変える。

白球を彼らに向けて放り投げ、マミゾウは笑みを浮かべて片目を閉じた。

「毛球じゃよ。木更津の狸は、聞きしに勝る名球団であると聞いておるぞ？ 十七年前の屋島狸大学選抜との特別試合、息詰まる投手戦を制した勝負、九回裏の本門打。そして本家本元の応援囃子。さすがの大迫力じゃった。儂も佐渡の者たちと見せて貰ったぞ」

「……それは、そのう……」

「猫きやうあひの目、じゃったか。人間のチーム相手に試合をしたこともあると聞く。儂が貸して欲しいのはその力、チーム一丸となつて試合に挑むおぬしらの団結力じゃ。

今回の件はのう、全国の狸の力を結集して事に当たらねばならぬ。蚊帳の外となる者たちが居てはならぬと、儂は考えておる。というよりも佐渡と四国だけではとても手が足りぬのじゃよ。儂がこうしてあちこちと巡っているのもそのため。お主らの囃子と毛球の腕前、どうか、この二ツ岩に預けておくれ。この通りじゃ」

「そ、そんな、やめてください総大将！ わかりました！ わかりましたから！」

頭を下げようとするマミゾウに、木更津狸たちは慌てて彼女を引き起こそうとする。ひとしきり後、マミゾウと彼らは誰ともなしに笑い出していた。

「――すまんのう、無理を言つて」

「いえ、事情は皆わかっています。できる事なら力になりたいと思つていたのも本当です。多摩騒動の時には、海を渡れずに間に合いませんでしたから」

「儂も同じじゃよ。あの時できずにおつたこと、見て見ぬふりを決め込んだことへの後悔は、

いくらしても足りんじやろう。が……一度やると決めたからには、湿っぽい事を言っても始まらん」

「……はい！」

しっかと頷く木更津狸一同。マミゾウは再度、感謝をこめて彼らと握手を交わした。すると彼らの一人、官九郎がもじもじとしながら切り出してくる。

「あの、総大将。もしお時間があれば僕たちの試合を見ていきませんか？」

「ほう、それは良いのう。面白い」

「今日は八剣八幡門前稲荷の狐たちと試合なんです。ニッ岩様が応援して下さいれば、気合の入りが違います！」

「言うのう。儂の狐嫌いを知ってとはいいい度胸じゃ。負けたら承知せんぞ？」

「わかってますとも。なあみんな!？」

「ニッおうっ!!ニッ」

威勢の良い掛け声に、たちまち響く狸囃子。試合開始を告げるサイレンが、境内裏のグラウンドにこだました。

【#二ツ岩貉化逆門・草津編】



「……ふうむ。ここまで来ておいてこれも芸が無いかのう」

けばけばしい広告のクランチクッキーを棚へと戻し、土産物屋の軒先で首を捻るは、ご存じ佐渡の団三郎貉、二ツ岩マミゾウ。

どうにも決まりきらない決断にふうむと腕組みをし、片目を閉じて外を窺えば、店舗に囲まれた湯畑を、流れ落ちる白い湯が硫黄の匂いととも湯気を上げていた。

このたび二ツ岩マミゾウが訪れるは、故郷・佐渡をはるか離れて本州は上野国、草津。全国温泉番付に東の横綱を張る、言わずと知れた一大温泉街であった。

梅雨どきとあってか、店頭には梅干し梅酒梅茶漬けと梅尽くし。佐渡への土産を物色していたマミゾウは渋い顔をして手に取った品を棚に戻す。浴衣の袖を繰って、冷やのカップ酒をくいと呷った。

さて。先だつてのオカルトボールを巡る一連の騒動の末、マミゾウは結界を超えて現世に戻ることとなった。普段からヒマを見ては佐渡や京都の外界と行き来をしている化け貉だが、久々に見た東京の空に、生来の旅行好きが頭をもたげたのである。ついでにちよいと温泉巡りでも

と足を延ばし、気づけば草津の旅館に入りびたりで、あつという間に時が過ぎてしまった。

現在のマミゾウの活動の本拠は幻想郷だ。あまり留守にするのも良くはないと分かっているものの、続く長雨について足も鈍り、温泉手形を手にあちらの湯を巡りこちらの湯に浸かりと、気付けばはや一週間。尻尾の縞模様から色が落ち、爪牙もすっかりふやけるまでに温泉を堪能しつつして、流石にまずいと腰を上げることにしたのが今朝の事であつた。

そうして朝から、帰郷のために土産を物色しているのだが——どうにも、いまいちピンとくるものが見当たらない。

「寺の連中はともかく、ぬえの奴は妙に舌も越えておるからのう……」

マミゾウが独力で結界を超えられることを知っているぬえは、化け貉が留守にするたびに外来の土産物をせびつた。以前に持ち帰った東京の銘菓ひよこなどは好評であつたが、ついでに寺の皆にもとお裾分けしたところ、後日、住職が可愛すぎて食べられないと深刻な顔で相談してきたというオチが付いた。

マミゾウは懐の金時計を取り出して一瞥。帰りのバスの時間はまもなくに迫っていた。

「あまり時間もないし、適当に決めておくかの。のう、主人！」

見繕った地酒とつまみを買求め、ニッ岩貉は店を出た。

外は相変わらずの雨。霞む視界と冷たい雫が、旅立ちの足を鈍らせる。辻の向こうに、まだ入っていない飲み屋や蕎麦屋がちらついて、もう一泊どうかねとマミゾウを誘惑した。

脳裏をよぎる誘いについて負けそうになる怠惰な心を、いかんいかんと振り払い。蓮の葉を化術で変化させた傘を掲げた化け貉は、観光客で賑わう通りを足早に抜けていく。

「……む」

ふと、香ばしい匂いが鼻をかすめたのはその時だ。

年季の入った店舗の店頭で、白く吹き上がるせいろの湯気。温泉饅頭の辻売りであつた。豪勢にも試食に振舞われるのは蒸かしたての饅頭である。

「ほほう」

美味そうな匂いにふらふらと引き寄せられ、売り子の差し出すままに受け取ってみれば、中身はクルミの味噌餡である。たちまち一つを頬張って、マミゾウは湯気に曇るレンズを拭きつつ頷いた。

「んむ。はふ。……美味い。これじゃな」

これなら食戒に反することもない。寺の欠食門徒妖怪たちも文句がなかうと、二十個ばかりを注文しかけたマミゾウだったが――探った懐、随分と軽くなった財布に思わず顔をしかめる。改めて覗けば千円札に小銭が少々。いかにも寒々しい残金である。

それもそのはず、オカルトボールの騒動での外界行は完全に成り行きで、外の通貨など準備せずに出てきたのだ。特に外界の支払いに欠かせないカード類は命蓮寺の離れにある私室に置いたままである。

後先考えずに温泉地に滞在を伸ばしたせいで、持ち合わせなどすっかり底をついていた。

「ふむ。金は天下の回りもの。使えばその分減る。成程、道理じやな」

湯気を立ち上らせる湯畑に向け、マミゾウはひとりごちて煙管を吹かした。紫の煙が湯気に混じってふらふらと昇り、小雨のぱらつく曇り空に消えてゆく。

「……どれ、久々にやるかのう」

そうしてマミゾウ、呟くなり浴衣の懷から取り出した楡の葉数枚に、墨でさらさらと書面を書きこむ。

——佐渡のニッ岩貉団三郎、金壺萬円也

文面を見てしばし思案顔の後、マミゾウはひとつ頷いてほうと息を吹きかけた。化力を込めて念じれば、化け貉の手には手が切れんばかりのぴかぴかの一万円札が姿を見せる。

これぞニッ岩貉の貸証文。業界筋では金塊よりも信用のおけるといいう一札である。

今日一番の笑顔と共にその出来栄えを確かめ、マミゾウは改めて店主へと声をかけた。

「もし、そこのお嬢さん。すまんが、これを十個ばかり包んでくれんか」

……かくして、マミゾウはちゃっかりと蒸かしたての味噌胡桃餡饅頭を手に入れた。全国より人々が湯治に集う草津の湯、その喧騒にまぎれて狸の化かしも一興であろう。

四段重ねの饅頭を手に、二ツ岩貉はバスへと急ぐ。その足取りは、心なしか陽気に軽い。「戻ったらすぐにでも、金を送らんといいかなあ」

幻想郷まではそれなりに遠い道のりだ。着くまでに冷めてしまうであろう饅頭はどうしたものだろう。蒸かし直すか、いつそ火を入れて炙ったほうがいいか。

寺の庫裡にフライパンはあったかのように思案しつつ、冷や酒を煽る佐渡の化け貉を乗せたバスは、一路駅へと向かって走り出す。

土産屋の店頭では、毛むくじやらの狸の剥製が、ぴこぴこと元気に手を振って、二ツ岩貉を見送っていた。

【#ニッ岩貉化逆門・北海道編】



佐渡の団三郎貉ことニッ岩マミゾウが、現世におけるその本拠、相川のニッ岩大明神の重ね鳥居より現世に戻ったのは、夏の盛りを過ぎようという八月の末。

両津港のフェリーから新潟発の新幹線に飛び乗って、帝都東京を経由し北へ、北へ。開通間近の北海道新幹線ホームを脇に眺め、青森発の寝台特急はまなすではるばる津軽海峡を越え、北の大地へと脚を下ろしたのは。まだ夜も明けきらぬような早朝のことであつた。

越佐の四十九里の波間を超えて、日本各地へと姿を見せる団三郎貉とて、丸一日近くの電車旅の強行軍はそうそう多く経験したものではない。何かと物入りの中の急遽の旅とあつて豪華寝台を貸し切りという訳にもいかず、車輪の音に揺られ固いベッドに寝転がつての15時間は、化け貉にとつてもいささか辛いものであつた。

「んう……む」

札幌駅は朝の五時。伸ばした背中がばきりばきりと音を立てる。

昨晩は冷房の甘い二段ベッドの上段で、騒がしい家族連れの声を聴きながら、眠れぬ慰みにとつい何本とビールを開け続けた。ようやく寝付けたのは空も白み始める頃で、後から後

から込み上げてくる欠伸を噛み殺し、眼鏡の下を拭う。

「やはり船旅にすべきじゃったかのう……」

急ぐにしても他の選択肢があつたのかもしれないが、今更後悔しても遅い。

空は薄雲に包まれ、夏とあつてもまだ薄暗い。肌寒さにまくった袖を摩りながら、駅からの道をなんども大欠伸をしながらぶらぶらと歩き、マミゾウは街路の看板に見つけたスーパー銭湯へ、これ幸いと飛び込むにした。

「これで少しはゆつくりできるかのう」

支払いを済ませるなり、浴衣に着替え休憩室へと直行。荷物を残らず耳栓に化かし、ぐいと髪の中の耳へ押し込めば、限界だというように佐渡の二ツ岩の顎がかくりと落ちた。たちまちすうすうと深い寝息を立て、マミゾウは深い夢の中へと落ちていった。



こうまでの強行軍でマミゾウが北の大地を訪れたのは訳がある。故あつて、現在マミゾウは幻想郷と現世を行き来し、四国に佐渡、全国各地の狸達の間を忙しく駆け回る日々であるのだが——そんな忙しい日々の中に、伊予松山の八百八狸総帥、隠神刑部狸に、隠し子がいるという話が突如転がり出したのである。

知つての通り、松山は山口靈神に社を構え、四国八百八狸総帥としてその名を馳せた隠神刑部は、20年前の多摩狸騒動以来、狸界の表舞台から姿を消している。彼の威光を伝えるのは連絡役の豆狸のみであり、ゆえに、彼が本当に命を落としたのではないかという噂は、各地の狸達の間で囁かれていた。

松山の化狸達にとつてこの疑念は一笑に付すようなもので、隠神刑部は依然として顕在であるという認識らしいのだが——いずれにせよ、八百八狸の総帥がその後継者も決めぬままに姿を隠しているというのは事実であり、それが四国の狸界に少なからぬ不安を呼んでいるのも確かであった。

そこへ来て、降つて湧いた隠し子騒動である。しかもその所在は狐に猪に熊にと狸の天敵ひしめく蝦夷地であるというのだ。俄かには信じがたい話であつたが、真実であれば捨て置けぬ。いずれにせよ真偽を確かめねばならぬということで名だたる化狸達の意見も一致したが、さて北海道は遠い。まして人ならぬ妖怪の身、土地に括られ伝承に繋がれた古老にとつて容易くその地を離れるという訳にもいかない。

そこでマミゾウにお鉢が回つてきたのである。

伊勢へ七度、熊野に三度などと歌われ、旅好きで知られる佐渡の団三郎。状況を鑑みても絶好の狸選であるのだが、さすがに無理を押しての旅、なかなか疲れが抜けぬ中での夜行の睡眠不足は靦面であつた。かくしてマミゾウはスパー銭湯の休憩室で5時間も熟睡し、係員に睨

まれてそそくさと施設を後にするという有様であつた。

ついでに折角の温泉にも入りそびれ、まったくさんざんである。

「……やつてしもうたなあ。蝦夷地は明治以来……かれこれ百年ちよいぶりじゃから勝手がわからんでいかんぞい」

思い返せば日露戦争の穴埋めだけに、莫大な黄金を探す陸軍第七師団と脱獄囚たちの騒動に巻き込まれて、アイヌ娘の面倒を見たのが懐かしい。単純な北国というだけなら、マミゾウは明治のご一新で遙かオロシヤの大地まで踏んだことがあるのだが。

ぼやきとともにコンビニで買ったスタミナドリンクを呷り、ついでに名物のラーメン横丁豚骨味噌のラーメンを啜る。温まった腹をさすりながら、日の高くなつた市街を歩きつつ、マミゾウが向かうは札幌一の繁華街、^{すすきの}薄野は^{たぬきこうじ}狸小路である。

この狸小路、札幌にとどまらず、日本の各地に狸の巣穴めいた「穴倉」の通りを指して見られる名だが、人間が勝手につけたものも多く、実際に狸が住んでいることは稀である。

ここの一角こそが、件の隠神刑部の隠し子の根城であるというのだが——果たして眉唾ものではないか。つい今さっきまで、マミゾウも半信半……三信七疑程であつた。

「むう。どうやらデマ……という訳ではなさそうじゃの」

近づけば確かに感じる同族の気配。四国や佐渡と同じ島とは言え、鰐や狼の住んでいた広大な北海道には、狸達の割り込む隙間はなかったはずだ。しかし確かに、賑やかな雑踏の中に狸

への信仰と、それに基づく化力が満ちている。

無駄足にならずに済んだかとひとりごち、マミゾウがしばらく歩を進めれば。アーケードに組み込まれたビルの一角に、堂々と狸を祀る社が設けられていた。

——曰く、狸小路・本陣狸大明神社。

社殿の造りはなかなかのもので、規模こそそう大きなものでもないが、繁華街の通りに面して社名を顕す姿にはなかなかの威風も感じられた。社殿前には観光客と思しき人間たちが列をなし、興味深げにフラッシュを焚いて自撮りの最中。

ちようど、ビルは場外馬券場を兼ねており、参拝者が手を合わせる傍らで馬の勝ち負けを競って一喜一憂している者たちがいた。レースの結果に馬券を撒き散らして悔しがるその中の数名に、マミゾウはちよいちよいと声をかける。

「——ふむ、おぬしたちかの、ここの眷属は」

「ど、どちら様でございましょうか」

なかなかうまく化けているが、彼らも立派な狸である。言葉にせずともマミゾウの化力を感じ取ったか、青年たちはとたんに畏まる。

「儂はマミゾウ。佐渡のニッ岩団三郎貉じゃ。ちとものを尋ねるがよいかのう」

マミゾウが自己紹介を済ませ、これこれこうと経緯を掻い摘んで話すと、狸達は一斉に目を丸くした。

「隠し子……ですか？」

「うむ。そういう訳でな。詳しいことがわかるなら教えてくれんかのう。何故このようなところに、刑部狸どののご子息が祀られておる？」

「へ、へえ、そりやあ勿論、ここにいらつしやるのは俺らの大將殿ですが……」

彼らの語ることに、経緯はこうだ。この通りは古くから飲み屋街が軒を連ね、狸小路などと呼ばれて蝦夷の開拓以来、百四十年もの歴史を重ねてきた。札幌に限らずこの地の近代化には、日本各地から入植した人々のたゆまぬ努力が不可欠であったのだが——その中に、人に化けた狸たちも混じっていたのだという。

彼らは戊辰戦争の戦乱で故郷を失った根なし狸で、屯田兵よろしく明治維新と共に新天地を目指したという。彼等は遙か北の大地で狼や熊から身を潜め、人間たちと寸分違わぬ姿になるすべを身につけ、銃を恐れず自らの武器として、尻尾の毛が擦り切れるまで勇敢に戦い、自らの領土を切り拓いたという。

「ふむ？ では、その折に刑部殿のご子息がこちらに來たということかの？」

「いえ、違うんです」

「あん？」

さて、この神社が建てられたのはそうした開拓の時代をはるかに下って、昭和48年のことになる。

小路の設立百周年を記念した第二十回狸祭りが開かれた折、何か記念になるものを建立しようという話がでた。そこで狸小路の名になぞらえて、感謝を込めて有名な化狸を神霊として勧請しようと相成ったのである。

ここに彼らが頼ったのは、四国の名譽狸（注：さまざまな功績で狸以外の種族でありながら、名狸としての地位を贈られた人物）である富田狸通である。本邦きつての狸研究家である彼はたちまちその依頼に答え、伊予松山は山口靈神の隠神刑部と、伊予宮瑠璃姫の間に生まれた子という狸をつくりだし、この地に祀ったのだというのだ。

「——なんと、そんな経緯か」

「……はい」

なんとも奇矯。まるで勝手に商売の看板を真似られるような状況である。目を丸くするマミゾウだが、それだけに留まらない。そのように生まれた本陣狸大明神には上総守證和大明神の娘のかずさ御前なる美狸が嫁ぎ、夫婦仲睦まじく多くの子を成した。

その中でも美しさと器量で知られる鶴の宮藻里豊姫は蝦夷守和登狸大明神の元へと嫁ぎ、また、その妹の真狸は松山へと帰り、金森大明神金平狸と八股お袖の子である狸平のもとに嫁いでいるのだという。

つまりは、『そういうもの』であると決めた狸を祀るために人間たちがそれらの伝承をつくりだし、あれこれと思案を巡らせたのである。

しかもその絵図面を引いたのが、名譽狸たる富田狸通だ。実際に四国や登別へと人が行き来し、これらの婚姻の仲介まで行つたのだという話まで聞いて、マミゾウはあきれるやら驚くやらであつた。

「そこまでするのかのう、人間は」

まさかのまさか、人間に狸が化かされたのだ。それもこうも鮮やかにとあつては、もはや笑うしかない。

感嘆の声とともに煙管を吹かし、マミゾウは通りの端から本陣狸大明神の本尊を見やる。

どこか愛嬌のある素焼きの像には、アーケードを行き交う人々が足を止め、賽銭を投げ参拝し、お御籤を引いては一喜一憂。スマホを取り出して記念写真も取る始末だ。

そこには確かに、この地に根付いた狸への親交の形があつた。

始まりや形はどうあれ、この地に築かれたこの神社は、人間たちが化狸を必要としているから生まれたに他ならない。伝えられた伝承はわずかに四十年、化狸達の寿命に比べればあまりにも短い、でも、信仰とはその長い短い、古い新しいで優劣を競うものだろうか？

マミゾウの思っていたものとは形こそ違えど、ここにいるのは確かに、隠神刑部の子息にして、蝦夷地を治める本陣狸大明神そのものなのである。

「罷に狼に追われ、同族の姿はろくになかったであろうこの地に、こうして狸の伝承が伝わり、いつしかまことの信仰となつて人間が日参しておるわけじや。

……そのこと自体をもつと考えねばならんのかもしれんのう」

感慨深げに頷くマミゾウの前で、神社の像がにこりと笑つたような気がした。

【#二ツ岩貉化逆門・館林編】



上野国、館林は青竜山茂林寺。狸界のみならず、この国に知らぬ者なき名古刹に佐渡の二ツ岩が降り立ったのは、年の瀬も押し迫る師走の二十九日のことであった。

かの地は本邦の狸にとつてまさに聖地とも言うべき場所であり、それは佐渡貉総大将であるマミゾウとて例外ではない。四国の古老たちが治める領土も名高き狸の都であるが、やはりその格は一步も二歩も及ばない。

なにしろ、時の帝すら参拝に訪れ、近辺を走る東武伊勢崎線の最寄り駅すらもこの寺への参拝客を運ぶために設けられたというから、その威光は計り知れない。新年まであと数日という冬の日差しの中、茂林寺駅のホームから降り、マフラーを寄せて歩くこと5分と少し。緩やかに曲がる道路の向こうに賑やかに開かれた参道が姿を見せた。

「おお……」

参道の左右に並ぶ土産物屋を埋め尽くすのは、狸、狸、狸。数え切れぬほどの狸の信楽焼である。ほかに食堂、団子屋、休憩所と、参道の賑わいは通りの端まで及んでいる。

四国名狸の膝元にあつて、盆暮れ正月例祭の日にはこのような出店が並ぶ光景はマミゾウも

見知ったものであるが、年季の入った土産物屋街の様子を見るに、まさか年が明ければこの商店が皆店をたたんで引越すわけもないだろう。

つまるところ、これらの店は全て、茂林寺への信仰によって支えられる門前町なのである。

「お噂は聞いておったが、これはまた、なんとも……」

佐渡のニッ岩をして信じられぬと唸らせるほどの繁栄ぶりに、マミゾウは知らず眼鏡を外してそのレンズを拭く。まさか佐渡の貉総大将ともあろうものが化かされたというわけでもなからうが、それでもなお信じ難き光景である。

店先の可愛らしい信楽焼の額をそつと撫でてやり、ゆるゆると参道を進んでゆけば、ほどなく大きな門が見えてくる。わずかな緊張と共にそこをくぐるやいなや、本堂に向けての左右にずらり、四、五十ばかりの大化狸が並んでマミゾウを出迎えていた。

「二ようこそお越しくださいました、ニッ岩団三郎様！二」

一斉に歓迎の声。目を白黒させるマミゾウに、頭を下げる狸たち。その誰もが立派な尻尾とふかふかの毛皮を備えた、いずれ名だたる化狸であることが一目で知れた。

「驚かせてしまい、申し訳ありませんね」

そうして、その参道の奥から従者の豆狸を連れて現れるのは、その双眸を閉じ、柔和な笑顔を浮かべた女性である。乱れひとつない白髪は足元近くまで長く、袈裟と僧衣もこれまた雪のように白。マミゾウは慌てて尻尾を背に寄せて立て、彼女の前に膝をついた。

「守鶴様。ご無沙汰いたしました」

「マミゾウも変わりないですね。なによりです」

たおやかに微笑む彼女はそれだけで、まるで白百合が咲いたかのように美しい。

狸界における至宝・汲めども尽きぬ分福茶釜ぶんふくちやがま。その名と共に知られる本邦一の名狸。それが彼女、茂林寺の守鶴しゅかくであった。

その生まれは今を遡ること二千と五百年。はるか天竺で釈迦の説法を受けたことでも知られる、古妖中の古妖にして、この国でもっとも大きな信仰を持つ化狸だ。その翼二十丈の鶴に変わって、大陸と本邦とを風のごとく行き来したなどという規格外の逸話を持ち、守鶴の名はそこに由来した。

茂林寺はまさに彼女を祀る寺といっても過言ではない。境内には狸を祀る三つの堂と祠、寺務所には分福茶釜伝承を伝える冊子に小説、漫画までもが頒布され、狸伝承にまつわる記録の展示館までが常設されている。

さらには寺領の隣接する五千二百平米あまりの沼地、湿原は県の天然記念物に指定された守鶴の直轄領であり、ここに生え繁る草木、棲む魚、水鳥は茂林寺に住まう五千とも一万とも言われる狸たちを養う糧となっていた。

本邦において、狸が所領を持ち繁栄を築いているのは天敵である鼯などの大型肉食獣の生息しない島嶼域に限られている。四国や佐渡はその典型と言え、マミゾウをはじめ、屋島の太三

郎や徳島の金長などの名狸もその例外ではない。しかし守鶴が治めるのは関東平野のど真ん中であり、それだけでも彼女の力が尋常ならざるものであることは容易に知ることができる。

「迷惑をかけますね。あまり、ここを離れることができないのです」

「いや、急にお邪魔したのはこちらですじや。お氣遣いなく」

分福茶釜を求め引きも切らぬ参拝客の雑踏の中、あまり騒ぎになるのは良くないという守鶴の提案で、二人は寺前の釜飯屋へと場所を移した。

茸出汁仕立ての釜飯もさることながら、玉繭を練り込んだ千丈うどんが有名な店である。相当の繭好きと思われる主人の講釈をひとくさり聞き、二人は運ばれてきた温かいうどんと釜飯に舌鼓を打った。

昼時を過ぎているとあつて店内は人も疎らだが、使い込まれたテーブルや椅子は、さぞ人気があるだろうことを思わせる。

「明日の晩にでもなれば、賑やかなところをお見せすることもできましたが」

年末年始は参道に無数の蠟燭が灯され、年始参りに訪れる参拝者が詰めかけるのだという。その混雑といったら凄まじいもので、夜を徹して臨時列車が走るほど。店の奥で年越しの打ち合わせをする青年団を見、守鶴は穏やかに微笑んだ。白絹のごとき髪がさらりと揺れる。

「いやいや。繁忙の最中にお邪魔してしまつてはそれこそ本末転倒というもの。此度は儂の我儘を容れていただいただけで感謝の限りですわい」

「また、長旅をしてきたのでしょうか？ 皆もマミゾウの話を知ったがっていました」

「参りますのう。いい歳をして落ち着きがないと、太三郎殿にも叱られましてなあ」

「ふふ。四国の皆も元気にしているのですね」

そうして食事が一段落したところを見計らい、マミゾウは懷から一枚の手形を出した。折りたたまれ、年季の入ったそれをゆつくりと広げてゆく。

「さて。すっかり御馳走になってしまいましたわい。このたびこちらを訪れた用件がまだでしたのう。守鶴様にこちらをお返しせねばと思い、この二ツ岩、佐渡よりはるばる参上した次第です」

「……ああ」

守鶴は懷かしそうに目を細め、古びた書面を手を取った。

楡の葉で漉いた和紙に妖怪墨で記した文面。これは今を遡ること百と20年前に、マミゾウが守鶴と交わした借用証である。これをもってマミゾウは、守鶴が所有する狸の宝具、汲めども尽きぬ無限の湯、分福茶釜を限定的に借り受けることができた。

「先日、佐渡への里帰りの折にこちらを使つてひと暴れしましたのう。三回のお約束の最後の一回を使い果たしたことになります。長らくのご厚意で借り続けた茂林寺の宝具分福茶釜、約束通りお返し致します」

マミゾウこと団三郎は、佐渡にて金貸しを営んだ逸話で知られる。人妖分け隔てなく金を

貸し、利子も取らなかったという彼女が貸すものは、決して金銭のみではなかった。食器や家具、人足、化術、果ては妖怪の能力までも取り扱っていたのである。

そして、それらのやり取りは決して違えぬニッ岩貉の貸証文によって担保されていた。

「はい。……確かに」

しかと頷き、守鶴が証文を受け取ろうと手を伸ばしかけたその時。マミゾウは静かにそれを持ち上げた。

「……マミゾウ？」

化け貉の思わぬ反応に、守鶴が不思議そうに首を傾げる。

「そして。本日ここを訪ねたのにはもうひとつ、理由があります。この場にあつて、守鶴様にお願いを致したい。……単刀直入に申し上げましょう。儂の次の商売に投資をしていただけませんか」

「御願ひ……？ それは、どのような意図でしょうか」

静かに尋ね返す茂林寺の大化狸。一見口調は穏やかだが、守鶴の言葉には有無を言わせぬ力が練り込まれていた。真意を尋ねるその言葉は、たちまち虚言を吹き飛ばす。これぞ二千年の時を生きる太古の化狸の貫目たる言霊である。さしものマミゾウも気圧され、一瞬言葉に詰まりかける。

が——それを押し殺し。マミゾウはふてぶてしく笑って見せた。

ここで気圧されるなど、佐渡の団三郎貉の名折れである。

「なあに、簡単なことです。儂の企む計画に、守鶴様も一枚噛んでいただきたい」

「計画……ですか？」

「ええ」

マミゾウは肚に力を入れ、尻尾を大きく立てて守鶴に真つ向向かい合う。

広げた貸し証文をぱたと閉じ、折りたたんで広げ直せば。そこにあるのは別のもう一枚。

マミゾウが示したのは、墨もまだ乾かぬ新たな契約の証文であった。その文面をゆるりと示し、化け貉は不敵に笑う。

「今回は、ご厚意にて預かるなどとつまらぬことは申しませんぞ。この二ツ岩の全身全霊をもつて、守鶴様にも必ずや良い商売とさせていただきますよう」

「——これは」

差し出された証文を受け取り、その文面に驚く守鶴。

分福茶釜の無期限貸与。その賃料は、佐渡の化け貉が堂々示す出世払い。

あまりの無茶な条件に、守鶴はしばし、咄然として証文を見つめていた。——やがて、茂林寺の化狸は白い睫毛を瞬かせ、真剣な表情でマミゾウを見やる。

「では、マミゾウ。あなたはこの取引で、私に何をもたらしてくれるのです？」

「守鶴様だけにではありませんのう。四国、佐渡、この国に住むすべての狸たちに、妖怪たち

に。ですな。新たな人間との付き合い方を、示したいと思います」

あまりにも、荒唐無稽な大言壮語であつた。たとえこの、僅有絶無の外來妖怪、ニッ岩マミゾウ以外の狸の口から出るのであつたとしても。

だが。戦乱の佐渡を戦い抜き、海千山千の化け貉を四天王と従えた団三郎貉は、命と矜持を賭してでも、日本中からありとあらゆる力を借り集め、この計画に注ぐことを決意していた。

「どうぞ、守鶴様のお力をお貸しいただきたい。

——かつての多摩騒動において、力及ばずに完遂叶わなかつた、あの『妖怪大作戦』。その再度の決行のために！」

この国最高の化狸を前にしつかと見据え、マミゾウは誠心誠意を込めてそう口にした。

ニッ岩貉化逆門 結

【つづき】

佐渡で起きた、相川二ツ岩大明神の火事騒ぎ。ぬえと共に佐渡に戻ったマミソウは、己が佐渡を留守にしていたことがこの騒動の原因であったことを目の当たりにし、ひどく頭を悩ませることとなりました。

佐渡貉四天王の懐かしい面々と再会を果たし、古参妖怪の不在に伴う求心力低下を知ったマミソウ。思案の末に全国各地の狸のもとを巡り始めたのであります。

化け貉の胸にあるのは、平成の多摩狸騒動にて決行されながらも、力及ばずに中断したままの大化術「妖怪大作戦」。

狸の総力を結集して再度行われるその大作戦こそが、今の狸の世をすくう手立てとなると語るマミソウであります。果たしてその真意はいかに？

▼1

庇を叩揺らす風音が、ホールに薄いノイズのように広がっている。

京都は出町柳のほど近く。賀茂大橋、西詰にあるカフェの2階。換気のパンがゆつくりと湿った空気をかきまぜる。煙草と酒精が染みつき磨き込まれた内装煉瓦の下、橙色の電灯に照らされたビリヤード台を、白い手球がぱちんと跳ねる。

普段ならば授業をさぼった有閑学生が詰めかけて、実に賑やかな場所なのだが、今日の天気は生憎の曇天。客足も鈍く、ホールの中には数えるほどしか人影も無い。いまにも雨の迫ってきそうな灰色の下には湿気が籠り、フル稼働の空調をもってもなお汗が滲む。

ぱちん。がん。がこん。

緑のラシャを張られた台の上を、セルロイドの手球が縦横無尽に滑り、カラフルな球を一つまた一つとポケットに打ち落としていく。鮮やかなキュー捌きで台上に身を乗り出すのは、すらりとした長軀を赤のネクタイと黒のスーツに包む男装の麗人である。黒髪をぴっちり後ろに撫でつけ、白い肌につるりとしたおでこ、豊かな眉、そして口元の鮮やかな紅は、宝塚のスタアもかくやの黒き王子そのものだ。

「これで、おしまい」

くすりと口元を緩め、宝塚女はぱちんと手球を撃ち抜く。狙い違わず9番が角のポケットに落ちるのを見届けて、佐渡の貉総大将、二ツ岩マミゾウは眉をしかめ、煙の出ない煙管を噛み締めた。

「……むう」

唸り声と共に髪をかき上げ、不満げに台を見下ろす。

伝統的な化け勝負になぞらえて十番勝負となったこの玉突き、マミゾウの戦績は3勝7敗。それも明らかに、相手に手筋を誘われて、辛うじて勝利を拾った格好である。完勝であることを示しつつ、佐渡の団三郎貉の面目を潰すまいという意図であろうか。

「……参ったのう。完敗じゃな」

玉突きは、大正の頃通い詰めたミルクホールでそれなりに遊んだものだが、マミゾウはこの麗人に全く手も足も出なかった。しかも面でキューを傍らの店員に預け、化け貉は大きく足を開いて引き寄せた椅子に腰を下ろす。

「団三郎様。あなたの仰ることはわかりました。佐渡を荒らされた腹いせにそんな大騒ぎを起こすおつもりなのですね」

マミゾウの向かいで、女は優雅な仕草で葉巻を切って一口。燐寸の明かりが照らす艶やかな男装も相まって、思わず目を奪われんばかりの美貌であった。事実、ホールの片隅に陣取った学生どもは、男女問わず彼女へと視線を送っている。

この場において、まったくマミゾウは余所者である。居心地の悪さに、ズボンの奥に仕舞い込んだ尻尾の先がむずむずするのを堪えて、吐息した。

「……ご協力は頂けませんかのう」

「それを決めるのは私ではありません」

やんわりとした語調の、しかし明瞭な拒絶。ほうと吐き出した煙が、ホールの中へと薄く広がってゆく。洋物葉巻の甘い匂いに、マミゾウはくらくらとする頭を押さえ、苦笑と共に髪の中から榆の葉を持ち上げた。

キューを磨き微笑むは、糺ノ森の下鴨桃仙しもがもとうせん——若き頃の通り名を、階段渡りの桃仙。京都における狸の名門、狸谷不動きつての蓮っ葉で名を知られた女傑である。いまは糺ノ森下鴨家へと嫁いで四児の母となり、表立った活動から身を引いているが、その名は京都狸界において一目を置かれるに相応しい。

そう。彼女こそ京都狸界にその名を知られた偽右衛門狸にせえもん、故・下鴨総一郎しもがもそういちろうの妻なのである。糺ノ森の下鴨総一郎と言えば、その狸柄、春風駘蕩にして無欲恬淡。慈悲心に富み、無類の酒好き将棋好きでその名を天下に知らしめた、当代きつての名狸である。一癖も二癖もある洛内の狸を残らず束ね、その威光と化術には鞍馬の天狗も伏見の稲荷狐も一目置いたというその総一郎が、生涯愛した雌狸。それが桃仙であった。

单身時代から、狸谷不動の二百五十段の階段を登り詰めて訪れる求婚相手が引きも切らなか

つたという美人狸の彼女。いまもその美貌はまったく衰えていないが、今はこの黒き王子の男装で日々を通しているという。

先頃、宝塚演劇に大ハマリして以来と本人は語るが、さても、亡き夫に対し操を守る妻の鑑ではなからうか。

「……いずれにしても、勝負は勝負。守っていただきますよ」

「無論、約束は違えぬよ」

現在、マミゾウが日本中の狸を集め企む計画——『妖怪大作戦』の再起にあつて、日本の中核、京都化狸の協力が得られるとあれば、これほど心強いことはない。洛内に絶大な権勢を誇る伏見稻荷一門の化狐、また叡山鞍馬の天狗が幅を利かせる中で、狸達の肩身は決して広いものではないが、狸谷の古老や下鴨、南禅寺、夷川らといった天平以来の一族はいまだ確かな勢力を保っていた。

間近に迫った計画実行の日を前に、マミゾウはこうして外界を訪れ、彼女の協力を仰がんと賀茂川へ日参して彼女の説得を続けていたのであるが、当の桃仙はのらりくらりと話をはぐらかして返事を先延ばしにしていた。

一日、また一日と時が過ぎ、いよいよ猶予が無くなったマミゾウに対し、桃仙がようやく持ちだしたのが、この十番勝負であった。

『……その計画にあの子たちを？』

じゃあ団三郎様、私とひと勝負いたしましょう。貴方が勝てばあの子たちにも言うことを聞かせますし、狸谷不動のおじいさま達にもご紹介いたします』

まさに渡りに船、絶好の機会の勝負であつたはずだが——どうもこの勝敗、初めから織り込み済みであつたらしい。

葉巻を消した桃仙は、カウンターの上から真新しい瓶とグラスを手にして封を切つた。ポトワインの甘つたるい匂いがあたりに広がる。

「団三郎様も一杯いかがです？」

「いや、儂は」

決まり悪げに辞退せんとするマミゾウに、桃仙は微笑みと共にキューをくると回し、その尻でとんとビリヤード台を叩いた。途端、台のポケットに収まっていたセルロイドの玉がもぞもぞと動き始め、まるまると太つた白いネズミへと変化した。

マミゾウが驚きに目を見開く中、的球、手球、合わせて十四。ビリヤード台に整列するネズミたちに、桃仙は皿の上からチーズの欠片をつまんで一つずつ与えていく。化け貉は思わず眼鏡のレンズを拭つた。

手球も的球も、先程改めたときは間違ひなくセルロイドの玉であつたはずだ。

「さあ、団三郎様」

すい。いつの間にか、マミゾウの鼻先には赤い液体をなみなみと注がれたグラスがあった。桃仙にされるがまま、化け貉はそれを受け取ってしまう。

「……敵いませんなあ」

勝ち目がない。マミゾウは吐息とともに思い切りグラスを呷った。苦い敗北とは正反対の、甘ったるいポートワインが、かあつと喉を滑り落ちてゆく。

その向かい、桃仙も自分のグラスを口へと運び、

「私はただの母です。あの子たちの成長を見守り、総さんの残した糺ノ森の家を守るだけ。南禅寺の皆さんにも、夷川のお家にも、いう事を聞かせる力などありません。そんなに皆さんの協力が欲しいのならば、団三郎様が直接向かえば宜しいのではないかしら」

「むぐ……」

痛いところを突かれてマミゾウは黙り込む。かつて四国狸の名代として京都に乗り込んでいた経緯もあって、佐渡の団三郎貉と京都の狸の関係はあまり良好とは言えない。直接の面識があるのは桃仙と総一郎くらいのもので、夷川などは近づいただけで追い払われかねないだろう。「それに、あの子たちはもう立派な一人前だわ。面白いことであれば、勝手にあの子たちが上手くやります」

「ふむ？」

首を傾げるマミゾウに、桃仙はくすりと微笑み、グラスを置いた指先を唇の前に立てた。

「それがあの子たちに流れる、阿呆の血ですから」

「……阿呆の血、のう」

「ええ」

阿呆の血のしからしむるところ。それが総一郎の口癖であったという。もう一度微笑む桃仙に、マミゾウはゆるゆると首を振って天を仰いだ。窓の外、広がる曇天は分厚く空を覆い、風がかたかたと窓を揺らしている。

どうやら、ここいらが潮時のようだ。

「……雨が近そうじゃ。そろそろ、お暇するといたしますかのう。長々とご迷惑をおかけしましたな、桃仙殿」

腰を上げ、ぴよんと宙返りして煙をどろん。装いを旅姿に戻して踵を返そうとするマミゾウの背中に、桃仙が声をかける。

「団三郎様、四国に行かれるのでしょうか」

「ああ、そのつもりじゃ」

「金長一門をお訪ねするのであれば、よろしくとお伝えくださいな」

下鴨家は四国きつての名門、金長一門と親交深い。先々代の頃は海を越えての婚姻もあったという。桃仙に笑って頷き、マミゾウはカフエを後にした。



かん、かん、かん。鉄骨と煉瓦の階段を下り、曇天を見上げて通りに出たところで、マミゾウは空を仰いで独白する。高野川と鴨川の合流する砂州を臨み、人車の行き来する今出川通りの大橋のたもと、がりがりと髪をかきむしる。

「いやはや、参った」

計画の成否を左右する行脚だが、そのふりだしから大きく躓いた形だ。己の立場を少々、過信していたことは否めない。

「少々、アテが外れたのう」

「勝手に押しかけて来たくせに、厚かましいお願いね。図々しい」
ばやきめいた独り言に、いきなり返事が返ってきた。マミゾウは首を傾げ、ぐるりと当たりを見回した。曇天の空の下、鴨川の流れと雑踏の中に、声の主の姿は見えない。

が、気配は確かにある。

がさり。マミゾウが帽子の下で耳を持ちあげてみれば、茂みを揺らす微かな物音。通りの脇の植え込みに毛深い気配が潜んでいる。だが上手く隠れたもので、ほんの小さな物陰だというのに、見た目だけでは何かが隠れているようにはまったく見えない。

茂みの前にしゃがみ込み、マミゾウはその奥へと語りかけた。

「そう言うおぬしも狸かね？」

「知らない。狸なんてみんな一緒。馬鹿な事ばかり考える。面倒くさいだけよ。下鴨のお母さんもお母さんだわ。こんな怪しいやつ、とっとと追い払えばいいのに」

「ふむ」

聞こえてくる声はまだ若い少女のものだ。警戒も露わに——というよりは、明らかに敵意の交じった棘のある口調である。

「ねえ。貴方が佐渡の狸総大将ってやつで良いのよね」

「いかにも。二ツ岩マミゾウじゃ。皆もそう呼ぶよ。……して、そう訊ねるお嬢さんはどのどちらさんかのう」

「誰だっていいじゃない」

なんとマミゾウの正体を知った上での毒舌であった。威勢が良くて結構と、化け貉は内心で感心する。この娘、なかなかどうして良く化かしたもので、茂みの中に隠れ潜んで居るはずなのに、その声の出所はいまいち判然としない。

目の前の気配とて本当に実体なのか、マミゾウにも確信は持てなかった。大した隠行の術だと思えば、佐渡の化け貉は懷から取り出した煙管に火を付ける。

「やりたいなら自分たちだけでやればいい。誘われても迷惑。巻き込まないで」

「ふーむ。……迷惑か。祭りは、大勢の方が楽しいじやろう。儂はのう、皆で一緒に騒ぎたいだけじやよ。ちと大目に羽目を外してな」

願ひ虚しく返された拒絶。ほうと吐いた煙が、曇天の下に消えてゆく。

同時、くしゅんと少し離れた階段の陰で小さくくしやみが聞こえた。煙草は化けの皮を剥がとして狸が苦手とするものの一つだ。慌ててそれを繕うように、茂みの中から声。

「あんた、何を企んでるの」

問われ、マミゾウは一息。紫煙立ち上る煙管をくるくると回し、顎をさすってしばしの思案。

「悪いこと、かのう」

「なにそれ」

たつぷり間を置いての答えに、呆れたように茂みが揺れた。マミゾウはかかか、と笑った後、ゆつくりとその場に腰を上げる。

「どうやら、要らぬ心配をかけてしまったようじやな。安心せい、桃仙どのにはきっぱり断られておるよ。無理強いして京都の狸衆を連れていこうなんぞ、微塵も考えてはおらぬ」

「……………」

「まあ、もし気が向いたら、見物にでも来てくれれば嬉しいがのう」

「そういう言い方は狡い。あいつが気に入るようなことばかり言う」

がさり。階段の向こうで気配が強まる。精一杯、動揺を押し隠すように。

「だから貴方のような狸は嫌い。危ないことが分かつてるのに、それがまるで面白いことのように言うんだから」

「お主は、そうは思わんか」

「当り前じゃない。死んじやったらなにもかもおしまいよ」

下鴨総一郎が命を落としたのは、いまから七年ほど前のことだ。金曜倶楽部なる人間達の秘密結社の卑劣な罠にかかって囚われ、哀れ狸鍋となつて食われるという、あまりにも惨い最期であつた。

けれど、総一郎は何ら恥じることなく、その最期を受け入れたと伝え聞く。どうせ鍋にされて食われるならば、存分に美味い狸鍋となつて人間どもを驚かしてやると、最後の時まで阿呆の血を貫いた。実に、彼らしいとマミゾウは思う。

「分かつておるのじゃないかね。そうして止めに來たということは、お主とて薄々は」

「……やつぱりあんたは迷惑よ。そういう言い方をするから嫌い。何もかもわかつたみたいなのとばかり言う」

「かかか。なあに、儂も阿呆の血とやらを見習つてみることにしたんじやよ」

齒を覗かせて笑い、マミゾウは煙管をとんと叩いて灰を落とした。

「……総一郎どのの御子息は、良き伴侶に恵まれておるのう」

「うるさい、そんなんじゃない」

むくれたように声が跳ねた。とうとう辛抱しきれなくなつたか、階段の向こうから小石が飛んでくる。危ないとそれを避け、マミゾウはぴよんと距離を取った。

「おぬしも、気になつたら見ておくれ。次の満月の夜じや」

そう言い残し、紫煙の匂いを後に、マミゾウはくると彼女に背を向け歩き始める。その頃にはもう、声の気配はどこかへといなくなつていた。

▼2

「——うーむう……」

などと、格好付けて京都を発ったマミゾウだが、その旅路にはいきなりケチがついた。賀茂川にいたところから怪しかった空模様であったが、京都駅に着いた時にはすでに分厚い雲は崩れてざあざあと雨が降り始め、特急で大阪に出たあたりで天気は大荒れとなっていた。

これはかねてから近づいていた台風の影響であるという。夜半にかけて空模様は下り坂というニュースは流れていたのであるが、思わぬ駆け足でやって来た大嵐に、マミゾウの旅路はもうに行く手を塞がれる格好となった。

案の定、どこの路線も高速バスは全て運休。行く当てもないまま乗車場にひしめく人混みを押しわけ、手近な喫茶店に引き籠ってかれこれ2時間。マミゾウは手持ち無沙汰に煙管の灰をちゃんと灰皿に叩き落とした。

「こりゃあ、今日はどこかに宿を用意せんとどうしようもないのう」

携帯の画面を流れる交通情報には、運休と遅延の赤字ばかりが並ぶ。単純な交通機関の運休ではなく、肝心かなめの島と本州を繋ぐ橋自体が通行止めになっているらしい。無論、運航している海路なども見当たらず、もはや台風が通り過ぎるまではどうにもならないというのが実

情であるらしかった。

大規模な交通機関のマヒに伴い、大阪のホテルはどこも満員となっていた。値段や環境に目をつぶればドヤ街の格安宿もないわけではないが、仮にも佐渡の総大将二ツ岩団三郎貉、野良妖怪に非ずである。虫の付いた一畳寢床にぎゅうぎゅうと押し込まれるのは御免こうむりたいというのが正直なところ。

結局、少し足を延ばして神戸に今夜の宿をとる。安全運転の鈍行鉄道でたつぷりと時間をかけ、なお激しくなる風雨の中をかいぐぐってマミゾウはどうにか宿にまで辿りついた。

素泊まりのビジネスホテルは、妖怪の身にあつても利用に不自由がない。

「警沢を言えばもう少し広い部屋が好みじゃがなあ……まったく、外の世界は何をするにも金がかかつて参るわい」

それでも、隠しておいた尻尾と耳を広げるには十分だ。

水浸しとなった一張羅を脱ぎ捨ててクリーニングに出し、シャワーを浴びて汗を流す。呼び出した化け式にドライヤーをフル稼働させ、耳と尻尾を乾かしながら窓の外を覗けば、風雨はなお激しさを増していた。

テレビの天気予報を見たところ、天候が回復するのは早くても明日の昼前という。頼杖をついてチャンネルを回したのち、夕飯は宅配のピザとビールで済ますことにして、マミゾウはごろんとベッドに横になった。

冷めかけたチーズと生地をもぐもぐと咀嚼し、缶を傾けて金麦芽の炭酸に喉を潤す。
そうしてふと見れば、携帯がメールの着信を知らせていた。差出人を見、マミゾウは片眉を
跳ね上げる。

「おう、……これは、なんと」

From: Shibaemon

Mail: shibaemon_awa@sumoto@ponpoko.bakebake.com

Subject: ㄥㄥㄥ

記されたアドレスは、これからマミゾウが訪ねる相手を示していたのである。

さても妖怪というのは近代文明には疎いものだ。マミゾウは外来暮らしが長く、人間社会に
交じっていた経験も豊富なためインターネットや電子機器の扱いにも通じているが、同じよう
にメールを送ってくる狸というのは中々見かけない。

几帳面さを伝える流暢な時節の挨拶の下、添付ファイルが一枚だけ。何かと思つて開いた
直後、スマホの画面がぱあつと光を放った。

折り畳まれていた圧縮がほどこ、画面の上に化け式が展開してゆく。電子信号が宙に浮かび
上がらせるは、ダンディな装いをした白髪交じりの化狸の姿。

淡路・洲本本陣・柴右衛門大明神——日本三名狸・芝右衛門^{しばえもん}。

『団三郎くん、元気にしているかい。以前に聞いていた連絡先があつたので、こちらに送らせて貰うとするよ。折角の来訪だというのに、生憎の天気で残念なことだ。』

台風となれば、京都からの道中はいろいろと難儀するだろう。待たせるなどと考えずに、ゆつくりと訊ねてきてくれ給え』

まさかの映像・音声付メッセージ。電子メールに化術を織り込んで添付したのだ。写真一枚にも満たない数百キロバイトにこれだけの映像を仕込むとは、流石は日本三名狸の名に恥じぬ業前というべきか。

「ああ、いや。芝右衛門殿であればこれくらいはなさるかろう」

狸狐界において、己が身を雷鳴や煙、火の玉へと変化は定番の一つと言っている。芝右衛門程の化狸となれば、0と1の電気信号に化けることなど造作もないのだろう。

そも、一千年の昔、弘法大師の威光によつて四国より追ひ払われた狐たちが、文明開化と共に本州と四国の間に引かれた電信の海底ケーブルを伝つて逆襲を狙つた話は、今も狸界における語り草であつた。

とは言え、化狸一匹を変換すると電気信号は途方もない量になり、仮にパケット利用無制限であっても通信には十数時間を要する。いまだ化狸通信は実用化の目途が立たないなか、伝言役にメールを使うというのはいかにも彼らしい。

「その内、使いの豆狸もりすとらされてしまうのかもしれないあ」

しかしここで感服だけに終わってしまえば、同じ三名狸の名折れ。お返しにとマミゾウも気合を込めて返信の文面を作る。数度のやりとりの後、ほどなく芝右衛門もLINEを嗜むということが分かり、すっかり夜が更けるまで化術を駆使したお喋りは続いたのであった。



日付をまたぐ夜更かしもあって、マミゾウが目覚めたのはチェックアウトぎりぎりの10時過ぎであった。慌てて荷物をまとめてフロントへ降りるが、案の定雨足はまだ衰えぬままだ。

台風の本体は徐々に神戸を通過しつつあるようだが、出発は午後が確実となるだろうことを確信し、マミゾウは肚を決め腰を据えて時間を潰すことにした。

雨足が途切れ、雲の隙間から陽が差し始めたのは午後も三時を回ったところ。昼から神戸市街を気ままにぶらつき、休日営業のパブを数件はしごしてたらふく酒を呑んでいたマミゾウは、ようやく都市機能を取り戻し始めた神戸の街並みを抜け、高速バス乗り場へと向かう。

やはり人で混雑する受付で尋ねたところ、まだダイヤは激しく乱れているが、どうやら今日中には出発は叶うらしい。一番早い切符を確保し、酔い覚ましに缶珈琲などを啜ってベンチで手に待つことしばし。白い車体の高速バスが乗降場にやってくる。

旅行の大荷物を引きずりながら、ああでもないこうでもないと言ひ合う二人連れの女学生を尻目に、いそいそと乗り込んで席に陣取り、一息。

なお、マミゾウの荷物は一通り米粒に化かしてポケットの中だ。

「さて、あとはこのまま揺られておれば良いだけじゃな」

まだほんのりと残る酔いの中、こくりこくりと舟を漕いでいれば、いつの間にかバスは出発していた。乗降案内のアナウンスにふわあと大欠伸をしつつ、明石海峡大橋の上から鮮やかな夕焼けを臨む。

瀬戸の海は島の向こうに島を重ねる、広い湖にも似た不思議な立地である。嵐が過ぎ、平静を取り戻した海には、いくつもの島影が伸び、複雑な色合いのシルエットを生んでいた。

かつては海賊・水軍の要所として戦が絶えず、幾度も歴史の転換点となり続けた海を見下ろし、佐渡の化け貉を乗せたバスは一路、淡路へと走る。

すっかり日が暮れる頃に、バスは台風一過の洲本へと到着した。

路肩の街路樹、深い地面の水たまり、あちこちに嵐が爪痕を残す中、降車場に下りたマミゾウを出迎えたのは、港に面した潮の香りに佇む煉瓦造りの建物であった。かつては紡績工場であり、今は市の観光施設となつて、無数のご当地名産の幟に飾られた建物の前に、嫌味なほどスーツ姿の似合う紳士が一人。

「お待ちせして申し訳ない、芝右衛門殿」

「いやいや。遙々、淡路にようこそ。団三郎くん」

ロマンスグレーの髪を丁寧に撫でつけ、銀縁の眼鏡を誂えた品の良い紳士——彼こそが佐渡のニッ岩団三郎、屋島の禿太三郎と共に三名狸として日本にその名を轟かせる淡路の芝右衛門狸である。

洲本城下には柴右衛門大明神の社が聳え、城の天守にも彼の祠は並ぶ。武左衛門、榊左衛門、川太郎かわたろう淡路七狸と共に広く知られ、多くの信仰を集めていた。

面子だみかじめだ出入りだと、血腥さの抜けない徳島の狸に対し、淡路の狸達は芝居に歌に遊戯に踊りにと、芸事や花柳を良く好んだ。それらは、泰平の江戸の世に大阪の芝居小屋へと通いつめた芝右衛門の影響が少なくない。

「さて、団三郎くんも長旅で疲れていらつしやるだろう。僭越ながら一席設けさせていただいたよ。行くとしよう」

見ればすでに高級そうなハイヤーが待たされている。マミゾウは気ままな旅姿の己に多少気後れしつつも後に続いた。一応、外見だけでも整えるべきかと内心で思案する。

「これは……お氣を使わせてしまいましたかのう」

「いやいや。落ち着いて話せる場所が良いと思ったまでだよ」

二人を乗せたハイヤーは夜の明かりが灯る市街を軽やかに走り抜け、しばし。ほどなく辿り着いたのは洲本繁華街のイタリアンレストランだった。

大きな店構えではないが、落ち着いた内装には、隅々まで手を抜かぬこだわりの感じさせる。ドアベルを鳴らした芝右衛門の顔を見ると、店員は何を言うでもなく二人を奥の予約席へと案内した。なるほど、流石は淡路の大狸とマミゾウは感心しきりである。

「ここは私のお気に入りですね。お口に合うと良いのだが」

「存分に御馳走になるとします」

「ああ、馴染みの店だから遠慮はいらない。耳も尻尾も楽しんでくれ給え」

ならばとお互い、本身を露わにし、すぐに運ばれてきたワインのグラスを合わせて乾杯。

芝右衛門は前菜のレバーパテを上品に運んでゆく。マミゾウもそれに倣い、次々と運ばれてくる前菜に舌鼓を打った。

テーブルに並ぶ葉島野菜のサラダ、淡路牛・地鶏・猪豚のミックスグリル。地魚を生かした魚介のパスタ。どれも淡路の特産である。成程、同じ島と言っても日本海と瀬戸内海ではこうも食べ物も違うものか。四国、神戸、大阪、和歌山と各地の陸に挟まれた淡路は、それらの中継点として文化の交差点となっている。

「ふう……食った食った。もう何も入らんぞい」

「満足いただければ何よりだ。久しいねえ。はるばる私を訪ねてきてくれたことを嬉しく思うよ、団三郎くん」

「いやはや。無沙汰が続いて申し訳ない限りじゃ。何分、佐渡も色々とあつてのう」

「聞いているよ。社が火事と聞いた時は本当に驚いた」

「お恥ずかしい限り。これも儂の不徳の致すところ。昨今の人間社会の隆盛と妖怪の弱体化は、どこにあつても頭の痛い話じゃて。……そこに行くと、淡路はさすがの栄えようじゃ」

洲本の繁華街のそこここには、芝右衛門とその配下の狸を祀る社や石像などが設けられ、彼らをモデルにしたマスコットやお菓子までが売られている。

これは単に芝右衛門の人氣によるだけの事ではない。淡路の狸はただ化かすだけではなく、人間たちの暮らしに寄り添って生きることを旨としていた。戸締りを忘れた不用心な家を見回り、進んで川や土手の清掃に努め、悪い酒に暴れるものを懲らしめる。淡路における狸の繁栄は、それらの地道な活動が実を結んでの事である。

「いやいや、私はもうとつくに隠居の身だ。いまは柴助が良くやつてくれている」

「羨ましい限りじゃ。若い世代が居らぬというのは、どこも問題ですのう」

少子高齢化は、現在の妖怪社会共通の問題である。妖怪の強さというのは多く、古くから伝わったものであるとか、伝承の旧さやその知名度に比例する。一人前になるには何百年という年齢が求められて当たり前であり、生まれてそこそこの若輩、新参はどうしたって舐められる社会である。

若手のホープと言えば、生まれて僅か七十年ほどで日本屈指の大妖怪と成り、多数のフオーを生んだゲゲゲの森の少年がいるが、これは例外中の例外であろうか。

頼母子講を開いて身寄りのない子狸を引き取り育てるといつた後進の育成にも熱心な芝右衛門にとつて、それはより身近な問題と感ぜられているようだった。

「知つてのとおり、私は大阪で大ボカをやらかした。その恥を濯いでくれたのは皆だからねえ。本当に感謝しているんだよ」

そう。淡路にその狸ありと知られた名狸芝右衛門であるが、実は長らくその社殿は大阪道頓堀の中座に存在していた。

これは彼が通い詰めていた大阪の芝居小屋で、ふとした粗忽から正体を怪しまれ、犬に食い殺され命を落とした故事による。中座の人々はこの芝居好きの狸に親しみ、芸事好きの狸を憐れんで座の片隅に祠を作つて祀つたのだ。以来、芝右衛門は中座演芸の守り神として信仰を集めてきた。

これは彼の妖怪としての命を繋ぎ止めただけでなく、新たに神霊としての側面も与えるなど、決して悪いことではなかったが、故郷淡路の狸達にとつてみれば一族の総帥を誘拐されたようなものである。芝右衛門の息子・芝助を筆頭に淡路の狸は一丸となつて遷座誘致の活動を続け、ついに西暦二千年。中座の老朽化に伴う建て直しを機に、彼は社殿ともども晴れて故郷に帰ることができた。

「あちらも賑やかで良かったけれど、やはり私にはこの洲本が落ち着くのだねえ」

「大阪の商売は忙しいですから。儂も何度か取引をしましたが、危うく狸のほうが化か

されるなどという無様を晒すところじゃった。油断のならぬ土地ですぞ」

「芸の本場でもあるからねえ、毎日が実に愉快で、よい所でもあるんだが」

メインディッシュとなる三種のグリルを、鮮やかなフォーク捌きで口へと運び。芝右衛門はナプキンでそっと口元を拭う。

「さて。旧交を温めるのはこのへんにして、そろそろ本題としようか。団三郎くん、君の言う妖怪大作戦の再戦とやらの件だが」

「そうですね。……包み隠さずお話せねばなりません」

そうして、マミゾウは楡の葉を化かした計画書を取り出し、控えと共に芝右衛門に差し出した。胸の内にある算段までを含め、計画を残さず詳らかにしてゆく。

この大仕掛け、成就のためには三名狸が総力を結集せねば決してなしえぬことである。説明は多岐にわたり、仔細を含めておおよそ1時間半にも及んだ。

「……と、このような具合になるのう」

「……………」

話を聞き終えた芝右衛門、二、三の質問をしてしきりに一人頷いていたが、やおら卓上に注がれたままとなっていたワイングラスを掴み、ぐいと一息に煽ってぽんと両手を打った。

「痛快だ！ これは、実に興味深い！」

破顔一笑。相好を崩す芝右衛門に、マミゾウもほっと安堵する。

「なるほど、私を訪ねてきた理由も良く分かった。これは協力を惜しむわけにはいかないねえ」
「そう言っていたけると心強い」

「まったく、実に興味深い話だ。面白い事を考えるねえ、団三郎くん。」

……けれど、その前にひとつだけ。これだけはお聞きしようか」

すう、と芝右衛門の纏う気配が変わる。

彼は、けして穏やかなだけの数寄者ではない。若き日には屋島の禿太三郎とは化術比べを通じて命のやりとりをし、阿波の狸合戦においては津田と小松島の混乱に乗じ、狸の本邦である四国に版図を伸ばさんと介入した、野心も併せ持つ傑物である。

洲本城下、淡路を総べる三名狸の胆力は、いまだ健在であった。

「団三郎くん。君が全国化狸の音頭をとって、盛大に大騒ぎをやらかそうというのはわかったが、しかしその盛り上がった騒動の落としどころをどこに見るんだい？ 難しいものだよ、化生といういきものは。まったくもって御し難い。」

派手に暴れ、最後には倒されるのが良いというのは真実だ。化かしとは暴かれるためにあるものだ。私のような古株の中にはそれを本望とする者もいるだろう。けれど、化狸が化力妖力を尽くし、世を騒がし人を脅かす恐怖を人間に見せれば、彼らは直ちに狸を害獣と定めて駆除を始める。そうなれば止める手段はないだろう。人間を脅かす狸は、一匹残らず殺されてしまう。間違っても、同族を進んで危機に晒すわけにはいかないよ」

「同感じゃ。儂もそれは本意ではない」

「しかしそこで手加減をしては、人間を驚かせるには不十分だ。今の世は刺激的だからねえ、ちよつとやそつとの不思議では、あつという間に忘れられてしまう。それでは多摩騒動の二の舞だ。暴れに暴れたところで、その騒動をつぶさに記して残すかい？」

「魍魅魍魎、曖昧模糊こそがあやかしの妙味、化かしの心臓ですから。今の世の記録媒体はどれもこれもちいとばかり鮮明に過ぎる。儂らの姿を残すことには、反対の方も多いじゃろう。多摩の騒動の折は、太三郎殿は化術をカメラには映らんようにしておったようですな」

「あれは、確固たる映像や記録に残ることを避け、噂にのみにその姿、その正体を隠匿したことで、多摩には化狸が住むという過去の伝承を揺り動かすのが目的であつたのだろうね。多摩の若い狸たち身元を隠し、安全を守る手段でもあつたんだ」

「然り」

マミゾウが同じ立場であつたら、同じことをしたかもしれない。

今の世にあつても、狸は化けられるのだという事を白昼の元、人間たちに明らかにして、果たして多摩の安寧を保てたであろうか。

もはや、人間は闇を恐れない。いわんや、ふわふわ毛玉の狸をや。面白がつてテレビが追い掛け回し、こぞつて見物人が詰めかけ、化ける化けぬに構わずそこらじゅうの狸を捕まえて、見世物か研究材料にでもされたかもしれない。

おそらく、三狸は四国より招聘された立場として、力の誇示よりも、狸達の将来を取らんとしたのだろう。

「しかし、惜しいかなお三方とも、今の世を知らな過ぎた。いや、四国や佐渡といった、過去の恐れ、噂、狸の伝承が残らぬ東京という地を、己の郷里と同じように考えてしまったのかもしれませぬな。……あの地はとかく時間が早い。人の噂とて七十五日も保ちませんからのう。さて、20年余りが過ぎた今では一週間も残るかどうか」

SNSのタイムラインを眺め、マミゾウは深く吐息する。昼前に流れたつぶやきを、今誰が覚えているだろう？

「かの妖怪大作戦も神経の疲れが原因の幻覚とされ、テレビで専門家が持論をひとくさりして、はいお仕舞い。挙句、その手柄を横取りする狡猾な人間すら出る始末だったと聞き及びます」

「では？ まさか団三郎くんも、その考えなしにここまで大風呂敷を広げたわけではないだろう。これでは百畳敷あつても包めない」

「まったくじや。そこで僕はこの大作戦、人間にも協力を頼もうと思うのです」

「……ほう？」

これは思わぬことだったか、芝右衛門がぴくんと耳を跳ねさせる。

「もつとも、全員ではなく一部の、ですがのう。幸い、十年すこし前までは実業家をしておりましたゆえ、伝手はある」

マミゾウはおもむろに、懷から一枚のメダルを取り出して見せた。

キラキラと輝く金属製のそれを見て、芝右衛門がほうと眉を上げた。

流石は淡路の名狸である。これで話を通じるとは、当のマミゾウも思つてはいなかった。

「これは驚いた。ご存じとは」

「いやあ、前に少々嗜んでおりましてなあ」

照れ笑いを浮かべる芝右衛門。やはり流行には敏感であるようだ。ようやく彼を驚かせてやつたと、マミゾウは会心の笑み。

「先程お話した計画は、言わば祭の神輿。むしろこちらの方が祭の本体と言っても良いじやろ。何事も、一番肝心なのは事前の準備と後始末じやからなあ。無論ながらそのためにせねばならん事は山ほど残っております。儂がへまをすればそれまで。あとは芝右衛門どのが、儂に賭けてくださるか否か」

「ふうむ……ずいぶんと、大胆なことを考えなさるなあ、団三郎くん」

「大法螺大嘘大歓迎。そういうものでありませんか、儂ら狸は」

メダルを弾き、にやりと笑つてみせるマミゾウ。

芝右衛門もまた、一本取られたとばかり盛大に笑うのであった。

▼3

淡路の狸に見送られてマミゾウが洲本を発ったのは、それから数日を挟み、すっかり日も高くなつた正午近くになつての事であつた。もともとその日も早朝の出発を予定していたが、芝右衛門との会談の後、是非お会いしたいと芝助以下七狸が詰めかけて引きとめられ、バスの時間を遅らせての出発であつた。

旅先ではどうも酒が進むと、鈍い痛みを頭の押さえつつの淡路バスの車上の狸である。

これより向かうは徳島小松島。

四国三大狸最後の一角、日開野金長ひかいのきんちやう大明神の元であつた。

「……かれこれ二百年ぶりか。大分変わっておるんじやろうなあ」

阿波の狸は、武闘派で知られた任侠の輩である。仁義に面子にと体面を重んじ、義侠を持つて喧嘩に明け暮れ、時に命のやりとりも辞さぬ。数多くの名狸達がひしめき長らく抗争を繰り返す土地として名高い。

その発端にして最も有名なものが、天保年間に小松島の日開野金長狸と津田浦の穴観音あなかんのん六右衛門狸の間に繰り広げられた阿波狸合戦だ。

それぞれに与した阿波の狸を二分し、一年半にわたって続いた大抗争は多数の死傷者を出し、

両軍の総大将である金長、六右衛門のいずれもがこの戦争で命を落としている。それでもなお双方の憎しみは収まらずなお激しさを増して、両陣営の間には相仇^{あいがたきまたがたき}又仇^{またがたき}が繰り返され、屋島や淡路など国外の狸まで巻き込む大騒動に発展した。

最終的に、屋島の禿狸の介入によって手打ちと相成ったものの、いまだ両者の間には深い溝が残っているのである。

洲本を発って二時間と少し。バスが徳島駅前に到着した時刻は午後一時半を回っていた。空腹を覚えながら駅に降り立ったマミゾウがまずはじめに感じたのは、どつと押し寄せる圧倒的な化力であった。

「おう……!!」

佐渡の化け貉の口を、思わず驚愕が突いて出る。

隠していた尻尾がびりびりと震え、帽子の下から耳が跳ね上がらんに妖力が漲る。化生の尻尾、ことに狸のそれは、妖力と己の格を示すバロメーターである。喧騒の絶えぬ阿波の大地——その地の伝承に深く絡みつき、根付いた化狸への信仰が脈々と流れこんでくるのに合わせ、マミゾウは背筋に強い妖力の滾りを感じていた。

「ふーむ。これは見事なものじゃのう……」

疲れも空腹もたちまち吹き飛ぶ。両手を握りしめて感嘆したマミゾウは、ポケットに両手を突っ込んで歩きだした。

四国と本州を繋ぐターミナルでもあるピンク色の駅舎と、南国めいてヤシの木が立ち並ぶ大通り。聳えるビル群。徳島の市街は近代的な都市の外見を備えつつ、コンクリートとアスファルトの大地に確かな妖怪への畏敬を保っているようだった。

その昔。人間の文明がまだ昏く、人々が妖怪を恐れていた時代には、人の恐れを呼び、妖怪の糧とするこの力は、どんな場所にも満ちていた。それが失われて幾星霜。余程特殊な場所を除けば、街中に妖怪が共存する大地などつくに消え去っていたと思っていたが——マミゾウはその考えを改めざるを得なかった。

四国は狸の領土であるというのは、屋島や松山を訪れたときにも感じていたことだが、現代になおこの力を保ち続けるこの地に、ただただ感服するばかりのマミゾウである。

「……ゆえに、こんな昼日中の駅前でも大勢のご同輩に会えるという事じゃなあ」
顎をさすりながら足を止め、螺鈿細工の煙管を一服。

いつのまにかマミゾウの周囲に近付いてくる四、五人の男達の姿があった。

背後をちらりと窺えば、そちらからも似た雰囲気の連中が数名。剣呑な気配を隠そうともしない強面はどうみても堅気とは言い難い。皆、そつなく人間に化けているようだが、それにしては趣味の悪いスーツに髪型ばかり。パンチパーマに角刈りに、気合を入れているのか綺麗に沿った坊主頭もあった。

ずらりとマミゾウを取り囲んだ男達の中から、紺のバンダナを袖に巻いた目つきの鋭い長髪

の男が進み出る。

「失礼ながら、ご同族とお見受けしやす」

「いかにもそうじゃが、あまり歓迎されている風ではないのう」

「ご無礼は平にお許し下せえ。なにぶん事が事ゆえ皆、気が立つておりやす」

男は警戒を解かぬままに略式で仁義を切りはじめ。周囲の通行人の視線など気にも留めていない様子だ。

「自分、生国は阿波勝浦。江田の河原に遊び、長じては河畔の悪童どもの頭を張っておりやしたところ、縁合つて日開野一党、金長大明神狸より杯を頂き、江田川赤池あかいはのうみの御社を任されます、赤池あかいはのうみ緋鯉ひこい之介のすけと申しやす。

そのお姿、化力、毛艶。見間違はずもございやせん。名高き佐渡のニッ岩団三郎大親分とお見受けいたしやした。はるばるのご来訪、感謝いたしやす。

先程、淡路のバスから降りてこられるのを見させていただきやしたが、此度はいかなる用向きでお越しでありでしょうか」

マミゾウが徳島を訪ねるのは、時間こそ空いているが初めてではない。名前も顔も知られていてもおかしくないが、それにしてもこの警戒は一体何故か。佐渡の化け貉は眉を振りつつ、男——緋鯉に聞き返す。

「なにやら儂が観光に来てはならんような言い分じやな。遠方から来た相手に対して、ちと無

札が過ぎぬかのう？ 外の化狸というのは、阿波ではそんなに珍しいんかい？」

「申し訳ありやせん。ですが、此方阿波は金長様のお膝元。余所のお方が入国するとあらば、事前に報せの一つもあるべきでございやしょう。それに佐渡の大親分が、供も付けずお一人でのお忍びとは、いささか筋が通らねえ話じゃございやせんか」

「ふむ。仁義ならば通したはずじゃが、そちらには届いておらんかったか？ 別に今日明日すぐにお会いしたいというつもりもなかったが」

マミゾウは淡路に着いてすぐ、芝右衛門を通じて金長へ訪問の報せを送っていた。ゆえにく自然にそう答えただけであつたが——その一言で、明らかに男達の雰囲気が変わつた。彼らの警戒が敵意へと近いものにまで高まり、包囲の輪がじわりと縮む。

どうやら、今の一言を挑発と受け取られたらしい。

(……しくじつたか)

どうも、徳島の事情を見誤つたようだった。少なくともマミゾウの来訪は、彼らには歓迎されていない。

化け貉は懷で煙管を弄びつつ、飛び掛かられた時に対処できるように警戒を深める。試しに周囲を囲む狸衆をひと睨みしてやると、露骨に戦意を剥き出しにする者が数名。佐渡貉総大将を前になかなかの度胸である。

が、図体こそ立派な連中だが、よく観察すれば興奮のため数匹の化けの皮が剥がれかけてい

た。荒事の腕前はともかくも、化術においてはさほどの腕前でもない者たちが半数のようだ。いざとなれば強引にでも乗り切れるか——マミゾウはそう算段を巡らせる。

「団三郎親分。申し訳ありやせんが、自分らと御同行願えやせんか」

「なあ鯉兄イ、いちいちそんなしち面倒くせえことしなくったつてよオ、こんな雌狸一匹くらい、このまま——」

「黙つてろ松。手前等は言われた通りにすりゃいいんだ」

目を血走らせている若い衆にぴしやりと言ひ捨て、緋鯉は潔く頭を下げる。

「無礼は百も承知しておりやす。ですが、従つていただけないとあらば」

「どうするつもりじゃ」

「自分らにも、阿波の狸の意地がありやす」

「……ふむ」

強引に力付くに出るわけでもない。あくまで最低限の礼義は通し、こちらの立場も把握したうえで対応だ。金長直参の狸とあつて、緋鯉は少しばかり話は分かりそうだと判断し、マミゾウはポケットからひよいと米粒を取り出した。一斉にざわつく緋鯉達を制し、化術を解いて荷物に戻したカートを傍らの男へと放り投げる。

「ここで押し問答をしておつても埒が明かんじやろう。案内してもらふとするかのう」

「……良いんですかい」

「嫌じやと言ったところで、お主らも黙つて見逃しはせんじやろうが。違うか？」

堂々と言つてのけるマミゾウに、緋鯉を除く男達は困惑を隠せない。荒事になる以外のことは想定していなかったようだった。成程、実にわかりやすいやくざ狸だ。

「失礼しやす。……こちらへ」

「ああ、そいつは大切に扱つておくれ。金長殿への土産が入つておるからのう」

男達に囲まれたまま、マミゾウは駄裏手の路地に止めてあつた黒塗りのワンボックスへと案内される。警戒を解かぬ彼らに左右を囲まれて座席に着くと、助手席に緋鯉を乗せほどなく車は走り出した。向かう先は南。予想通り、小松島に進路をとっているようだ。

「煙草を吸つてもよいかね。なに、余計なことはせんよ」

「……紙巻がありやす。煙管は御辛抱を」

「ふむ」

了承の合図に軽く頷いてやる。元来、煙草は狸の化術破りの道具でもある。当然の警戒だろう。おい、と若い衆を呼びつける緋鯉の合図に従い、男の一人が慌ててマルボロを取り出した。

「火を貰えるかね」

ライターを咥えて紙巻を上下させ、催促すれば今度は左右からライターが飛び出してくる。すっかり言いなりの若い衆に、フロントミラー越しに緋鯉は苦い顔。

（先程の様子からするに、こやつらは金長殿の子分で間違いなさそうじゃな。逆らわんでおれ

ば黙っていても運んでもらえるわけじゃから、悪くはないかのう」

頭の後ろに腕を組み、ごろんとシートに背を預ける。

この状況にも動じることなく、むしろ護送の足を都合良くタクシー代わりに使おうというマミゾウの大胆さに、男達はすっかり吞まれてしまっている。威勢は良いがまだまだじゃなと内心で微笑みつつ、マミゾウは紙巻を堪能した。



果たして、徳島市街を抜けて二十分ほどの道程を経て、マミゾウを乗せたワンボックスは閑静な住宅街の一角へとたどり着いた。

海が近いのだろう。潮の匂いがかすかに香る。近所に学校でもあるとみえ、夏休みの子供たちの歓声が響いていた。

芝山に本宮を置く日開野金長大明神の社殿は、この小松島に鎮座するが——マミゾウを乗せた車はそこを素通りし、近くの3階建ての雑居ビルの前に停車した。入り口前に控えていた若い男達が飛び出し、一斉に緋鯉達を出迎える。

「お連れしたぞ。鷹の兄貴は」

「すぐに着くとのことですよ」

短いやりとりを挟み、マミゾウはビルの二階——事務所と思しき一室へと通された。分かなりやすいほどに分かりやすい、任侠狸の事務所である。

中に詰めているのはでかい図体に、刺青剃り込みの強面ばかり、見本のようないかつい顔が勢揃いである。愛想良くしろと言う気もないが、いささか前時代的に過ぎる。実際に金長は阿波狸の大親分でもあるわけだが、だからと言ってこの成りでは、現代社会からは浮いて仕方ないだろう。

「団三郎親分、ひとまずこちらでお寛ぎを」

「……わかった」

所内に詰めている狸はざっと二十。どれも皆若い顔だ。喧嘩だ戦争だと抗争の絶えない阿波の狸には、早くに命を落とす者も多く、ゆえに天保の狸合戦を知らない世代と、古老たちとの間に確執が生まれているという。実力のある若い世代が名狸の名跡を継ぎ、番付の上位に並ぶ事もその一因と聞いていた。察するに、ここはその若い狸達の拠点であろう。

紙巻きを一本灰にする間に、にわかに階下が騒がしくなる。

「お待たせしやした。……兄貴、こちらです」

緋鯉に先導され姿を見せたのは、やはりまだ年若い角刈りの青年狸であつた。紋付袴は着慣れているが、肩肘張った所作と、張り詰めた気配にどうにも尻の柔毛が抜けきっていない印象の拭えぬ若輩である。

(が、なかなかどうして良い面構えじゃな)

それでも左の指が数本欠け、首元と頬に傷痕があるのは、阿波という土地柄ゆえか。すでにいくつかの修羅場を潜つてきているらしい。その化けぶりも見事なもので、粗削りだが確かな実力も感じさせた。

「……うちの若い衆が粗相をやらかしたようで、ご無礼、平にご容赦を。」

手前、この阿波にて金長大親分の恩を受け、及ばずながら日開野組の補佐をさせていたたいしております藤ふじの木の小鷹こたかと申します。当代取つて八代目の若輩者ですが、佐渡の団三郎大親分にあつては、どうぞお見知りおきください」

「ほう。お主が」

藤の木狸は、大鷹、小鷹の父子二代に渡つて阿波の金長狸と義兄弟の契りを交した狸である。以来その名は常に、金長狸の一の子分として従う忠狸が襲名してきた。彼もまた当代の金長の右腕ということなのだろう。ならばその若さの理由にも得心がいく。

「こちらこそ、よろしく願ひするぞい、小鷹殿。いかにも儂が佐渡の団三郎じゃ。皆はマミゾウと呼ぶ。急な来訪に迷惑をかけたのう」

「いえ」

「案内、誠に感謝する。……と言いたところじゃが、金長殿の社殿は芝山の本宮。日開野の阿波狸総帥金長大明神でもなくここに連れてこられた理由については、お聞かせ願ひたいとこ

ろじやなあ」

向かいに座る小鷹と緋鯉の間に緊張が走る。

黒張りのソファーに背を預け、マミゾウは片頬杖をついて問いかけた。

「……どうにも妙なことになるっておるようじゃが、淡路の芝右衛門殿から、日開野は金長殿に直接、あぼいんとは取って頂いたはずでう。旅程に不手際があつて、当初の予定とはずれてしもうたのは儂の落ち度じゃが、どうやらそれ以前に、儂の来訪そのものが歓迎されておらんようじや。咎められるような危急の自体がある、ということかのう？」

「それは……」

「緋鯉、余計な口を出すんじやねえ」

口を開きかけた舎弟に釘を刺し、やおら、小鷹はがばりと身を乗り出し、黒テーブルの上に手をついた。

テーブルを軋ませんばかりに力を込め、深々と頭を下げる。

「団三郎様！ 此度の来訪のご事情、手前も承知の上でさあ。ですがここはどうか、何も言わずにお帰りくださいませ……！」

「それは、どういう了見じゃ。金長殿はお会いにならぬということか」

「……それは言えねえです。……ですが、俺ら阿波の狸は、団三郎様の仰ることには協力できねえです。どうか。……どうかこのまま、何も見ずにお帰りいただけねえでしょうか」

「自分からお頼み申します！　どうか、お願えしやす!!」

小鷹の隣で緋鯉も同じように、テーブルに頭を擦りつける。

見れば他の狸たちも一斉にマミゾウに伏していた。異様な気配に流石のマミゾウも一瞬呆気にとられるが、

「小鷹殿。仮にも日開野の若頭が、儂に対してそのようなことをするもんじゃないぞい」

「手前の面子で済むならいくらでも捨てる覚悟です。後生でさあ、どうか、どうかお聞きいれくませえ、団三郎様！」

「……お主がそのような態度では、日開野一派……金長殿の体面にも泥を塗ると言っておるんじゃがなあ」

金長狸と団三郎は格で言えば同じ一国の狸の総大将。過剰にへりくだることは、一派の首長である金長の格も貶めることになるのだ。

だが、小鷹も緋鯉も、一切顔を挙げようとはしない。マミゾウが諾と答えぬ限りこれ続けるつもりようだ。

「そうまでして、儂と金長殿を会わせたくないということか」

「……………ッ」

「儂が誰なのか、分からぬという訳じゃあるまい。その気になれば、お主らなどどうとでもしてやれるんじゃないやがのう」

「百も承知です。団三郎様。ですが、こればかりはできねえ相談だ！

……聞き入れて頂けねえというのであれば、俺あここで腹を切ります」

「た、鷹の兄貴ッ!？」

立ち上がりかけた緋鯉の鼻先に、否応なく裏拳がぶち込まれる。鼻血を流して地面に伏せる彼に、小鷹の怒号が飛んだ。

「緋鯉、お前えは黙つてろ！俺あ団三郎様と話してんだ！」

「す、すんません兄貴……ッ」

小鷹は本気だ。言葉通りに実行すれば、佐渡と徳島の狸の間には決して消せぬ遺恨が残る。

一命を賭してでも、ここで我意を貫く。やり口はあまりに拙い交渉だが、——いやはや、見上げた根性ではある。

（源助にも見習わせにやあいかなあ）

螺鈿細工の煙管を取り出して一服。さてどうしたものかとマミゾウは思案する。

十中八九、来訪の報せは届いていた。それをこの小鷹が握り潰したのだ。組を預かる補佐ならばそれくらいはできるだろう。マミゾウの来訪を金長に知らせず、内密に済ます為に。

おそらくは徳島のあちこち——港や空港、駅などに手勢を置いて見張らせていたのだ。昨今妖怪とても人間の交通手段に便乗するのが常である。網を張るのもそこまで難しくはない。

そしてその動機は——

「儂の大ボカが原因じゃからなあ……」

マミゾウが一人つぶやいたその時、やおら階下に騒ぎが起こる。事務所前に次々と車が乗り付け、そこから飛び出してきた狸が、事務所前に控えていた狸達に詰め掛ける。そのまま押し問答が始まったようだが、ほどなく事務所の狸たちは押しのけられ、どこかと階段を駆け上がってくる足音が多数。

「……………ッ」

小鷹が、痛恨とばかりに苦渋の表情を見せた。

「小鷹！ 緋鯉！ これは一体何の騒ぎだ!!」

事務所に新たな乱入者が訪れる。

神祇を預かる神主の白装束を纏う、黒髪細目の若者——日開野組親分にして一門総帥、阿波狸総大将、七代目金長その狸（ひと）の登場であった。

「大将……………」

事務所に入ってくる金長を見、小鷹は喉から絞り出すように小さく叫んだ後、深く俯き、唇を噛み締めて押し黙る。

「お前達は一体なにをしていたんだ。どうして私に黙ってこんなことをした。答えろ!」

「……………」

「……………」

問い詰める金長に、二人は齒を食いしばったまま顔を反らすばかり。

言い知れぬ緊張が満ち、ざわめきの収まらぬ中。マミゾウはそのただ中に進み出た。

「お初にお目にかかる。七代目金長どの」

改めて任侠狸の作法に則った仁義を切り直し、マミゾウは金長の前に腰を落とす。もはや、周囲の狸衆たちも彼女を押さえようとはしない。

金長はと言えば、返事もせず目を見開き、顎を強張らせてわなわなと肩を震わせるばかり。そうして訪れた、しばしの沈黙の後。

ごくろ、大きく息を呑み、金長は震える声で口を開いた。

「まさか……まさか、こうしてお会いできる日が来るとは、思っていませんでした。佐渡の団三郎様」

「済まぬな。初めての来訪がこのような形であつたこと、詫びねばならぬ。お主たちに、何より金長度殿には酷い事をした。謝つても謝り切れぬことじや」

動揺に震える金長に、今度はマミゾウが深く頭を下げる。

「佐渡の二ツ岩健在也。あの折、多摩騒動においてお主たちを裏切り、見捨てたこと、もう一度この場で謝らせて欲しい。……まことに、済まなかった」



経緯の説明の前に、まずは徳島の狸について話さねばならない。

ここ徳島には化けるものも化けないものもひっくるめ、数多の名狸がひしめくが、彼らが大きく金長、六右衛門の二大勢力に分かたれていることは既に述べた。

そのうち、日開野の狸は実力でその跡目を決めることで知られており、これは初代金長の死に際し、藤の木大鷹の息子の小鷹狸が後を継いで二代目金長となったことに由来する。以来、金長の名は血筋ではなく、歴代の金長狸が徒弟の中から優れた狸を選出して後継者を襲名してきた。

現在の七代目が金長を襲名したのは今から20年ほど前。多摩狸騒動の直後の事であった。六代目金長が後継者に認めたのは、武蔵国は多摩鎮守、鬼ヶ森の玉三郎。

多摩で起きた一連の騒動の後、戦後処理を終えて徳島に戻った六代目は、自ら連れ帰ったこの若者を七代目にしたのである。

玉三郎は、生まれも育ちも多摩の森。もともと四国とは縁もゆかりも無い上、当時まだ十にもならぬ若狸であった。そんな彼が阿波金長と親交を結んだのは、やはり多摩狸騒動が契機である。

ニュータウン開発で棲家の森を追われ、窮地に陥った多摩狸は、化学復興を掲げ各地の名狸へ救援を求めて使いを出した。その中で金長を尋ね四国へと渡って来たのがこの玉三郎だったのである。長旅の疲れに倒れた彼は、日開野での療養中に六代目金長の娘、小春と恋仲になり、二男一女をもうけるほどの仲となっていた。玉三郎と娘の間の深い愛を知り、また彼の器を見出した六代目は、周囲の反対を押し切って彼を七代目へと推挙したのであった。

そして、この騒動の当時、佐渡の貉総大将、団三郎の元にも、当然のように多摩よりの使いは訪れた。

その名を水呑沢の文太という。故郷の期待を一身に背負い、助力を求めてはるばる海を渡ってきた彼に対し、マミゾウが取った対応は、強い拒絶であった。

マミゾウはこの若い狸に対し、配下の四天王貉を始め、豆狸に至るまで徹底して中立を貫くように厳命し、一切の接触を持たせぬままに追い返したのである。

この文太と七代目金長——玉三郎は、同じ多摩の森を同郷にして兄弟のように育った同朋であつたのだ。

「団三郎様は、戦後の食糧難の中でお亡くなりになったと。文太はそう言っていました」

「当時は、そういうことにおつたのう」

戦後の混乱期から高度経済成長の時代、マミゾウは狸としての死を偽装し、人間として社会に入り込み実業家として成功している。かの名誉狸田中角栄と交流を持ったのもこの時期だ。

人間の力はあまりに強く、彼らに抗するのは無謀である。それが当時人間社会に生きていたマミゾウの結論であった。多摩に肩入れしても自分たちの首を絞めるのみと判断し、マミゾウは佐渡からの介入を禁じたのである。

事実。多摩のニュータウン開発は阻止できなかった。狸達の暮らす森は残らず消え去り、棲家を追われた彼らは、姿を消した。

「あのあと八方手を尽くしたが、文太の消息は掴めなんだ。……遅すぎたのかもしれない」

「……団三郎様」

金長は、苦汁を滲ませるように俯く。

この間ずっと、歯を食いしばり、堪えるように蹲っていた小鷹であったが、ここでぶんぶんと首を振り、やおら身を起こした。そのままマミゾウへと掴みかかる。

「てめえ……今更……今更何しに来やがった！ 佐渡の総大将が聞いて呆れらあ！ てめえは、人間相手に尻尾隠して逃げ出した臆病者じゃねえか!!」

「小鷹！ 何を言うんだ！」

「本当の事じゃねえですか！ 大将が言えないなら、俺が代わりに言つてやらア！ 先代や屋島の御大、隠神刑部様も多摩に揃って命を振り絞つてた時に、こいつは人間に尻尾を振つてのうのと暮らしてやがったんですぜ！」

「事実じゃな。非難をされても仕方のないことをした」

「氣取ってんじやねえ!! 仲間を見殺しにして、今更どの面あ下げて顔出しやがった!! 大将がどんな気持ちでいたか、わからねえたア言わせねえぞ!!」

「小鷹!! やめろ!!」

周囲の若い狸たちがマミゾウから小鷹を引き剥がし、取り押さえんとするが、彼は馬鹿力でそれをものともせず振り払い、羽交い締めにする緋鯉をも引きずってマミゾウに迫ろうとする。「それを、今になってもう一度力を貸せだア!? 寝惚けた事言ってんじやねえ!! てめえがあの時、愚図愚図してなかったら、大将も、文太さんも、その仲間も、多摩の故郷を失わずに済んだかもしれねえんだぞ!! それを、手前えの身勝手であッ……!!」

「鷹兄イ、落ち着いてくだせえ!!」

「離しやがれ緋鯉ッ!! こいつの澄ました面ア、一発ぶん殴ってやらなきや氣が済まねえ!!」

「——小鷹アッッ!!」

ずん。

一喝が事務所を貫いた。仁王立ちとなった金長の胆力に圧倒され、取っ組みあっていた狸たちは一斉にころんと転がる。中には吃驚しすぎて化けの皮がはがれ、丸々とした狸に戻ってしまつた者達もいた。

呆然と尻餅をつく小鷹に、金長は静かに言い聞かせる。

「見苦しい真似をするな。……小鷹。いまお前の口にした恨みや悔恨は、全部私のものなんだ。

お前が勝手に、私の心を喋るんじゃない」

「……………あ」

「私を思い遣ってくれるのは嬉しいが。それを口にすべきかどうか決めるのは、この金長だ。……小鷹、お前じゃない。わかってくれ」

「す……すみません……、大将……おれ……俺は……っ」

「……良い。いや、有難う、小鷹」

「大将……ッ」

韜晦と共に崩れ落ちる小鷹を、緋鯉がすかさず支える。

そして。彼らを背に庇うように、金長は真つ直ぐにマミゾウに相對する。

「ご無礼をお許しください、団三郎様」

「……良いんじや。儂はそれだけの事をした。憎まれて当然であろう」

「いえ。それに。——負い目があるというなら、私も同じなんだよ、小鷹」

「へえ……？」

きよとんと瞬きをする小鷹。金長は集まる若狸達一同を見直し、

「多摩の皆は。私の仲間たちは、最後まで戦い抜き、そして負けてからも。無くなると分かったあの森に残って最後までを共にした。私はそれを見捨てて、ここへ逃げてきたんだ。団三郎様に罪があるというなら、私も糾弾されねばならない」

「そ、そんな、なに言ってるんです大将！ 大将はこの阿波になくはならねえお狸^{ひと}じゃねえですか！ 小春さまだって、大将とは——」

「どうあれ事実だよ。多摩の仲間たちは、人に交じり、人のふりをして——あるいは、わずかに残った住宅街の緑の中に息を潜めて生き延びている。私だけがこうして、阿波に居場所を得て、化狸・金長として生きていられる。私はそれをずっと悔いてきたんだ」

静かに語られる金長の言葉に、いつしか事務所の中にはすすり泣きが聞こえてくる。

若くして七代目を継ぎ、荒くれ者揃いの阿波の狸をまとめんと奔走した金長の労苦は、想像を絶するものであつたらう。六代目の後見があつたとしても——いや、あつたからこそ。四国の外の狸が先代に取り入ってでかい顔をしやがつてと、反発を生むことは必至だ。

それに耐え、ひたすらに歯を食いしばつての二十余年。その証がここに集い彼を慕う、日開野の若き世代の狸達なのだ。

「少し、良いかのう」

「団三郎様……」

「……もし、お主らに今の狸の世を憂うことがあるならば。儂に少し、話をさせてもらえんか。聞きたくないというならば追い出してくれて構わん。儂が一方的に話すだけじゃ」

20年前。多摩でおきた騒乱は、合戦と呼べるようなものではなかった。人間に対するささやかな抵抗運動がせいぜいのもので、最後の大作戦ですら、風変わりなショー程度。集った化

狸達の奮戦は、人間達にはまるで通じなかった。

結果から見れば、佐渡の貉たちの判断は正しかったのだ。

人間たちを追い出し狸の生存圏を確保するなどということは、おおよそ今の世にあつて不可能であると。

「だが、その正しさは狸の矜持を守るには足らなんだ」

「狸の、矜持……？」

「儂はのう、賢く立ち回ったつもりでおった。もはや人の力は強大で、抗うことはむずかしく、なれば少しでも仲間を失うことを避け、ひっそりと永らえることこそが最善と、そう考えておった。いや、太三郎殿や刑部殿らも、それは自明と承知しておったのかもしれない。じゃが」

一息。

「それでは足りぬ。そうして命を永らえたところで、儂らは狸ではなくなってしまう。刑部殿は、太三郎殿はそう言いたかつたのじゃろう。ゆえに抵抗運動に身を投じ、己が化力を持つて、狸の矜持を示そうとした。儂は、今になってようやくそう気づいた。もうとつくに後悔には遅すぎるくらいじゃがな」

事実。マミゾウの棲家である相川のニッ岩大明神とても、人の手入れが途絶えれば、いつかは朽ちて野に帰るだろう。信仰なき神は消え、畏怖なき妖怪は忘れ去られる。佐渡の総大将としてその例外ではない。

「だからこそ。その決断を悔いたからこそ、儂は此度の計画を立てた。

人間はますます繁栄し、儂ら狸は棲家を奪われ、野の獣として退化し化術の力を失う。それは覆せぬ必然じやろう。四国や佐渡とて例外ではない。じゃが、それは今ではない。今この瞬間には、かつての古老名狸が、その名籍を継ぐ後継者が確かにおる。ゆえに。だからこそ、今だからできることがあると考える」

「……それが、団三郎様の仰る計画ですか」

「そのように大それたものではないんじやよなあ。ざっくり言えば、日本中の狸を集めて、馬鹿騒ぎがしたい。それだけのことじや。無論、途方も無く馬鹿高い掛け金を要する上、勝てる保証のない博打じや。儂とて成功するか否かは分からん。……ゆえに、見送るのも構わぬ。かつて儂がしたのと同じ判断じや。それは正しい。無理強いはせん。」

「が。これも年寄りの繰り言じやが、一度下した判断を後悔するのは、もう御免じやよ」
いつしか涙をにじませ、金長を囲み並ぶ狸達一同に、マミゾウは訊く。

「金長どの。いやさ、鬼ヶ森の玉三郎どのよ！ おぬしはどうする。今の世に狸はどうあるべきと、お主は思う。どうか、それを聞かせて欲しい」

「……止してください。私はもう、あの森には戻ることはできない」

「いや、これだけは言わせてもらう。あの時責任を投げ出したものとして、恥をかこうが厚顔と罵られようが、言わねばならぬ。お主がこの徳島で七代目を継ぐというのなら尚更じや。お

ぬしは、あの日の百鬼夜行、あのまま中途半端なところで終わらせて、本当に良いと思ってるのか！」

「それは……」

「待ってくだせえ」

口ごもる金長に、小鷹が顔を上げる。

彼は涙と鼻水でくしゃくしゃの顔をそのままに、マミゾウを見上げる。

「団三郎様。……そいつあ、狡い、狡い言い方すぎやしませんか。そりゃあ、佐渡の大親分にそう言われちゃあ、大将の立つ瀬がねえ。そんなふうには、何もかもうまくいく口ぶりです……あんまりだ。あんまりに、無責任つてもんじゃねえですかい、団三郎様」

縫るような若狸に、しかしマミゾウは首を横に振り、口元を緩めて牙を覗かせる。

「かかか。言うたじやろう。これは博打じゃ。伸るか反るかの大勝負、いくらでも上手い事を言って騙すに決まっておろう」

佐渡のニッ岩は、くるんと煙管を取り出し、吸い口を咥えて歯を覗かせる。不敵に笑みを浮かべ、ぐるりと一同に顔を巡らせた。

「忘れるなよ、儂らは狸じゃ。化かしてなんぼのいきものじゃ。己も騙せすして何が狸か。楽しくなくて何の祭りか。始まる前に失敗を考えて、何が狸か。違うかのう？」

「……………」

ただ、静かに。静かに沈黙があつた。マミゾウの言葉は、海に投じられた一石のごとく、小さな波紋を立てるのみ。

誰も泣きはしない。怒りはしない。ただ静かに、時が流れた。

ちりちりと焦げた煙管が紫煙をくゆらせ、立ち上り——それがついに燃え尽きんとした頃。
「……これも、これも契機なのかもしれないな」

ひとつ大きな深呼吸。そうして顔を上げた金長の顔に、もう迷いは見当たらなかつた。

そこには阿波狸を率いる総大将としての貫録と、確かなカリスマが満ちていた。彼は俯く小鷹の肩にそつと手をかけ、静かに決意を口にする。

「小鷹。君には思うところがあるだろう。皆もそうだ。けれど今回だけ。それを飲み込んで、私についてきてくれるかい」

「なにを仰るんで！ 阿波狸の四百年來、藤の木狸は日開野金長様のお力になると決めてるんです。それは皆も同じ気持ちです！ ……なあ、違つかお前ら!!」

小鷹の一言。それに異を唱える者はいない。ぐいと力いっぱい顔を拭い、若狸は補佐の顔を取り戻した。回りの若狸達も、口々に声を上げ、拳を力強く突き上げる。

大海に投じられた一石、さざめく波はいつしか鳴門の大渦となつて猛々しく荒れ狂う。

「やろう……やろうぜ！」

「おうよ！ 大将の弔い合戦だ！」

「馬鹿！ 誰が死んだってんだ、縁起でもねえ事言うんじゃねえ！」

「あ痛えッ!? 違えよ、心構えみたいなもんだ！ たとえ話じゃねえか！」

「言っ正しい事と悪いことがあらあ！」

いつしか賑やかに騒がしく。立ち上がる彼らに囲まれて。

マミゾウが差し出した手を、しっかりと握り交わし、金長は力強く頷いた。

▼5

小松島の住宅街。落ち着いた佇まいの一角、昼中には運動部の学生たちが詰めかけ、朝から昼から騒がしい公園の脇。世俗のそばに鎮座ましますのは小松島、日開野金長大明神。

阿波狸総帥の社であることを示す墨書きの門扉には、狛犬代わりの護衛の化け式、黒猫と白犬が並んで睨みを利かせる。一見、ただの古い神社であるが、ひとたび化狸の心得があるものが彼らに礼をして鳥居をくぐれば、たちまちここは異界への門となり、その奥に広がる巨大な邸宅へと繋がるのだ。

紺屋大和屋の穴蔵、阿波狸総帥の御座所には、いまや時ならぬ賑わいが満ちていた。

丸い耳と縞々の尻尾を振り乱し、忙しく走り回る狸衆と、給仕に走る娘たち。玄関からはひっきりなしに來客の到着を告げる豆狸の声が上がり、金長の徒弟達は忙しく彼らを出迎えては、奥の広間へと案内する。

古今、手打ちにあつて怨恨を水に流し、蟠りをなくすには飲むのが一番と。今宵は派手に宴席が設けられていた。まあそんな建前がなくとも、顔を揃えれば飲み騒ぐのが狸の性である、

日開野には、知らせを聞き付けた沖州の高須隠元や岩倉別所の楠藤兵衛、北辰一刀流の劍豪田浦太左衛門といった名狸が次々に訪れ、新顔の若狸と面を会わせ、古参と時ならぬ旧交

を温める。

身の丈九尺の大坊主、高須隠元が地上がりの船盛を並べれば、火術の名手藤兵衛の手による仕掛け花火が夜空を彩る。器量良しで知られた寺町お睦、松の木のお山などは雄狸たちの चौかいをひよいとかわしてきやあきやあと笑い合っている。浮かれて手を出した雄狸は見事に投げ飛ばされ、池に顔を突っ込んで目を白黒させていた。

「俺あ……あんたを、許した訳じゃア、ねえ、かあな……」

「鷹の兄貴、飲みすぎですぜ。ほら」

飲み比べだと威勢よくマミゾウに挑んできた小鷹は、酒樽を半分ほど空にしたところで青くなつてぶつ倒れ、若い連中に介抱されている。笑つて彼を見送つたマミゾウは、そのまま勝負の礼儀とばかり一樽をさらりと干し、周囲からの喝采を集めた。

そうして、なおも続く狸の宴。騒ぎから少しばかり離れて、夜涼みに縁側から月を見上げていたマミゾウ、ふと気配を感じて視線を脇に向ける。……そこには。

「これは、御無沙汰いたしております。先代殿」

「……参つたもんだ。こんな隠居を担ぎ出して」

髪に白いものの混じり始めた、貫録たつぷりの男姿。四角い顔に髭を蓄え、甚兵衛を着込んだ壮年の狸。当年とつて二百と五十六歳。かれこそ六代目金長——先代の金長狸である。

その名はすでに七代目に譲つて引退をしているが、いまだ存命にして頑健。阿波狸界におい

て押しも押されもせぬ重鎮であつた。

「隣を良いかね」

「勿論です。……おお、そうじゃ」

マミゾウは荷物の中から包みを取り出し、紙袋と共に六代目へと押しやった。

「つまらぬものですがどうぞお納めください。こちらは、下鴨の桃仙殿から預かっております」

「おお、これは懐かしい……。矢二郎君は元氣にしているだろうか」

「ご健勝のようです。今は諸国漫遊修行の旅の最中とのことでした。偽右衛門の選挙も、矢一郎どのの祝言も無事済んで、賑やかにやっておるようですな。まあ、ひとまず一献」

「ああ……おっとと。まったく、京都も難しい土地だものな。彼らが頑張ってくれているのは何よりの励みだ」

六代目金長の返杯を受けて、マミゾウは杯をそつと触れさせる。ちんと涼やかな杯の音を聞きながら、くいと酒精を干した。

「長らくの心残り、ようやく果たせてほつとしておりますわい」

「流石の君も応えたらうな。なに、これでけろつとして居られたら、あの時ぼろ負けに負けたわしらの立場がないが」

「苛めんでくだされ。先代どの」

それはなかなか痛いところだ。マミゾウ、再度手酌で杯を煽って苦笑い。どんちゃん騒ぎの

続く屋敷を振り返り、ほうと息を吐いて星空を見上げる。

「良いところですね、ここは」

「ああ。先代さま先先代さま、そのまた昔の先代さま。遡れば初代の金長さまが、ここ小松島の紺屋、大和屋茂右衛門様の邸宅に祀られて以来、金長狸はずっとこの阿波の地に狸たちの終の棲家を残そうとしてきた。時にその意志は軋轢を生み、争いを生むこととなったが——それと同じだけの未来をこの地にしっかりと根付かせてくれたよ」

微笑む六代目の表情はどこまでも優しい。

彼は太平洋戦争の後、それまで武闘派一辺倒だった五代目の後を継ぎ、縄張りを巡り相争っていた阿波の狸たちの間に合議制の寄り合いを作り、名狸界を発足させた功労者である。津田浦勢とも融和策に努め、歴代金長の中でも最も温和な狸として知られている。

「未来か。……良いものですね」

「まったく」

七代目とその妻小春、そして彼らの間に生まれた三匹の小狸たち。さらには社殿向かいの染物屋、大和屋一家まで巻き込んだの人狸仲睦まじい様子を眺め見て、マミゾウもまた口元を緩めた。想いと共に杯を傾け、決意と共に中身を干す。

「先代どの。……こうしてお世話になりつつ放しの上、さらに頼み事で恐縮じゃが、もうひとつだけお力をお貸し願えませんかのう」

「……ほう？ 改まつて、一体なんじゃね」

「津田浦の穴観音に、伝手はございませんか」

言うなり、六代目は口に含んだ酒をぶうつと噴き出した。げぼげほと激しく咳き込みながら、マミゾウを振り返る。

津田浦穴観音。まごうこと無き、日開野金長の不倶戴天の敵、六右衛門狸の居城である。

「ちよ、ちよっと待ってくれ。佐渡の。本気かね！」

「儂は、この国全ての狸と申し上げた。口にした約束は守らねば、団三郎の名がすたる」

「い、いや、しかし……」

狼狽する六代目。

それもそうだろう。彼の時代には日開野と穴観音に休戦協定が結ばれ、わずかなりとも相互の交流もあった。しかしそれも多摩騒動で金長が四国を長期に渡って離れた事で断たれ、さらに金長狸の代替わりと共に悪化の一途をたどっている。

今や両者の関係は一触即発一歩手前。阿波狸合戦再びの危険性は、阿波の狸にとって差し迫った脅威なのである。

「こちらの事情によそ者が口を突つ込んで居るのは承知の上。そこを枉げてどうかお頼みしたい。この通りじゃ」

「い、いやいや待ってくれ佐渡の、そのような事をされても困る。……第一、隠居のわしが勝

手に話を進めるわけにもいかないだろう」

「私からもお願いいたします。義父上」

慌てうろたえる六代目の元へやってきたのは金長と小春であった。彼の背後には、年若い少年少女の姿もある。先程紹介された、大和屋の跡取り息子とその許婚だ。彼等も真剣な表情で同意する。

初代金長との確執以来、不倶戴天の敵であった六右衛門狸との共同戦線。

もしこれが成れば、阿波狸界を揺るがす出来事であった。——無論、容易い事ではないのは誰の目にも明らかである。

「阿波の狸のため。いえ、この国の狸達のため。いまは争っている時ではないのです。過去の遺恨を忘れろということじゃない。ただ、私達が何を思い、団三郎様の話を受け入れたか。そのことを六右衛門様や穴観音の狸達に知らせずには、私達はまた、同じことを繰り返すのではないでしょう。か。ミヨくんも、陸くんも同じ気持ちです」

少年と少女、二人の若者も合わせて頭を下げる。ギョツと拳を握り精一杯という気配の少女に対し、少年の方はどこか不承不承といった気配だった。それでも、二人の並ぶ距離は決して遠くはない。

「うむむ……」

難しい顔をして、六代目は唸る事、数分。やがて半ば自棄のように声を張り上げた。

「ええい、若者たちがこうまで決意を固めているというのに、年寄りがこれでは全くだんじやないか。……わかった！ やろう！ できるかは分からないが、やるだけやってみよう！」

「ありがとうございます!!」

声に喜びをにじませ、七代目。六代目はやれやれと肩をすくめて、どかりとその場に腰を下ろす。

「……ミヨくんのこともある。できるだけ慎重に事を運ばねば。ハノスケ！ 居るか！」

「こちらに控えております」

煙のごとく現れて答えるは、六代目の腹心、羽ノ浦狸^{はのうら}。指示を受けるやいなや、配下の豆狸を引き連れてすぐさま走りだしてゆく彼の背を眺め、六代目は額の汗を拭って吐息する。

「どうやら、忙しくなりそうだぞ。せっかく隠居でのんびりやっていたというのに」

「これからもっと大騒ぎになりますぞ。儂も、存分にご期待に応えねばなりませんのう」

「よしてくれ、心臓に悪いよ」

六代目の嘆きに、どっと笑いがおこる。

雲間に覗く阿波の月、それを見上げて杯を掲げ。

マミゾウは決意も新たに揺れる月を飲み干すのであった。

——さて。

かくして20年来の悔恨を乗り越えたマミゾウは、全国各地の狸たちの協力を取り付け、いよいよその大計画の実行へと挑むことと相成りました。

この長きにわたる化狸双六道中もいよいよ大詰め。狸達が繰り広げる前代未聞の大作戦の顛末はいかなる決着となるか。そしてまた、マミゾウの企みの真意は「いずこ」。

全てを記すは、次なる最後の化逆門。ハアギヤモ

時を経て再起する妖怪大作戦。その結末やいかに。それを語るその前に、ひとまずはここで区切りといたしましょう。

ニッ岩貉化逆門 結 了
「妖怪大作戦 真打」に続く

妖怪大作戦 真打

▼
1

西の空へと太陽が傾き、空は橙と青の境に彩られる。地に落ちた影は緩やかに伸び、島から張り出した岩壁を彩っていた。長く続いた酷暑もようやく一息つき、次の季節の訪れを感じさせる潮の香りが涼やかにサヌカイトの風琴を鳴らす。

讃岐は屋島、四国霊場第八十四番札所、屋島寺。

かつて源平の戦の舞台となり、普段から観光でにぎわう巖壁の島は、黄昏時を前に人影もまばらだ。わずかに残る観光客も見えぬ何かに追われるように島を下り、参道沿いの土産物屋はそそくさと暖簾を片付け、遍路傘は忙しげに帰路につく。

その原因が、島の各所に潜む狸たちの群れである。

人気の遠のいたここ屋島には、人外の者たちの織りなす時ならぬ騒ぎが満ちていた。表向き、施設の改装工事や崖崩れの通行止めという体で立入禁止になった島内の各所、休業中のホテルや観光施設のそこここに、数えるのも馬鹿らしくなるほどのふわふわの茶色い毛玉たちが、所狭しとひしめいている。

彼らのざわめきは島内を包み、すでに待ち切れず飯を食い、酒盛りを始める声もあった。早々と出来上がって腹鼓を打ち始めるお調子者も出る始末。

事の始まりとなつたマミゾウの来訪からちようど一年。

奇しくも中秋の名月のこの日、弘法大師の膝元にして、屋島の禿太三郎狸を祀る叢山大明神の社領であるこの地には、全国各地からの狸達が集結し、今か今かとその時を待っていた。

少し辺りを見回してみても、集う者たちは皆、名狸、大狸、化狸のオンパレード。

境内の西に陣取るのは、四国は阿波、日開野の金長狸一派である、その片腕たる藤の木鷹を筆頭に、沖州の高須隠元、楠藤兵衛、寺町睦と大物が並び、若衆の脇を固めるは赤池緋鯉之助。その向かい、金長一派とは距離を置き、津田浦穴観音からは当代穴衛門が直々のお出ましである。孫にしてやがては九代目と目される秘蔵つ子、萬寿を傍らに、穴観音四天王の川島兄弟、軍師葭右衛門も顔を連ねる。両名が顔を連ねるのは初代同士の天保以来とあって、辺りには時ならぬ緊張が満ちている。

阿波と言えは金長に並ぶ実力者としてその名を知られた名狸、吉野川の赤岩将監。こちらにも好敵手たる伊沢の鎮十郎と共に参陣である。金長と穴右衛門以上に長きに渡って相争い続ける両者、既に陣営の若い連中が小競り合いをはじめ、野次馬が集まっては喧嘩ださあやれやれと威勢のいい野次が飛び交う。

その隣に並ぶは創生の神島、淡路より七狸と芝右衛門。ぴんと高い山高帽にタキシードを纏つての正装だ。従う狸達は淡路の美食に腕を磨いたコックたちで、自慢の料理をあちこちに振舞っている。

さらに顔を巡らせれば此方は東予、壬生川^{にゆうがわ}の喜左衛門^{きざえもん}、波止浜^{はしはま}の柿^{かき}の木狸^{きだぬき}、新居浜^{にいはい}一宮の女郎狸^{じようろう}。今治白山神社の美人狸三姉妹の顔も見える、さらにその前には西予、松山城下の八股お袖、太宮八幡の金平ら、隠神刑部ゆかりの者たちが宴席を連れ、刑部狸の空の主座を囲むように守っていた。

一方海に目をやれば、幾艘もの廻船宝船を並べ、洋装にざんばら髪の無精髭。かの坂本龍馬に弟子入りし、愛用のリボルバーを譲られてアメリカの地を踏んだと豪語する、土佐は八州大膳神社の花柳大膳狸^{かりゆうだいぜん}である。

その船が停泊する入り江、揺らめく灯台の火を守るのは、遠く善光寺から牛車を引き連れやってくるきた善光寺門前の灯籠狸^{とうろうだぬき}。弘法大師のお膝元とあつて、いささか緊張気味である。

境内の東側には、ご存じ東光寺の禅達、湖鏡庵の財喜坊、重屋の源助、関の寒戸お杉、佐渡の貉四天王が配下と共に揃い踏み。はるばる海を渡り彼らを佐渡から連れ来るのには、財喜坊の湖鏡幻術が大活躍した。

こうした大狸古狸の間、いかにも現代の若者風に装い、茶髪ピアスにお洒落を決めるは、遙か蝦夷地の本陣狸大明神。今回の祭を前に初めて化身の姿を見せたというが、ブランド物に身を固め、狸らしからぬイマドキのチャライ装いながらも流石は各地名狸のサラブレッド、お袖やお杉、松の木鹿の子らの女傑に『ねえねえ君どこ社住み？ 何化け？ 狸院^{RINE}やってる？』としれっと聞いて回る姿は怖いもの知らずというかなんというか。

毛球の聖地、屋島狸大学のグラウンドでは、木更津の證誠寺狸衆が、大学選抜チームとナイターゲームの真つ盛りである。六回裏を迎えて四対二、二死満塁の打席。フルカウントをファウルで粘り強く持ちこたえる大学選抜に、会場が湧く。

宴席の中央には、持ち出されてぐらぐらと湯を湧かす、至宝・分福茶釜。その前には狸達が一列を作り、汲めども尽きぬ湯を神妙におし頂く。この靈湯、ひとたび口にすればたちまち全身に妖力化力が漲り、浴びれば長旅の疲れもたちどころに吹き飛ぶ。館林茂林寺に座す守鶴の姿はここにはないが、彼女の庇護は遍く狸毛玉たちを確かに守り導いていた。

伊予、阿波、讃岐、土佐、佐渡、信濃、草津、木更津、果てはるか蝦夷地まで。ずらりと並ぶ顔は誰も彼もが伝承に名を残す名狸。互いに化けを披露し、新顔は自己紹介、古参は旧交を温める様はまさに全国狸サミットとでもいうべき様相である。

押しかけた狸の数がありにも多かつたため、屋島島内の施設には入りきらず、急遽屋島狸総合大学のキャンパスが解放された。化術の名門で日夜勉強に励み、一人前の大明神を目指す若き学徒狸たちも、今日ばかりはフル動員で雑用に走り回っている。

「壮観じゃのう……」

溢れ返らんばかりの狸の群れを見上げ、マミゾウは思わず声に出してつぶやいた。ひっきりなしに詰め掛ける狸達の間ではトラブルも頻発し、なし崩しに宴会やら勝負になだれ込む連中が後を絶たない。既にマミゾウ自身も半日も前からその対処に大わらわである。

そんな中。

「マミゾウ様！」

「さま！」

雑踏の中をびゅうつと駆け寄ってくるのは、小さな小さな凸凹コンビ。佐渡は真野曉森に住む二匹の子狸兄弟である。

「おお、小平太に志郎、お主らも来たのか」

「はい！ 禅達様のお伴で参りました！ 今回の大作戦、俺たちも心から力を尽くすようにと言われました！」

「ました！」

並んでぺこりと頭を下げる兄弟。佐渡での一件は、既に情状酌量のうえ頭突き3発と油揚げ抜き5年の刑の沙汰が下されている。今は東光寺預かりの見習い子坊主となり、禅達の指導のもとで修業の最中であつた。

それでも二人とも、己の起こした不始末をなんとかして償いたいという思いがあつたのだろう。気負うように尻尾を立て、意気込みは全身に満ちている。

行動力ならば大人顔負けの兄弟だ。禅達もさぞ苦労したと見て、疲れた様子でお前に任したと素っ気ない。マミゾウは苦笑しつつ、二人の頭をわしと撫でてやつた。

「うむ。今宵は夜っぴての大仕事じゃからな。お主らにも頑張ってもらわねばならぬ。途中で

疲れた帰りたいと言っても容赦はせんからな。覚悟しておけよ」

「は、はい!!」

「はい!」

並んでカチコチに背筋を伸ばす兄弟。まったく、可愛らしいほどに懸命だ。知らぬ土地、知らぬ狸に囲まれて緊張しているのだろう。しかし、年少ながら佐渡の貉の面目を保とうという志は微笑ましくも心強い。マミゾウはひよいと化け式を放って、卓上の御馳走から美味そうなところを持つてこさせる。

「まずは存分に腹ごしらえをしておけ。腹が減ってはと言うしの。一度始まったらもう朝まで何も食えんぞ」

「は、はいっ」

慌てて食べ始める兄弟二人。屋島名物の一鶴の骨付若鶏を頬張り、兄ちゃんこれ美味しいね!と無邪気な志郎に、しっかり食べろと兄ぶる小平太。

マミゾウが目を細めながら兄弟の食べっぷりを満足げに眺めていると、

「おお、こんな所に居ったか」

「これは、太三郎殿」

とことこと歩み出るのは小柄な僧形の老狸。ここ蓑山大明神の本陣、屋島の禿狸こと太三郎である。屋島狸大学の学長も兼任する彼は、作戦の当日になっても多忙であり、一堂に軽く挨拶

拶をした後、私室に戻って事務に追われていた。ようやく顔を見せたかと思えば、太三郎は心底楽しげなニコニコ顔。

「佐渡の嬢ちゃんに、一人、紹介したいものが居るんじゃないよ」

「ほう？」

「狸大学の一回生じゃ。飛び級で試験に合格した天才児での中」

嬉しげに太三郎は、一匹の若狸を紹介する。見た目はまだ十代、柔毛も抜けきらぬ様子の少年である。しかしその双眸は力強く、意志の強さを感じさせる太い眉に凛々しい鼻筋は一目で只者ではないと感じさせるほどの覇者の相が窺えた。

その顔立ちに、マミゾウは強い既視感を覚える。

「お主は……まさか」

「はい。山口霊神は四国八百八狸総帥、隠神刑部が一子。犬神中將いぬがみちゆうじようと申します」

「なんと……!! 刑部殿にご子息がおったのか!!」

「ひやつひやつひや。どうじゃ、驚いたかの。儂も入学名簿を見ていて実に魂消たわい」

目を見開くマミゾウに、太三郎は愉快そうに腹を抱えて大笑い。

中将の母は、刑部狸の密かな寵愛をうけた愛妾の一人であった。狸界の表舞台を退いた刑部の立場を慮り、彼女は中将を身籠るとすぐに山口霊神を辞し、黒森山の山中へと去ったという。以来、中将は家族——母と弟、犬神少將の3人で、山中の穴蔵で慎ましやかに暮らしてきた。

立派な狸になるようにという母の言葉に従い、日々勉強に励み、化術を磨き、いつしか中将は歳に似合わぬ腕前を持つようになった。優れた才覚を示しながらも、己の出自について知らぬままにいた彼だが、十二になった今年の春、東予の喜左衛門より自分の父が隠神刑部であることを聞かされ、父の後継に相応しき狸となるため、常よりも三年早く屋島狸大学の門を叩いたという。

中将の身の証は確かであり、その血筋は真正銘本物であった。学長の太三郎自ら同席した選拔入学試験の二次面接口頭試験において、中将は見事満点回答を叩き出し、主席入学を果たしたのであった。

以来、狸大学始まって以来の天才と、学内の評判を一身に集めているという。

「先程、毛球で鳴門砂吉とバツテリーを組んでいたのもこやつでう。本来、今回の作戦に元服前の若者を参加させるのはよろしくないじやろうが、わしは特別に彼を加えたいと思っておる。業前は狸大学が保証するぞい」

「なんとも、頼もしい限りですのう。……太三郎殿の太鼓判であれば、異存などあるわけがない。中将どの、よろしく頼む」

「光栄です。若輩ですが、死力を尽くさせていただきます」

静かな自信を覗かせ礼をする中将。歳に似合わぬ落ち着きぶり、まさに八百八狸を統べる覇者の相か。秘蔵つ子を披露し、太三郎はニコニコ顔だ。

かくてこの日この月の下、いよいよ役者は揃った。祭の始まりである。



山の端、海に向こうにばかりと月が昇る。陸地の反射と雲に包まれた赤い満月だ。欠ける事のない丸い月、焼きたての煎餅か、蒸かしたばかりの饅頭か。

ざわざわと尻尾の端まで力を漲らせる月光を浴びながら、マミゾウは屋島の中央に組まれた大櫓の上へと飛び上がった。

既に宴もたけなわ、揃った狸達はめいめい勝手に飲めや歌えやの大騒ぎだ。騒音に顔をしかめ、マミゾウは傍に控えた源助が木の枝から化かした拡声器を受け取る。

『えー、テストス』

スイッチを入れるなり、拡声器からキイイインとけたたましいハウリングが鳴り響いた。耳をつんざく高音に、島じゅうの狸は残らず耳を塞いで飛び上がる。

どしんと一斉に尻餅をつく音がそこら中にこだまし、はずみで大学選抜の四番は空振り三振に打ち取られていた。

『……失敬、ちと調子が悪いようじゃな』

「うるせえぞ、ちゃんとしろ！」

罵声に応えつつ、マミゾウはごほんと気まずく咳払い。灯籠の明かりの照らす中、島の各地に集った無数の狸達をぐるり見回して声をあげる。

『では改めて。皆の衆、今宵は良い満月じゃ。天候にも恵まれ、今宵、この地にほんとうに良く集まってくださった！ このニッ岩、心より感謝する！』

「挨拶が遅えぞ！ とつくに始まつてるじゃねえか！」

早速野次を飛ばすのは禅達である。アウエーである四国において佐渡の貉が委縮してはいかんと、佐渡貉四天王の筆頭として気を張っているのだろう。相変わらずでかい図体の割に細かいことだとマミゾウは苦笑する。

『まずはご歓待を、と思つてのう。腹が減つておつてはまとまる話もまとまん』

マミゾウがぼんと腹鼓を叩けば、広場のあちこちにぼつぼつと狸火が灯る。いつの間に設えられたか、山と積まれた御馳走に酒がずらり。無論、どれも本物である。

『皆、儂が人間から巻き上げた金で用意させたものじゃ。そして各地の名狸の皆さまからも、多数のご好意をいただいております。遠慮などいらん。存分に呑み、食つてくれ!!』

ひやつほうとそこらじゅうで歓声が上がる。これだけの数の狸たちだ、まだまだ飯も酒も足りていなかった。相好を崩した狸達是我先にと御馳走に群がり、たちまち始まる乱痴気騒ぎ。

寄越せ俺のだ、うるさいあたいが先よと取り合いが始まる。中にはバターたつぷりのフライドポテトを豆狸と取り合う古老の姿もあった。この光景を目に、流石のマミゾウも苦笑い。

まこと狸とはこういうものだ。目先の欲に敏感で、美味しいもの、面白いものに目がない。

『それ、そう急がんでも、無くなったりはせん。三日三晩飲み食いしても余るほどあるからうう！……そして、落ち着いたらば耳だけでもこちらに貸してくれるとありがたいのう。さあ皆、空を見よ!!』

どおん。櫓の上で大きな腹鼓の音。

御馳走を口へと詰めこみ、酒樽を抱えながら。狸達がきよとんと首を上に向ける。

月の夜空をざあつと覆うように、四方八方から八畳敷きが広がった。幾枚ものワイルドカーペットが重なり繋がってできるのは巨大なスクリーン。豆狸達に変化した映写機をからからと回し、狸火のスポットライトがスクリーンに向けて投射するのは、巨大な日本地図であった。

『これより皆に試みてもらうのは、世紀の祭りじゃ！』

狸の、狸による、狸のための祭り。儂ら狸の総力をもつて、この日本を丸ごと化かす！

名付けて、日本縦断・“妖怪大作戦真打”！』

どおんとひときわ大きな腹鼓。

スクリーンに広がる日本地図に、次々と赤い点が灯ってゆく。それらが示すのはこの国の主要都市であることはすぐに知れた。

『この四国より海を渡り、西へ、そして東へ。一丸となって走り抜け、日の本を渡つての大作進じゃ。これはまさに、この国全土に狸の生き様を見せつける一夜の夢！われら化狸、一世

一代の大々々化術である!』

高らかな宣言に、一度、静寂があたりを包み――

一拍遅れて、どよめきが屋島を満たした。

「……正気か、マミゾウよ」

『正気も正気。一堂、ちとお静かに願おう! まず仔細を聞いてほしい』

どろん。スクリーンが一気に拡大し、四国は瀬戸内海に面した一角を映し出した。赤丸が点滅するのは言わずもがなここ、屋島の位置だ。そこから伸びた矢印が、さあつと地図の上を走り始める。

『儂らは、化力妖力の限りを尽くし、百変化をもってあらゆる化かしを続けながら、日本縦断の百鬼夜行を執り行う! 出発地はここ、讃岐は屋島。名高き屋島太三郎殿の御在所じや。儂らはここより西、坂出へと抜け、一路瀬戸大橋を渡って岡山に入る。弘法大師どのは、狐を追いつく際に鉄の橋が掛ければ戻ってよいと伝えたときとされるが――狐が渡ってよいものを、儂らが渡って悪いという法はないはずじやな』

ここで一同に密やかな笑いが漏れた。スクリーンの矢印は海を超え、対岸の岸边へ。

『海を渡り本州へと出たのち、一路北へ。辿りつくのは吉備津彦の膝元、岡山駅じや。皆、犬やら猿やらに食われぬようにせんとおう! ここまで70キロをおおよそ2時間。かなりのハイペースじやが、この調子でおつては、とても一夜で日本じゅうを駆け抜けることなどできん

な。そこで、ここじゃ!』

地図の一点を叩き、マミゾウは両手を広げた。

どろん、月の輝きに照らし出されるのは、白き流線型の車体。

近代技術の粋を集めて作られた高度経済成長の象徴、0系新幹線である。

『この新幹線のレールをちょいと拝借して、日本各地の駅を一気に突っ切る! ノンストップなら東京までもおおよそ4時間じゃ』

再び一堂にどよめきが走る。狸は特に列車を好む。いっばしの化術を身に付けたならば、一度は列車に化けてみようと思うものだ。しかし、流石に新幹線に化した狸の前例はない。この発想に、ことに電車好きで知られる八股お袖は目を輝かせて身を乗り出していた。

元々あるものそっくりに化け、同じだけの機能を再現するのは化術の基礎の一つである。確かに最高時速210キロの超特急と日本縦断のレールを借りれば、それだけの速度を出すことは不可能ではない。……あくまで、理論の上では、だが。

『無論、百鬼夜行は誰かに見られてなんぼじゃ。速ければ速いほど良いという訳にはいかぬがな。さて、ここで全員を二つに分ける。西征し、九州上陸を目指す者たちと、山陽道から東海道を経て東京を目指す者たちじゃ。言うまでもないが東軍のほうが距離も長く主要都市も多い、こちらが主力となるじゃろう。もつとも西軍の進行先、九州には薩摩守護の狐どもが居る。到着を待ち構えて卑劣な妨害をしてくる事じゃろう。腕に覚えのある者は奴らを悔しがらせるの

も良からうな』

東西に別れた赤い矢印。西に向かった矢印が狐のアイコンを蹴散らして突っ走る。このパフオーマンスにまた、どつと会場が湧いた。

『一方東軍は、神戸、大阪、京都と立て続けに難所を経て、さらに岐阜、名古屋と進んでゆく。距離もさることながら、人間が嫌というほど詰りに詰まった大都市じゃ。どんな危険があるもしれん。覚悟は必要じゃろうなあ。……参考までに聞くが、己の所領を離れ旅した経験がある者はどれくらいじゃ』

ぱらぱらと手が上がる。予想通り、伝承や土地の逸話に縛られぬ若い狸が多かった。全国武者修行の経験がある淡路の芝助などは、ここぞとばかりに自慢げである。

『なるほどのう。四国や佐渡の皆に一つ忠告しようかの。外の世界は思う以上に力を使うぞい。普段と同じようなことができるとは、ゆめゆめ思わぬようにな！』

さて、名古屋を発った後は一気に静岡を突っ切り、伊豆熱海を抜け、横浜を通って、東京へとまっしぐらじゃ。箱根の山はトンネルで抜けられるのは僥倖じゃのう』

眼鏡をくいと持ち上げては、女教師めいた姿勢でばしと指示棒でスクリーンをつつき、マミゾウ。

『最終目的地はここ、東京！ 本音を言えば東北や北海道までも巡りたいが、流石にそれは狸が今の三倍はおらんと不可能じゃろう。不本意じゃが、これは仕方がない。次の機会に譲ると

しよう。そして全体すけじゅーるはこれじゃ！ 夜の10時にここを發ち、翌朝の4時前には、東京に辿り着く！ 概略はこれじゃ！』

わずか6時間で、日本を縦断する百鬼夜行。その途方も無いスケールに、会場からは呻き声が漏れた。名狸をはじめ、各地の主要な者たちにはすでに伝えてある計画だが、こうして大々的に發表する事でその荒唐無稽さを改めて思い知ったのだろう。動揺とざわめきが会場を覆ってゆく。

「そ、そんなことできるのかよ……!?!」

『出来る!』

あちこちから上がる不安の声を跳ねのけるように、マミゾウは力強く叫んだ。

『というよりも、やってもらわにゃならん。その意地を張り通さねば、儂らは狸ではおられんようになるじやろう』

言い切ったマミゾウに、狸一同はお互いの顔を見合わせる。途端に辺り一帯はがやがたと騒がしくなった。無茶だろ、いや偉い狸様たちのいう事だぞ、じゃあ手前えはできるのか、お前こそ金時計ついてんのか、と喧嘩まで始まる。取っ組み合いになって転がる狸達を見下ろし、金長は顔を覆い、太三郎や芝右衛門は顔を見合わせて笑うばかり。

たちまち喧騒の満ちる場のざわめきを打ち払うように、どおんと大きな腹鼓の音。

大音声に静まり返った中、マミゾウは壇上から狸達を見下ろした。じつくり、狸一匹一匹の

顔を見つめるように。蓮の葉のおけさ傘をばさりと揺らして。

『なあ、おぬしら。……悔しくはないか』

佐渡のニッ岩貉は、集う狸達に問いかける。

『人間に大きな顔をさせて、狸をただの野の獣と侮られて。馬鹿にされ、笑われ、齒を食い縛った思い出はないか。住処を追われ、友を失い、家族と別れ。それを悔やんだことはないか』

「……………ないか、つて」

「そんなの……」

あるに決まっている。声に出す出さぬはあつても、名の有る無しに関わらず、集う狸達一同の思いは同じであつた。人間が暗闇を畏れぬようになって幾年。狐の繁栄に虐げられ、狸達はただ一方的に侮られ、忘れられ続けている。

『その通り。なにくそ、ふざけるな。目にも物を見せてくれる！ そう思うものは多からう。儂も同じ気持ちじゃ。人間に復讐をしたいと考えるのも、これまた自然なことじゃろう。』

しかし、人間に不用意な手出しをすることが、どんな結果を招くか。儂らはこれまで、嫌というほど思い知らされてきた。どれだけ儂らが奮戦したところで、人間はなんの痛みも感じん。後悔もせん。幾多の失敗でそれを学んだからこそ、儂らはこうしてひっそりと、人の世に交じって生き延びてきた』

語るマミゾウの言葉を、静かに聞き入る四国名狸達の思いはいかなるものだろう。多摩騒動

の折への後悔だろうか。郷愁だろうか。

いつからか、狸が諦め、忘れてきた生き様を。

マミゾウはこの場で、もう一度口にする。

『じゃがのう。儂はこのままではいかんと思った。腑抜た様をつまらんと思った！』

儂らは狸じゃ。化かし化かされる化生が、こうもせこせこ毎日悩み悔やんでなんとする。

儂らの好きなのはいつもそう、美味しい飯と面白いこと。まさに阿呆の血よな。面白き世を、面白く！

それをせんでは、狸は死んでしまう！』

ぐい。蓮の葉を化かした一升杯に、なみなみと注いだ酒を呑み干し。マミゾウは空になった

盃をぶんと空に放り投げた。どろん、もう一つの満月が夜空に咲く。

『儂が、幻想郷というところに行つたという話を聞いておる者もいるじゃろう。儂は、あそこ

で新しい勝負の形を学んだ。殺す殺されるではなく、もつと違つた勝負の形をな。

勝ち負けではなく、いかに楽しく遊びそして魅せるか。そういう勝負が、かの地にはあつた。

そして、思い出したんじゃ。それこそが儂ら狸の化かしじやつたと！

人を化かし、煽てられて調子に乗り、正体を明かして窮地に陥るが、まんまと隙をついて逃

げ延びる。無論、ちやつかりと駄賃を拾つてな。

……狸の化かしとは、古来より、ずうつとそういうものじやつた。皆のため、狸界のため。

そう言い訳して、儂はいつの間にかすつかり毫碌していたようじゃ』

どん。どおんつ。力強く叩かれる狸の腹鼓。

本能を呼び起こす原始のビートが、詰め掛ける狸達に伝播してゆく。

『無論、これが最善とは言わん。最後の機会だとも言わん。後代の優秀な狸達が、もつともつとうまいやり方を思いつくかもしれん。が、今この場に居合わせたお主らが、そろって同じ顔触れが、ともに同じ祭りに加わる機会は今しかない！』

ぐつと拳を掲げ。マミゾウは力強く、そして朗らかに笑う。

『どうか、力を貸して欲しい。これより始まるは、この国の化狸すべてが一同に介す、一世一代の大化かしじや！』

長い長い演説を終え。拡声器が沈黙を取り戻す。

しんと静まり返った広場の中。太三郎が一人進み出、ばん、ばんと手を叩き始めた。

ほどなく、あちこちからばらばらと拍手が起こり始め——やがてそれは万雷の拍手へと変わってゆく。続く手の音はやがて拍子を取り、リズムを刻み。

いつしか腹鼓の大合奏となつて、屋島を包み込んだ。

▼ 2

そして、夜は更け時刻は10時を少し回る頃。

まるい月が東の空に昇り、夜闇がすっかりあたりを包む中。

月明かりに照らされ、聳える屋島が、まるで身を起こし立ち上がるかのようにざわりとその輪郭を揺らめかせた。

島の各所に潜み、酒に飯にとたつぷり栄養を蓄えた数万にも及ぶ狸達が一斉に立ち上がり、毛皮に尻尾に蓄えた化力を解き放ったのである。この光景を目にしたのは、周囲に住む人間たちの中でもごくわずかであった。

夜の中に首を傾げ、見間違いかと目を擦る。彼らは、この幻想の一夜の最初から最後までを目撃することになる、実に幸運な者たちであった。

ぼ、ぼと無数に灯る狸火が、岩壁を下り列を作って輝きを増す。地に影を落とすほど皓々と輝く満月の下、何処からともなく水が溢れ出した。ざあんざあんと揺れるのは、屋島を包む砂浜と波。あとからあとから吹き上げて、見る見るうちに水位を増した海の中、寄せては返す綾目模様がざわりざわりと波を打つ。

そんな砂の浜に、進み出るは一人の若武者。

黒鹿毛の馬にまたがり、騎乗にて鎗矢を番え波打ち際を走るうつくしき若武者は、屋島源平の那須与一。源氏きつての弓の名手は、いつからか屋島の上にある船の上、掲げられた扇へと狙いを定める。

ぎりりと弦を引き絞り、ひようと放たれた矢が狙い違わずの扇を射跳ねるや否や。

ぱあんと甲高い破裂音と共に、空の月が高らかに弾けた。たちまち消え失せた幻術の奥から、それを合図とばかりに怒濤のごとき百鬼夜行の行列が溢れ出す！

走る走る、妖怪達のスタンピード。ぴよんぴよんと飛び跳ねる化け傘、巨軀の入道、叫ぶ山彦、柄杓片手の船幽霊。双子の三つ目小僧が舌を出し、どしんと落ちるつるべ落としがけたたましく笑う。

「一番乗り、もらいやす！」

「遅れるな、続けお前ら!!」

競うように先頭を走るは、金長の舎弟の緋鯉に小鷹と、六右衛門方の川島兄弟。負けじと源助や財喜坊がそれに続く。どっと走る狸の群れは、思い思いの化け姿を取って、屋島の坂を駆け下りた。

「お見事でした」

「なになに、これからが本番じゃよ」

次々に走り出してゆく狸達を見つめ、その本陣でマミゾウは愛用の朧車に飛び乗って、大鎧

姿になって軍配を掲げた。大化術を披露した太三郎と共に、屋島の崖を駆け下りる。

それに併走するのは黒塗りのリムジンに乗る芝右衛門、輿に乗った赤岩将監。無数の赤い兵隊を率いた喜左衛門がそれを待ち構え、灯籠の牛車が追いかける。

「行くぞ皆の衆！ 出発じゃ!!」

「三三!!」

一斉に上がる鬨の声。

ぼんぼこ26年9月吉日、夜10時7分。

妖怪大作戦真打の火ぶたは、かくして切つて落とされた。



地響きを立てて、西へ西へと進む狸の群れ。ひっきりなしに化けては変わる変幻自在の百鬼夜行は、たちまち香川市内の人々を叩き起こした。折しも季節は9月の連休。繁華街のサラリーマンたちが驚愕に目を見開き、ゲームにP.Cに向かっていた子供たちが驚きと共に窓から身を乗り出す。

交差点で立ち上がる六つ目の赤信号に、四方の車が急ブレーキをかけて急停車。運転手はあんなぐりと口を開け、ビルドアップした達磨達が披露する四肢の筋肉に見とれている。商店街の

シャッターをこじ開け進む大蛇に、明日の仕込みをしていた定食屋弁当屋の店員が我先にと逃げ出し、飲み屋の客たちは黄金の髑髏に顔を青くして腰を抜かす。ショッピングモールの屋根を飛び越したいただらばつちが、ケーキ屋を屋根ごと引き剥がして甘味を独り占めしていた。屋島をしばし西進し、妖怪の群れは香川駅前をかすめるようにしてなお先へ。走る隼車の上、持ち込んだフライドチキンを競うように頬張って、太三郎とマミゾウは腹をさする。

「もうすこし、腹ごしらえをしておくべきでしたかのう」

「なあに、食い過ぎてはちいと眠くなってしまうじやろう。ひやつひやつひや」

アメリカ大統領のパレードを再現し、力強く『われわれはできる』を叫ぶ芝右衛門に、赤岩将監は動く西洋の天守閣を披露。著作権的になかなか怪しいネズミ達が甲高い声でパレードを繰り広げた。

一路目指すは瀬戸大橋。喧騒と共に、化狸の行列は進む。

「団三郎様、僕も一化け行ってきます」

「あまり飛ばし過ぎるでないぞ、先は長い！」

「はい！」

聞こえているかいのか。佐渡の狸の代表として気負いを見せつつも、源助は駅舎へと向かい、派手に狸火の化術を繰り広げて大いに人間たちを沸かせていた。

くるくると走り回る炎に出動してきた消防隊が放水を試みるが、そこから嘖き出すのは虹の

きらめき。警官達は混乱しながら必死になって無線に呼びかけ続けているが、そこから帰ってくるのは木霊のさんざめく笑い声だ。

「……さて、徐々に暖まって来たかのう」

スマートフォンを開き、SNSのタイムラインを見れば、香川で起きた異変が次々と写真付きで拡散されていた。高度情報社会の面目躍如。地方で起きた騒動とても、今は瞬時に日本中に、世界中に広がってゆく。

「よし、このまま北へ向かう！ 列車に気を付けるんじやぞ！」

小平太にスマホを預け、マミゾウは軍配を大きく返した。狸のスタンピードは、北へと進路を変える。人間達の驚く様子は滑稽で、警察も消防も呆気ないほどにあっさりと吹き飛ばされていく。狸達の士気は高く、意気揚々と進軍は止まらない。ひやあと声を挙げながら、小平太に志郎の兄弟も楽しげだ。

「順調ですね！ マミゾウ様！」

「いや、こういう時間が一番いかん。そろそろ何かあってもおかしくない時間じゃな」

間もなくマミゾウ達の本隊も坂出に差し掛かる。先頭はすでに瀬戸の海に近いだろう。いまのところ予定に狂いはないが、すっかり浮かれ気分の狸達に釘を刺そうと、マミゾウが言ったまさにその時だ。

宇多津の港の沖で、激しい閃光と爆炎が上がる。

「うお!？」

「なんじゃ、ありやあ」

ぴんと尻尾を立て、化狸達は一斉に海を見た。響く爆音は繰り返し、橋の先にある与島櫃石島のほうで立て続けに響く。ただならぬ緊張感が辺りに伝播してゆく。

海の向こう、尋常ならぬ妖力の高まりに、ぞわりと背筋の毛が逆立つのをマミゾウは感じた。太三郎らも同様のようで、皆は一様に顔を見合わせる。

と、同時に泡を食った様子で本陣に駆け込んでくる伝令があった。化け式を引き連れ、進行方向から駆け戻って来た彼らは、大慌てでマミゾウの前に滑り出る。

「ま、ま、マミゾウさまっ!!」

焦りに呂律も怪しい豆狸を落ち着かせ、低い目線に顔を合わせるや否や、またも橋の先で再び閃光と爆発。百鬼夜行の先頭で何かが起きているのは明白であった。

「落ち着いたかの。何があった」

「っ、き、——」

「き？」

「狐です! とんでもなく強くて、でっかくて、美人で、尻尾が九本も……!」

「狐!？」

にわかにあたりが騒然となる。

伝令の豆狸曰く。封鎖された瀬戸大橋の対岸、鷲羽山にすさまじく強い狐が陣取って、狸達の行く手を塞いでいるという。わずか一匹にもかかわらずその力とはんでもないもので、先頭を走る金長、六右衛門両派の武闘派狸を相手に一步も引かぬどころか、ぐいぐいと押し返しているほどの手練れだという事だった。

「狐だあ？ どつから出てきやがった!？」

「ここいらの狐でそれほどの大物といえは姫路城天守の長壁おさかべ姫ひめじゃな。どこから情報が洩れておったかの？」

「だとしても、いきなりそこまで敵対するものだろうかねえ」

「待て、九尾だつてんなら違うだろう。伏見の連中が動いたんじゃねえか」
「いや」

議論百出の皆の推論を遮って、マミゾウは首を振った。膝の上に乗せていた小平太を脇に下ろし、籠車の上に腰を上げる。

「そやつには心当たりがある。儂が相手をしよう。……禅達よ、後は頼む」

「お、おい、マミゾウ!!」

大狸の応答は待たず、マミゾウはたと路面に飛び降りた。着地するや否や、放たれた矢のごとく地を蹴って駆け出してゆく。

風を切り疾走した化け貉は間もなく橋に差し掛かった。行く先を塞がれてこった返す狸の大

行進の間を潜り抜け、頭上を飛び越し、跳ね跳ぶように橋を吊るワイヤーを伝い蹴って、その先頭へとまっしぐらに駆ける。

「大事ないか！」

「団三郎様！」

現場は騒然となっていた。

荒れた路面、軋む橋。焼け焦げたゴムとアスファルトに混じって、嫌なおいが鼻を掠める。乗員が逃げ出し放置された車の陰に蹲る、怪我をした狸が十数匹。致命傷という訳ではないが、かなりの重傷も含まれていた。

惨状を一瞥したマミゾウの頭上を閃光が照らす。大橋の向こうに大きく広がる金色の毛房。ゆらりと動くその流れから派手な光芒の明滅が生み出され、爆発に狸たちの群れが毛糸屑のようになり吹き散らされる。

もはやここは戦場だった。

「てめえら、気合い入れやがれ！　ここが正念場だろうがッ!!」

頬から血を流しつつも、藤の木の小鷹と川島兄弟は、逃げ出そうとする狸を叱咤し、懸命に戦線を保とうとしている。が、それも時間の問題だろう。橋の上から海へと放り込まれ、溺れそうになっている者たちを、巧みな泳ぎで緋鯉が助け上げていた。

なおも弾け進む稲妻と卍の閃光に、マミゾウは小さく苦笑した。

「いささか分かりやす過ぎるのう。化術には長けても芝居は大根じゃな！」

化け貉の高らかな声に、対岸に広がっていた尻尾がぐんと収束する。

小さな姿となったそれは——やはりマミゾウの予想通りの相手。見ずとも分かる。海風に混じるその不快な匂いは、マミゾウにとって良く見知ったものだ。

「下がれ。儂が相手をする」

「マミゾウ様!？」

「あれは儂の知己じゃ。予想は外れて欲しかったがのう」

子狸たちを下がらせ、戦線の先頭に踏み出したマミゾウに——傲然と対峙するのは青白の道服に身を包み二つ房の帽子を被る、金髪の女。

豊かに膨らむ九本の尻尾は、いずれおとらぬ黄金色の金毛である。

大橋の中央、止まったバスの上に陣取つて。腕組みと共に眼下を見下ろすは、幻想郷の賢者、スキマ妖怪八雲紫の腹心、九尾の化け狐——八雲藍。

不倶戴天の敵たる九尾狐の前に、マミゾウはちやりと眼鏡を押し上げた。

「こりゃあ、珍しいところで会うもんじゃのう、八雲の式よ」

「四国が随分騒がしいと、紫様が御立腹だね。はるばる外の世界まで出張だ。まったく、日常業務も終わっていないというのに、余計な手間をかけさせる」

「忙しいのであれば、今すぐに戻ればよからう。負けて無様を晒さずに済むぞい」

「ははっ、これは面白い冗談だな。久々の外界で少しばかり持て囃されて、大した増長じゃないか、化狸風情が」

マミゾウが眼鏡を光らせ訊ねれば、藍はつまらなそうに首を振った。

「一応、知り合いのよしみで警告はしてやろう。……今すぐに仲間を散らして逃げ帰るなら、仕置き程度で済ませてやらんでもないが？」

「出来ん相談じゃなあ。こちらにも事情があつてのう」

「そうか」

「そうとも」

千変万化の化け貉と、九尾の妖狐。二者が笑みを浮かべると同時。

大橋の中央で、天地を揺るがす二つの巨大な妖力がぶつかり合った。

橋げたを軋ませ卍を描き繰り出された光の渦を、隙間なく苦無の弾幕を、化け貉の呼び起こした塗り壁の妖怪変化が受け止める。

「伝令じゃ！ こやつは儂が押さえる！ 皆の衆、先に進め！ 押し通れ!!」

背後に力の限りに叫ぶと同時に、鋭く地面を蹴って走りだしたマミゾウは化力のありったけをつぎ込んで化け式を呼び起こす。獣に、鳥に、蛙に、人型。橋の上を埋め尽くす数百の式が、陸から空から水の中から、藍を包み込むように殺到する。

「させん」

次々に着弾し破裂する式の煙の中、卍の輝きが迸る。八雲の式に力を与える、無限螺旋の原動力。藍は旋回とともに煙を切り裂き、高速回転する輝きで化け式の戦列を薙ぎ払った。

そのまま狸衆の行列に突撃をかけんとする藍に対し、身を呈して割って入ったマミゾウは、十丈を超える大石臼を呼び出して九尾狐の脳天へと叩き付けた。

「喰らえいッ！」

ずがごおんッ、まるで隕石落下のごとき威力で夜闇を震わせる撃音。大質量による容赦のない物理的打撃は鬼とて脳震盪必至の一撃だが、しかし粉々に砕けた石の破片の中から、埃をはたき落とし、澱むことなく立ち上がる姿がある。

「微温いな。紫様のお仕置きのほうがよほど応えるぞ」

「なんたる石頭じゃ……」

藍は額から零れる血を無造作に拭い、破れかけた帽子を脱いだ。金髪の中に、ぴんと尖って跳ねる狐耳。にいと耳元まで裂けた口元に残忍なる笑みを浮かべ、九尾の狐は高らかに笑う。

「思えば、あちらでは体面だの立場だので、存分に暴れられなかったからな。一度、お前との格付けをはつきりさせておくのも悪くない」

「ぬかせ。八雲の大妖の手前、使いつ走りの顔を立ててやつておっただけじゃというに、随分と思いがかるのう」

「調子に乗るな、田舎狸が！」

藍は帽子を力強く地面に放り棄てると、地に両の手を突いた。深く身を伏せ、ぶるぶると全身に力をみなぎらせてゆく。青白の道服が激しくはためき、その背に大きく伸びた九つの尻尾に弾けんばかりの化力がこもる。

ざわざわと黄金色の毛皮がざわめき、膨れ上がる妖力と共に、藍の姿もまた見上げる巨体へと変化していく。

平安の昔、上野国にて三浦、千葉、上総の軍兵、八万余を相手取り、世を乱す太刀小狐丸をばらまいて、陰陽寮の天才「指神子」安倍泰親をも向こうに回して暴れ回った大妖怪、白面金毛九尾狐。

金毛九尾の化身の巨体が、瀬戸の大橋を揺るがし顕現する。

たちまち放たれる狐火と苦無弾幕の嵐。牙を剥き出し鋭く唸る九尾狐の吠え声に、狸たちはたまらずに震えあがった。

「ふん、派手な趣向じゃのう。閨で帝を誑かすだけが能の九尾と思っておったが、どうして骨もありそうじゃないか。見様見真似じゃが——借りるぞ、ぬえ」

——恨弓「源三位頼政の弓」。

妖狐の前に一步も引かず、佐渡の化け貉が身を震わせて変化するのは、辟邪の武、摂津源氏棟

梁の一矢。

「妖怪退治には、こいつが一番効くじやろう!!」

ぱあん。涼やかに鳴り響く弦の音。放たれた一矢は瞬く間に二、四、八、十六と数を増し、九尾の巨体へと降り注いだ。魔を払いあやかしを退ける源三位の鏃が、藍の脚を縫い止める。

「ぐウ……ッ!!」

喉を震わせ苦悶をあげる藍の巨体の足元へ走りながら、マミゾウは肚に息吹をこめ、ありったけの力で腹鼓を打ち鳴らす。

「構わん、押し通れ!! 道はお主らの通った後にできる!」

どおんと打ち鳴らされる一喝に、恐怖と混乱に寄り集まって震えていた狸達が我を取り戻した。行列を先導するマミゾウの姿に励まされ、狸たちが雪崩を打って橋になだれ込む。マミゾウは狸達の先頭を庇ように、跳びそうになる葉帽を掴み、地を蹴り駆けた。尻尾にあらん限りの妖力を漲らせ、脈打つ鼓動のままに走る、走る、走る。

「させんと言ったはずだッ!」

「お主の相手は儂だと言ったじやろうがッ!!」

言うが早い、マミゾウは鍛え上げた歯節のまま、藍の首筋に思い切り噛み付いた。金毛の毛皮にはばちばちと電撃が走り、高熱が化け貉を焼き焦がさんとするが、マミゾウはなお構わず、藍の喉元に立て続けに喰らいつき、力任せに橋げたへと叩き付ける。

ずうんと傾く巨軀がアスファルトを揺らし、橋を吊り下げるワイヤーが激しく波打つ。

「先に行くぞい、佐渡の嬢ちゃん！」

その隙を縫うように、狸の軍を引き連れて太三郎が走る。その隣で六代目金長が、後に続く狸達を鋭く叱咤し、四角い顔を深く傾け、疾走する。

赤岩将監が、金平が、お袖が、佐渡の貉四天王が。小鷹に肩を貸した七代目金長が。九尾を押さえ込んだマミゾウの脇を、全速力で駆け抜けてゆく。

「行かせるかアッ!!」

藍が吼えた。もがくように四肢を振り乱し、尻尾を力任せに振り回してマミゾウを吹き飛ばし、九尾を揺すり妖力を漲らせる。

黄金色の尻尾の毛がばあつと散ると同時に、それぞれが狐の分身へと身を変じた。その数、優に千を超える。無数の奴隷^{スレイブ}式の同時使役。それは八雲の大妖の補佐として式の扱いに長けた藍ならではの芸当だろう。行動を単純化したとはいえ、自立稼働する式を同時に千以上体も動かすなど、正気の沙汰とは言えぬ。

「ちい……ッ」

追い縋る妖狐の分身は、続こうとした狸達を阻止し、先を行く狸達に追い縋る。即座に十体の分身を呼び妨害を試みんとするマミゾウだが、さしもの佐渡貉総大将とて、これを一人で相手するのは無謀だった。多勢に無勢、百体以上の九尾狐に囲まれて、瞬く間に海の上へと追い

詰められる。

分身は貴様の専売特許ではないとばかり、にまりと口元を歪ませる九尾に、マミゾウが齒嚙みした、その刹那。

橋上を一陣の疾風が駆け抜けた。姿の見えぬ色の付いた風。それは見る間に橋を突つ切り、狐たちの戦陣に突き刺さる。神話の光景のごとき一撃に、幾重にも重ねられた強固な防護は紙のように弾け、九尾の戦線は大きく崩れる。

完全な不意打ちに、藍の分身は次々に式を碎かれ、その場に転がってゆく。成す術なく吹き飛ばされ、橋の欄干に辛うじて掴まりながら、藍が驚愕に眼を剥いた。

「あれは……」

狸たちは知っている。

全国津々浦々に、あまねく勢力を誇る稲荷狐。京都伏見の大將を頂点と抱き、千本鳥居に正一位の位をもって神意の鎮護をもつ忌々しき彼らに、唯一反抗しうる強大な化狸を。

猛り叫ぶその威風を見て、狸たちは歓声と共にその名を叫んだ。

四国八百八狸総帥、隠神刑部ここにあり。

「……やってくれるのう、刑部どの!!」

「敵陣に穴が開いたぞ! 突っ込め!!」

マミゾウの喝采が再度皆を奮い立たせた。いまだとばかり、狸達は進軍を再開する。

「くそッ、させるか、邪魔をするな——!!」

「悪いが、これ以上手をかけておられぬ」

もがく藍の鼻先で、マミゾウは渾身の力を込めた爪を、九尾狐の腹へと叩き込んだ。叫びをあげた藍は、化け貉を振り払わんと巨軀の爪を振るうが——それよりも早く、マミゾウは次の化術を放っていた。

「かアッ!!」

息吹とともに練り込んだ化力が、ざわめく渦となつて立ち上がる。

眼下の海を波立たせ、海面がずおうと持ち上がった。途方もなく馬鹿でかい二つ目の巨大な海坊主。それはマミゾウが瀬戸の大渦を化かしたものだ。海坊主は、水のいびつな五指をもつて九尾狐に掴みかかる。途端に身を翻し、飛び退く九尾。

「かかか。見たぞ。おぬしの式とやらは、水が苦手じゃったのう?」

「——ッ!?!」

先程、藍はマミゾウを海の上へと追い詰めた。九尾狐とて無意識のうちにとつた行動であったが、これは彼女が最も恐れる攻め筋であつたのだ。藍は己の失策に顔を歪めるが——遅い。マミゾウは飛び退いた藍の懷へ鋭く飛びつき、がっきとその身体を掴み極める。がぶりとその首筋に唾液に塗れた牙を立て、幻術妖術を封じるのも忘れない。

「続きは幻想郷でやるとしよう。いまは先を急ぐのだな」

マミゾウはそう言つて、藍諸共に橋の欄干から身を躍らせた。それを負うように、海坊主も二者の元へと殺到する。

「マミゾウ様!!」

「おお、危ない、落ちるぞ!」

「で、でも、大親分が!」

疾走する朧車の上、小平太の叫びもむなしく、瀬戸の海に激しい水柱が立て続けに跳ね上がる。空の上に大波を広げ、ざあと橋の上にまで大きく水飛沫を撒き散らしてゆく海面が、ざわざわと夜の中に揺れ橋脚を軋ませて、波立つ。

満月の明りが白い虹を描く、ざあざあと降り注ぐ海水の雨の中。狸達の一団は、瀬戸の大橋を奔り抜けてゆく。

……やがて、海の泡立ちが消え、大波が静まり、元の静寂を取り戻す中。

黒々とした海面をざぱりと押し上げて一匹の狸が姿を現した。

「げほっ、ごほっ」

思い切り水を吐き、ぜいぜいと肩で息をしながら。濡れ鼠となつた身体を橋げたの上に持ち上げて、マミゾウはびしょ濡れの髪を払い、ひびの入ったレンズを拭う。

静けさを取り戻した海の中、金毛九尾の狐の姿はどこにも見当たらない。匂いも妖気もきれいに消え失せ、どこかに隠れ潜んでいそうな様子も感じとれなかった。まさかあの程度で溺れ

死んだとも思えないが、少なくともこの場はどこかに退いたのだろう。

「初っ端からこれか……先が思いやられるのう。あやつが出てきて、この程度で済んだのは僥倖じゃったかもしれないが」

満月は変わらず空にある。

疲労に激しく上下する胸を押さえ、佐渡の化け貉はうんざりと呻いた。

▼3

マミゾウが先行していた百鬼夜行に追いついたときには、既にJR岡山駅の周辺は大騒ぎとなっていた。時刻はまもなく深夜の零時。そろそろ人間はねぐらに籠って寝付いていてもおかしくない時刻であるが、今宵ばかりはそうではない。

駅前を闊歩するのは、古史博学で知られる大宮八幡の金平狸が化ける古今無双の大英雄。犬飼猛、楽々森彦、留玉臣の三臣を引き連れ、掲げる旗は日の本一四道將軍。桃から生まれた勇氣の子、吉備津彦。それをはるか総社の山から見下ろし、配下の虎縞牛角と共に応戦するのは鬼ヶ島の城主、温羅である。白刃閃き稲光舞い、投げ落とされる大岩はぐわらんぐらわんと大地を揺らす。

その隣ではどこからか現れた軽便鉄道が駅前の路面鉄道を占領し、道後温泉の湯気の中には坊ちゃんと山嵐が赤シャツを追いつけ回す。運転席に飛び乗り、制帽を被って微笑む女学生は、松山城下の八股お袖だ。

地域密着、趣味丸だしの大化術。実に愉快結構と笑いながら、そこここに暴れる変化不思議の間を掻い潜って、マミゾウは新幹線のホームへと走る。

運賃箱に榆の葉を突っ込んで改札を飛び抜け、階段を登れば、しゅうしゅうと煙を噴く新幹

線が、乗客の狸達を満載に詰め込んで、いまかいまかと発車を待っていた。

足を止めてよおく見れば、そこかしこのデイトールが怪しいが、この際走れば贅沢は言っていない。

「マミゾウ様!!」

駆け込んできたマミゾウの姿を認め、小平太がぱつと顔を輝かせた。志郎が窓から身を乗り出してぶんぶんと手を振る。

「遅えぞ、マミゾウ!!」

「ええい急かすな。疲れておるんじやぞ!」

禅達に言い返しながら、マミゾウはぜいぜいと息を切らせて最後のダッシュ。転がり込むように乗降口のドアを潜れば、ホームには高らかに発車ベルが響いた。

「よかった……大丈夫ですか!? お怪我は!?!」

「狐ごときに負けやせんよ。ありがとうな」

駆け寄ってきた兄弟の頭をわしわしと撫でてやり（濡れ鼠なのを忘れていて彼等もびしよぬれになった）、マミゾウはどかりと床に腰をおろして手足を投げ出す。

二つのホームに並ぶのは、青と緑の上りと下りの新幹線。廃車になって捨てられていた古い客車をモデルに、多くの狸達の化力を依り合わせ、作り出した今宵の足である。ここで百鬼夜行は二手に分かれ、東京と博多へと東西の終点を目指す。

西軍を率いるのは壬生川の喜左衛門、新居浜の少女郎ら東予の狸と、吉野川の赤岩将監、鎮十郎、また六代目金長に率いられた高須隠元らの金長一門だ。向かいのホームの列車に乗り込む同胞たちも、また力強く手を振り返していた。

「団三郎様、俺たちはここで！」

「うむ。精一杯派手にやってくれ。期待しておるぞ」

「ほほほ、任せるがいい。——どおれ、行こうか!!」

喜左衛門の号令一過、化け新幹線が汽笛を吹いた。高らかにいななきを響かせて、がたんとレールを揺らし動き出す新幹線。その左右のホームからは旅順要塞の攻略で敵将クロパトキンを脅かしたという、喜左衛門の紅い兵隊がずらりと並んで礼砲を打ち上げた。

「俺達も行くぞ！」

「おう、皆、ここからが本番じゃ！ 気を引き締めていけ!!」

動き出す列車の中、狸達が忙しなく準備を整えてゆく。

東軍を乗せた新幹線も、発車ベルと共に岡山を発った。眼下でなおも化術を披露している金平、お袖達に手を振る。彼らはここで追撃の足止めの役も担うのだ。

ほどなく、化け新幹線はみるみる速度を上げて機動に乗り、一路東を目指して疾走する。人工のそれとは違い妖力で作っただけあって、乗り心地は快適。特にシートはふかふかのふわふわである。210キロの高速を感じさせぬ居心地の良さに、内部に乗り込んだ狸達は、大作戦

の最中である事も忘れ、目の前を行きすぎる夜の町並みに顔を輝かせていた。

ぱぁんと汽笛を鳴らし速度を上げる新幹線の隅、ふうと額の汗を拭い、マミゾウは座席にもたれかかった。びしょ濡れの懷を探り、動かなくなったスマートフォンを覗いて吐息。ぽいと荷物に放り込んで、誰ぞいんたーねつとが見れるものはおらんかと豆狸を呼びつける。

「私ので良ければお貸ししようか」

「かたじけない」

芝右衛門の厚意に甘え、端末を借りてネットを巡れば、四国から始まった騒動はすでにSN Sを席卷していた。深夜とは思えない速度でタイムラインが流れ、目撃情報や動画が乱れ飛び、ネットニュースがそれを拡散している。

正体不明の大騒ぎに、幻覚だ事故だ事件だ天変地異だと推測妄言が飛び交うさまを確認し、マミゾウは大きく頷いた。政府も無視はできないようで、三十分後に官房長官が緊急会見を行うという告知も広まっていた。

確実に、前回の大作戦より騒ぎの規模は広がっている。

「ここまでは予定通りじゃな。……あとはこのまま、何処まで保つかじゃが」

一度は退場したものの、藍が再度襲ってこないとも限らない。あれだけ挑発してやったのだ、追いかけてくるならば西ではなくマミゾウのいる東軍を狙うだろうと算段を付けているが、無論その確証はない。タオルを借りて顔を拭い、マミゾウは声を張り上げる。

「皆、持ち場は事前に決めた通りじゃ。出番が後の者はできる限り体を休めよ！ 動けなくなつたものは奥の車両に寝かせておけ!!」

新幹線の姿を借りてとはいえ、時速210キロを保つのは、化術に長けた狸としてそう簡単なものではない。化術というのはあくまでその場を凌ぐ一時的な力。単純な仕組みのものでも持続させるのは難しく、長時間、化かしたものの姿を保持するのはかなりの高等技術なのである。

今回、この新幹線を作るにあたっては、乗り込んだ狸達がローテーションを組んで各部機関や施設を分担し、順繰りに交代してゆく方法を取っていた。これなら一人が分担する部分は単純なもので済むが、万一誰かが走行中に気を抜けば、即座に全体に波及する大事故にも繋がりがねない。

今日の為、化け新幹線を担当する狸達は半年以上も前から猛特訓を重ね、全体練習にも余念がなかったが——いかなるトラブルが起こるかは、本番になってみなければ分からない。慎重になるに越したことはなかった。

備前を抜け、姫路を通過し。化け新幹線は一路東へと速度を上げる。途中でも所要所に化かしを披露しながら、一行はほどなく神戸へと差し掛かる。到着を知らせるアナウンスの中、立ち上がるのは東光寺の禅達以下、佐渡の貉四天王だ。

「さて出番だな。お前ら、恥ずかしい真似をするんじゃねえぞ!!」

「あまり気負いすぎて尻尾を出してくれるなよ?」

「手前じゃあるまいし、誰がそんなへマするかよ！ 行くぜ！」

軽口も鮮やかに、禪達らはひよいと新幹線の屋根へと飛び出した。財喜坊、源助、お杉も短い挨拶と共に後へ続く。

「さて、佐渡貉の底力、四国の連中にも教えてやろうじゃねえか！」

両手を合わせ、楡の葉を手に、呪文を唱え。思い思いの集中一過。漲る妖力はあたりを満たし、神戸の港に巨大な帆船となつて着岸した。佐渡の黄金を満載に詰め込んだ宝船は、六甲おろしもなんのそのと貿易の港から上陸し、街の中を駆け巡る。

ずしんと足音を立てて進むは、巨大な仏像。片目の阿弥陀仏が極楽浄土から輝きを放つ。

一方、ポートアイランドの海面からは巨大な魚が空を跳ね、異人街では驚く人間達を絢爛豪華な邸宅が出迎えた。

じゃらんじゃらんと、そこら中に撒き散らされた小判が跳ね、黄金の輝きを瞬かせた。驚きの中にそれを拾い集めようとする人間たちの鼻先に、けたけたと笑う少女の幻影。皿にお椀に徳利に、カメラにケータイ、手帳にボールペン。そこらじゅうの道具に手足が生えて、ぞろぞろと行進を始める。

「やるものだねえ。私達も負けていられない。行くとしよう」

「はい、父上！」

「……ああ、騒がしいのう、まったく」

大阪では、淡路の芝右衛門と穴観音の六右衛門一派がその化力を振るった。穴観音の狸達が炎に包まれ落城する大阪の陣を再現し、戦場を走る武將たちの果敢なる最期を再現すれば、芝右衛門はいささか凄惨なその光景へ定式幕をかぶせ、イケメン武將の無双演義に変えてゆく。

芝居の幕のカーテンコールはそのまま、淡路七狸達の舞台演芸へと変わり、人間たちの反応は驚きから笑いへと切り替わる。無論、厳しい批評と文句は流石のもので、たじろいだ狸達は毛玉に代わって舞台裾へ転げ落ち、人々の爆笑を誘った。

「爽快じゃのう……！」

次々に繰り出される名狸渾身の化術。どれもこれも、歴史に残るほどの大化術の大盤振る舞いだ。東へ走る化け新幹線を追うように、都市には皓々と明かりが灯り、人々は眠りを忘れてこの夜の百鬼夜行に夢中になっていた。テレビが特番を組み、取材のへりを飛ばして新幹線に併走する。高速を走る車も、渋滞の中にこの騒動を見て歓声を上げた。

湧き起こる声は次々に伝播し、夜半に眠っていた人々も目を覚まし始める。

「——団三郎様、もうすぐ京都です！」

「……そして、そろそろお出ましか」

忌々しげにマミゾウは空を見る。ぐんと全身を包み、まとわりつくような感触があった。取材のへりが突然に方向を変え、迷ったように明後日の方向へと飛び去って行った。

京都を包む霊的守護の結界である。上空に目を凝らせば、へりに変わって空を飛ぶ鞍馬の天

狗たち。隊伍を組み威圧を続ける彼らは手に手に団扇を振るって攻撃準備を整え、行く手の伏見稲荷には千本鳥居を皓々と輝かせて、神服の狐たちが睨みを聞かせている。

ここは本邦妖怪の本拠にして、最も歴史ある街だ。古くより根を張った彼らの縄張りであり、騒ぎを起せば途端に監視網がそれを捉え、手勢が飛んでくる。狸達の乱痴気騒ぎは、当然のように天狗や狐の不興を買っていた。

「どうする、マミゾウよ」

「どうするも、今更後には退けんぞ。しつかりせんか！」

「そうは、言うがなあ……」

出発から約4時間。早くも狸達の中には息が上がり始めている者たちがいた。化力妖力を使い果たし、疲労困憊で突つ伏す者たちが次々と溢れ、小平太達はその手当に奔走している。

多くの狸達は、その総帥である名狸が治める領土の中で生まれ育ち、そこを離れるものは少ない。ゆえに彼らのほとんどは、現代社会で妖怪が力を振るうことの意味を実感していなかった。霊的守護の無い場所で力を振るうことは、雪山の中で裸になるようなもの。急速にその力を奪われ消耗していくことに他ならないのだ。そこへきてこの京都の結果である。

陰陽と修験に己を組み込み、都の正式な官位を得た天狗や狐は、この妖怪封じの結果から逃れることができる。対して余所者の狸たちは、てきめんにその効果を受けた。

「……こいつはいかん。予想以上じゃ」

化学エンジンの出力が一気に低下し、新幹線はみるみる速度を失っていく。京都の領内に入ってわずか数分だというのに、消耗が予想以上に速い。このままでは東京どころか、途中で新幹線の車体すらも保てなくなる。

己の計算違いを呪い、マミゾウが牙を軋らせたその時だ。びようと空に一陣の風が吹き、たちまち竜巻となつて狐を、天狗を残らず洛内の空から吹き散らす。

「ねえ、兄ちゃん、あれ何？」

ぽけらつと空を見上げ、志郎が兄の袖を引いて言う。つられて見上げた小平太もまた、ぽかんと口をあけていた。洛内の空を悠々と飛ぶ三隻の納涼船。一つは珍妙な格好の茶室である。

その先頭——『万福丸』の旗を掲げた甲板でピカピカと輝くのは、派手な飾りつけをされた叡山電車である。

「あれは——!？」

「佐渡の二ツ岩団三郎様、そして当代金長様、屋島の禿狸太三郎様とお見受けいたします!!」甲板に立ち朗々と叫ぶのは、どこか惚けた気配を保つ青年である。隣には愛らしい栗毛の少年が、おっかなびつくり酒瓶を抱えて立っている。

派手な電飾に七福神を乗せた叡山電鉄つきの宝船は、比叡の山を駆け降り、そのまま京都の市内を突っ切つて、マミゾウたちのレールに並走する。

「ゆえあつて、兄矢一郎はこの場に参ることは叶いませんが——下鴨総一郎が一子、矢三郎。

兄矢二郎、弟の矢四郎。お手伝いをさせていただきます！」

ひっく、叡山電鉄がしやつくりをする。あたりに漂う甘い酒の匂いは、しこたま赤玉ポートワインを飲んだ証拠だろう。三人上がった名前の中で姿が見えるのが二人ということは、あの叡山電車は狸の化けたものか。マミゾウは速度を落とした新幹線の窓を無理やりにこじ開け、納涼船へと叫ぶ。

「その化けぶり、見事！ 下鴨総一郎どのが良いご子息をお持ちになったな！」

「恐縮です！」

鞍馬の空に異変があつた。いくつもの黒い翼が、一斉にこちらへと飛び立ったのだ。やべえぞと叫ぶ新幹線内の狸たちだが、甲板に立った青年が、落ち着き払って懷から取り出した扇を招けば、たちまちごうごうと嵐が巻き起こり、空の天狗達を残らずはたき落としてしまった。叡山電車はびかびかと電飾を放ち、漢字のサーチライトで狐たちを威嚇する。

いずれもそうとう強力な宝具であるが、それを自在に使いこなすとはさすが京都の名門といったところか。

「この場は僕たちが引き受けます！ 皆さんは、どうぞこのまま、先を急いでいただきたい！」
「宜しいのか！」

「面白きことは良きことなり！ 阿呆の血のしからしむるところ、存分にお見せいたします！ 矢二郎兄さん、矢四郎、やってしまえ！」

言うなり、青年の隣で少年が抱えていた瓶を思い切り振りかぶり、空いた新幹線の窓に放り込んできた。慌てて受け止めたそのラベルは——夷川の偽電気ブラン。

荷物が届いた事を見届けるや否や、納涼船はぐうんと舳先をもたげ、隣を走っていた別の船に体当たりを仕掛けた。どしんと重音が響いて、甲板の狸達がすっ転ぶ。

「なっ、なにをしやがるんだ！」

「造反有理！ 造反有理！」

ぶつけられた甲板の上で、双子の狸が騒ぎ出す。すわ仲間割れかと呆気にとられるマミゾウの前で、そちらの船は怒り狂ったようにどこからともなく山と花火を引っ張り出し、下鴨兄弟の万福丸めがけて撃ち上げ始めた。

すると、こちらでもまたそれを見計らったかのように、万福丸からも反撃の火花が飛んだ。どんぱんどんぱんとお互いに飛び交う花火の中、二隻の船は天狗も狐も巻き込みながら空中戦を始める。三隻目の茶室はそくさと距離を取ろうとしていたが、これまた目敏く見つけた花火の標的になり、こちらも次々に応戦を始めた。

まさに、天狗と狸と天狗が三つ巴。驚く人間達を蚊帳の外に、しつちやかめつちやかの大騒ぎである。

「……どうもあちらは、夷川の船のようですね」

「下鴨と夷川の御息息は、どうにも不仲と聞いておったが。なんともまあ、型破りなことよ」

指で作った丸眼鏡を覗き、七代目金長が呆れた様子で肩を落とす。京都の狸の留学受け入れ先としては、複雑な気持ちであろう。呆気にとられるマミゾウへ、船の上から手を振りながら。そして、どおんと洛中の空に咲く大文字の大火火。

京都の狸たちは、誰よりも派手に夜を彩る。

「取り敢えず、ここは彼らに任せようじゃないか。……さあ、まだまだ半ば、長丁場じゃ！ 先を急ぐぞ！」

偽電気ブランをぐいと叩って気合を入れ直し、耳の先、尻尾の先までをぱちぱちと電気の刺激に震えながら。マミゾウは加速を再開した新幹線の運転席で、さらに声を張り上げた。



千変万化、百鬼夜行。化狸の道中はなおも続く。

琵琶湖では本陣狸大明神とその門徒がアイヌの伝承を再現し、雪とつららで湖面を凍りつかせ、名古屋では善光寺の燈籠狸が千本の燈籠を立てて、金の鯽を巨大化させ、雄雌二匹にまたがった両雄が丁々発止の名勝負を繰り広げてみせた。

関ヶ原にはマミゾウと禅達が総大将に扮して西軍東軍が布陣し、天下分け目の大決戦を繰り広げ、静岡では三保の松原にUFOに乗った天女が舞い降りて、宇宙戦争の楽を鳴らす。

賑々しくも華やかに。いつ終わるともしれぬ百鬼夜行。しかし、強行軍の中で次々に脱落者が出始め、東へ走る新幹線は一両、また一両と切り離されては短くなつてゆく。

この日のために鍛えに鍛えた狸達とて、長時間の難所続き、数百キロを踏破していよいよその限界を迎えつつあったのだ。力尽きた狸が倒れ欠けるたび、その速度もいまや当初の六割ほどにまで落ち、もはや超特急とは言い難い。

力尽きた者たちにはそれぞれ保護に十分な人員を付けたため、すぐに安全な場所まで非難するだろうが——今や東海道をひた走る列車の中に残る狸の総数は、出発時の四割弱。芝右衛門と芝助は愛知を抜ける難所で相次いで倒れ、六右衛門方も姿を消した。マミゾウの頼みの綱の佐渡の貉四天王も脱落者の保護のために一人離れ二人離れ、いまや誰も残ってはいない。

「——皆の衆、見よ、富士が見えてきたぞ！」

運転席から、声を振り絞つてマミゾウが叫ぶ。しかし、この国一番の霊峰を眺め、空高く浮かぶ満月の明りを浴びても、四肢から抜けた力が戻らない。叫ぶマミゾウの声も、それに頷く狸達の応答も、どこか弱々しいものだった。疲れに時折、こくりこくりと舟を漕ぎながら、小平太と志郎も懸命に、倒れた狸達の介抱をしていた。

屋島を登つて五時間半。もはや狸衆たちは疲労困憊、化け新幹線も肩で息をしながら、それでもなお気力を振り絞つて駆けるので精一杯。併走する魍魎魍魎の百鬼夜行も、いまや青息吐息である。東西の線路を時速200キロで走りながら、次々に大化術を繰り出すのは、日本中

の狸の力を結集してさえ、想像を絶する消耗を強いていたのだ。

（日の出までもうあまり時間が無い……まずいのう、これ以上遅れると取り返しがつかん）

その時だ。月明かりに浮かぶ霊峰富士、3776メートルの山を見上げ、これまでじつと座禅を組み、氣力を充実させていた重鎮がついに腰を上げた。

「どれ、そろそろ儂の出番かのう」

「太三郎殿、ご無理をなさるな」

屋島の禿狸は、これまで新幹線の動力機関に休まず力を送り続け、この超特急の速度を維持し続けてきた。その上なおここで持ち場の化術を披露しようというのだ。マミゾウも流石に不安になって声をかける。

「なんのなんの、この老いぼれはここまでただ乗りをさせてもらっておっただけじゃないか。そろそろ働かんと、若い衆に示しがつかんどのう。ひやつひやつひゃ」

太三郎は譲らない。その目元には黒い隈が浮かび、明らかに息も上がっている。決して楽な状態ではないだろうに、それをおくびにも出さぬ。その強い意地の中に、かつての多摩騷動への積年の想いが込められているのは容易に想像がついた。

御歳千二百歳という、小柄な老狸が富士山を見上げる最中、その傍に走り出す影が二つ。

「及ばずながら——義父にかわり、七代目金長が御伴を務めます！」

「同じく隠神刑部が一子、犬神中将もここに！」

そう言つて左右に控える若狸二匹。奇しくもここに、当代の四国三大狸が揃う事となつた。
「ほう、言うたのう金長。犬神。……足を引つ張るでないぞい」

「無論ですー」

若狸の声に破顔一笑。太三郎は腕まくりをすると、むうんとその全身に力を込めた。枯れ木のように小さなその身体が、凄まじい化力を巡らせて溢れ出す。

「はあああああ!!」

三狸の声が唱和する。ぼんと膨らむ三つの尻尾、たちまち飛び出す丸い耳。

力強く突き出された手のひらから、溢れ出した雷雲のごとき妖力化力が化け新幹線の車内を駆け巡り、そのまま車体の端から飛翔する龍となつて空に飛び出した。天高く一声吠える龍神に、たちまち雷鳴が鳴り響き、うねる空には風神雷神が揃つて姿を見せ、稲光の轟音を響かせ嵐を呼ぶ。

時速210キロの線路の上、瞬く間に風雨がうねり過ぎゆけば。見るも鮮やか天晴れと、雪渓を残し燦然と輝く霊峰の朱。

それは、昼夜をも化かす驚天動地の大化術。

樹海の園に鰯雲、夜空に浮かぶ赤富士は、空に聳える凱風快晴。

「まだまだじゃ、行くぞい！」

張り上げる意気も高く、太三郎の化術は続く。

武州玉川、山下白雨、常州牛掘、甲州伊沢曉、神奈川沖浪裏。

次から次へと切り替わる富嶽の様は、北斎の見た三十六景。

裏富士の十を添えて四十六の富嶽景が、月下の夜に再現される。十番勝負など小僧の遊び、鼬よ狐よ見るがいい、これが化狸の化術じやとばかり、屋島の禿狸は本物の富士を用い、名景の全てを再現してみせた。

「これで仕舞じやあッ！」

そうして。四十と六が並んだ光景の最後。懸命に追隨する金長、犬神を振り切らんばかりの氣迫で披露される大トリは、太三郎の懷から飛び出す白い灰。

東海道の夜空に高く、空を覆わんばかりに広がるは。

この国で一番高い山から、はるか天に伸び、燦然と輝くひとすじの桜。

「枯れ木に花を、咲かせましょう！」

歌聖西行が生涯を賭して求め、月の姫が恋をした、この国一番の花の象徴。

櫻華絢爛。富士の山の頂から、見上げんばかりに伸びる桜。

ほの紅く、そして白い花卉は空一面を覆い尽くし、ざあと満開の桜吹雪を散らす。筆舌に尽くしがたき常春の桜が、名月の下に咲き誇る。

人も、狸も、誰も彼もが。
ただ時を忘れたかのように、
それを見つめ——言葉を失っていた。

▼4

満開の桜の下、青木ヶ原の樹海を潜り、天下の險たる箱根の山をいざ越えて。化け式の新幹線はなおも行く。熱海湯河原の温泉を潜り、小田原城下をひた走る。

伊豆には黒船を率いて開国を迫る異国と、それを打ち払わんとする江戸の侍が闊歩し、天下の險では金太郎に率いられて、ご当地ゆるキャラがどんちゃん騒ぎの大暴れ。

長かった道中もいよいよ終盤。妖怪大作戦真打は、まもなくその終着地へと辿りつこうとしていた。

「そうつと運べ、そうつとじゃぞ！」

「はい。わかってます！」

静岡から伊豆。半時間余りにも渡つて、北斎富士と満開の桜を咲かせ続け、ありつたけの力を注ぎ混んだ太三郎は、やり遂げた表情で力尽きた。

ダウンした太三郎を特製のベッドに乗せて、新幹線はさらに東を目指す。

「……ひやつひやつ……どうじゃ、見事なもんじゃったろう……」

「助かりました。あとはお休みくだされ、太三郎殿」

憔悴しきった太三郎に、金長がつきつきりで濡れ手ぬぐいを変えている。金長、犬神二人の

助力もあつたとはいえ、都合半時間にも渡って、自分の担当である大化術と新幹線の動力の二つを支え続けたのだ。

屋島の禿狸の底力、恐るべし。三名狸などと呼ばれているが、とても自分などが並べられて良い相手ではないと、マミゾウは感服するばかりである。

「……皆、大丈夫か……!!」

すでに一両のみとなった新幹線の最前列。力を振り絞って列車の機関へ動力を送り込むマミゾウに、もはや答える声はない。名狸はその全員が力尽き、残る狸衆もこの新幹線の形を保つので精いっぱい、誰も返事をする余裕などないのだ。

差し入れの偽電気ブランは瓶の底まで舐めつくし、イモリの黒焼きに栄養ドリンク、積み込んでいた精力剤もすっかり尽き果てている。

「……くそ、あとちよつとじやと言うに……」

かく言うマミゾウも、目の周りに黒く狸隈を浮かばせていた。昔話などでよく語られる。不様に目の周りを染めるこの黒い模様は、狸の化力気力切れで起こる現象である。

小平太も志郎も、既になけなしの化力を使い尽くして狸の姿に戻り、ふわふわの毛玉になってマミゾウの足にしがみついていた。狸大学の天才児、犬神中将とて例外ではない。

マミゾウは歯を食いしばって新幹線の速度を維持し、運転席から天を仰ぐ。

空の端が白み、間もなく夜が明けようとしている。

まもなく妖の時間は終わり、人の時間がやってくる。祭の終わりは近い。

(……まだじゃ、まだ……っ)

遠のきそうになる意識を、腕に噛みついて繋ぎ止め。マミゾウは懸命に、化け新幹線に化力を注ぎ込む。

途中で別れた同朋達は上手く帰還できただろうか。西軍の喜左衛門たちは首尾よく済ませただろうか。皆、無事にやり遂げて逃げ切っただろうか。

化け貉の胸中で思いは巡るが、それを確かめる術はない。ネットの騒ぎは、ニュースの続報は。機械は水没し、無駄な妖力も一切残らず、どうやっても確認する手段がないのだ。一時はあれほど騒めていた街中の人々の声も、今はもう遠く聞こえなかった。

万人に届く大騒ぎ、世を揺るがす大騒動と言えど、夜を徹して騒ぎ続けるには足りなかったのか。それほどに今の世は、あやかしを不要としているのか。疑いを挟み弱まる心を奮い立たせ、マミゾウはぜいぜいと軋む新幹線の車輪に鞭を打ち、肚の底から振り出した力を送り込んで必死に速度を上げようとする。

もう始発の新幹線の時間だ。ぐずぐずしていれば、対向してやってくる鉄の塊に全員まとめて吹き飛ばされてしまう。

「団三郎、様」

太三郎を寝かせたベッドの脇、息も絶え絶えに声を上げるのは、七代目金長だ。さわやかな

様相はすっかり乱れ、こちらにも疲れ切つて目元の狸隈も酷い有様だ。しかしいまだ意識を保ち人間の姿を保っている。名立たる化狸が次々に脱落していく中、あの若さでよくここまで付いて来たと、むしろ感動すら覚えるほどであった。

「もう、皆、限界です……」

「わかつとる！ あと少し、もう少しだけなんじゃ……せめて、あともう何匹か、化力があれば済むものを……!!」

「団三郎様!! もう……っ!!」

金長の悲鳴と共に、レールの上で激しい金属の擦過音。ぜいぜいと苦しげに咳を繰り返した化け新幹線が、ついにがっくりと車体を落とした。車輪が力を失い、溶けたチーズのように垂れ落ちる。

狸の変じた新幹線は、その形を失い、もはや鈍行どころか歩いてでも追いつけそうな徐行のノロノロ運転だ。レールを軋ませ、車体を構成する狸達も変化が解けかけて、そこかしこに茶色の毛皮を覗かせてしまっている。

「団三郎様……!!」

それでもなお、運転席にしがみ付き、命を削り、意地で進もうとするマミゾウを。金長は足を引きずり、力を振り絞つても止めようとした。

マミゾウの肩を掴み、金長の振り上げた拳が——ぶんと空を切る。

「うわああっ!!」

直後の悲鳴は、運転席に張り付くマミゾウではなく、金長のもの。

不意に、突然、前触れもなく。突如の加速が車内を襲った。ぐんと動いた足場に金長はバランスを崩し、そのまま尻餅について後ろにころんと転がる。ついでに変化も解けて、ハンサム狸の面相も露わになった。

その場の誰も——マミゾウすら想像もしていなかった思わぬ力で。ほとんど停車状態だった化け新幹線が猛烈な再加速を始める。

「おおっ!!」

ぐんと力を増す車輪。息を吹き返した化学エンジン。突然の復調に面喰らいながら、マミゾウがずれた眼鏡の位置を直し、運転席に這い上がろうとした時。

「あ……………あ……………」

「うん？」

「ああ…………ああああっ、あああああああああっ!!
窓の外を見やった金長が、叫び声と共に目を見開く。

「どうした、金……………」

振り向きざまにマミゾウは見た。

こんな早朝だというのに、駅のホームに並ぶ人影がある。老婆、青年、主婦、家族連れ、サ

ラリーマン、現場作業員、板前、警察官、運転手。あまりにも統一性のない、ごくありふれた姿の人間たちだ。しかし、まだ開場前のホームにずらり揃った彼らは、高々と両手をかかげ、力いっぱい手を振っていた。

そこから流れ込んでくるのは、まぎれもない狸の化力。しつかと束ねられた化術の力が、化け新幹線の尻を掴み、力強く前へ前へと押し込んでくる。

金長は窓にへばりつき、涙をとめどなく溢れさせて叫んだ。

「正吉、お清ちゃん、ぼん吉、権太、佐助、おろく婆さん、……ッ、

——文太ッ!!」

それは。

20年前のあの月の夜に、人間達に敗れ、棲家の森を追われ、狸であることを止めて生きる道を選んだ、多摩の狸達。

「来てくれた……!! 来てくれたんだ!!」

肩を震わせ叫ぶ金長。どつと送り込まれた化力にくたばりかけていた空想化学エンジンが息を吹き返し、新幹線は時速二百キロを取り戻す。

否。200キロごときに留まらない。300、400、速度計を振り切り、時速500キロを超えてなお速く。レールを走る車輪ではまどろっこしいとばかり、ふわり浮かんだ車体は長く体を伸ばし、縞々模様のリニアへと変化した。

今しかない。運転席に這い登り、マミゾウは車内に叫ぶ。

「金長！ 小平太、志郎、太三郎殿！ 皆！ このまま、一気に駆け抜けるぞ！」
「っ、はいッ！」

瞬く間に——目の前を過ぎ去ってゆく光景。力いっぱい手を振るかつての仲間たち。万感の思いで顔を拭い、金長は我を取り戻し、金時計の奥底から振り絞った最後の化力を解き放つ。いつしか、街がざわめいていた。

コンクリートに塗りとくられた冷たい街が、妖怪への恐れと、不思議への興奮に揺れていた。四国から始まった大異変は、各地のネット媒体や緊急速報のニュースを通じて、すでにこの国の全てへ——いや、全世界に届いているのだ。線路を走り騒動を振りまく妖怪狸の百鬼夜行。その到着を今か今かと待ち兼ねて、この国の首都が期待に震える。

ごうごうと風を切り走る化けリニア。その鼻先が品川を超え、進行方向にレンガ造りの駅舎を捉える。この大行進、日本縦断百鬼夜行の最終目的地、終着点。東京駅だ。

「寝ぼけている場合ではないぞ、皆、起きろ!!」

最後の力をこめ、ありったけの声でマミゾウは叫ぶ。ジリリリとけたたましく鳴り響く目覚ましの音に、むくりのそりと寝惚け眼で起き上がる狸達を叱咤し、マミゾウは懐へと手を突っ込んだ。

「まだ、仕上げが残っておるぞ！ 佐渡のニッ岩、一世一代の大舞台、その目を開けてとくと

見るが良い！」

マミゾウの懷。様々なものを化かし仕舞う異次元空間で、佐渡の二ツ岩貉が袖に飼うのは真野灣に住む長太の化蛤——蟹しんの幼生である。

海旁の蟹氣は棲台を象る。マミゾウはこの化け蛤の幻をもつて、佐渡随一の化術の使い手となった。元来、大規模の化術を不得意とするマミゾウが、それをひっくり返すために備え磨いた、いわば団三郎貉の最後の奥の手。

かばりと開いた貝殻の隙間から、化け蛤が幻を吐き出す。

リニアを、駅舎を、この国の首都をまるごと包み広がるのは、佐渡の二ツ岩貉による、妖怪大作戦真打の最後にして最高の一化け。

「行くぞ皆、最後の最後、ありつたけじゃあ!!」

化力妖力、氣力体力の全てを振り絞り。肚の底から息吹を解き放ったマミゾウの叫びと共に。縞模様ハチマキの化けリニアは、レンガの駅舎へと突入した——

▼5

日本国内が騒然となった幻想の夜から、一夜を開けて秋の空。日本晴れの高い空の下、舅東京から海を越えてその向かい、千葉は木更津の證誠寺。

九月とは言えまだまだ残暑厳しい太陽が、さんさんと境内に降り注ぐ。陽射しの中に照らされ続け、マミゾウは暑さに耐えかねてがばりと身を起こした。

「……………」

同時、鉛のように重い疲労が全身を押し包む。体中の関節がばきばきと音を立てて軋み、頭の中ではわんわんと蜂が巣をつついた様な耳鳴りが酷い。疲労困憊の身体と、それ以上に重く痛い頭が、ずきりと視界を歪めた。

境内をちらりと見回せば、死屍累々と横たわる狸達が、もはや一步も動けぬと身を寄せ合っている。

「マミゾウ様……？」

そんなマミゾウを窺うようにこちらを覗き込んでくる小さな目玉。小平太だ。

起きておったか、と声をあげかけ、マミゾウは喉に走る痛みに顔を顰めて咳き込んだ。背中を丸めてむせる佐渡の化け貉に、慌てるふたり。

兄弟に、身振り手振りで持ってこさせた水を飲み干し、マミゾウはようやく人心地ついて大きく息を吐く。

「無事じゃったか」

喉を震わせるとんでもない皸枯れ声は、自分でも驚くほどに弱々しい。ここまで疲れ切ったのは何百年ぶりか。もう煙も出ないほどに化力も妖力も尽き果て、マミゾウは人化の化身もまともに保てず、耳は飛び出し尻尾は広がり、濃い狸隈が不格好に目の周囲を覆っていた。

氣を失ったのが狸の領土であるこの證誠寺の境内でなければ、そのまま衰弱して力尽きていたかもしれない。

「……んむ。他の皆はどうした」

「はいっ、皆さん無事です……!」

兄弟に話を聞くならば、妖怪大作戦真打の最後の一化けの披露と共に、東京の上空を舞った化けリニアは、そのままアクアラインを突っ切って対岸の木更津と跳ね飛んだ。

奇跡的に持ちこたえていた車体もついに崩壊、空中分解してばらばらになった狸達は、茂林寺の使いが引き取っていったという。見知らぬ相手に警戒を覗かせている兄弟に、マミゾウは守鶴のところならば安心だろうと諭す。

各地に散った狸達も、それぞれ避難、あるいは身の安全を確保して帰る算段を探している最中だと報告があったという。ひとまずは、安堵して良いということだろう。

「はあ——……あ……」

重い肩の荷を下ろした心地で、もう一度木陰の地面に身を投げ出すマミゾウ。

「その……お疲れさまでした……」

「んむ」

横たわったまま、横着に頷く。向こうでは青息吐息の金長が、大神、太三郎と一緒にへたり込んでいた。

「あの……大親分！ やったんですね、俺たち。最後までやりきったんですね。あの大作戦を、最後まで……！」

「じゃなあ。皆よくやってくれた。小平太、志郎。お主たちも良く頑張ったのう」

「ありがとうございます！」

ぱつと顔を輝かせる兄弟二人。既にだいぶ元気を取り戻しているようだ。若い事は素晴らしいなと、マミゾウは指を動かすのも億劫な自分と比べて内心で苦笑する。

「これで、なにが起こるんでしょうか……！」

「いやあ、なーんも起こらんじやろ」

「え？」

あつさりとしたマミゾウの返事に、期待に輝いて小平太の顔が、驚きに包まれた。

「今回は気合を入れて化けたからのう、しばらくはネットにもニュースにもあの映像が出回る

はずじゃが、それは単にそれだけのこと。新しく面白いことが起こらなければ、すぐに飽きられて終わってしまうじゃろうよ」

そう。化術というのは、あくまで一時的なものだ。永遠に形をとどめておくことはできない。化かすということは、真実にいつか負けてしまうものなのだ。

「人間たちは薄情じゃからなあ。そう時間も経たぬうちに、今日の夜の事など忘れてしまう。ああ、そう言えば、少しばかり不思議なことがあったなあ」と記憶に残る程度のことよ」

「そんな……じゃあ、こんなに苦労したのはなんだっただんですか!! あんなに頑張つてやり遂げた大作戦なのに、全部無駄になっちゃうつてことじゃないですか!! 大親分は知ってたんですか!! それなのに、どうしてこんなことを!」

「知れたこと。儂らが、狸だからじゃよ」

愚図る小平太につられ、泣きだす志郎。ぽんぽんと二人の頭をそつと撫でてやり、化け貉はにつこりと微笑んだ。

「伊達と酔狂で、人を化かす。己が危ない目に遭ったところで、懲りぬ。狸とはそういうものじゃよ。皆、それを承知で今回は、儂の祭りに付き合ってくれた。狸の矜持のために、命をかけてこの国全てを化かしてくれた」

懷中に煙管を探し——見つけられずにほうと吐息。本当に皆、よくやつてくれたものだ。マミゾウは唇の前にそつと一本指を立て、にこりと笑う。

「いつでも誰かが、ずっとそばにいる」

それを、時に思い出してほしい。素敵なその誰かの名前を。

「都合が悪いとき。妙なものを見たとき。理不尽に戸惑ったとき。そんな時に、人間たちに儂らを思い出してもらえれば、それで良いんじゃない。不思議なことは、面倒なことは、厄介なことは、みな儂ら狸の……妖怪のせいなのだ、とな。この大作戦は、その契機じゃよ。」

儂らはそうして生まれ、そうして人間たちとともに生きた。それは今も変わらぬ。いつでも誰かが、そばに居る。——そういうことじゃな」

「いつでも、誰かが……」

目を丸くする平太の前で、マミゾウは手の中に弄んだメダルを一枚、弾いてみせた。丸く輝くその中央には、どこか間抜けな猫の顔。

「まあ、少しばかり小細工はしたがのう。」

なあに。これもみーんな、妖怪のせいじゃよ」

ごろんと身を起こし、まだよく分からないといったふうに目を瞬かせる兄弟を引き寄せて。マミゾウはからからと高らかに、笑い続けるのだった。



ぼんぽこ歴26年9月。

この夜の大騒ぎをきっかけに、人間達の間で、世の不思議や理不尽を【妖怪のせいだ】とする風習が流行るようになった。テレビの番組やゲーム機の中、インターネットの情報の中に、その言葉は広く拡散をしてみた。

それは即ち、妖怪見聞、化学復興。長らく絶えていた外の世界での不思議に邂逅した少年少女たち、大人たちは、この夜の幻想を機に、不思議な隣人たちの存在に気付いたのである。

さて、しかし彼らが話題にする妖怪達の中には、狐や鬼や河童が揃っていても――狸が見当たらなかったのは、まこと二ツ岩貉らしい粗忽であつたらうか。この夜の大作戦、狸は妖怪に化けるのに夢中になり過ぎて、自らが化狸であると正体を現すのをすっかり忘れてしまったのである。

無論、これは次の企画ですぐさまフォローされることとなつたが、全く危うい話であり、実に狸らしい顛末と言えよう。

【あがり】

——
ぼんぼん
やう。

平成26年9月。くしくも中秋の名月となったこの日の夜以来。

ほんの少しだけではあったが、外の世界にも新参の妖怪が生まれるようになりました。

その事実を知る者はくわすかであり、それは決して大きな変化ではなかったのですが——
その時起きた出来事を、生涯に渡り忘れぬ者達がいた事は確かでありましょう。

その陰に、まあるい月の下で賑やかに人を化かし、笑う狸達の奮闘と。

この国すべてを、見事に化かしてのけた佐渡のニッ岩貉の暗躍があったのは、疑うべくもないことでもあります。

妖怪大作戦 真打 了

【参考文献】

- ・「平成狸合戦ぽんぽこ」 監督:高畑勲 スタジオジブリ
- ・「平成狸合戦ぽんぽこ シナリオ集」 高畑勲
- ・「腹鼓記」 井上ひさし
- ・「有頂天家族」「有頂天家族 二代目の帰朝」 森見登美彦
- ・「姫さま狸の恋算用」 水瀬マユ
- ・「実説古狸合戦」(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/890294>)
- 「津田浦大決戦:古狸奇談」
(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/890583>)
- 「日開野弔合戦:古狸奇談」
(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/890786>)
- 神田伯龍/丸山平次郎
- ※)いずれも国立国会図書館デジタルコレクション

- ・「阿波の狸の話」 笠井新也
- ・「伊予の狸話」 玉井葵
- ・「動物達の日本史」 中村禎里
- ・「狸とその世界」 中村禎里
- ・「新潟県伝説集成 佐渡篇」 小山直嗣
- ・「ニッ岩むじな考」 ひよこ石

- ・「ピクシブ百科事典」(<http://dic.pixiv.net/>)
- ・「ニコニコ大百科」(<http://dic.nicovideo.jp/>)
- ・「ウィキペディア フリー百科事典」(<https://ja.wikipedia.org/wiki/>)
- ・「たぬきご利益/パワースポット」(<http://www.ztv.ne.jp/ann/spot.htm>)
- ・「狸楽巢」(<http://www.katch.ne.jp/~msyk-tsuj/>)
- ・「いよ狸サロン」
(<http://home.e-catv.ne.jp/ja5dlg/tanukikai/tanukikai.htm>)
- ・「狸の国へおいでなして」(<http://www.jrt.co.jp/racc-dog/index.htm>)
- ・「祠めぐりオリエンテーリング」(<http://www.jrt.co.jp/hokora/>)

【奥付】

「ニッ岩貉化逆門・結」

初版 平成28年10月9日 東方紅樓夢12

オルハザカサンバンチ
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者: 銅 折葉

表紙: enclosed0 様 (サークル: 草枕文庫)

印刷所: (株)ポプルス

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方 project」の
二次創作です。





著:銅折葉(折葉坂三番地)

<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog>

表紙:enclosed0(サークル:草枕文庫)

東京